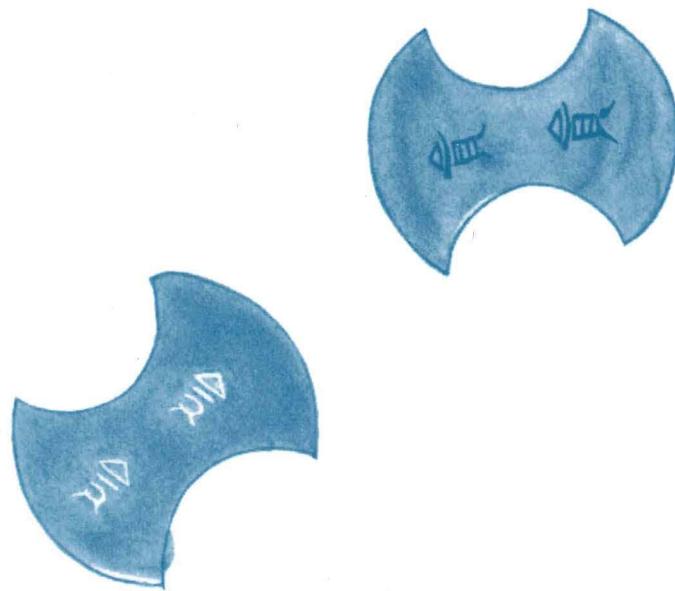


長崎奉行所_(立山役所)跡
岩原目付屋敷跡
炉粕町遺跡

—歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(下)—



2005

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書 第183集

長崎奉行所_(立山役所)跡
岩原目付屋敷跡
炉粕町遺跡

—歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(下)—

2005

長崎県教育委員会

発刊にあたって

本書は、長崎歴史文化博物館の建設に伴って平成14年度から実施した長崎奉行所（立山役所）跡・岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡の発掘調査報告書です。

長崎奉行所（立山役所）は延宝元年（1673）に置かれ、江戸時代の海禁政策下において外交・貿易や西国大名の監視などに重要な役割を果たしました。岩原目付屋敷は、正徳五年（1715）年に奉行所の北側に置かれ、長崎奉行を監視・補佐することが目付の職務でした。炉粕町遺跡は奉行所の南側に隣接し、奉行所と関連が考えられます。三つの遺跡は内容からみて有機的に結びついた、近世長崎を代表する遺跡であると言うことができるでしょう。

調査によって、岩原目付屋敷の建物跡のほか、炉粕町遺跡で奉行所との境を示す大きな濠がみつかりました。また、ヨーロッパや中国など海外との交易を示す多くの国際色豊かな遺物が出土しました。

本書の内容は、先に刊行した長崎県文化財調査報告書第177集『長崎奉行所（立山役所）跡・炉粕町遺跡』の続編と言えるもので、本書の刊行をもって長崎歴史文化博物館の建設に伴う調査が完結することになります。二巻の報告書は、出土遺物や一部保存が決まった遺構と共に、新しい博物館で活用される予定です。調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げ、発刊のあいさつといたします。

平成17年3月31日

長崎県教育委員会教育長
立石 曜

例　　言

1. 本書は歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書（下巻）である。
2. 本書が所収する遺跡および内容は以下のとおりである。
 - ①長崎奉行所（立山役所）跡・・・平成16年度調査区の遺構と全地区出土の遺物
 - ②岩原目付屋敷跡・・・遺構と遺物
 - ③炉柏町遺跡・・・遺物
3. 調査は、長崎県教育委員会が主体となり実施した。また、調査の一部を支援業務として国際航業株式会社に委託した。
4. 調査および整理担当者は以下のとおりである。

長崎県教育庁学芸文化課文化財保護主事 川口洋平
文化財調査員 柚木亜貴子
文化財調査員 平田賢明
文化財調査員 上原 恵

国際航業株式会社 稲垣正宏・飯田秀樹・伊藤敬太郎・安村 健・土岐耕司・土橋尚起
長尾聰子・東園千輝男・藤崎周太郎
5. 長崎奉行所の絵図面の変遷については、長崎県都市再整備推進課指導主事の小松旭が、出土瓦については、国際航業株式会社研究員の安村健が考察を行った。ガラス製品については、神戸市立博物館学芸係長の岡泰正氏から玉稿をいただいた。また、木製品の樹種同定を株式会社古環境研究所、金属遺物の科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託したが、紙面の都合で所収できなかった。結果については、関連文中で触れることとする。
6. 現場における実測は、調査担当者と国際航業株式会社が分担して行った。遺構の撮影は川口が行った。
7. 整理作業および実測・トレースの協力者は巻末のとおりである。
8. 執筆分担は文末に記す。また、本書の編集は、柚木・平田の協力を得て川口が行った。

本文目次

第1章 序 章	
1. 調査の経緯	1
2. 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2章 調 査	
1. 調査方法	3
2. 長崎奉行所（立山役所）跡	4
3. 岩原目付屋敷跡	8
第3章 出土遺物	
1. 土器・陶磁器 (21) 2. ガラス製品 (90) 3. 木製品 (100) 4. 文字資料 (103) 5. 金属製品 (112) 6. クレーパイプ (117) 7. 焼塙壺 (119) 8. 鰐甲 (122) 9. 火打石 (122) 10. 瓦 (123) 11. 銭 (140) 12. 骨 (146)	
第4章 考 察	
長崎奉行所立山役所の変遷についての一考察～絵図面を中心として～（小松旭）	151
第5章 総 括	155

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/50,000・1/2,000)	2
第2図 基本土層図・調査区域.....	3
第3図 長崎奉行所跡正面階段付近遺構位置図 (1/100)	5～6
第4図 長崎奉行所跡正面階段付近遺構実測図 (1/100)	7
第5図 岩原目付屋敷跡上層面遺構配置図 (1/300)	11
第6図 岩原目付屋敷跡上層面個別遺構実測図① (1/100)	12
第7図 岩原目付屋敷跡上層面個別遺構実測図② (1/100)	13
第8図 岩原目付屋敷跡土層断面図 (1/100)	14
第9図 岩原目付屋敷跡上層面遺構実測図 (1/100)	15
第10図 岩原目付屋敷跡石垣1・2遺構実測図 (1/100)	16
第11図 岩原目付屋敷跡中層面遺構配置図 (1/200)	17
第12図 岩原目付屋敷跡中層面遺構実測図① (1/100)	18
第13図 岩原目付屋敷跡中層面遺構実測図② (1/100)	19
第14図 岩原目付屋敷跡中層面遺構実測図③ (1/100)	20
第15図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図① (1/3)	23
第16図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図② (1/3)	24
第17図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図③ (1/3)	25
第18図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図④ (1/3)	26
第19図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑤ (1/3)	27
第20図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑥ (1/3)	28
第21図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑦ (1/2・1/3・1/4)	29
第22図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑧ (1/3)	30
第23図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑨ (1/3)	31
第24図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑩ (1/3)	32
第25図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑪ (1/3)	33
第26図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑫ (1/3)	34

第27図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑬（1/3）	35
第28図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑭（1/3）	36
第29図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑮（1/3）	37
第30図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑯（1/3）	38
第31図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑰（1/3）	39
第32図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑱（1/3）	40
第33図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑲（1/3）	41
第34図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑳（1/3）	42
第35図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図㉑（1/3）	43
第36図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図㉒（1/3）	44
第37図	長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図㉓（1/2・1/3）	45
第38図	長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図①（1/3）	46
第39図	長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図②（1/2・1/3）	47
第40図	長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図③（1/3・1/8）	48
第41図	長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図④（1/3）	49
第42図	長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図⑤（1/3）	50
第43図	長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図⑥（1/3）	51
第44図	長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図⑦（1/3）	52
第45図	長崎奉行所跡下層面出土遺物実測図①（1/3）	53
第46図	長崎奉行所跡下層面出土遺物実測図②（1/3）	54
第47図	長崎奉行所跡下層面出土遺物実測図③（1/3・1/4・1/8）	55
第48図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図①（1/3）	56
第49図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図②（1/3）	57
第50図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図③（1/3）	58
第51図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図④（1/3）	59
第52図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑤（1/3）	60
第53図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑥（1/3）	61
第54図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑦（1/3）	62
第55図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑧（1/3）	63
第56図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑨（1/3）	64
第57図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑩（1/3・1/8）	65
第58図	岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑪（1/2・1/3）	66
第59図	炉粕町遺跡出土遺物実測図①（1/3）	67
第60図	炉粕町遺跡出土遺物実測図②（1/3・1/4）	68
第61図	炉粕町遺跡出土遺物実測図③（1/4）	69
第62図	炉粕町遺跡出土遺物実測図④（1/3）	70
第63図	炉粕町遺跡出土遺物実測図⑤（1/3）	71
第64図	炉粕町遺跡出土遺物実測図⑥（1/3）	72
第65図	炉粕町遺跡出土遺物実測図⑦（1/3）	73
第66図	炉粕町遺跡出土遺物実測図⑧（1/3）	74
第67図	炉粕町遺跡出土遺物実測図⑨（1/3・1/4）	75
第68図	炉粕町遺跡出土遺物実測図⑩（1/3・1/4）	76
第69図	炉粕町遺跡出土遺物実測図⑪（1/3）	77
第70図	炉粕町遺跡出土遺物実測図⑫（1/3）	78
第71図	炉粕町遺跡出土遺物実測図⑬（1/2・1/3）	79
第72図	ガラス製品①（1/1）	93
第73図	ガラス製品②（1/1）	94
第74図	ガラス製品③（1/1・1/2）	95
第75図	ガラス製品④（1/3）	96
第76図	木製品①（1/4）	104
第77図	木製品②（1/4）	105

第78図	木製品③ (1/4)	106
第79図	木製品④ (1/4)	107
第80図	木製品⑤ (1/4)	108
第81図	木製品⑥ (1/4)	109
第82図	木製品－文字資料① (1/3)	110
第83図	木製品－文字資料② (1/3)	111
第84図	金属製品① (1/3)	115
第85図	金属製品② (1/3・1/4)	116
第86図	クレイパイプ実測図 (1/1)	118
第87図	焼塙壺実測図 (1/3)	120
第88図	器型分類図 (1/4)	121
第89図	鼈甲・その他実測図 (1/1)	122
第90図	火打石実測図 (2/3)	122
第91図	瓦部分名称	123
第92図	軒丸瓦① (1/4)	133
第93図	軒丸瓦② (1/4)	134
第94図	軒丸瓦③・軒平瓦① (1/4)	135
第95図	軒平瓦②・棟瓦・鬼瓦 (1/4)	136
第96図	道具瓦・丸瓦・刻印瓦 (1/4)	137
第97図	編年図 (1/6)	138
第98図	錢貨① (1/1)	143
第99図	錢貨② (1/1)	144
第100図	錢貨③ (1/1)	145
第101図	遺跡変遷図・上層面遺構 (1/1000)	158
第102図	遺跡変遷図・中層面遺構 (1/1000)	159
第103図	遺跡変遷図・下層面遺構 (1/1000)	160

表 目 次

第1表	長崎奉行所跡正面階段付近遺構一覧表.....	8
第2表	岩原目付屋敷跡上層面遺構一覧表.....	9
第3表	岩原目付屋敷跡中・下層面遺構一覧表.....	10
第4表～第13表	出土陶磁器一覧表①～⑩.....	80
第14表	ガラス製品観察表①.....	91
第15表	ガラス製品観察表②.....	92
第16表	木製品観察表①	102
第17表	木製品観察表②	103
第18表	金属製品観察表①	113
第19表	金属製品観察表②	114
第20表	焼塙壺観察表	121
第21表	瓦一覧表	139
第22表	錢貨観察表	142
第23表	出土貝類種名表と最小個体数	147
第24表	出土魚類種名表	147
第25表	出土哺乳類種名表	148
第26表	出土したその他の動物遺存体種名表	149
第27表	長崎奉行所立山役所関係事項一覧表	152
第28表	長崎奉行所立山役所関係絵図面一覧表	152

図版目次

- ① 石垣12・15, SD38・39・40, 玉石 東から
- ② 石垣12・玉石 北から
- ③ SD38・39・40 東から
- ④ SX 7・石垣14 東から
- ⑤ 石垣12(上・中層面) 北から
- ⑥ SD38・39・40(上・中層面) 東から
- ⑦ 石垣12・15(上・中層面) 西から
- ⑧ トレンチ②溝内断面 東から
- ⑨ 石垣12・15(上・中層面) 西から
- ⑩ トレンチ③溝内断面 東から
- ⑪ 石垣12(上・中層面) 北から
- ⑫ 玉石面(上層面) 西から
- ⑬ 調査区遠景 東から
- ⑭ SX 7・SD36断面 北から
- ⑮ SD36(近代) 西から
- ⑯ SD38・39・40(上・中層面) 西から
- ⑰ 調査区東側断面
- ⑲ 石垣7・17(上・中層面) 西から
- ⑳ SX 7・石垣13(上・中層面) 東から
- ㉑ 石垣13(中層面) 西から
- ㉒ SK193・194 西から
- ㉓ 石垣13(中層面) 南から
- ㉔ 調査区遠景 東から
- ㉕ 石垣13断面 南から
- ㉖ 調査風景
- ㉗ 石垣16(中層面) 西から
- ㉘ 調査員・作業員
- ㉙ B・C区調査区全景(上層面) 東から
- ㉚ B区調査区全景(上層面) 東から
- ㉛ SB4基壇周辺遺構全景 東から
- ㉜ SX2 東から
- ㉝ SD2 北から
- ㉞ SE2 北から
- ㉟ SX3・SD1断面 西から
- ㉞ SB1 南から
- ㉙ SX4 西から
- ㉛ B区V層上面 東から
- ㉜ SB2・3 東から
- ㉙ 石垣1 南から
- ㉚ 石垣1 西から
- ㉛ 石垣1南側部分 南から
- ㉜ 石垣1断面 南から(1)
- ㉝ 石垣1・2断面 西から(1)
- ㉞ 石垣1・2断面 西から(2)
- ㉟ 石垣1断面 南から(2)
- ㉛ 石垣1断面, C区土層断面 南から
- ㉜ SB4基壇遺構 西から
- ㉘ SB1 北から
- ㉙ SD5 南から
- ㉚ SE3 北から
- ㉛ SX7 北から
- ㉜ V層遺物出土状況 東から
- ㉝ SB5 西から
- ㉞ SX2 南から

第1章 序 章

1. 調査の経緯

昭和40年（1965）に開館した長崎県立美術博物館は、開館から30年以上が経過し、老朽化やスペースの狭さの問題が目立つようになった。このため長崎県と長崎市は共同で、周辺の諫訪の森整備の一環として、新たに長崎歴史文化博物館の建設を計画した。建設にあたっては、江戸時代にこの場所にあった長崎奉行所（立山役所）を一部復元する計画が策定された。

新博物館設置の主体となったのは、長崎県政策調整局都市再整備推進課であり、建設工事については長崎県土木部建築課が発注を行うため、調査を担当する教育庁学芸文化課を含めた三者で協議を行い、調整を図った。平成14年4月、学芸文化課が国庫補助事業により工事予定区内に予備調査を実施し、遺構の残存状況などから本調査の必要な面積・費用・期間を積算した。そして既存建物の解体工事との調整を行い、国際航業株式会社に支援業務を委託し、同年7月に長崎奉行所の本調査に着手した。平成15年度には長崎奉行所に加え北側に隣接する岩原目付屋敷跡と南側に隣接する炉粕町遺跡の調査を行った。平成16年度は、博物館建設基礎工事のために一旦調査を中断したが、11月になって長崎奉行所の未調査区域の発掘を行った。この間、平成15年度末にそれまでの調査成果から遺構を中心に報告書を作成している。本書では、平成15年度の岩原目付屋敷跡、平成16年度の長崎奉行所跡および未報告であった出土遺物の内容を報告する。

〈関連調査一覧〉※太字は本書所収。直は支援業務なし。

※予備調査（国庫補助）平成14年4月8日～4月26日（32m²）

- | | |
|----------|--------------------------------------------------|
| ①長崎奉行所 | 平成14年7月8日～平成15年3月31日（5,000m ² ）遺構・遺物 |
| | 平成15年4月1日～平成15年6月30日（600m ² ）遺構・遺物（直） |
| | 平成16年11月2日～平成16年12月3日（180m ² ）遺構・遺物 |
| ②岩原目付屋敷跡 | 平成15年7月1日～平成15年12月25日（3,050m ² ）遺構・遺物 |
| ③炉粕町遺跡 | 平成15年4月1日～平成15年4月30日（200m ² ）遺構・遺物（直） |
| | 平成15年5月1日～平成15年6月30日（350m ² ）遺構・遺物 |

2. 遺跡の立地と歴史的環境

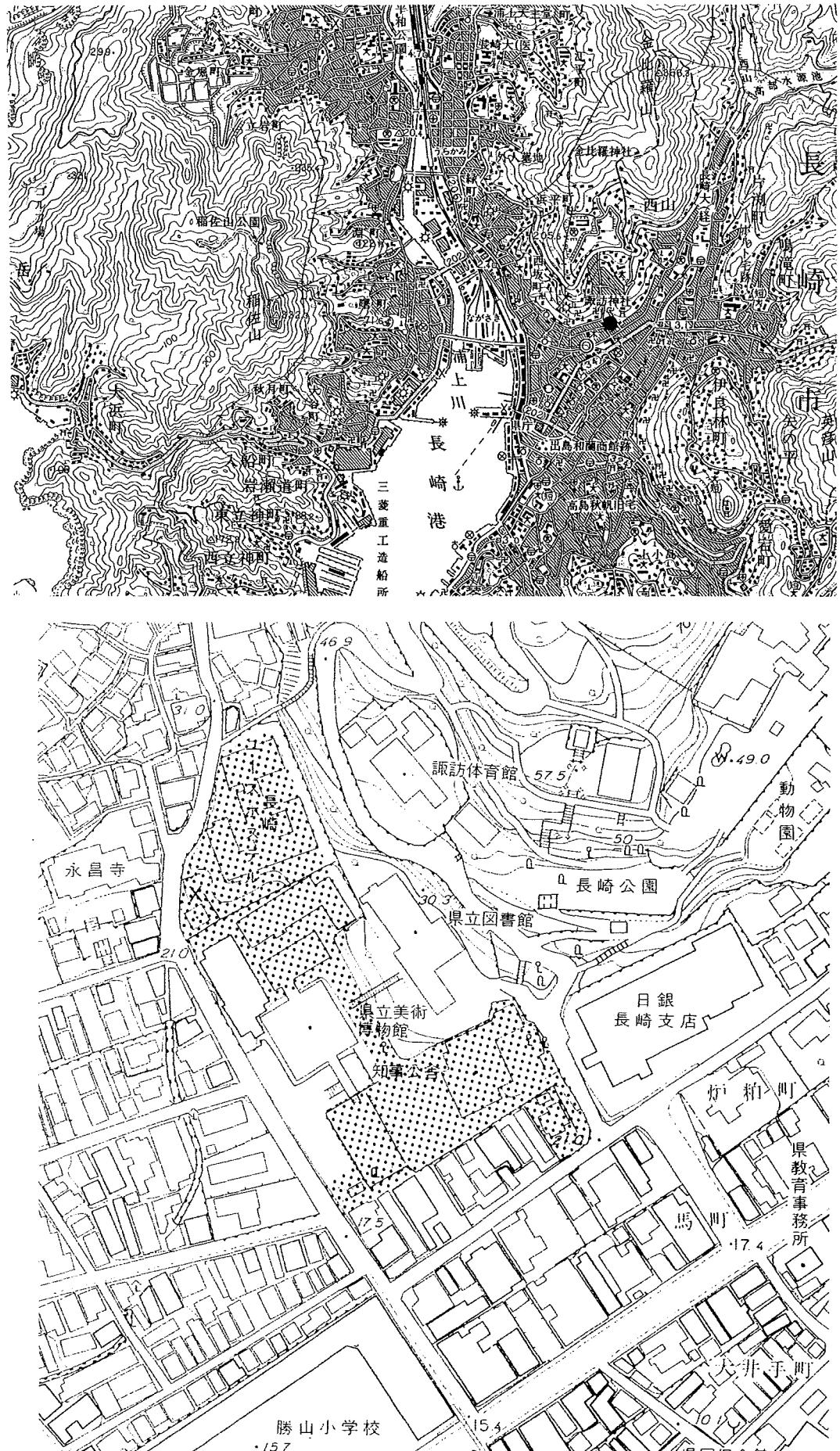
遺跡は、長崎市街の北東部に位置する立山・炉粕町にある。付近は標高約366mの金比羅山の南側山裾にあたる標高10～30mの傾斜地である。山裾のため湧水が多い。

付近には慶長頃に山のサンタマリアとよばれる聖堂や墓地があったとされる⁽¹⁾。続いて寛永頃に宗門奉行の井上筑後守の屋敷として使われた記録がある。延宝元年（1673）に奉行所が置かれ、北側には正徳五年（1715）に岩原目付屋敷が置かれた。奉行所は、享保二年（1717）に大規模な改築が行われた記録があり⁽²⁾、このことは発掘調査からも裏付けられている。明治以降は、学校や官庁として利用され、しだいに原形は失われていった⁽³⁾。

註(1)アビラ・ヒロン『日本王国記』大航海時代叢書11 岩波書店 1965

(2)『長崎実録大成正編』長崎文献叢書第1集・第2巻 長崎文献社 1973

(3)『長崎奉行所（立山役所）跡』長崎県教育委員会 1998



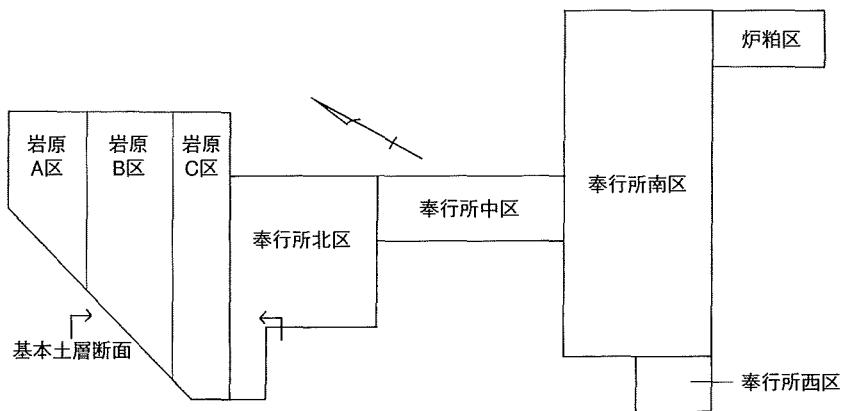
第1図 遺跡位置図 (1/50,000・1/2,000)

第2章 調査

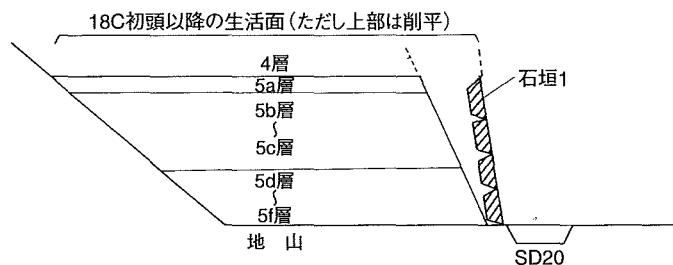
1. 調査方法

調査は、前回までに使用した世界測地系に基づく公共座標に対応した10m×10mのグリッドを引き続き利用した（上巻p.4参照）。これとは別に工程に合わせて設定した調査区も踏襲することとした。掘削は表土を機械により掘削し、以下を人力で行った。遺物包含層及び遺構内については適時精査を行った。遺物の取り上げは層位・遺構ごとに行い、出土位置や出土レベルの記録は行っていない。

遺構記録は、20分の1の縮尺で各面ごとに手実測を行った。写真については、35ミリのリバーサル・同モノクロ・デジタルカメラの3種で撮影し、重要なものについては6×7判でも撮影を行った。



4層—18C初頭以降の整地層（ただし上部は削平）
5層—17C中頃～18C初頭の整地層

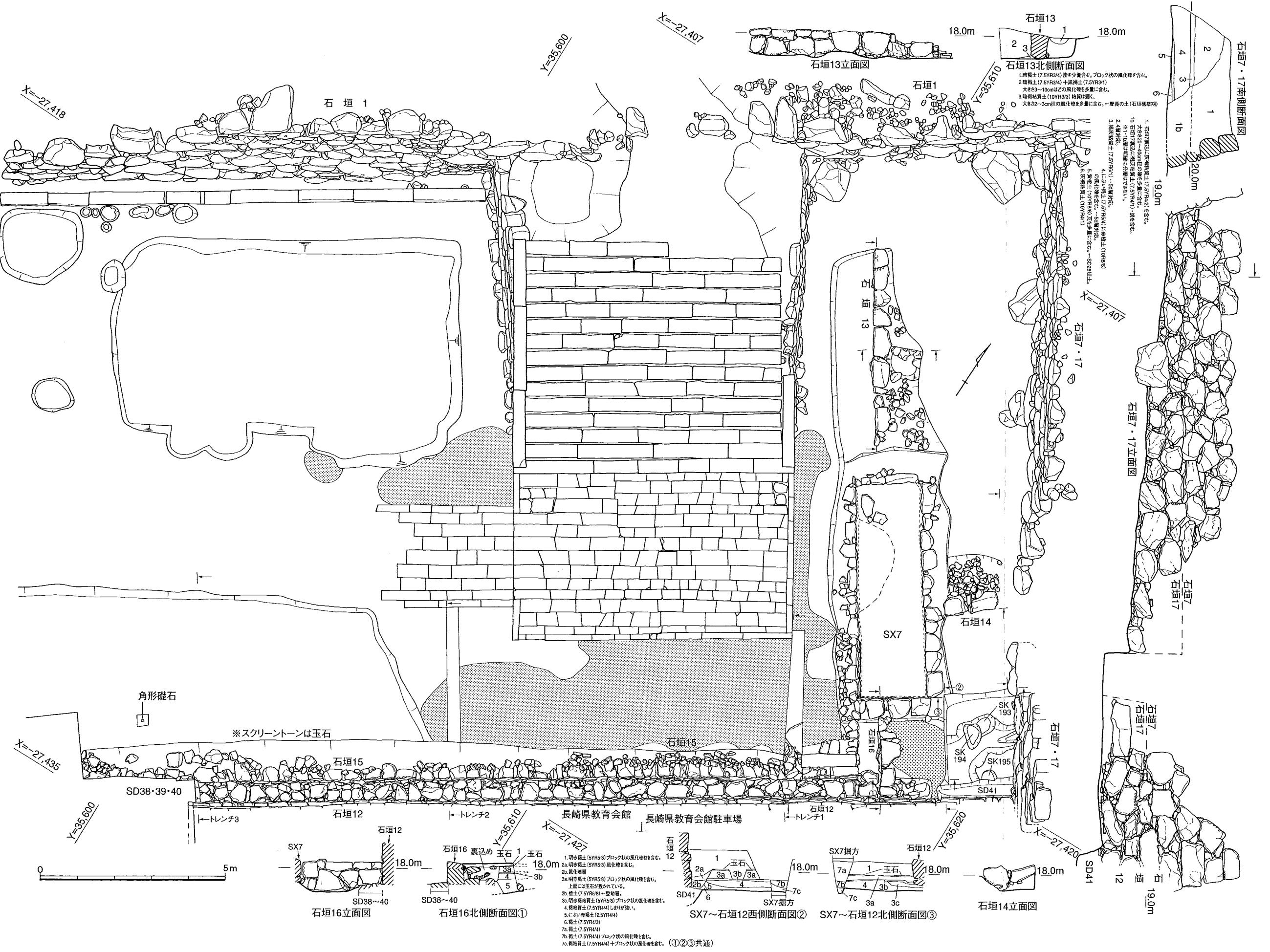


第2図 基本土層図・調査区域

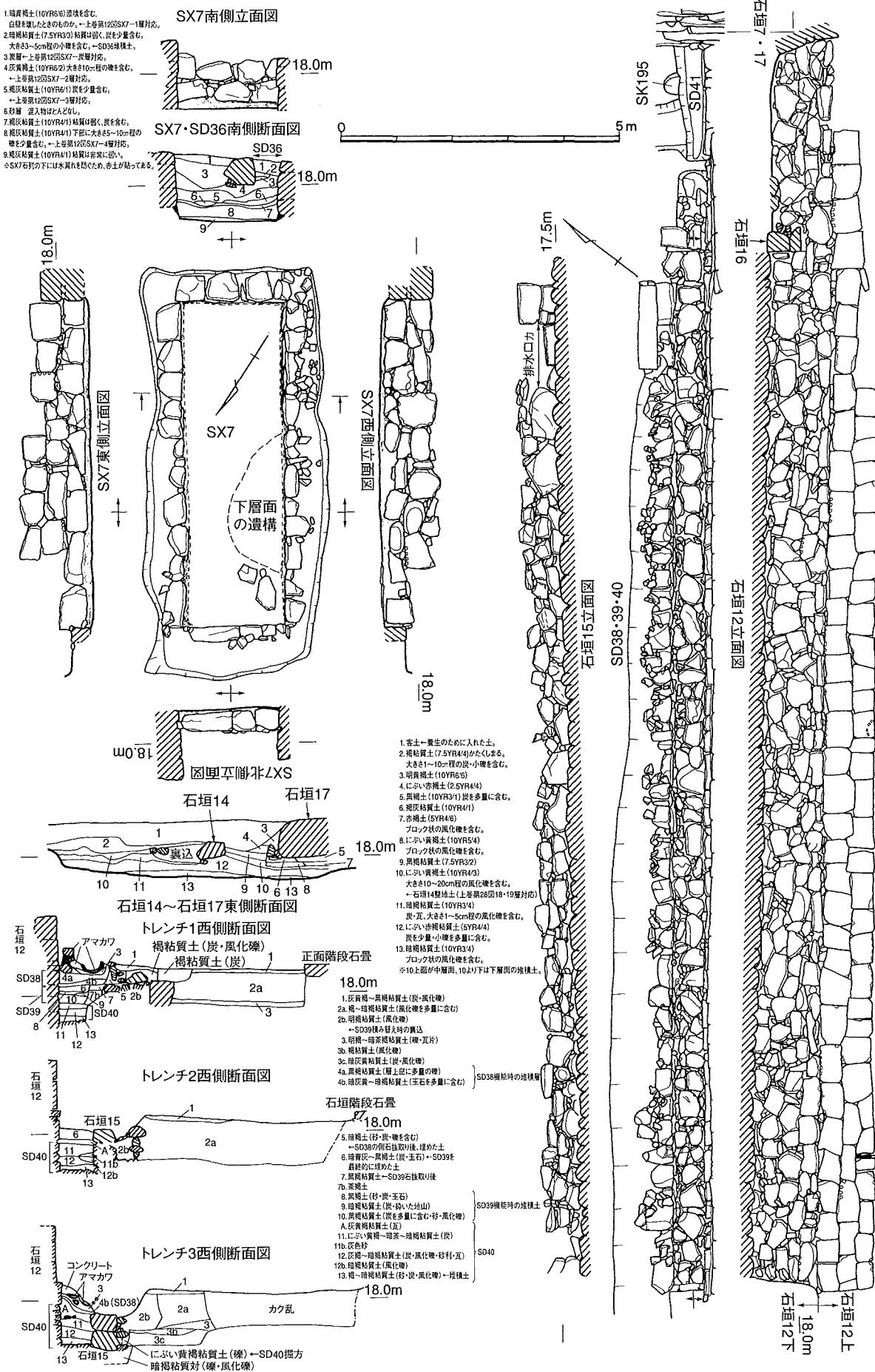
2. 長崎奉行所（立山役所）跡

今回報告する調査地点は、奉行所正門階段の真向かいに位置する隣地との境目付近である。博物館建設工事の工程によって未調査となっていた。機械による表土除去の結果、複数の遺構が検出された。以下にその概要を記したい。

- ・石垣7 東側—前回調査で確認していた正門階段の東側に位置する石垣で、未調査の南側隅部を新たに検出した。下部は石垣17で、積み足しが行われていると考えられる。18世紀初頭の遺構か。
- ・石垣12（石塀）—正門前の階段の真正面にあり東西に伸びている。上下2段に分かれており、積み方が異なることから、ある時期に積み足しが行われたと推測される。上部は長さ22.7m、高さ0.9～1.0m、厚さ（推定）0.6mで、2～3段程度の切り石積みである。天端のレベルは19.5m前後であり、この上に白壁が建っていたと考えられる。下部は長さ22.7m、高さ1.1～1.2mで、南側面が近代にコンクリートで固められているため厚さは不明であるが、北側面は上部より数センチ程度出っ張っている。上部と異って乱積みであり、天端石のレベルは18.5m前後で揃えている。上部は18世紀初頭以降、下部は17世紀後半から18世紀初頭か。
- ・石垣13—正門階段東側に平行して伸びる南北方向の石垣で、前回に上部を確認していた。今回の調査で、残存長約5m、高さ0.7mの石垣であることが判明した。切り石積みで天端のレベルは18.1mである。南側はSX7に切られている。17世紀後半から18世紀初頭か。
- ・石垣14—石垣7とSX7の間で切られるように検出された東西に伸びる石垣である。二石のみが残存しており、規模などは不明である。17世紀後半から18世紀初頭か。
- ・石垣15—石垣12下と平行して伸び、SD39・40と溝を形成。後に縁石とSD38を形成。
- ・石垣16—SX7の南側に位置する切り石積みの石垣である。SX7に切られ石垣12下部にあたっている。石垣14の続きと思われる。17世紀後半から18世紀初頭か。
- ・石垣17—石垣7の下部で、石垣12の下段よりも早い時期につくられたと考えられる。北側は石垣14と溝（SD38～40）を形成していると推測される。17世紀後半から18世紀初頭か。
- ・SD36—石垣12下と対を成す近代の溝で、SD36によってSX7と結ぶ。
- ・SD37—SD36の上につくられたアマカワの溝である。近現代か。
- ・SD38—石垣12下と縁石によって形成される18世紀初頭以降の溝。
- ・SD39—石垣12下と石垣15によって形成される18世紀初頭に埋まった溝。
- ・SD40—石垣12下と石垣15によって形成される溝で、床付近のSD39以前の堆積。
- ・SD41—石垣12下部の下にあると考えられる遺構で、石垣12北側裾に平行するように堀方が検出されている。石垣の保存のために掘り下げができず規模が判明していないが、地山を堀り込んでおり暗灰色の粘質土が覆土となっている。慶長期の遺物（石垣7前VI層）が出土している。
- ・SD42—石垣14・17で対を成すと推定される溝で、幅0.5m、深さ0.3m程度になろうか。前回調査で検出したSD8・9・30に対応するものであろうか。
- ・SX7（溜池）—前回の調査で北側半分が検出されていたが、今回の調査で全体の規模が判明した。長さ6.0m、幅1.7m、深さ1.2mであるが、遺構内の土層観察から60センチ程埋まった時点で西側に石列を設けてSD36に排水していたことが判明した。その時期は幕末から明治頃か。
- ・玉砂利—正門階段下の石疊周辺で検出された。18世紀初頭以降か。



第3図 長崎奉行所跡正面階段付近遺構位置図 (1/100)



第4図 長崎奉行所跡正面階段付近遺構実測図 (1/100)

遺構番号	設置面	備考	年代幅
SX 7	上	溜池、階段下	19C
SD36	中・上・近代	SX 7 と SD37~40をつなぐ	~20C
SD37	近代	アマカワの溝	~20C
SD38	上	縁石の溝	~19C
SD39	中	SD38以前	~18C 初頭
SD40	中	SD39以前	
SD41	下		16C 末~17C 初頭
石垣7	上	石垣17に積み足し	18C 初頭以降
石垣12上	上	切石積み	18C 初頭以降
石垣12下	中	野面積み	~18C 初頭
石垣13	中	石垣14のつづき？	~18C 初頭
石垣14	中	石垣13のつづき？	~18C 初頭
石垣15	中・上	石垣12と溝を形成	~18C 初頭以降
石垣16	中		~18C 初頭
石垣17	中	石垣7の下部	~18C 初頭
SK193	下		16C 末~17C 初頭
SK194	下		16C 末~17C 初頭
SK195	下		16C 末~17C 初頭

第1表 長崎奉行所跡正面階段付近遺構一覧表

3. 岩原目付屋敷跡

岩原目付屋敷跡は、旧ユースホステルの敷地に相当するが、近代の攪乱によって近世の遺構が残存するのは敷地の北側の一部と南側であることが判明した。

基本土層は、第1～4層までが表土及び近代の攪乱層で、第5層以下が調査の対象となる近世以前の土層である。第5層は上半（a～c）が黄～赤褐色土層で、北側から落ちる斜面の傾斜を解消するために運ばれた造成土である。南側は石垣によって止められている。遺物はほとんど含んでおらず、この面の上に上層の遺構が堀り込まれている。直下の5層から出土した遺物の下限年代から18世紀初頭に堆積したと考えられる。下半は赤褐色粘質土（d）が暗・黒褐色土層（e・f）を覆って、生活面となっている。一部には5e層の上に基壇がつくられ、建物も検出されている。この下半の時期も出土遺物から18世紀初頭に廃絶したことが推測され、極めて短時間しか存在していなかったことが窺える。この下は地山であるが、一部に風化・酸化した間層である5g層がみられる。基本的に5層は、他所から持ち込まれた客土であると考えられる。

(1) 上層面の遺構

5a層上に掘り込まれた遺構（上層面の遺構）には、絵図面⁽¹⁾と位置が一致する建物跡SB1・2・3のほか近代まで使用されたと考えられる石組の溝SD1および長崎奉行所との境目となる石垣1・2などがある。建物跡は上面が削平されていたため礎石は残存しなかったが、柱穴と栗石のみ確認された。主要な柱間は一間=六尺五寸（約188cm）と推測される。溝SD1は敷地中央を東西に横断するもので、北側の崖からの湧水を排水する役割であったと考えられる。石垣1の位置も絵図面と一致するが、裏込めの状況から積み替えが行われたと考えられ、古いものを石垣2とした。

(2) 中層面の遺構

5e・d層上につくられた遺構を中層面の遺構とした。主な遺構には5e層上に盛り土した基壇およびその上の建物跡SB4、基壇の側面の石組み側溝SD5、井戸SE4～7などがある。基壇上の建物跡SB4は二間×一間の小規模な堀建柱建物で、一間は六尺五寸と考えられる。基壇の上面は、地山の土を貼って整地が行われており、基壇の周囲にも玉砂利を敷くなど手が込んでいる。規模から考えると祠などの性格が推測される。基壇土および5e層に含まれる遺物の年代と覆土の5a～c層

に含まれる遺物の年代の下限は共に18世紀初頭頃と考えられ、極めて短期間しか存在し得なかつたと推測される。また、同じ面にありながらやや早い時期に廃絶したと考えられる遺構として、建物跡S B 5、井戸SE 3などがある。SB 5は二間×三間の掘立柱建物であるが、柱穴内の遺物の年代下限は17世紀後半代と考えられる。SE 3は、基壇に伴う側溝SD 5や玉砂利敷きによって廃絶したと考えられる。しかし共に、廃絶年代は18世紀初頭頃と考えられ、基壇やSB 4の短命さを際立たせている。これらが、岩原目付屋敷の創建時の遺構であるのか、初期の長崎奉行所に関係する遺構であるのかについては今後の検討が必要であろう。

(3) 下層面の遺構

地山上に堀り込まれた石組み遺構SX 2がある。出土遺物から17世紀初頭頃に廃絶したと考えられる。勝山町遺跡⁽²⁾の教会期の遺構に類例がみられる。貯水槽あるいは地下室であろうか。

註(1)『岩原目付屋敷』県立長崎図書館蔵。長崎県文化財報告書第131集（2000）掲載。

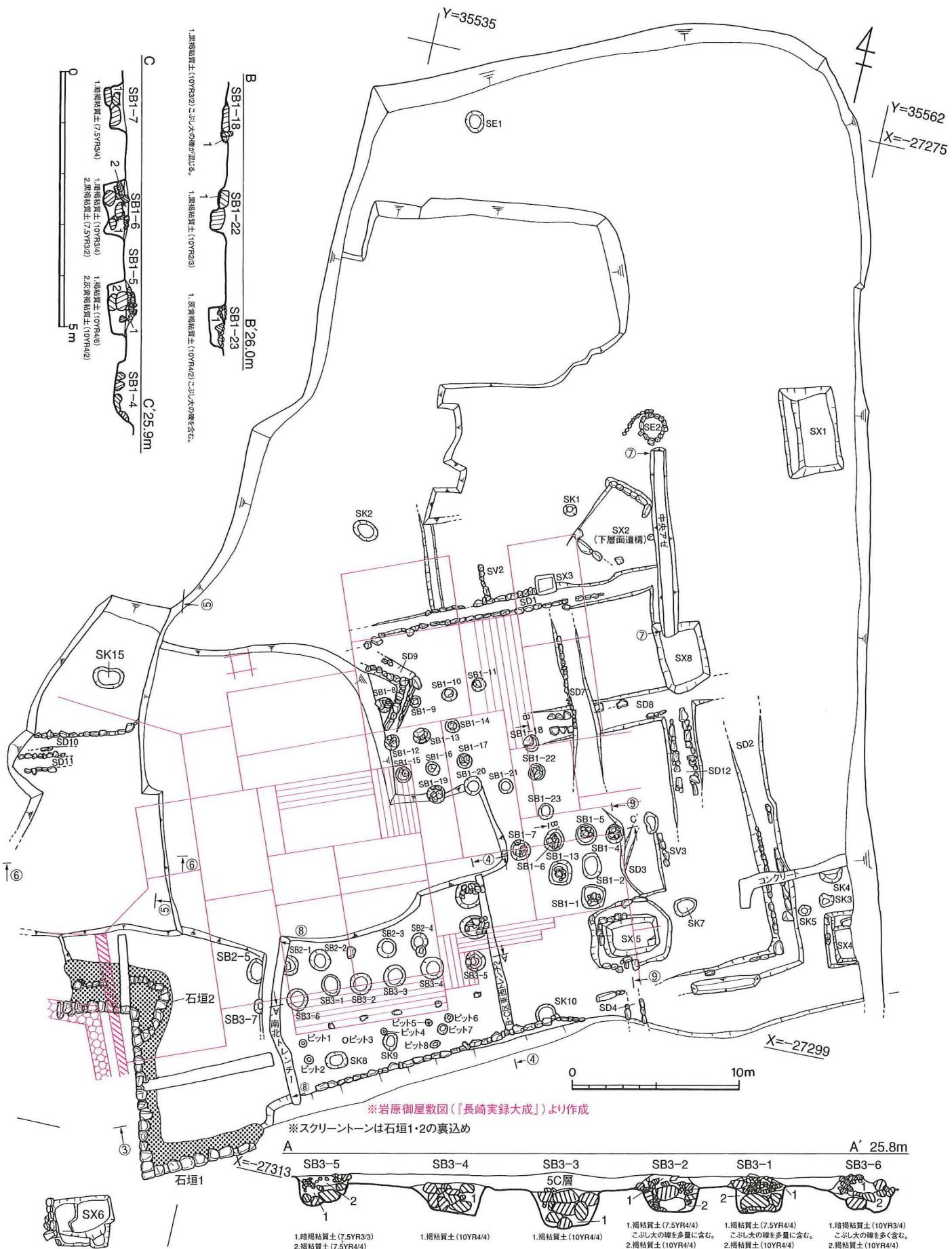
(2)『勝山町遺跡』長崎市教育委員会 2003

遺構番号	掘り込み面	備考	年代幅
SX 1	地山	長さ約5m、幅約3.4m、深さ約1.5mの土抗	18C初頭以降
SX 3	SD 1上	SD 1に伴う方形のアマカワ遺構	18C初頭以降～近代
SX 4	地山	遺構内南側には板状の木材が、北側には階段のような段が二段ある	18C初頭以降
SX 5	地山	長さ約5m、幅約3.2m、深さ約1.6mの土抗	18C初頭以降
SX 6	地山	長さ約4m、幅約2.8m、深さ約1.3mの土抗	18C初頭以降
SX 8	地山		18C初頭以降
SD 1	地山		18C初頭以降～近代
SD 2	地山	区画・排水を目的とする	18C初頭以降
SD 3	地山	幅約35cm、深さ約10cmの素堀りの溝	18C初頭以降
SD 4	地山		18C初頭以降
SD 7	地山	区画・排水を目的とする	18C初頭以降
SD 8	地山	区画・排水を目的とする	18C初頭以降
SD 9	5b層		18C初頭以降
SD10	岩原	SD11と裏込めを共有する	18C初頭以降
SD11	岩原	SD10と裏込めを共有する	18C初頭以降
SD12	地山	区画・排水を目的とする	18C初頭以降
SV 1～3	地山		18C初頭以降
石垣1	5c層		18C初頭以降
石垣2	5c層	石垣1に切られる形で裏込だけが存在	18C初頭以降
SE 1	地山	素堀りの円形井戸	18C初頭以降
SE 2	4層	石積みの円形井戸	18C初頭以降
SK 1	地山		18C初頭以降
SK 2	地山		18C初頭以降
SK 3	地山		18C初頭以降
SK 4	地山		18C初頭以降
SK 5	地山		18C初頭以降
SK 6	地山		18C初頭以降
SK 7	地山		18C初頭以降
SK 8	5層		18C初頭以降
SK 9	5層		18C初頭以降
SK10	5a層		18C初頭以降
SK11	5c層		18C初頭以降
SK12	5c層		18C初頭以降
SK15	岩原		18C初頭以降
SB1-1～1-7	5c層	柱間195cm（6尺5寸）の同一建物	18C初頭以降
SB1-8～1-23	5b層	柱間195cm（6尺5寸）の同一建物	18C初頭以降
SB2-1～2-5	5c層	柱間195cm（6尺5寸）の同一建物	18C初頭以降
SB3-1～3-7	5c層	柱間195cm（6尺5寸）の同一建物	18C初頭以降
ピット1～5	5c層		18C初頭以降
ピット6～9	5層		18C初頭以降

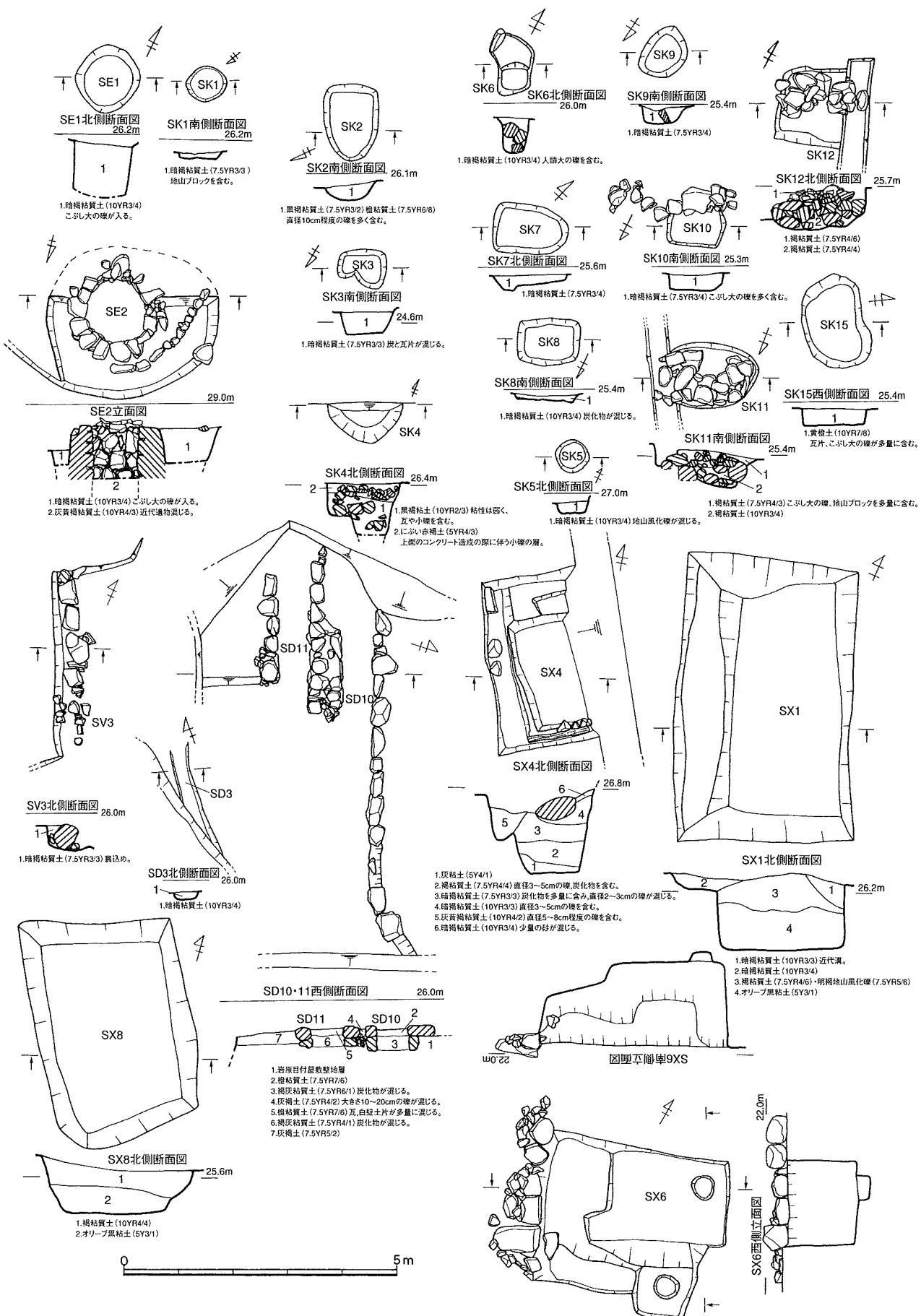
第2表 岩原目付屋敷跡上層面遺構一覧表

遺構番号	掘り込み面	備考	年代幅
SX7	SB 4 基壇土	埋込み甕	17C 中～18C 初頭
SX9	地山		17C 中～18C 初頭
SA1-1	地山	基壇に伴う遺構	17C 中～18C 初頭
SA1-2	地山	基壇に伴う遺構	17C 中～18C 初頭
SA1-3	地山	基壇に伴う遺構	17C 中～18C 初頭
SA1-4	地山	基壇に伴う遺構	17C 中～18C 初頭
SA1-5	地山	基壇に伴う遺構	17C 中～18C 初頭
SA1-6	地山	基壇に伴う遺構	17C 中～18C 初頭
SA1-7	地山	基壇に伴う遺構	17C 中～18C 初頭
SA1-8	地山	基壇に伴う遺構	17C 中～18C 初頭
SD5	5e層	基壇に伴う遺構	17C 中～18C 初頭
SD6	5e層		17C 中～18C 初頭
SD13	5b層	埋土内遺物は18C 初頭	17C 中～18C 初頭
SV4	5e層		17C 中～18C 初頭
SV5	5e層		17C 中～18C 初頭
SV6	5e層		17C 中～18C 初頭
SE3	地山	基壇上遺構造成時に埋められた	17C 中～18C 初頭
SE4	5b層	埋土内遺物は17C 後～18C 初頭	17C 中～18C 初頭
SE5	5b層	基壇に伴う遺構 埋土内遺物は18C 初頭	17C 中～18C 初頭
SE6	地山	遺物は17世紀後半	17C 中～18C 初頭
SE7	地山		17C 中～18C 初頭
SK13	地山		17C 中～18C 初頭
SK14	地山	SK 内埋土内遺物は17C 後 SB 5 に伴う遺構	17C 中～18C 初頭
SK16	地山		17C 中～18C 初頭
SK17	地山		17C 中～18C 初頭
SK18	地山		17C 中～18C 初頭
SK19	地山		17C 中～18C 初頭
SK20	地山		17C 中～18C 初頭
SK21	地山		17C 中～18C 初頭
SK22	地山		17C 中～18C 初頭
SK23	地山		17C 中～18C 初頭
SB4基壇	SB 4 基壇土	5e層上の土を盛り造られた基壇。西側に赤土を貼り、東側に建物(SB 4)が建つ	18C 初頭まで存続
SB4-1	SB 4 基壇土	一間×二間の建物 衍行の柱間は390cm(13尺), 梁行の柱間は195cm(6尺5寸)	18C 初頭まで存続
SB4-2	SB 4 基壇土	一間×二間の建物 衍行の柱間は390cm(13尺), 梁行の柱間は195cm(6尺5寸)	18C 初頭まで存続
SB4-3	SB 4 基壇土	一間×二間の建物 衍行の柱間は390cm(13尺), 梁行の柱間は195cm(6尺5寸)	18C 初頭まで存続
SB4-4	SB 4 基壇土	一間×二間の建物 衍行の柱間は390cm(13尺), 梁行の柱間は195cm(6尺5寸)	18C 初頭まで存続
SB4-5	SB 4 基壇土	一間×二間の建物 衍行の柱間は390cm(13尺), 梁行の柱間は195cm(6尺5寸)	18C 初頭まで存続
SB4-6	SB 4 基壇土	一間×二間の建物 衍行の柱間は390cm(13尺), 梁行の柱間は195cm(6尺5寸)	18C 初頭まで存続
SB4-7	SB 4 基壇土		18C 初頭まで存続
SB4-8	SB 4 基壇土		18C 初頭まで存続
SB4-9	SB 4 基壇土		18C 初頭まで存続
SB4-10	SB 4 基壇土		18C 初頭まで存続
SB5-1	地山	二間×三間の建物 柱間は210cm(7尺) ピット内遺物17C 後	18C 初頭まで存続
SB5-2	地山	二間×三間の建物 柱間は210cm(7尺) ピット内遺物17C 後	18C 初頭まで存続
SB5-3	地山	二間×三間の建物 柱間は210cm(7尺)	18C 初頭まで存続
SB5-4	地山	二間×三間の建物 柱間は210cm(7尺) ピット内遺物17C 後	18C 初頭まで存続
SB5-5	地山	二間×三間の建物 柱間は210cm(7尺) ピット内遺物17C 前	18C 初頭まで存続
SB5-6	地山	二間×三間の建物 柱間は210cm(7尺) ピット内遺物17C 後	18C 初頭まで存続
SB5-7	地山	二間×三間の建物 柱間は210cm(7尺)	18C 初頭まで存続
SB5-8	地山	二間×三間の建物 柱間は210cm(7尺)	18C 初頭まで存続
SB5-9	地山	二間×三間の建物 柱間は210cm(7尺)	18C 初頭まで存続
SB5-10	地山	二間×三間の建物 柱間は210cm(7尺) ピット内遺物17C 後	18C 初頭まで存続
ピット10	地山	ピット内遺物17C 前	17C 中～18C 初頭
ピット14	地山		17C 中～18C 初頭
ピット15	地山		17C 中～18C 初頭
ピット16	地山		17C 中～18C 初頭
ピット18	地山		17C 中～18C 初頭
ピット20	地山	17C 前	17C 中～18C 初頭
ピット21	地山	17C 後	17C 中～18C 初頭
ピット22	地山		17C 中～18C 初頭
ピット23	地山		17C 中～18C 初頭
ピット24	地山		17C 中～18C 初頭
ピット25	地山		17C 中～18C 初頭
ピット26	地山		17C 中～18C 初頭
ピット27	地山		17C 中～18C 初頭
ピット28	地山		17C 中～18C 初頭
ピット29	地山		17C 中～18C 初頭
ピット30	地山		17C 中～18C 初頭
ピット31	地山		17C 中～18C 初頭
SX2	地山	地下室遺構か 出土遺物は慶長年間 ※下層面遺構	

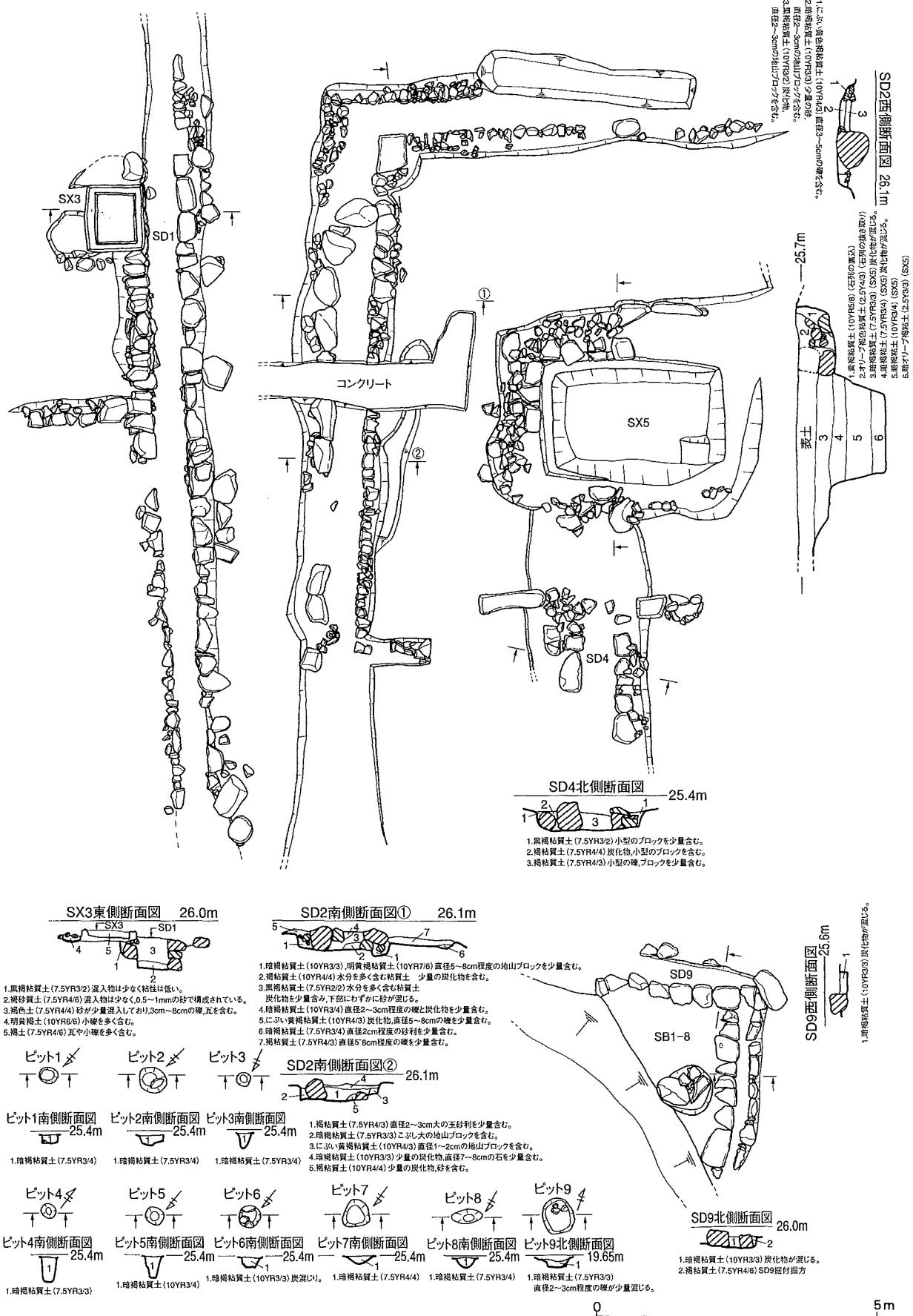
第3表 岩原目付屋敷跡中・下層面遺構一覧表



第5図 岩原目付屋敷跡上層面遺構配置図 (1 / 300)

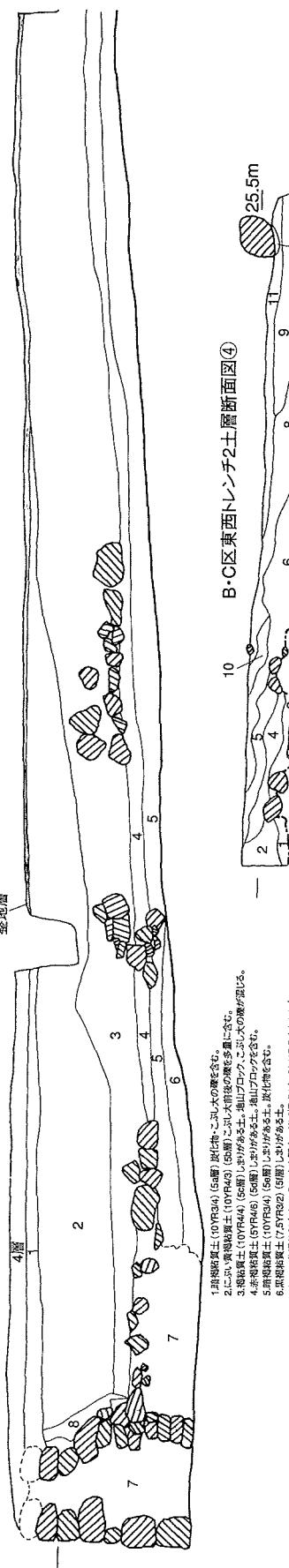


第6図 岩原目付屋敷跡上層面個別遺構実測図① (1/100)



第7図 岩原目付屋敷跡上層面個別遺構実測図② (1/100)

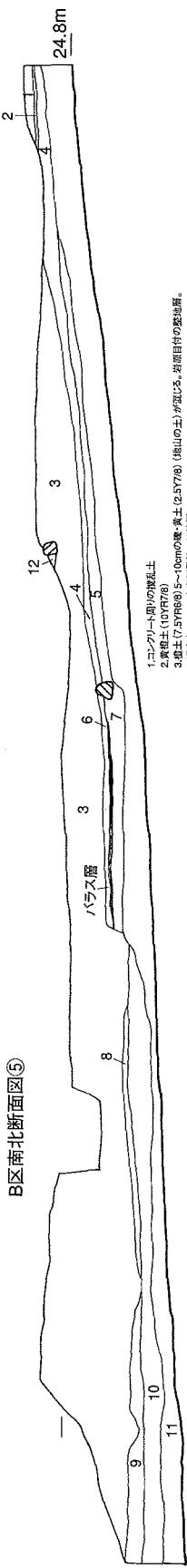
石垣1土層断面図③



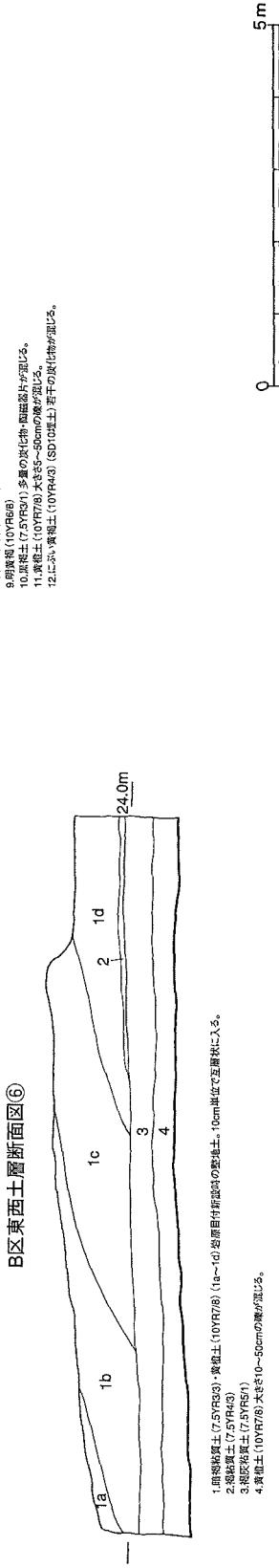
B-C区東西トレシチ2土層断面図④



B1区南北断面図⑤

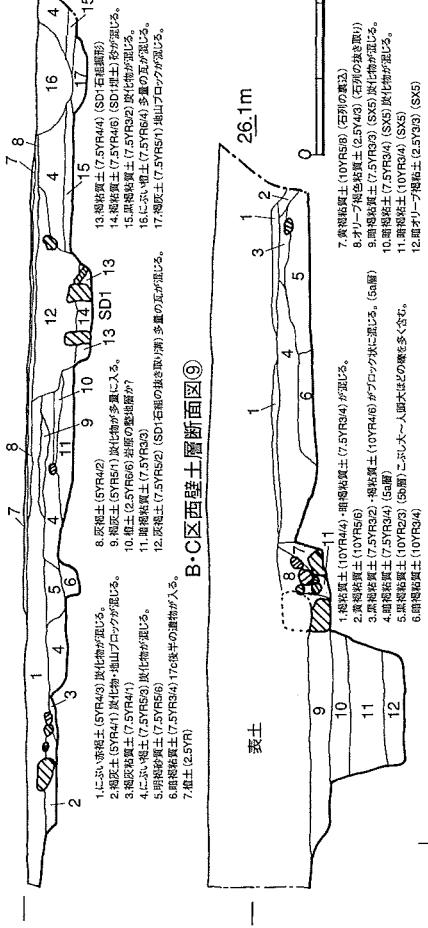


B1区東西土層断面図⑥

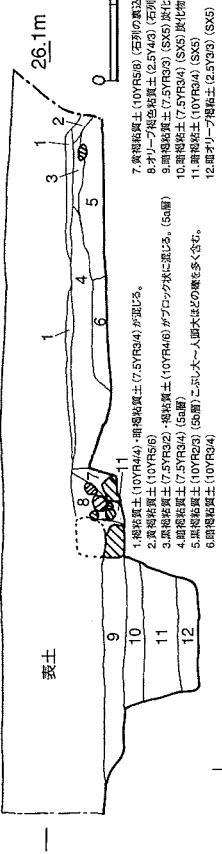


第8図 岩原目付屋敷跡土層断面図（1/100）

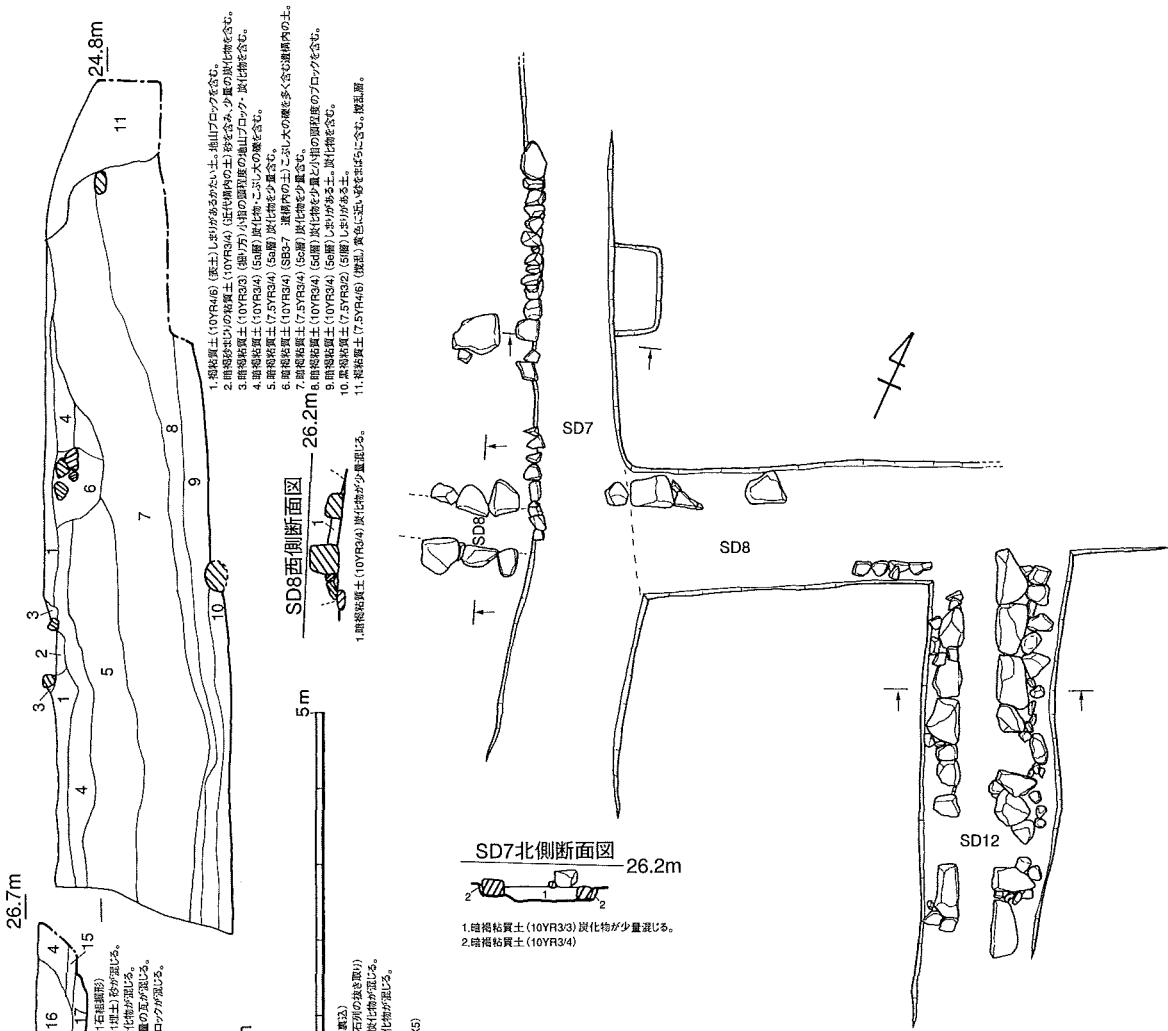
B区中央セゼ土層断面図⑦



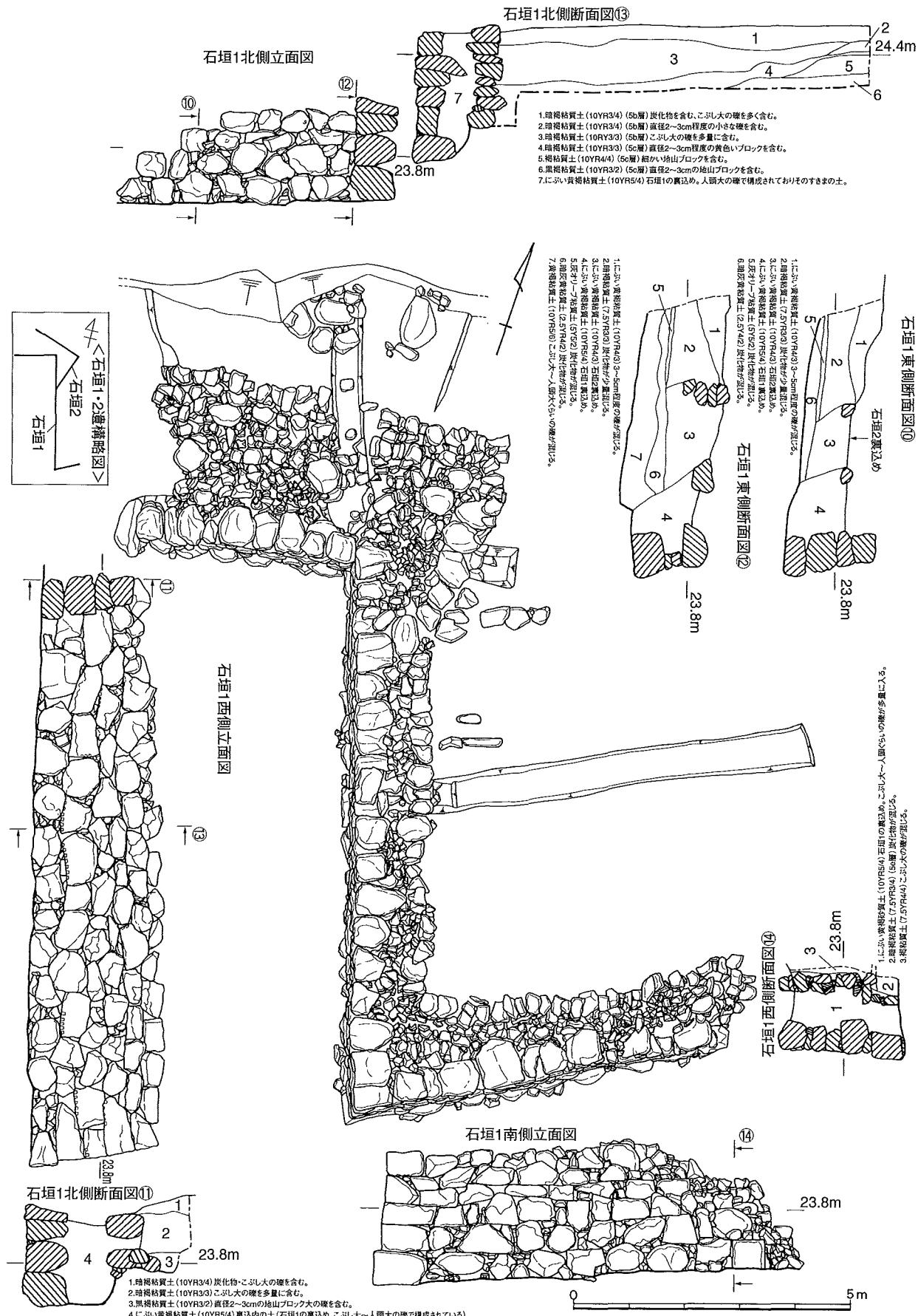
B・C区西壁土層断面図⑨



B・C南北トレーンチ1土層断面図⑧

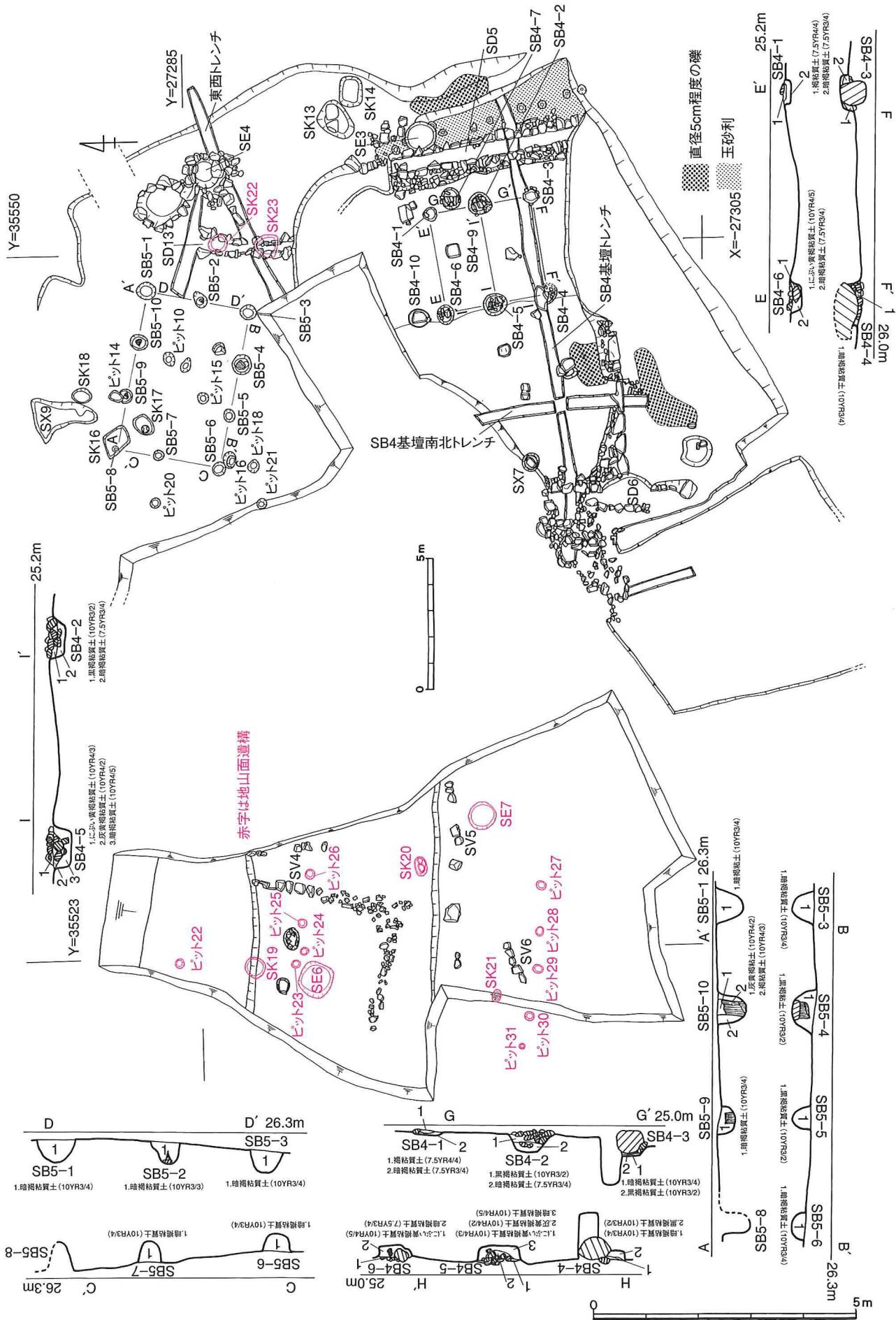


第9図 岩原目付屋敷跡上層面遺構実測図 (1/100)

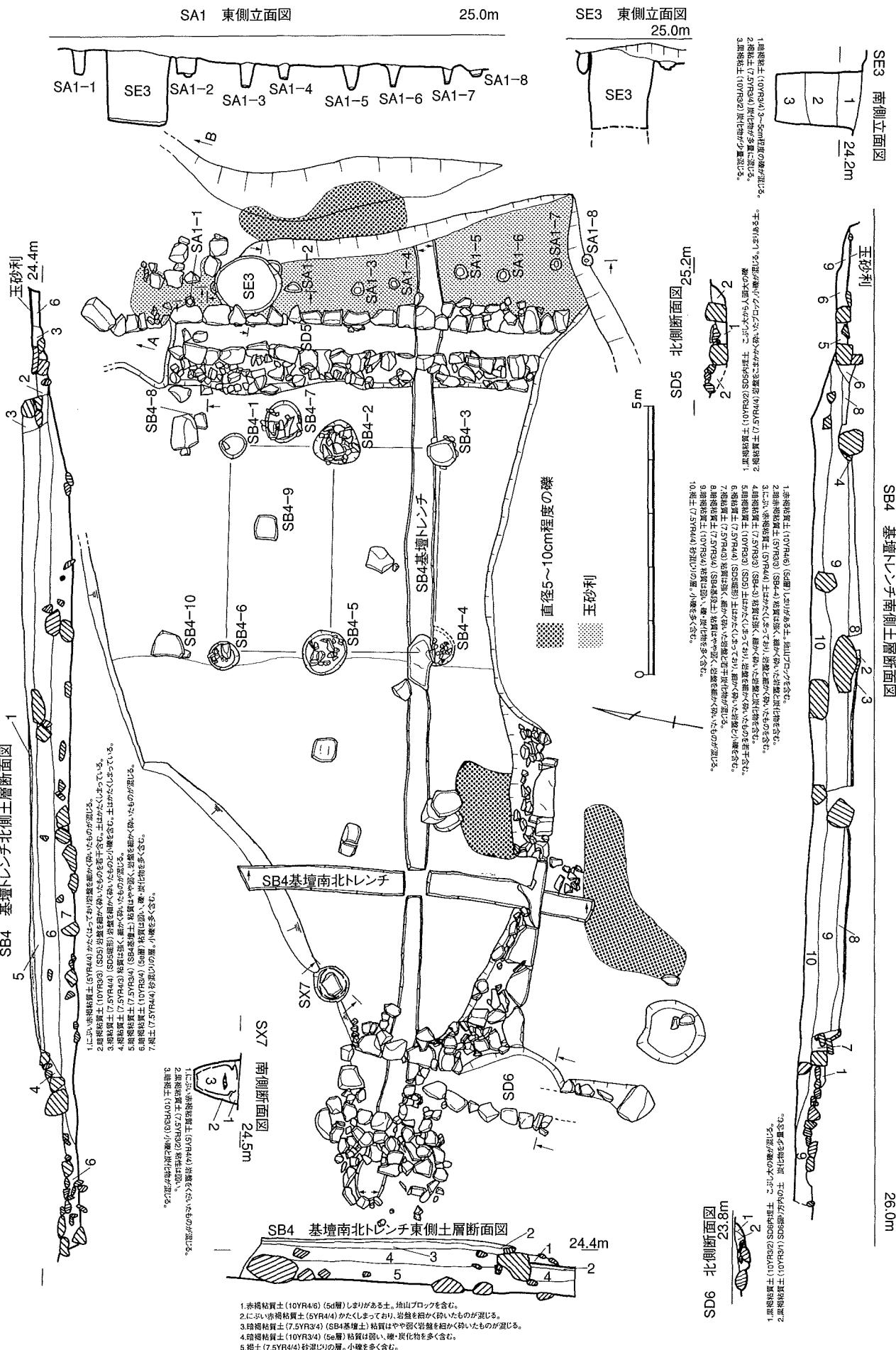


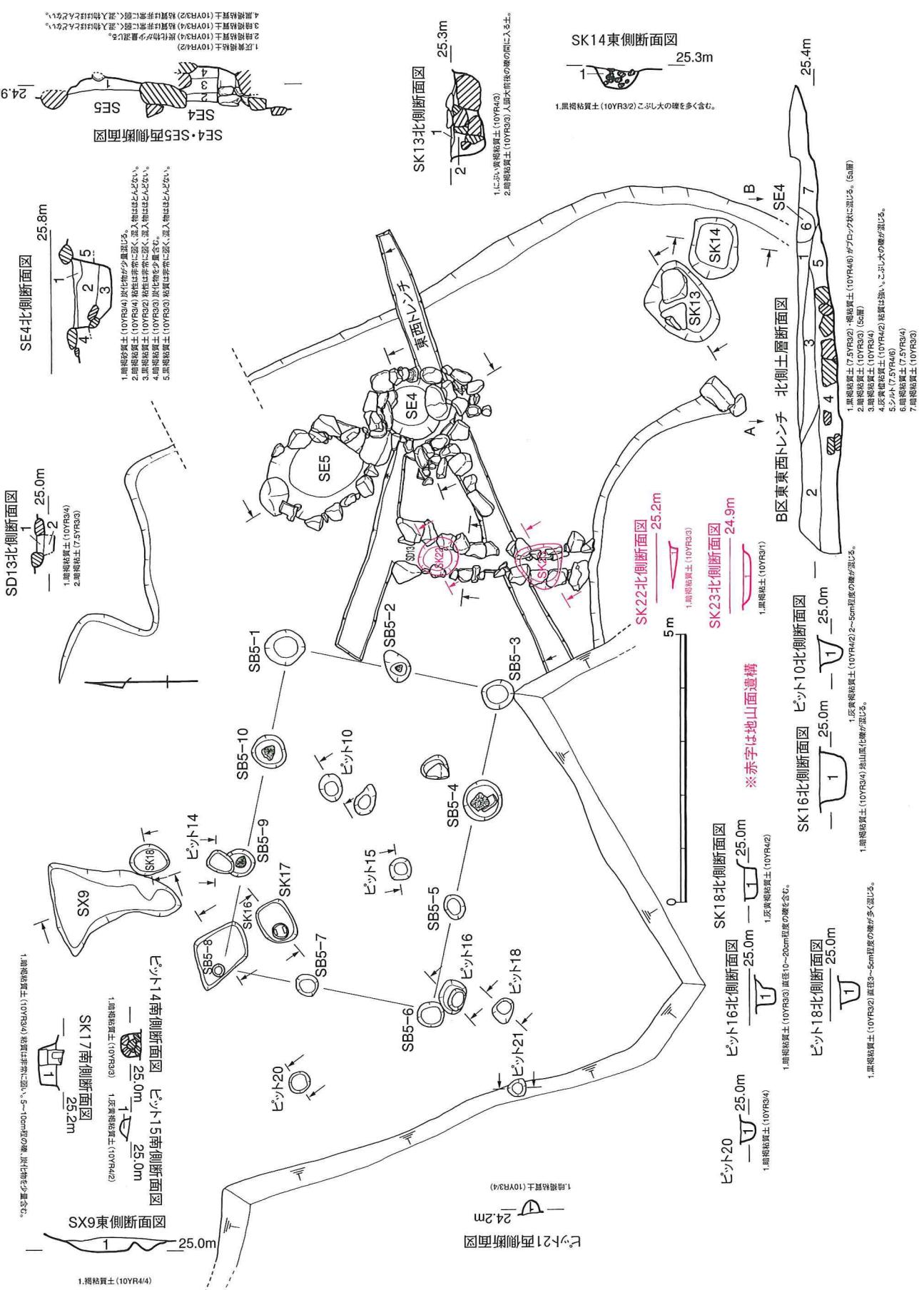
第10図 岩原目付屋敷跡石垣1・2遺構実測図 (1/100)

第11図 岩原目付屋敷跡中層面遺構配置図 (1 / 200)

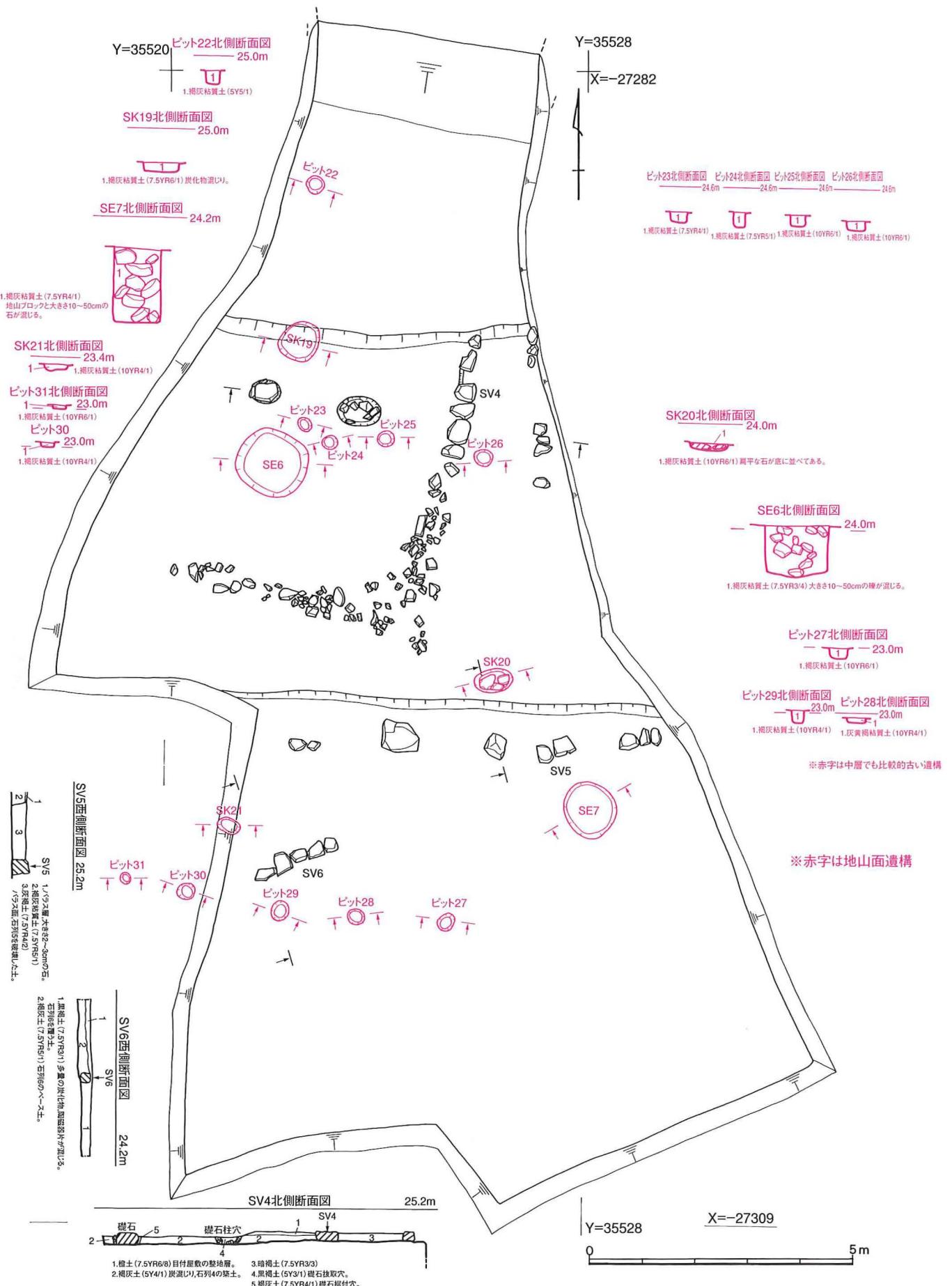


第12図 岩原目付屋敷跡中層面遺構実測図① (1/100)





第13図 岩原自付屋敷跡中層面遺構実測図② (1 / 100)



第14図 岩原目付屋敷跡中層面遺構実測図③ (1 /100)

第3章 出土遺物

調査によって出土した遺物はパンコンテナにして長崎奉行所300箱、岩原目付屋敷跡200箱、炉粕町遺跡100箱で合計680箱に達した。限られた紙面で報告するにあたり、以下の基準にしたがって遺物を抽出した。極力データ提示に努め、内容については表で提示し、様相のみ文章で記したい。

- ①遺構から出土し、年代及びその時代の様相を反映したもの。
- ②遺物包含層から出土し、今後研究の対象となる価値を有するもの。
- ③その他、稀少な資料で研究の対象となるもの。

(1) 土器・陶磁器

土器・陶磁器については、三つの遺跡において生活面の変遷が上・中・下とおよそ共通して捉えられており、これに従ってまとめて概観してみたい。なお、該当期の資料で二次的に上層から出土したものについても、理解の範囲でもとの時期に戻して触れるものとする。

①下層面

下層面の遺構から出土した土器・陶磁器は、国産では肥前陶磁（唐津・初期伊万里）、瓦質土器・土師質土器、貿易陶磁では中国産青花・色絵・三彩、ベトナム産焼締陶器、タイ産四耳壺などがある。稀少な資料としては、瓦質のクンディ（405）や堀に使用された焼き締め小杯（596）などがある。

②中層面

中層面を代表する一括廃棄資料としては、炉粕町遺跡 S D 1 がある。全体的には肥前陶磁が圧倒的に多い。二彩の壺や大形の鉢などもみられる。貿易陶磁としては、中国産の青花・白磁壺（安平壺）・朱泥茶壺・焼締壺、ベトナム産鉄絵碗・焼締壺などがある。また、岩原目付屋敷跡の第5層からも充実した遺物が出土している。ほぼ同様の出土傾向を示すが、稀少なものとしてミャンマー産黒釉壺（766）などもみられる。

③上層面

上層面を代表する一括廃棄資料は長崎奉行所の S D 1 である。主体は肥前陶磁で、染付にはくらわんか手に加え広東碗や線描きの清朝風のものもみられる。国産のものとしては、中層ではみられなかつた京焼（313）や萩焼（78）、関西系（304）と考えられるものなど広範囲の産地のものが一定量みられるのが特色である。産地の不明な練り込み手の灰落し（202）なども注目される。貿易陶磁としては清朝磁器が多く、景德鎮で西洋向けに焼かれた洋食器類（378）やガーニチュア（379）などが目立つ。また、煎茶具と考えられる德化窯系の小杯（307）もある。

④まとめ

膨大な出土遺物から遺跡の性格を示す傾向を抽出することは、困難な作業である。出土遺物は破片であっても完形品と同じ価値を持っており、図化に努めるだけでは肝心なところを見落とす可能性が大きいのである。したがって、土器・陶磁器のまとめとしては、遺構面単位で未図化の資料も念頭に置きながら考えてみたい。

下層出土の遺物は、貿易陶磁と肥前陶磁が主体であり、大村町（万才町・県1995）など長崎市街の近世遺跡の下層（16世紀後半～17世紀初頭）出土の資料と共に多くのものが多く、この時期には付近が利用されていたことが判る。出土遺物には東南アジア産のものも含まれており、南蛮貿易を反映して

いふと考えられる。文献史は、付近に山のサンタマリアとよばれる聖堂があったとするが、出土した土器や陶磁器は時期的には合うものの、これに直接結びつくかどうかは現時点では判断が難しい。さらに多角的な視点から追求していく必要があろう。

中層出土の遺物は、長崎奉行所の初期段階で使用された土器・陶磁器ということになるが、肥前陶磁が日常的な生活で主体的に使用されたことが窺える。規格のそろったものが多くみられ、奉行所でまとめて注文するようなことが行われていたのかもしれない。磁器類には海外輸出向けと共通するもの多く、当時としては国内で未だそれほど多くない大口の購入先であったのかもしれない。また加えて貿易品の碗・皿や容器が散見され、このあたりに海外貿易を管理する長崎奉行所らしさが表れているようである。中層の遺物の年代の下限は、文献記録から1710年代後半と考えられ、実年代のわかる貴重な資料ということができるが、代表的な遺構である炉粕町遺跡 S D 1 の土器・陶磁器をカウントした結果は以下のようなものであった。

遺物総数 4,400点

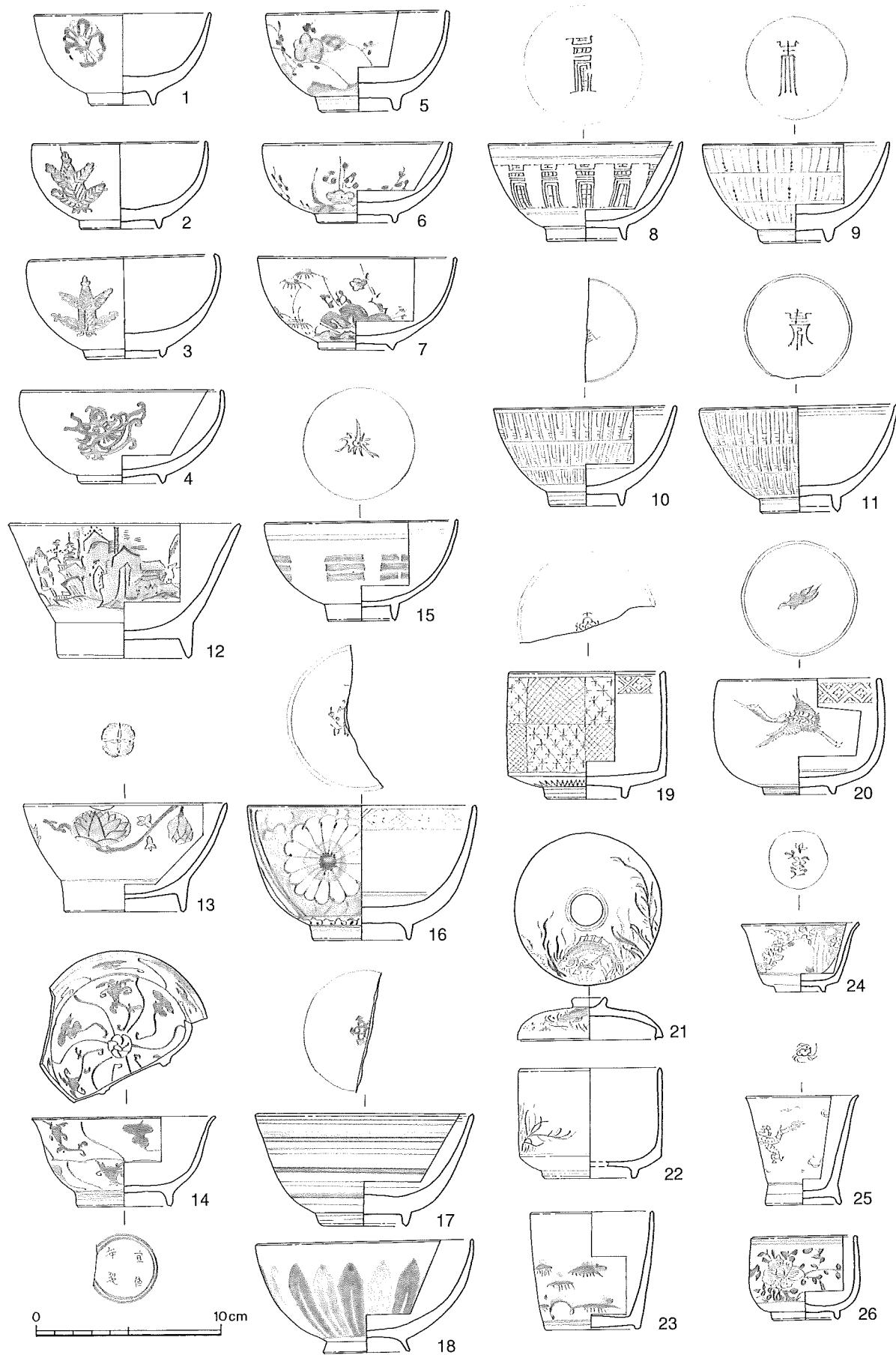
【内訳】国産磁器2,457点（55%）、国産陶器・土器1,809点（42%）、貿易陶磁器134点（3%）

国産磁器（実質的には肥前磁器）の内訳は染付が最も多く8割を占め、以下は白磁、青磁、色絵の順となる。全体的に小碗・皿の規格品が多いのが特徴であるが、アルバレロ形壺やクンディ、見込雲竜荒磯文鉢・碗や瑠璃釉、色絵製品などの海外輸出向け製品が散見されることは興味深い。海外輸出向け製品が長崎では一定量、使用されたことを窺わせる資料であると言えよう。国産陶器も規格品が多くみられ、碗・皿ではとくに京焼風陶器が多く、内野山窯系の緑釉・灰釉陶器、刷毛目陶器の順に続く。また大形の鉢や壺には鉄釉に加えて二彩手が多くみられる。以上から当時の食器セットを推測すると、碗・皿類には染付と陶器が拮抗し、壺・壺・鉢類には二彩手を含む陶器という組み合わせが考えられる。全般的に規格の揃ったものが多く、おそらく一体的に注文されたのであろう。

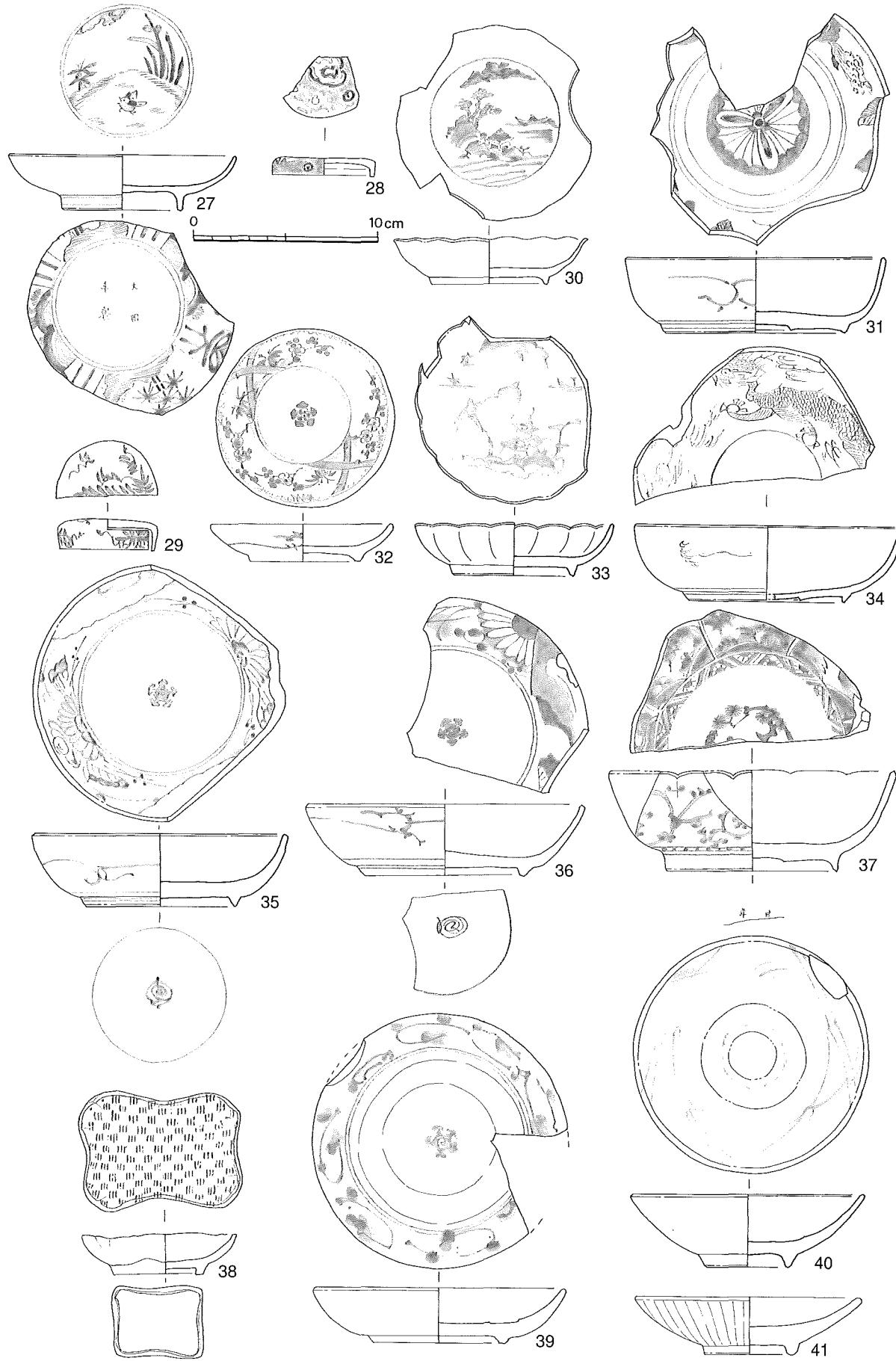
上層出土の遺物は、国産の陶磁器が大量生産されるようになった時期であり、安価な「くらわんか手」が多くみられる。奉行所においてもこのような安価な器が多く使用されていたことは意外であるが、これは S D 1 が長屋の建て替えに伴うことに起因するのであろうか。S D 1 出土の遺物は膨大であり、カウントの困難さから陶磁組成を明らかにできなかったが、印象としては炉粕町 S D 1 に較べて陶器の碗・皿は少なく、代わりに遠隔地の製品が散見されるという状況が窺える。また景德鎮系洋食器や煎茶具が一定量みられることは、食生活の洋風化や清朝風俗の流行を示していると考えられる。供伴したワインボトルなどと含め、出島や唐人屋敷との密接なつながりが推測されよう。

なお、復元される文化年間の長崎奉行所で使われた土器や陶磁器は、近代の大きな攪乱によって良好な状態では確認することができなかった。わずかに一部確認した資料をみると、肥前陶磁に混じって瀬戸窯製品（394～398）がまとまって出土しており、注目される。

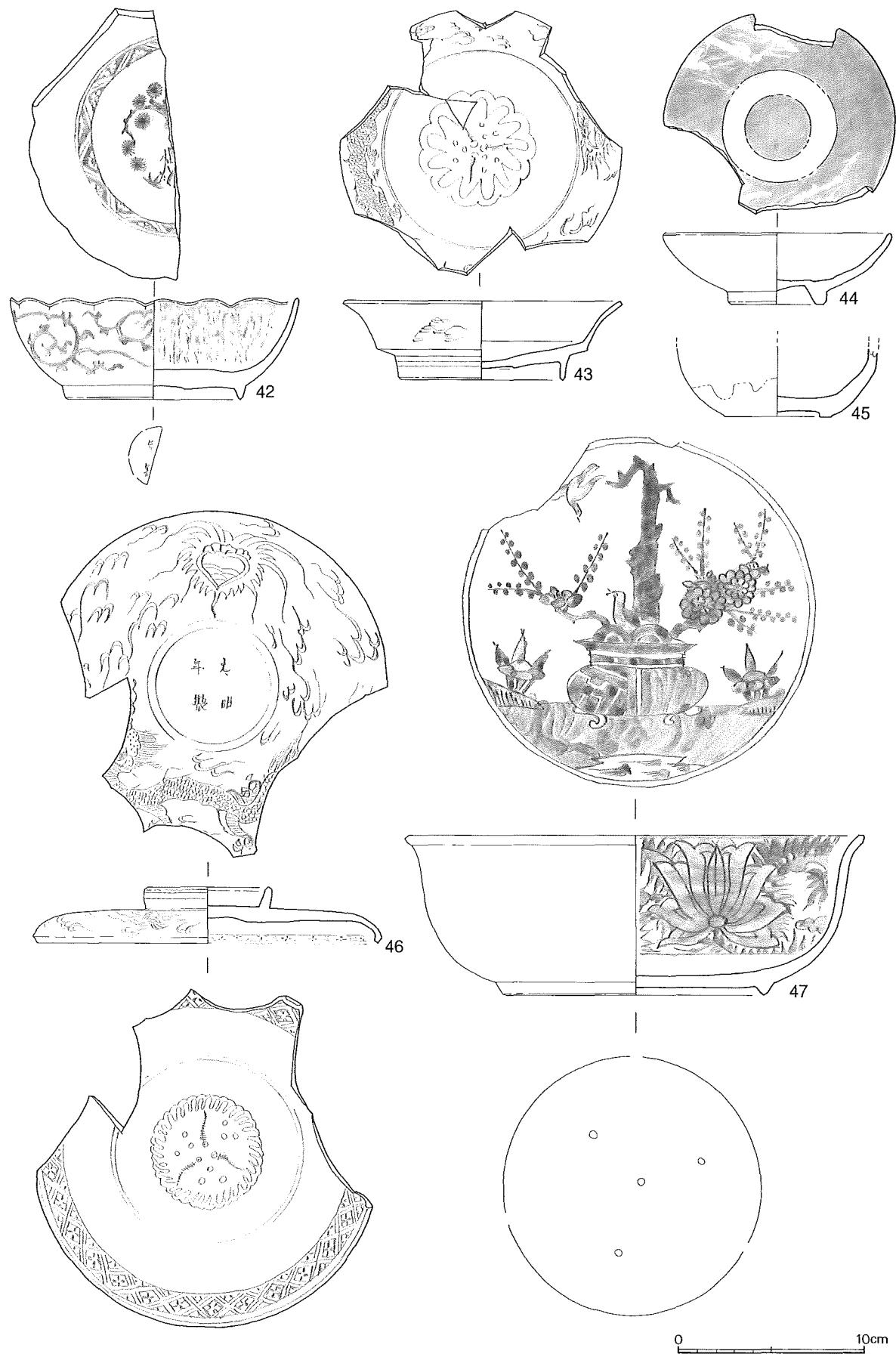
全ての時期を通していえることは、長崎奉行所ということでイメージされる「驚くような名品」は比較的少なく、町屋と比較しても総じて平均的な陶磁器が多く出土しているということであろう。ただし、中国や東南アジア製品がいずれの時期も一定量含まれる点などに、特色があるということができる。今後の課題としては、例えば煎茶具など機能別に検討を行い、より具体的な評価を行う必要があると考えられる（川口）。



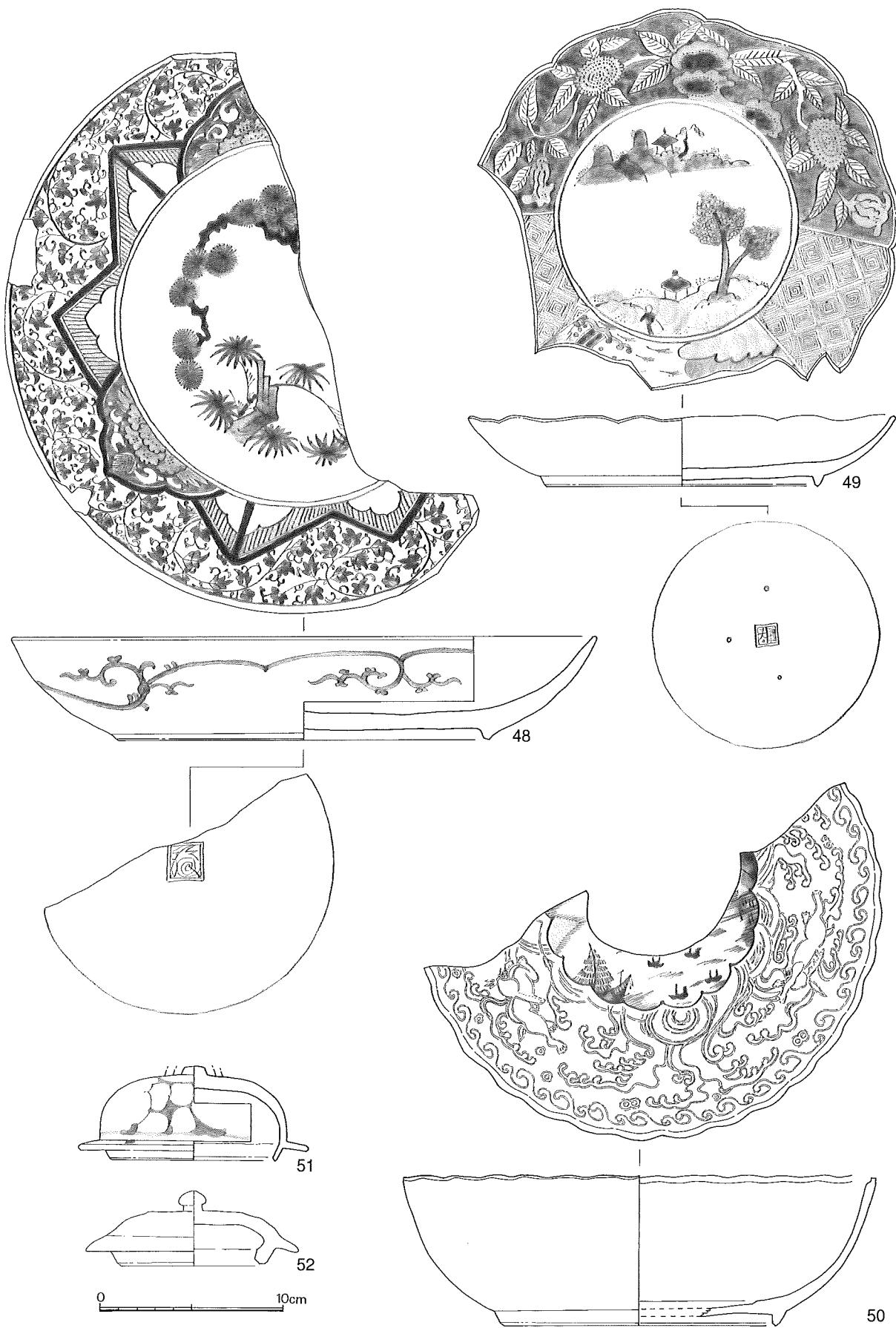
第15図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図① (1 / 3)



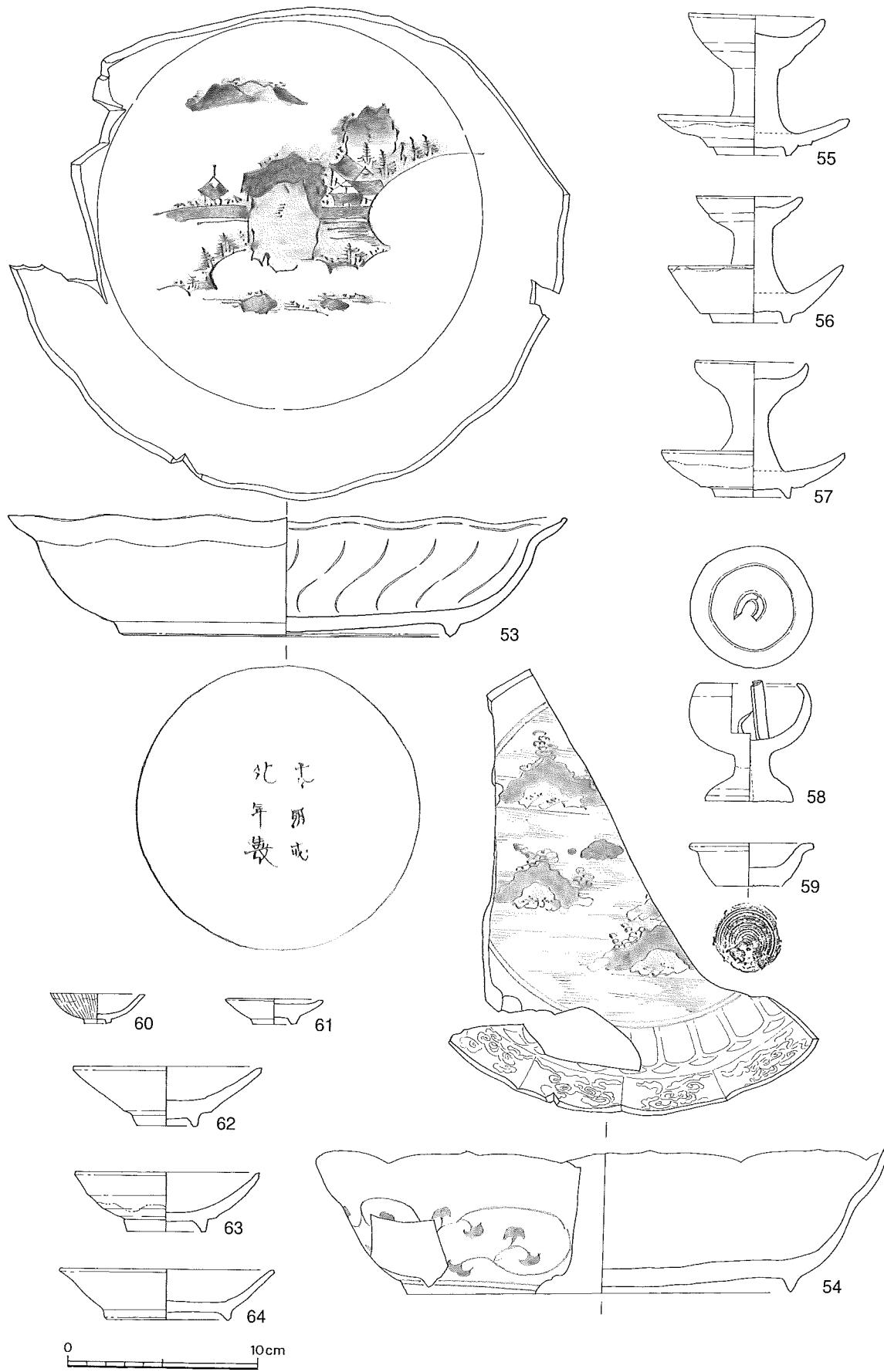
第16図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図② (1 / 3)



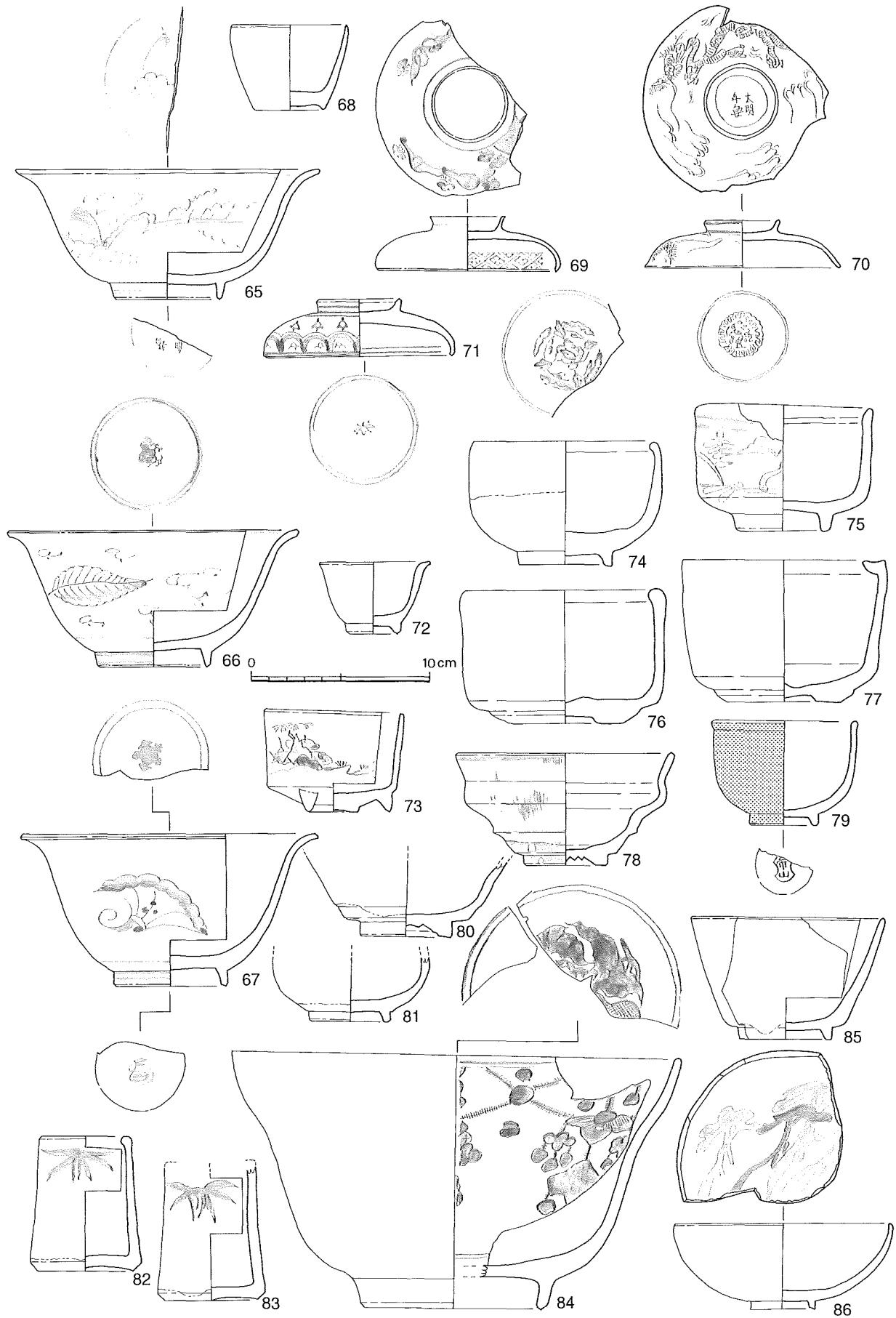
第17図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図③ (1 / 3)



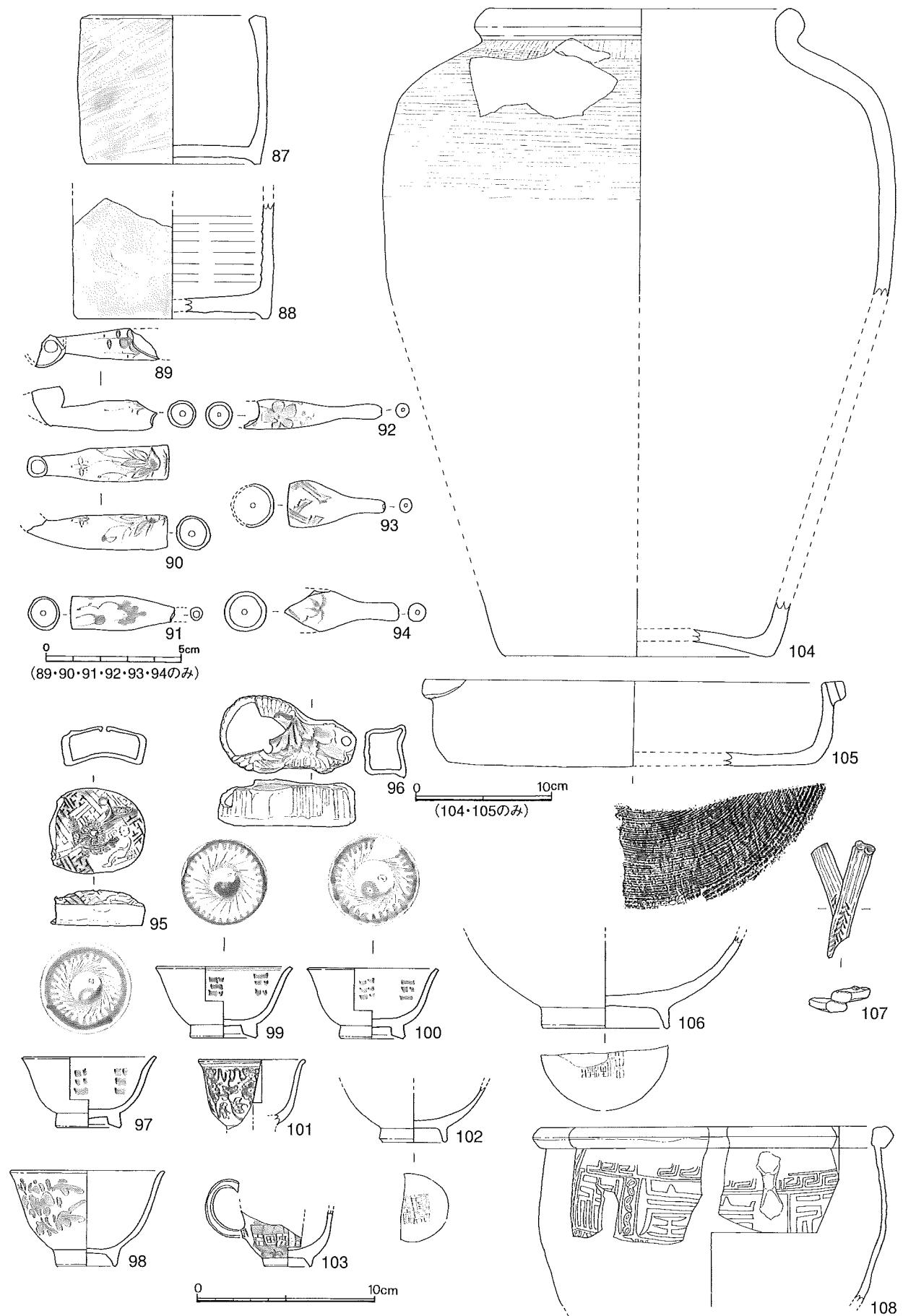
第18図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図④ (1 / 3)



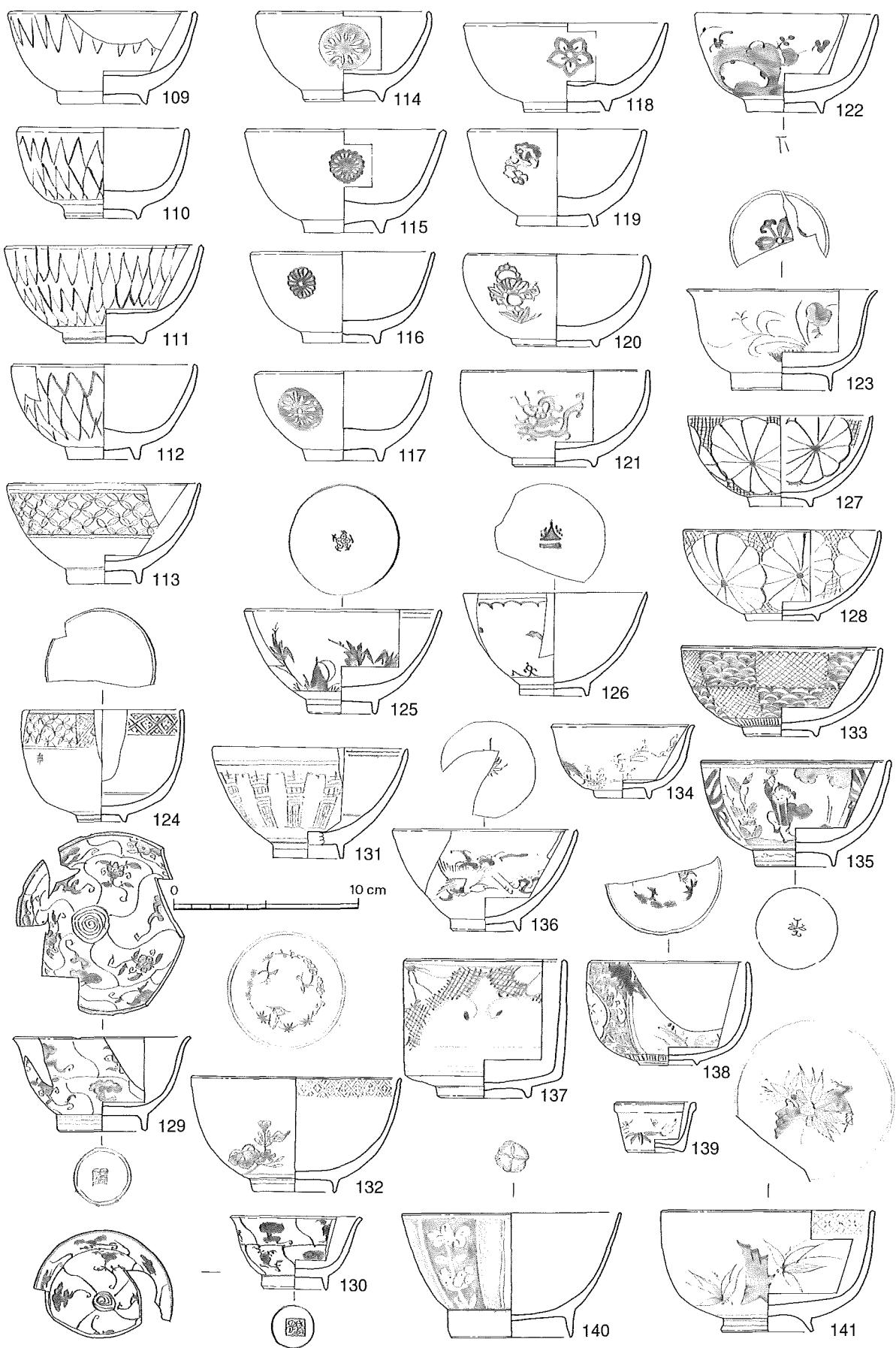
第19図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑤ (1 / 3)



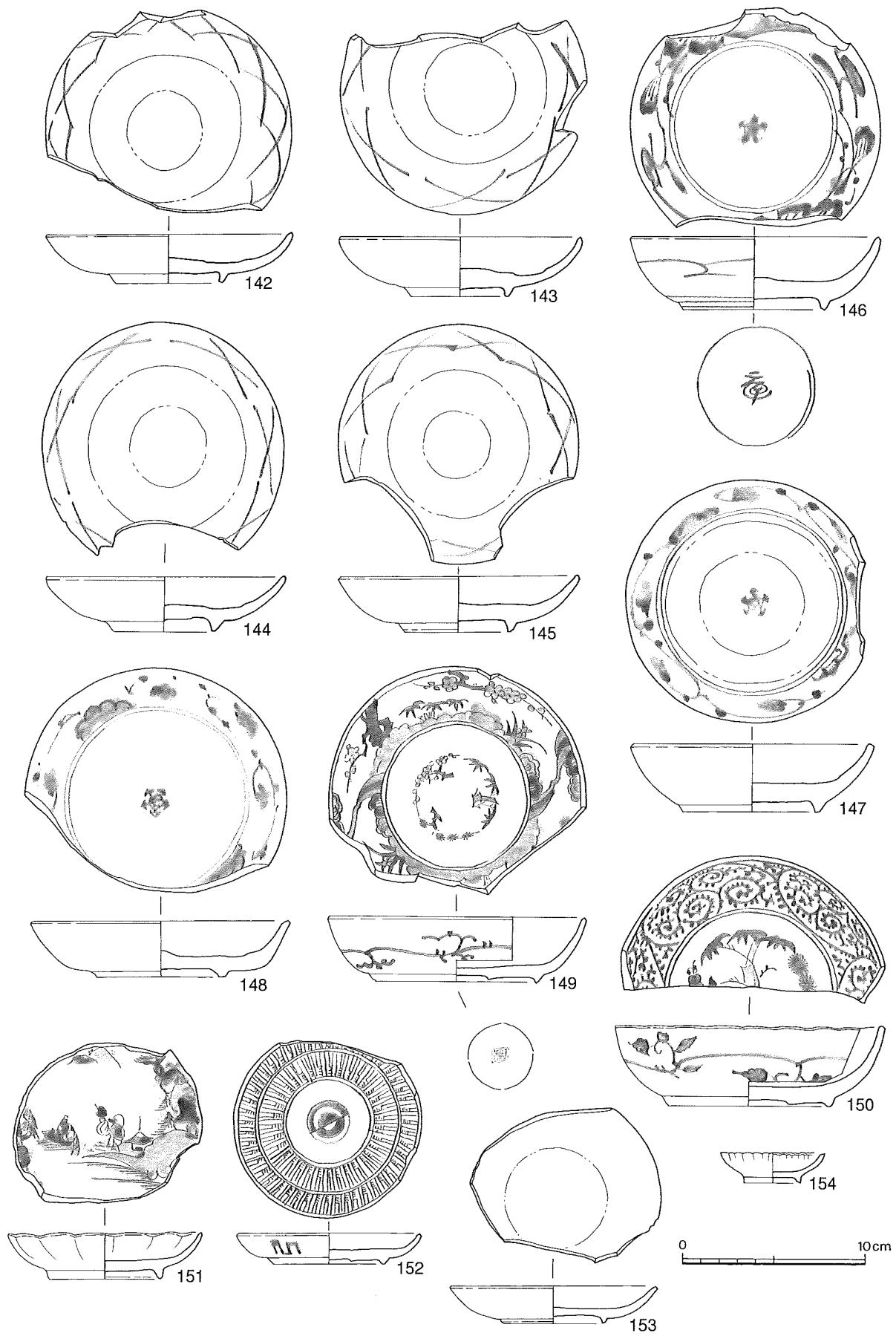
第20図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑥ (1 / 3)



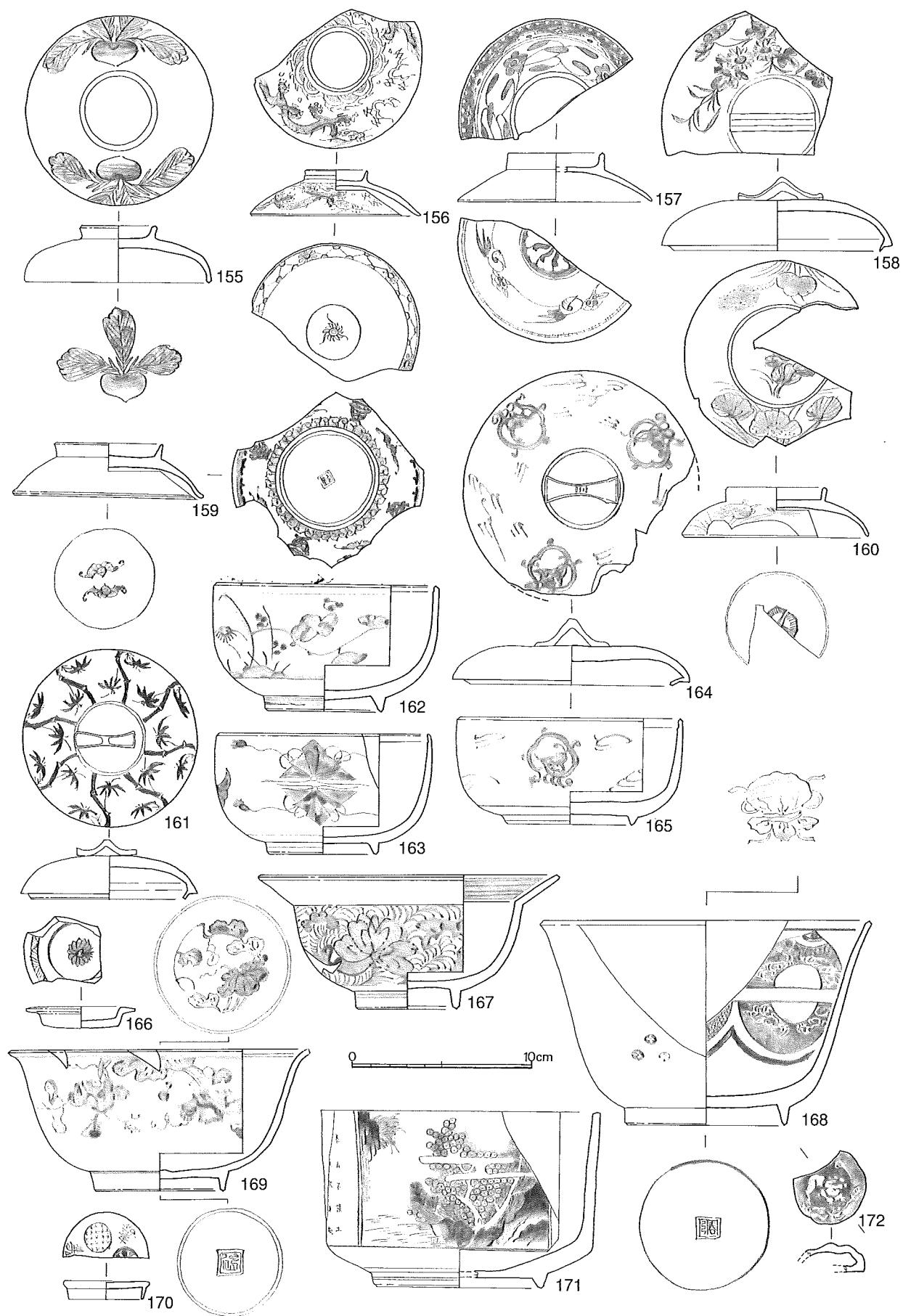
第21図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑦ (1/2 · 1/3 · 1/4)



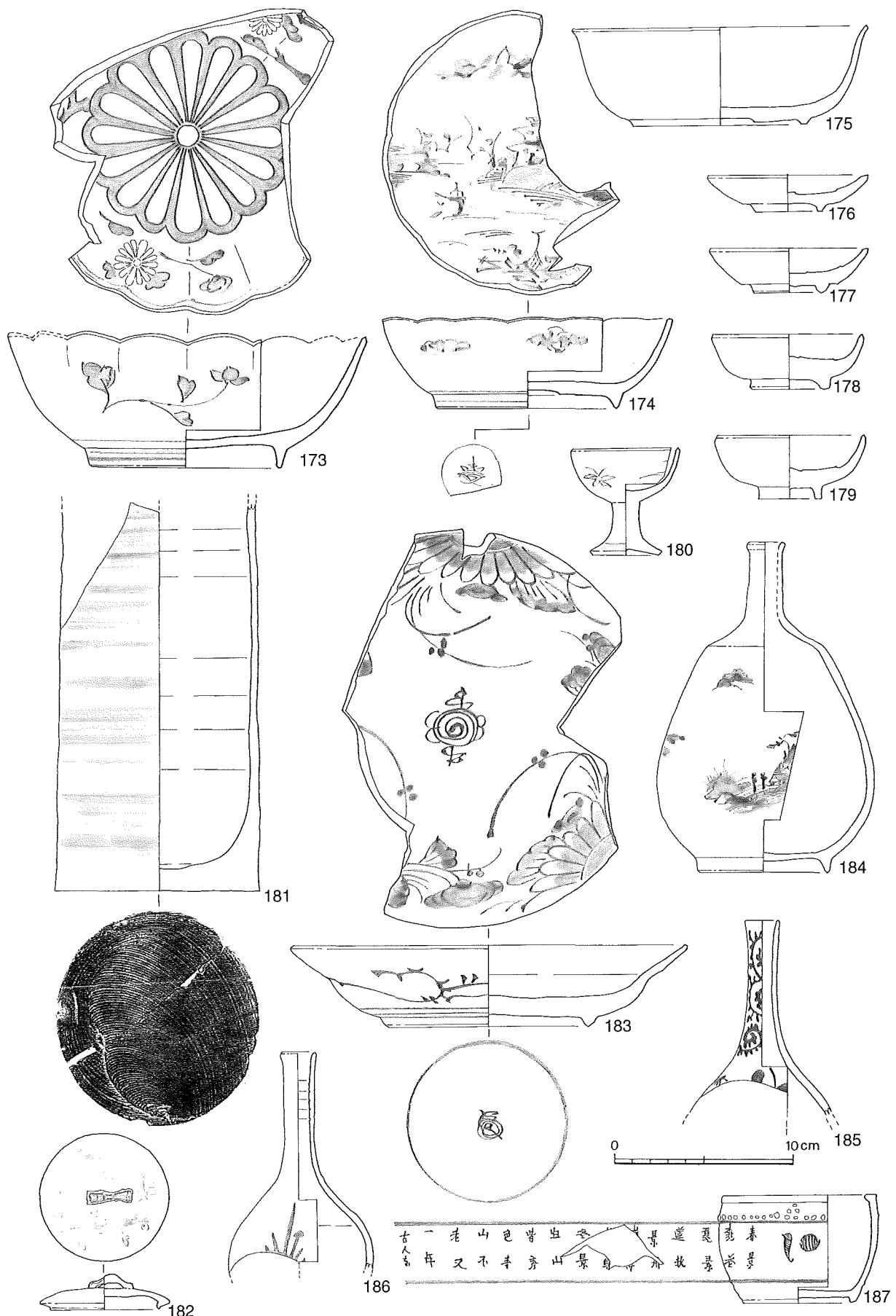
第22図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑧ (1 / 3)



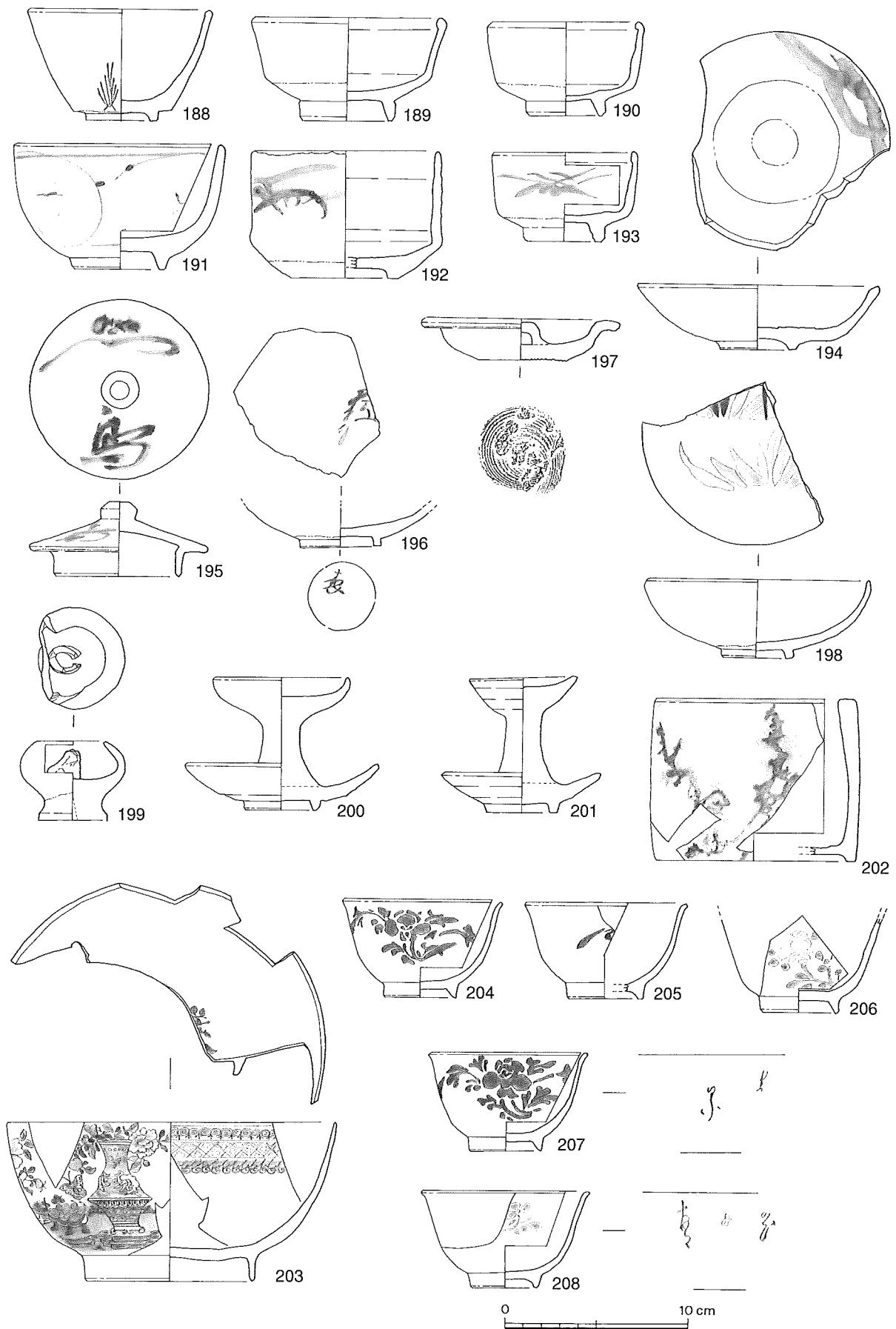
第23図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑨ (1 / 3)



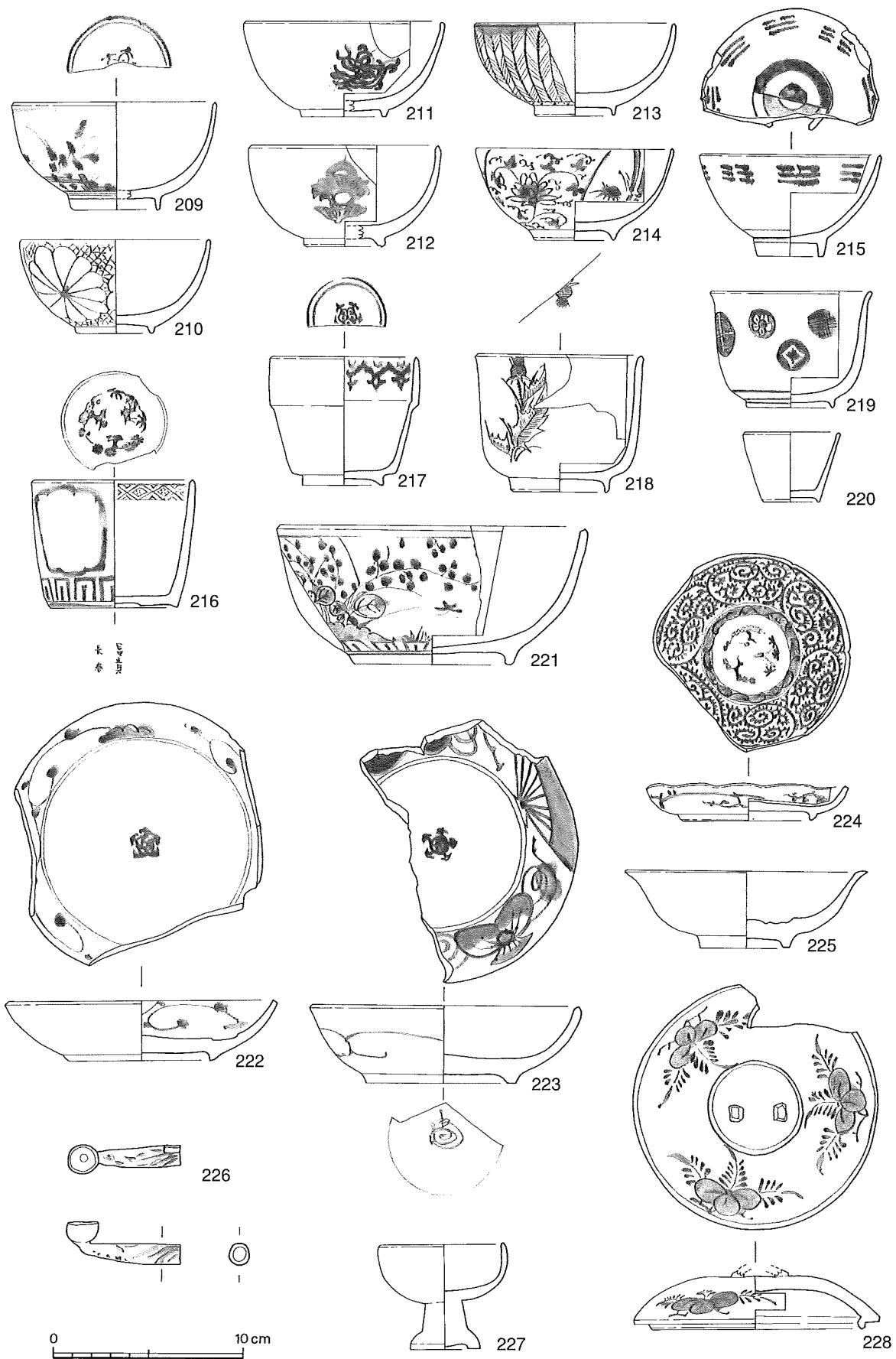
第24図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑩ (1 / 3)



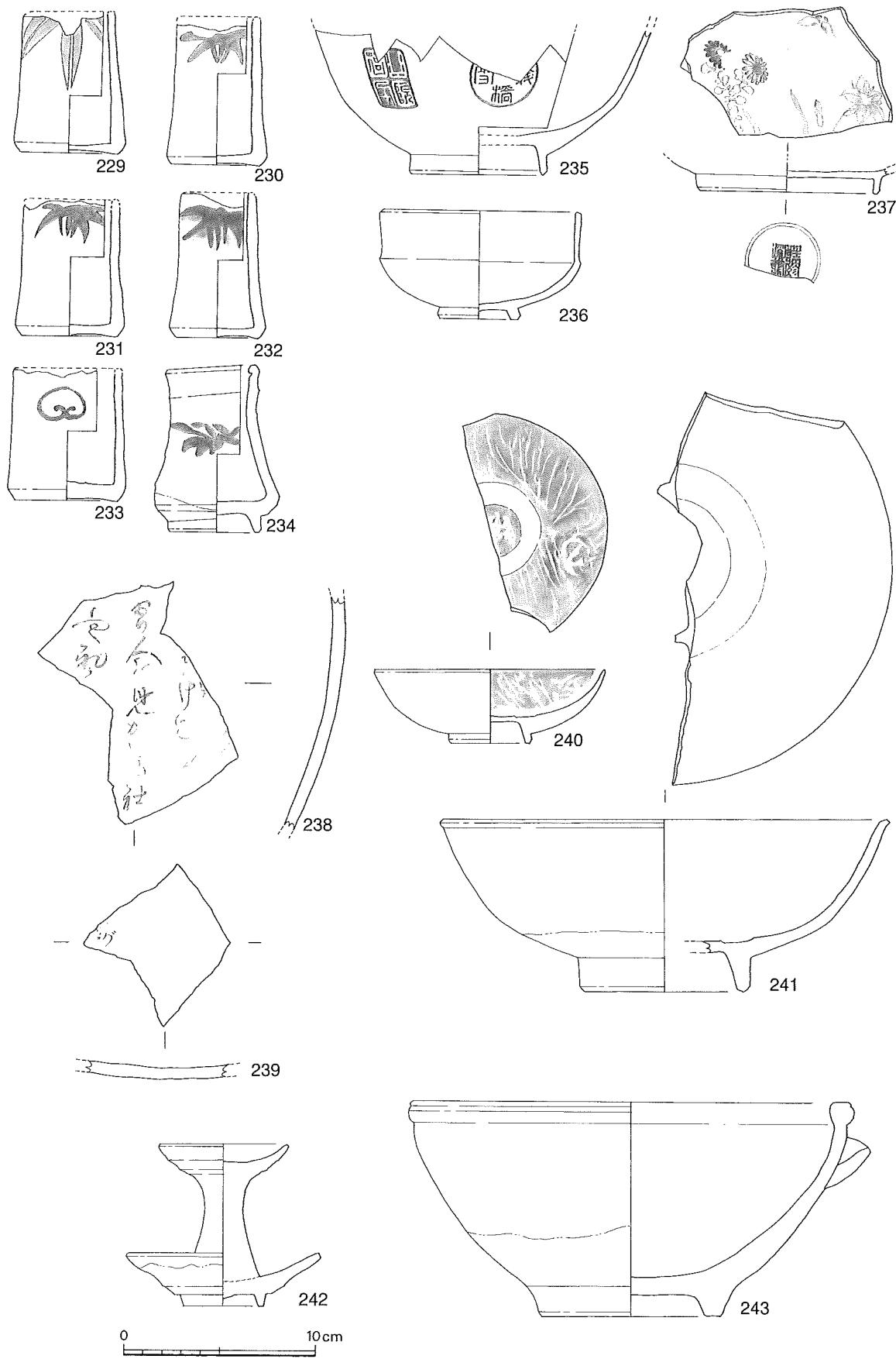
第25図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図(1) (1/3)



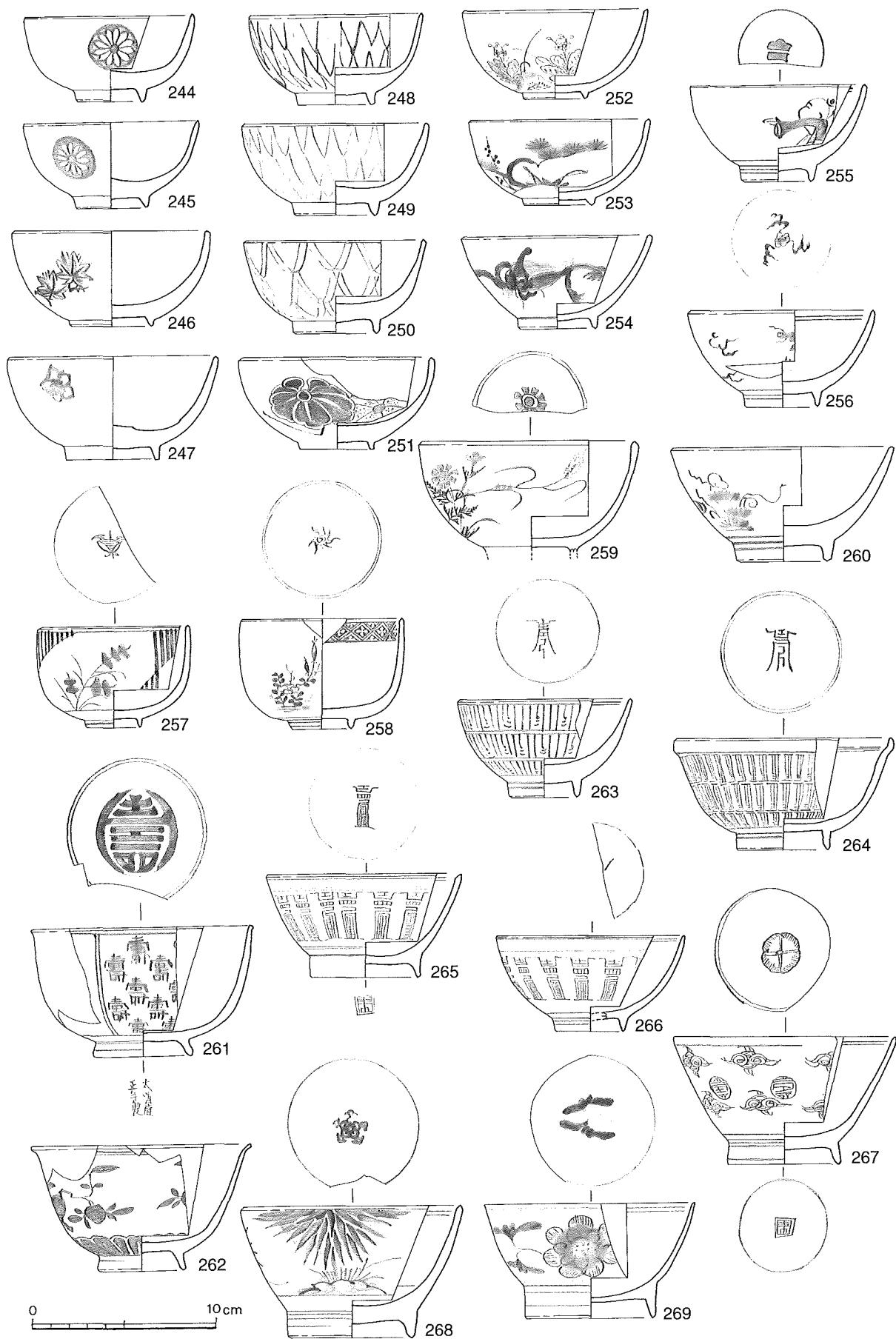
第26図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑫ (1 / 3)



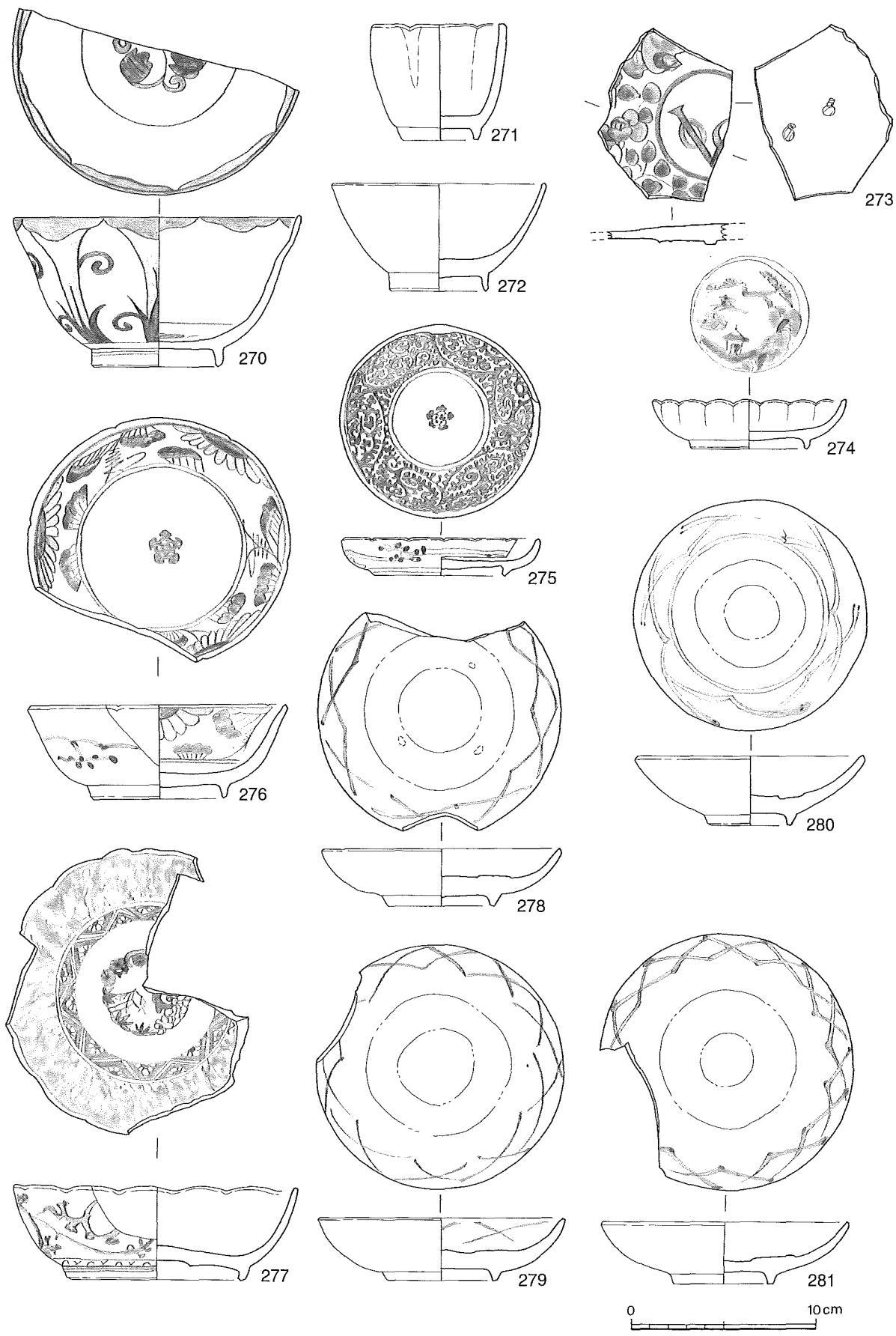
第27図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑬（1/3）



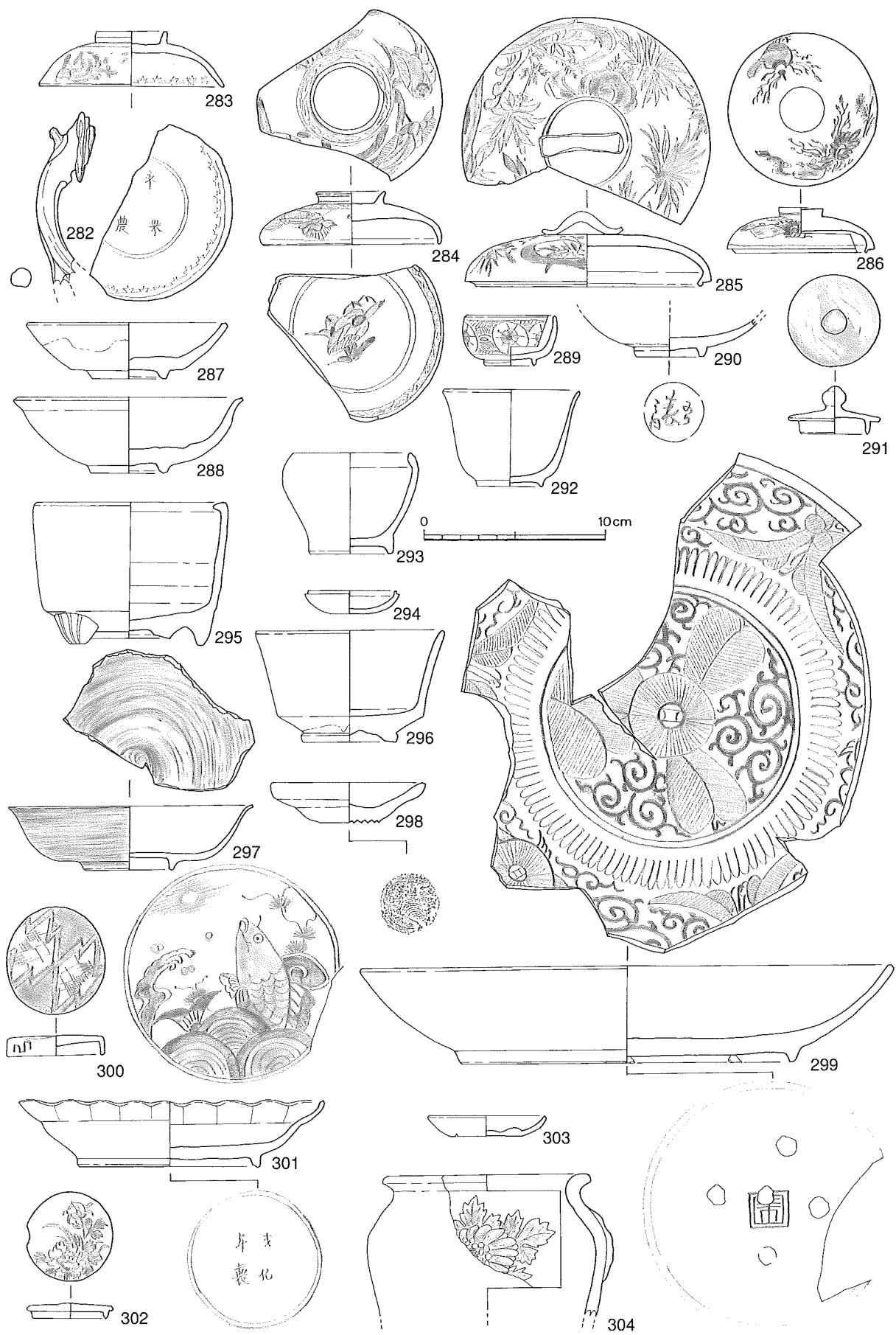
第28図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図④ (1 / 3)



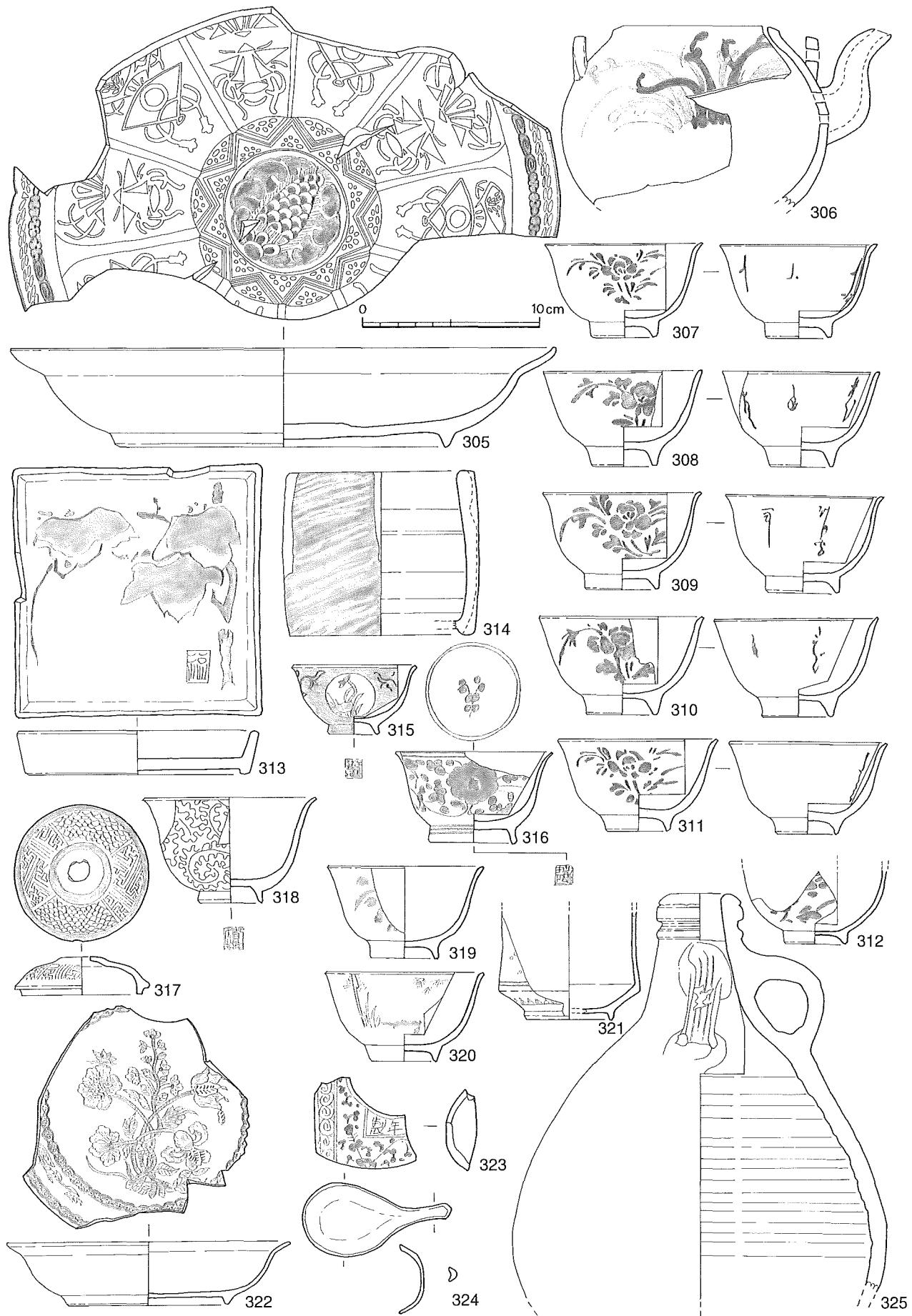
第29図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑮ (1 / 3)



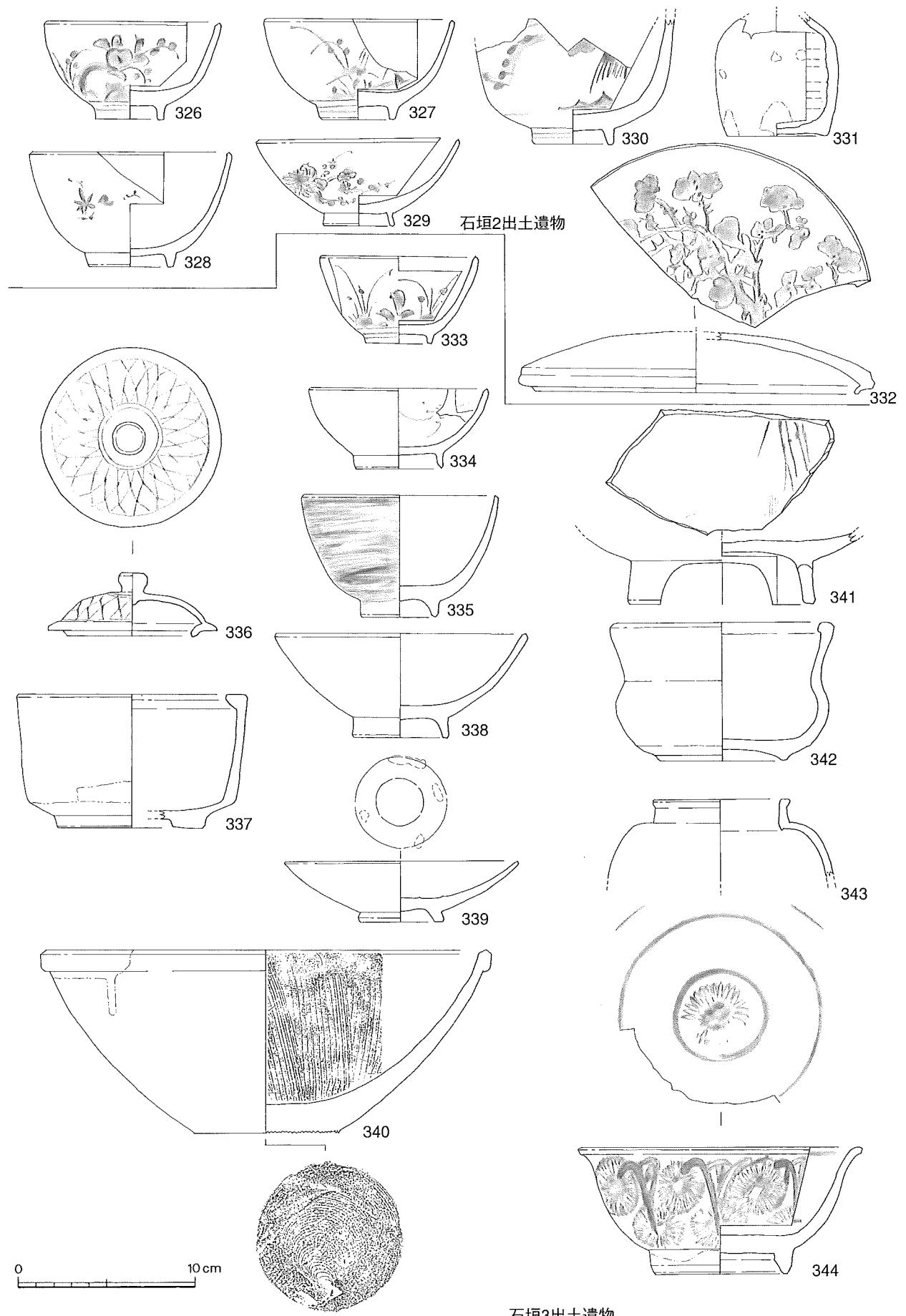
第30図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑯ (1 / 3)



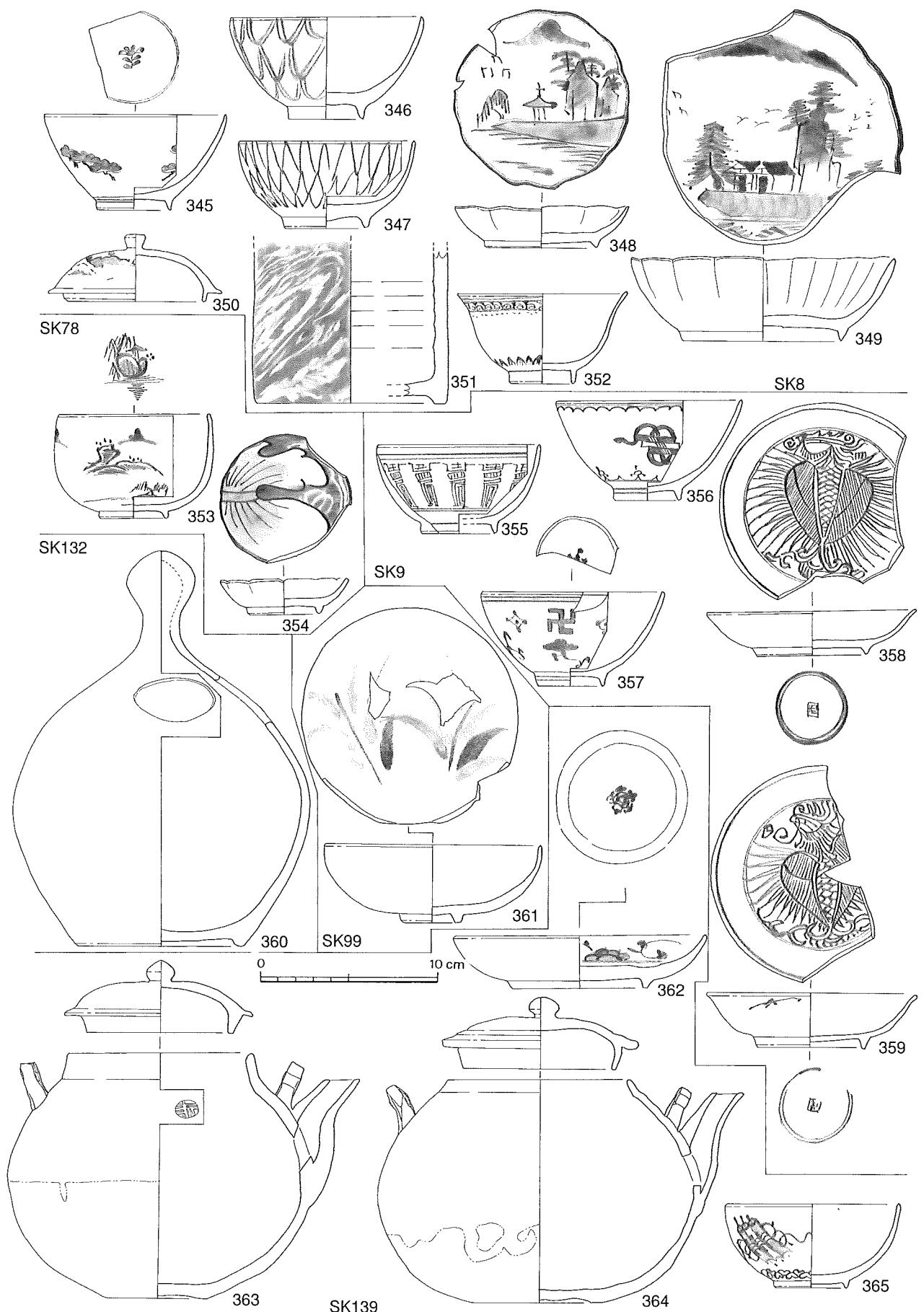
第31図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑰ (1/3)



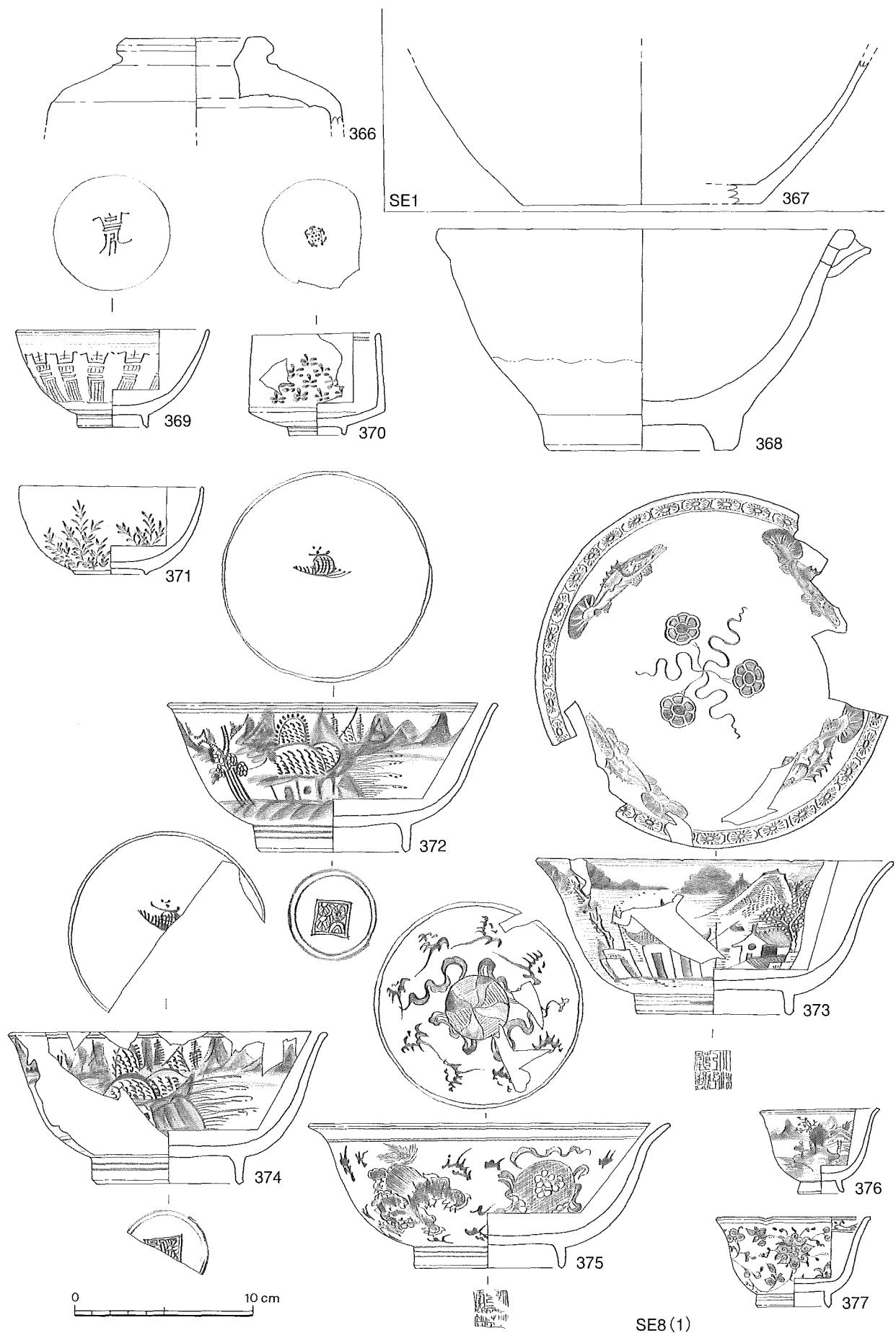
第32図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑯ (1 / 3)



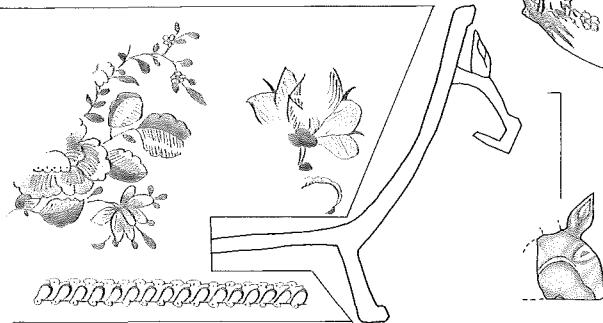
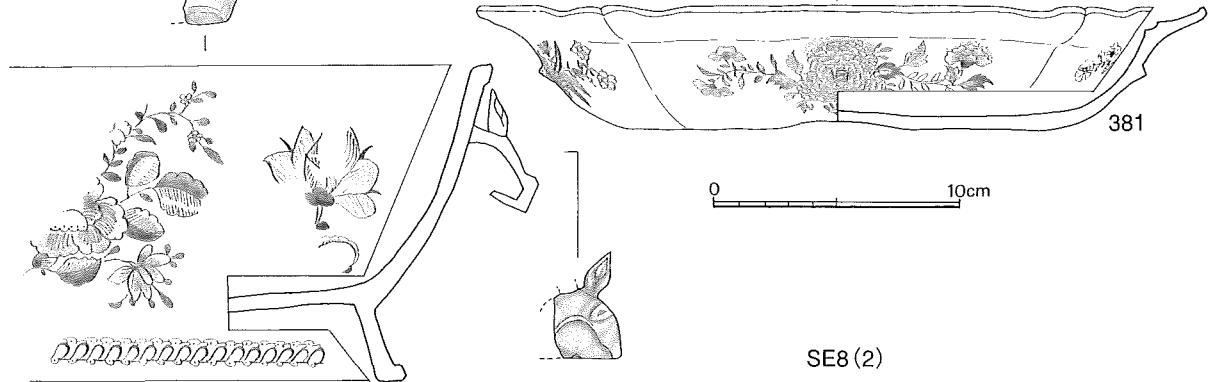
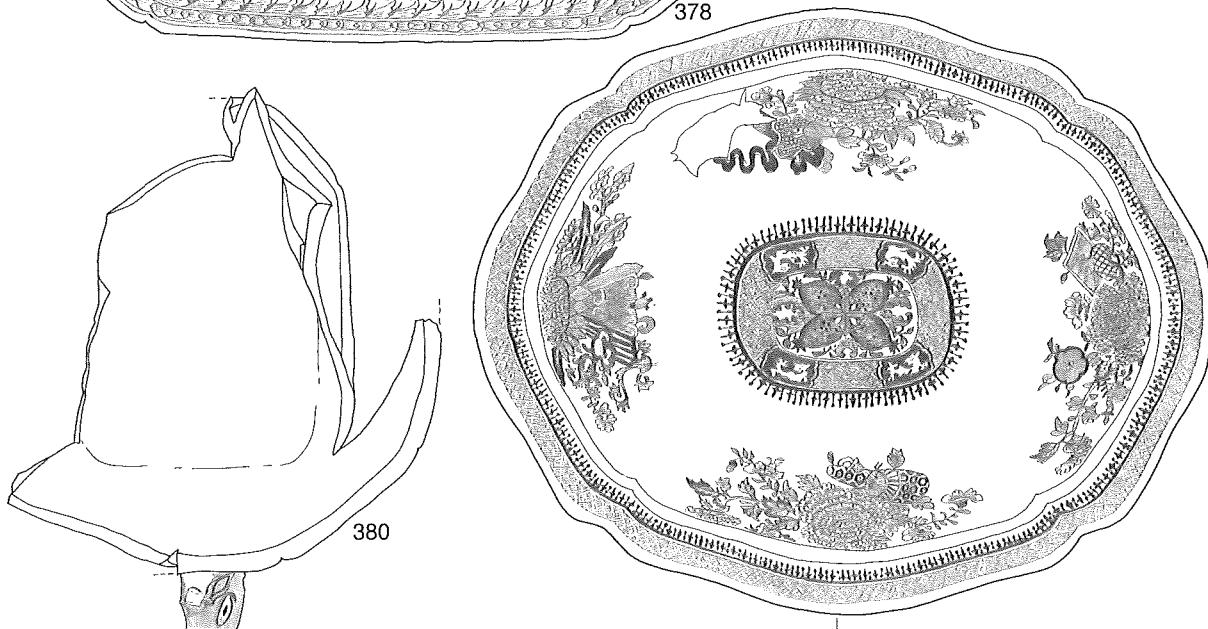
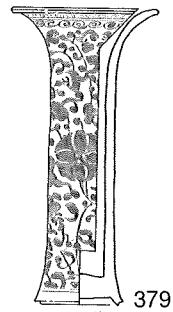
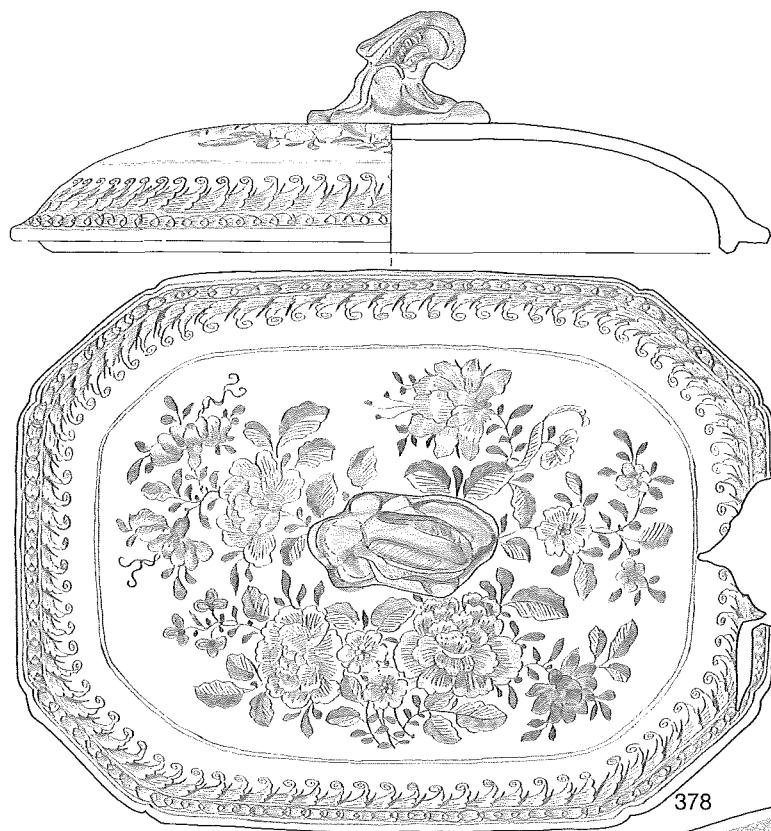
第33図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑯ (1 / 3)



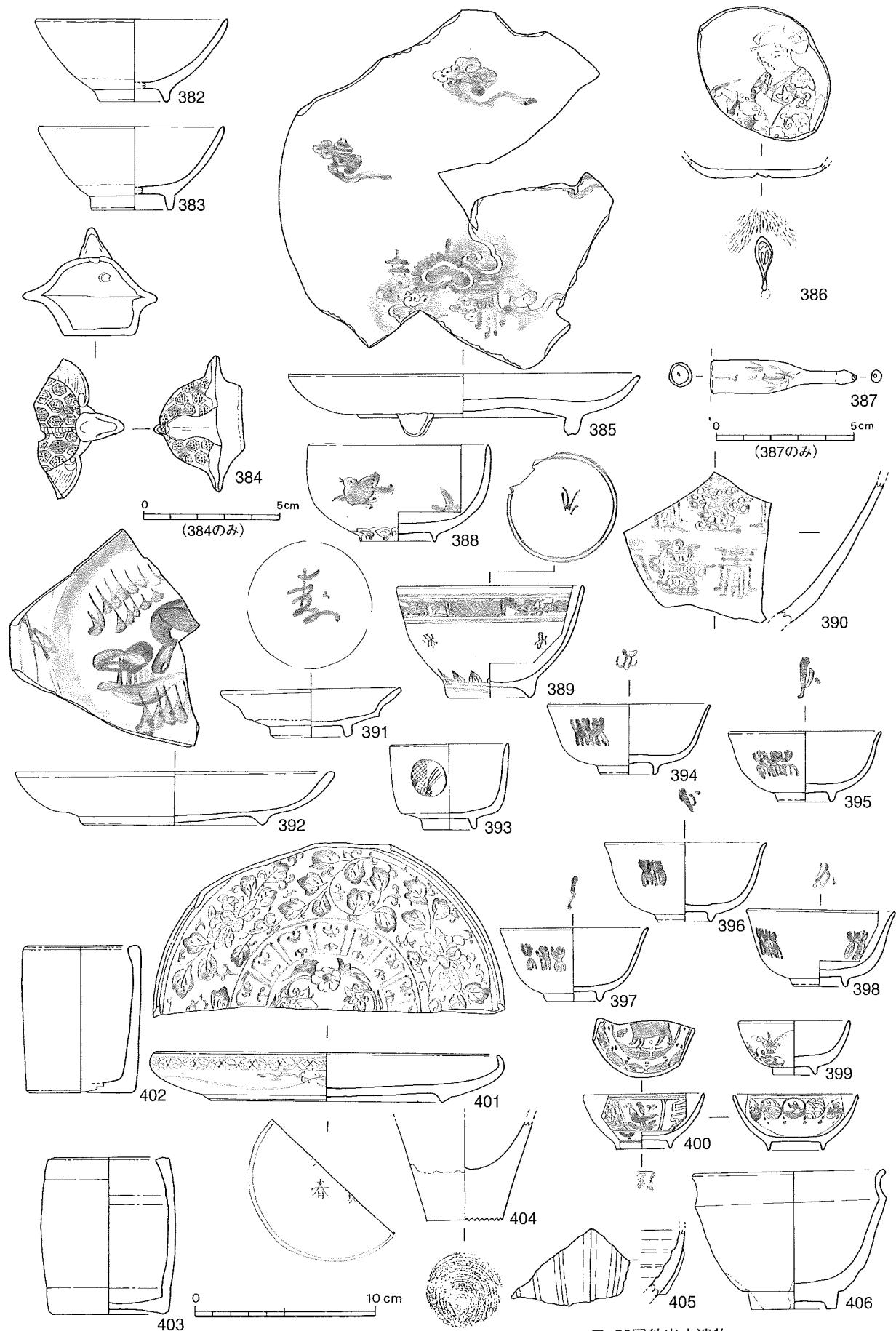
第34図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図⑩ (1 / 3)



第35図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図② (1 / 3)

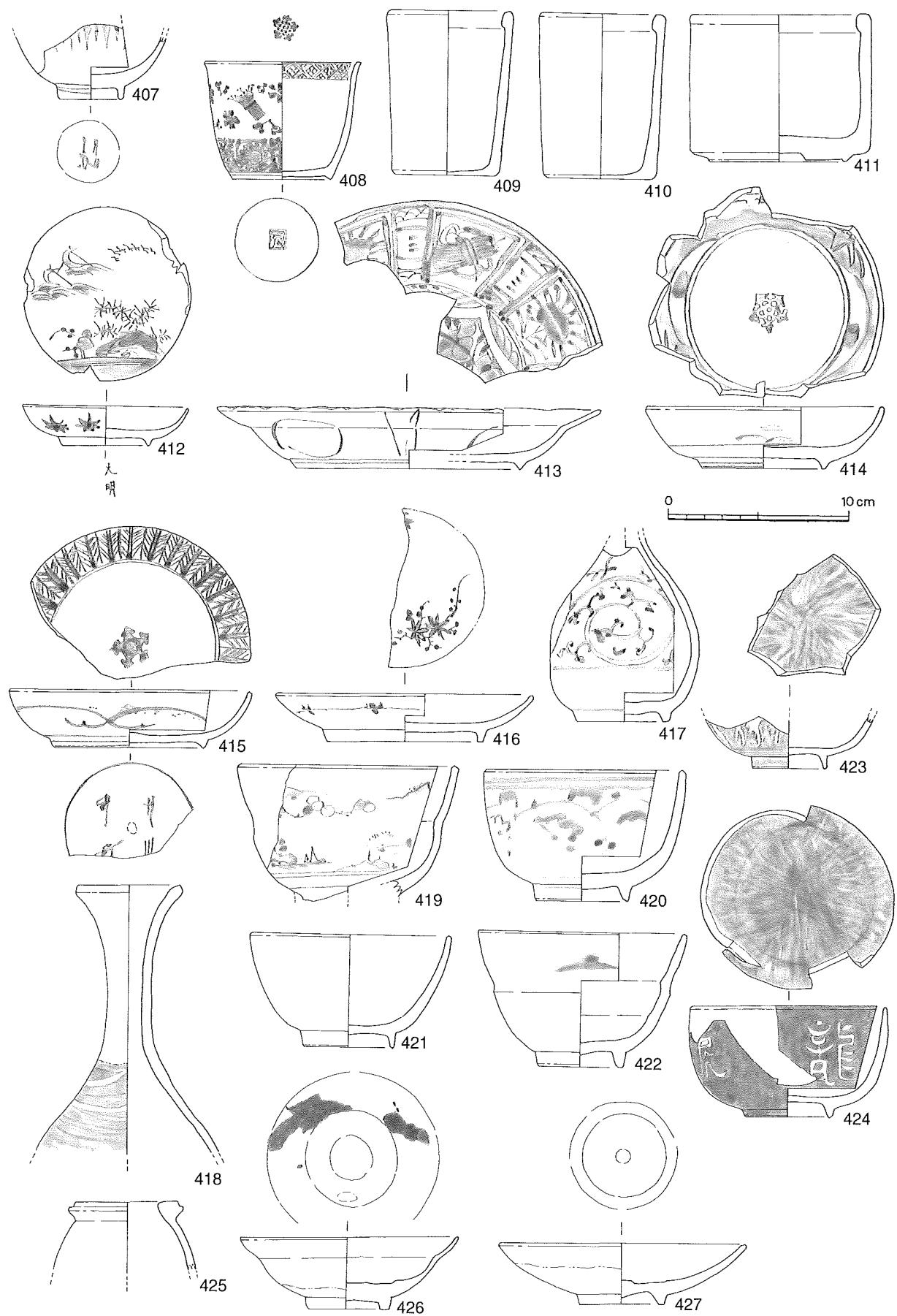


第36図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図㉒ (1 / 3)



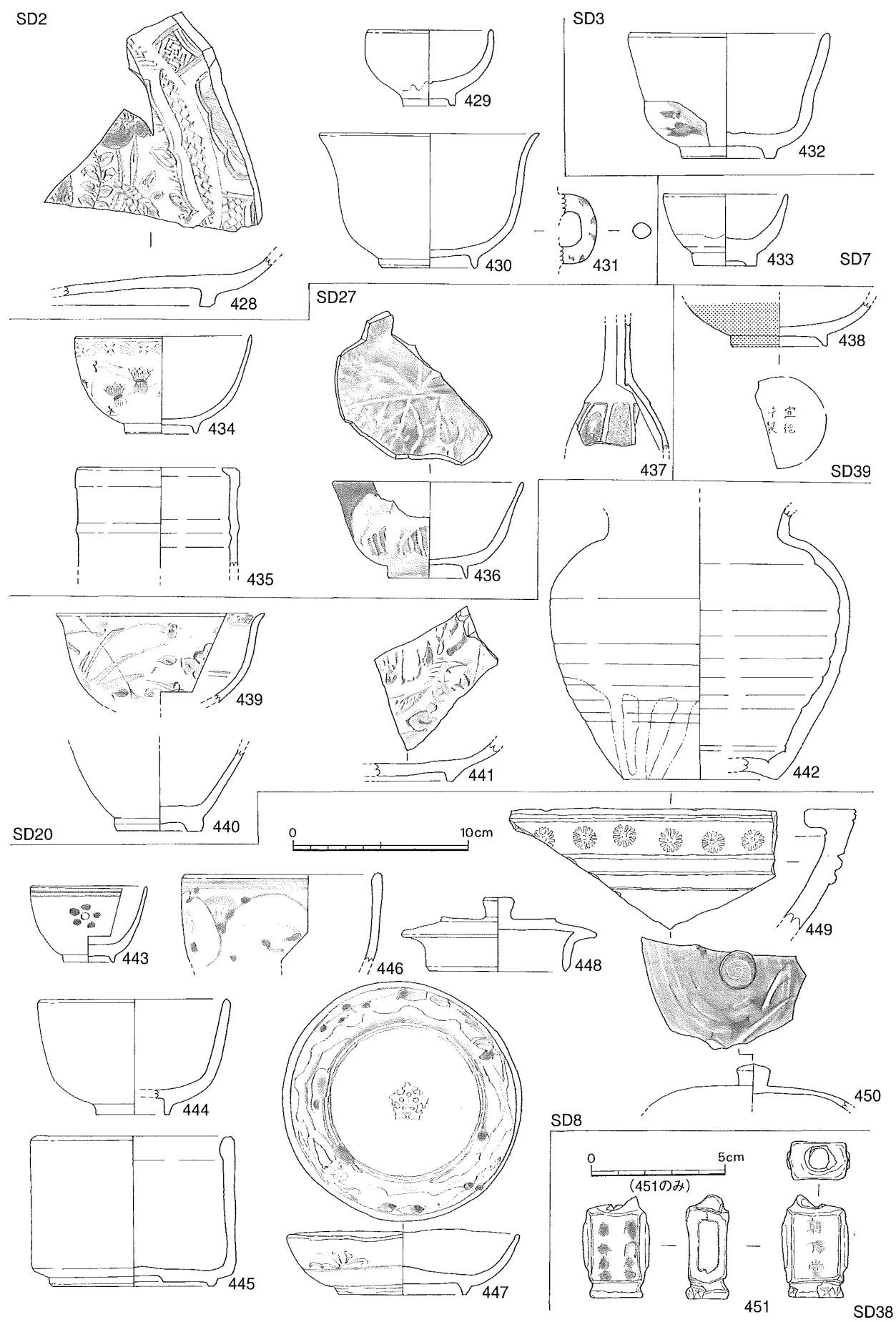
III・IV層他出土遺物

第37図 長崎奉行所跡上層面出土遺物実測図② (1/2・1/3)

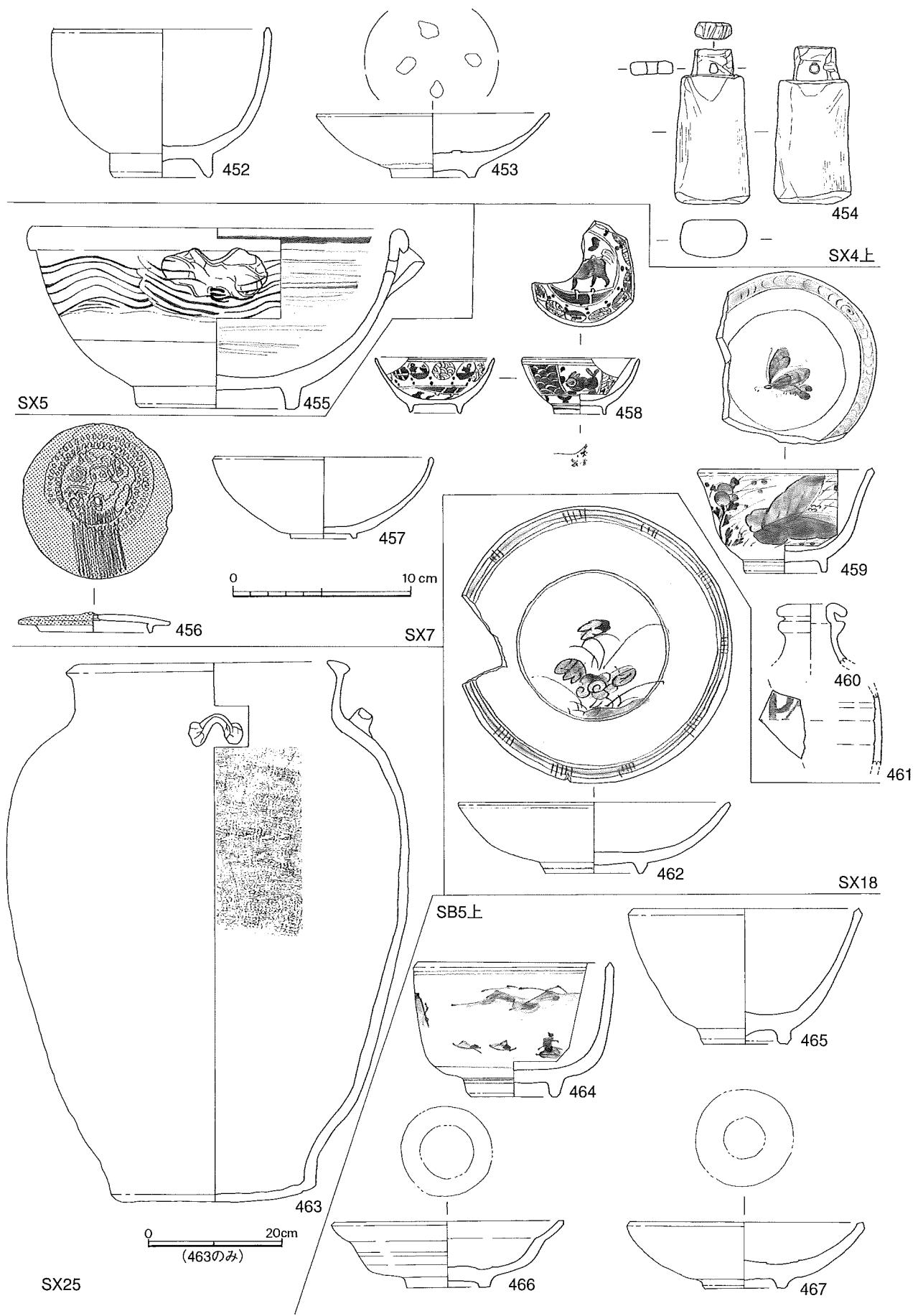


SD9出土遺物

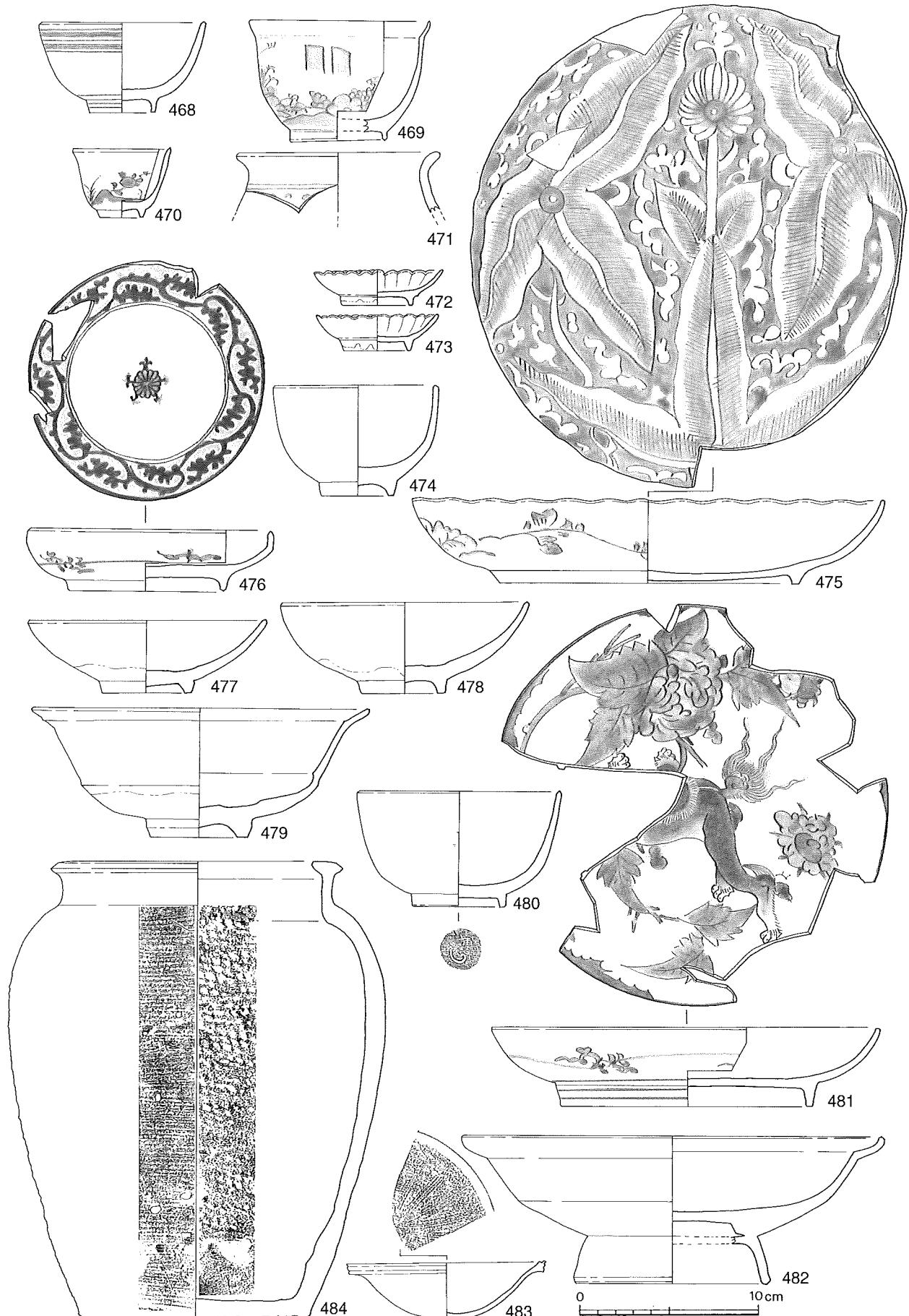
第38図 長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図① (1 / 3)



第39図 長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図② (1/2・1/3)

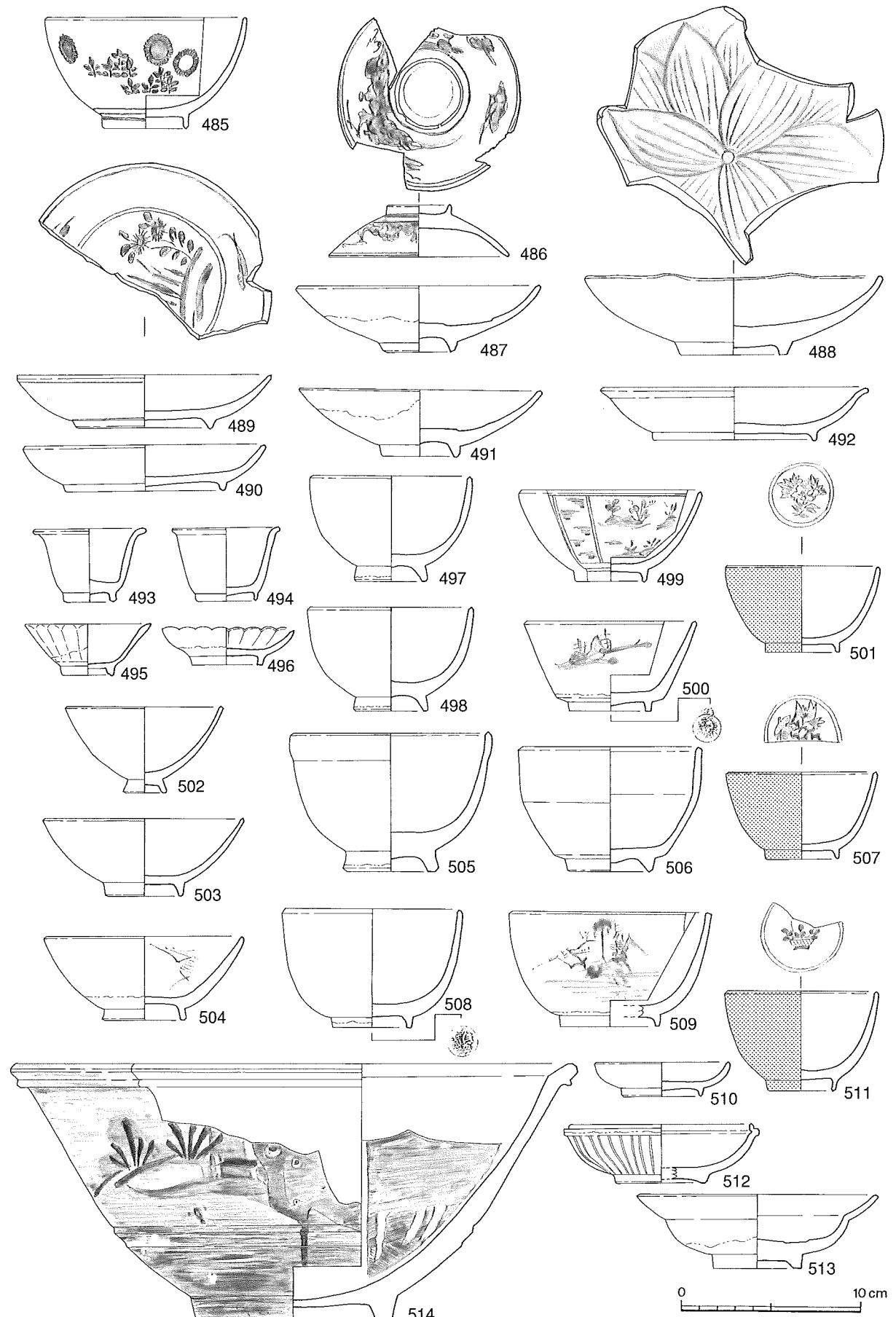


第40図 長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図③ (1/3・1/8)



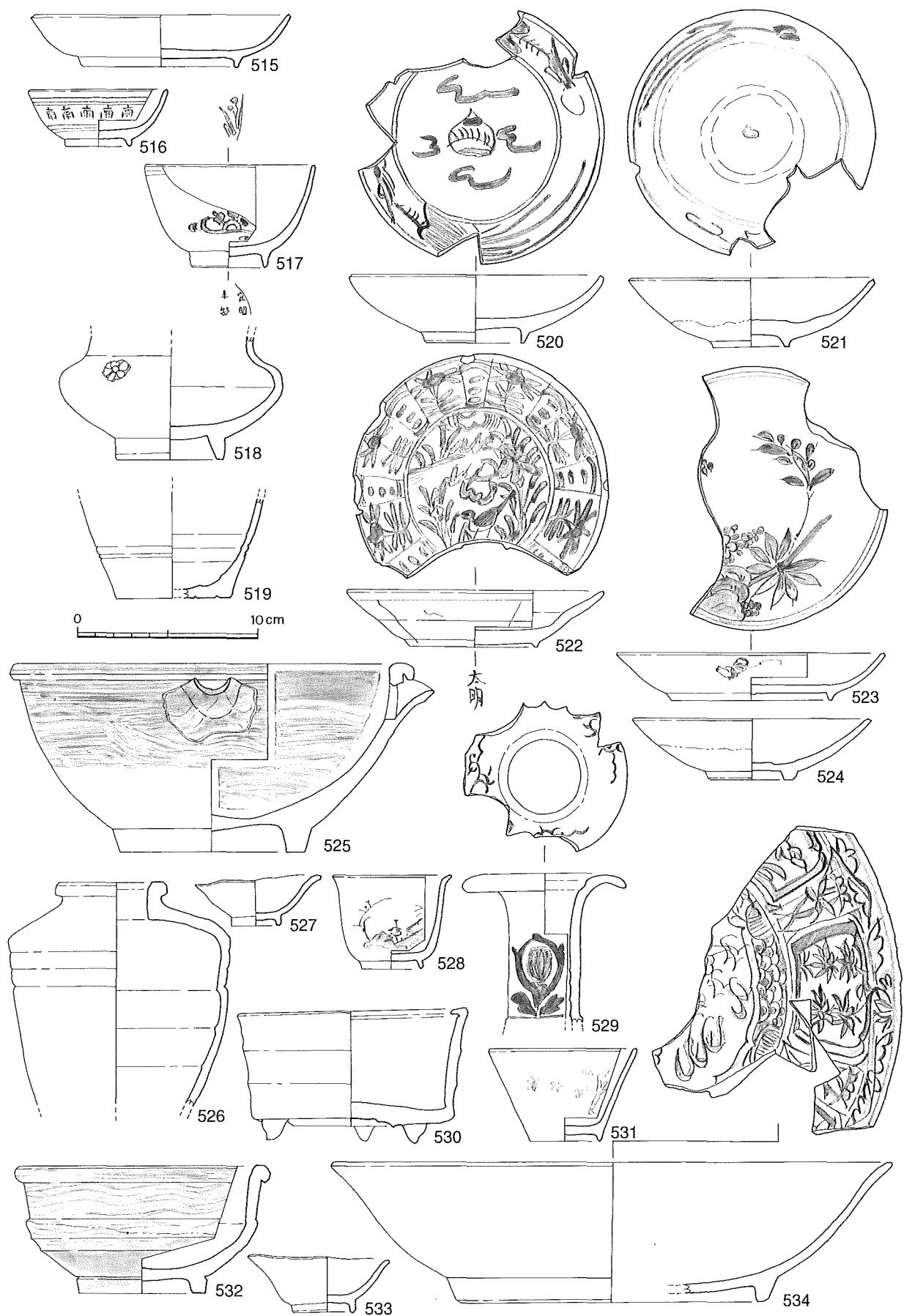
Va層出土遺物

第41図 長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図④ (1 / 3)



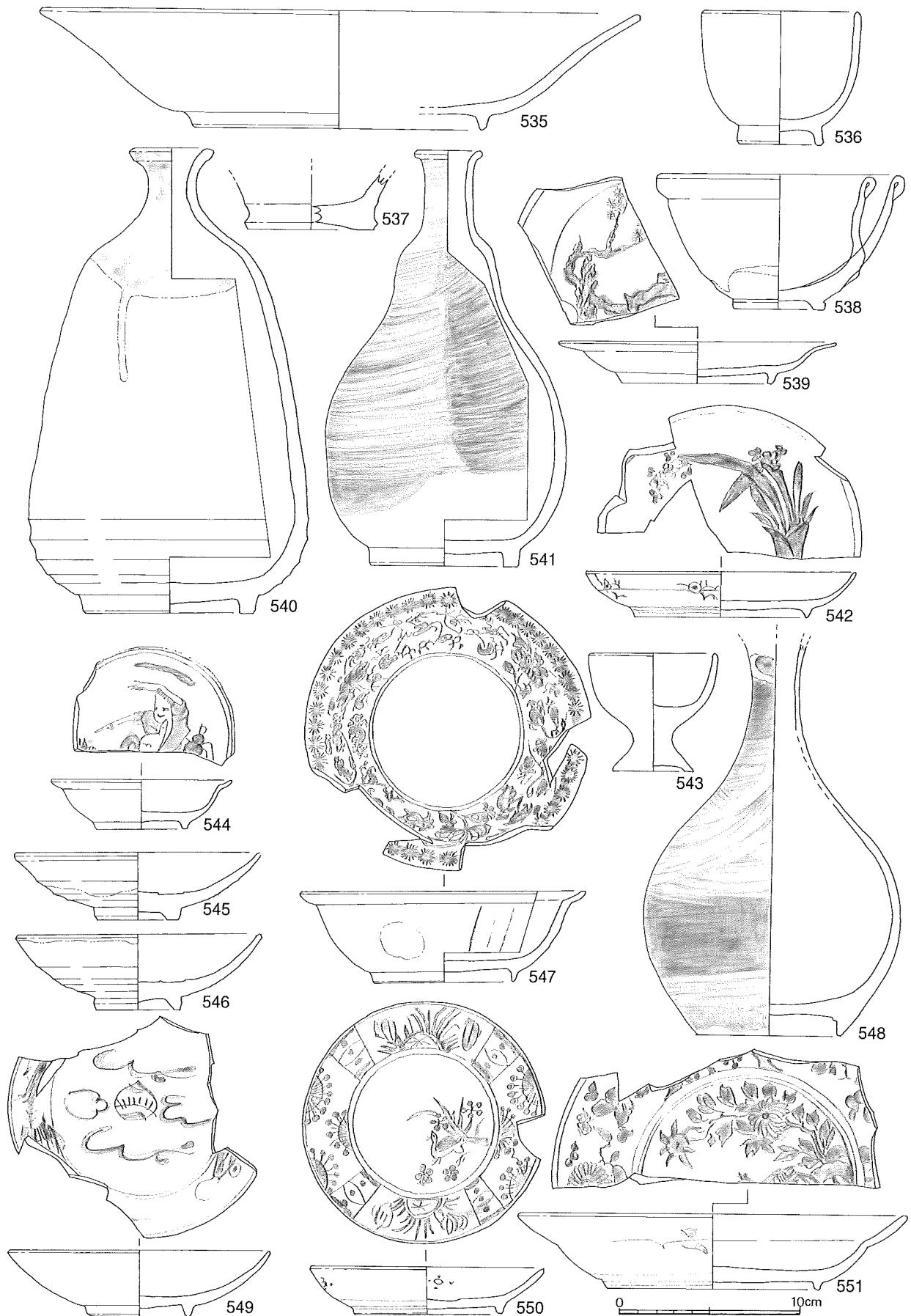
V層出土遺物(1)

第42図 長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図⑤ (1 / 3)



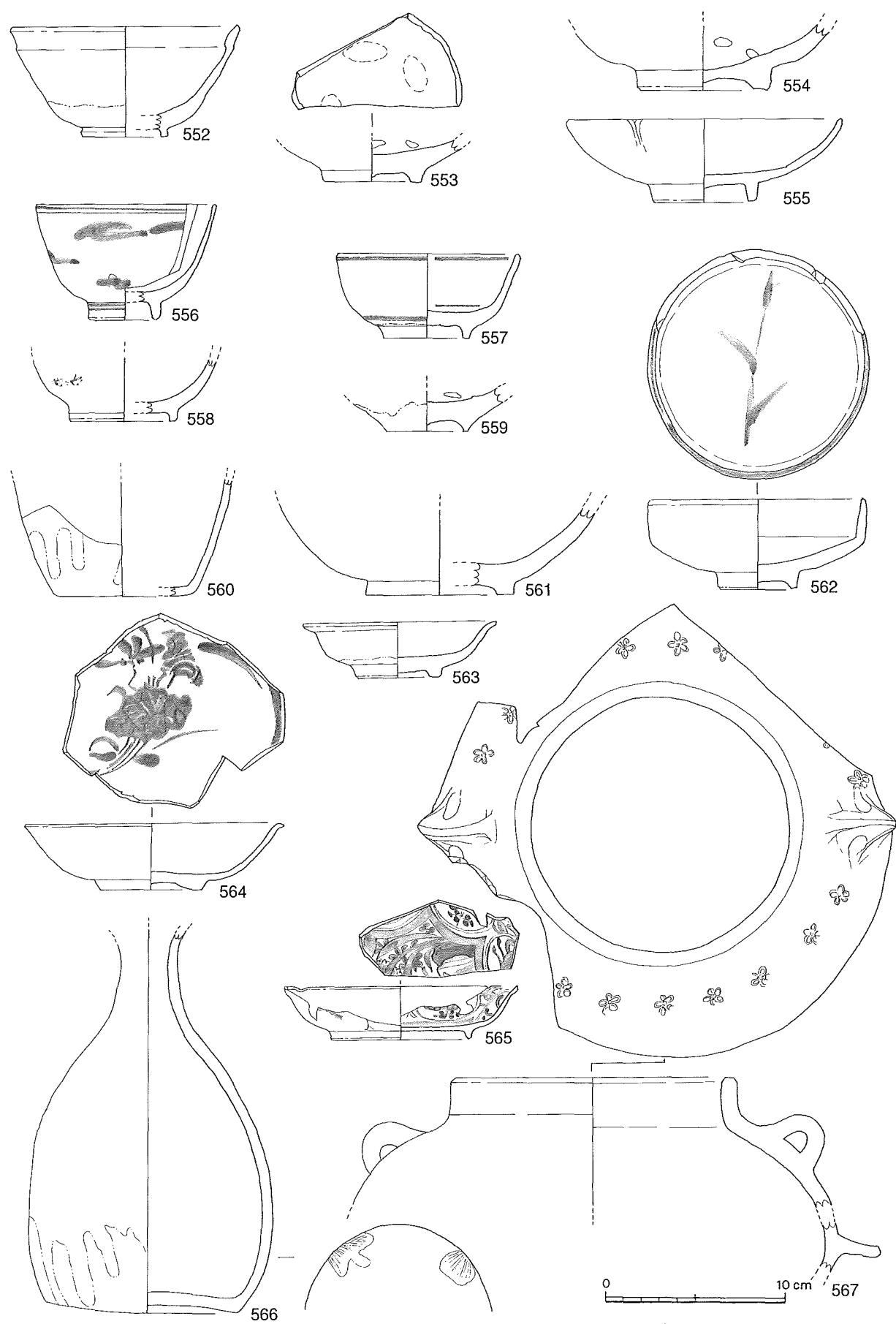
V層出土遺物(2)

第43図 長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図⑥ (1 / 3)



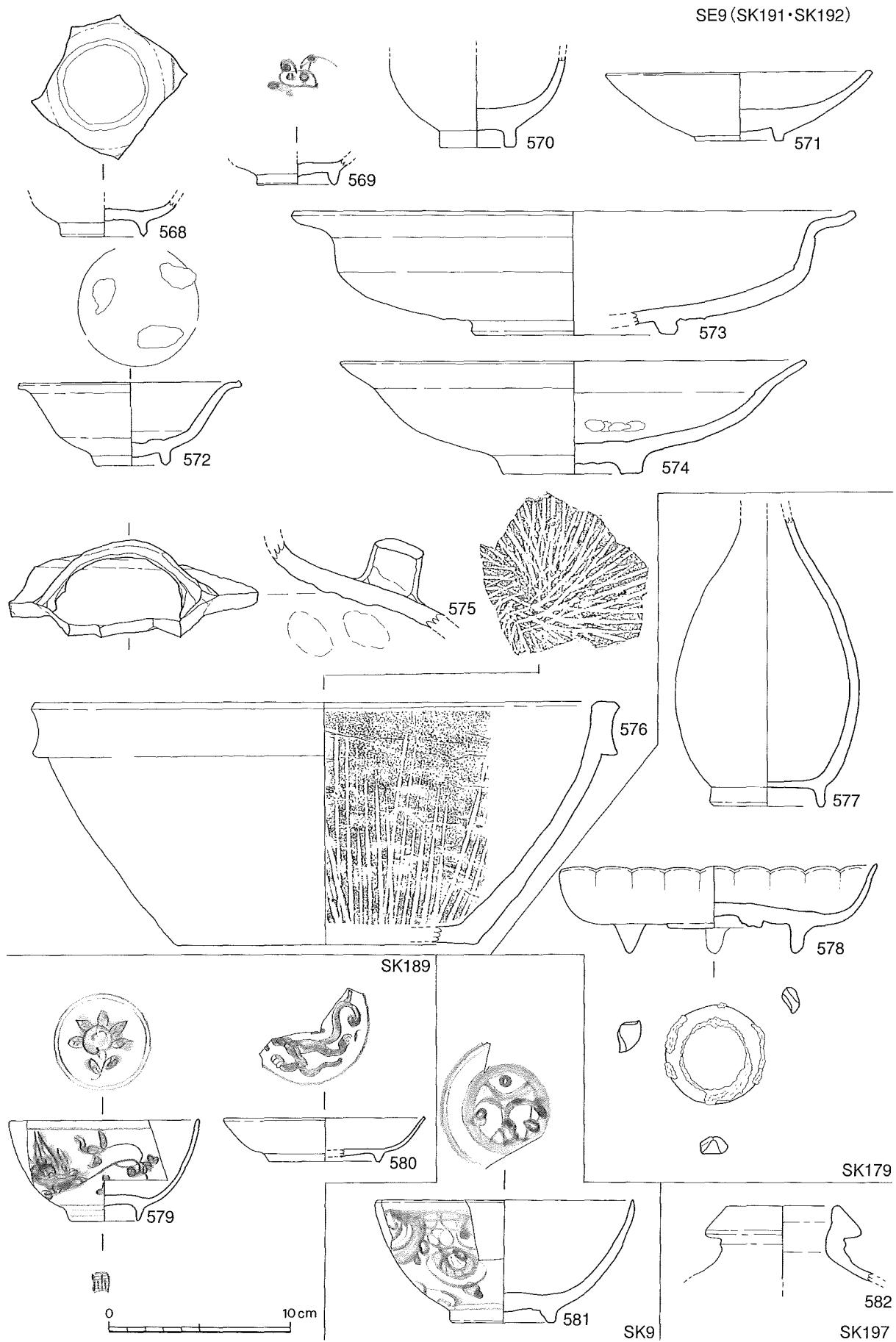
V層出土遺物(3)・IV層出土遺物

第44図 長崎奉行所跡中層面出土遺物実測図⑦ (1 / 3)

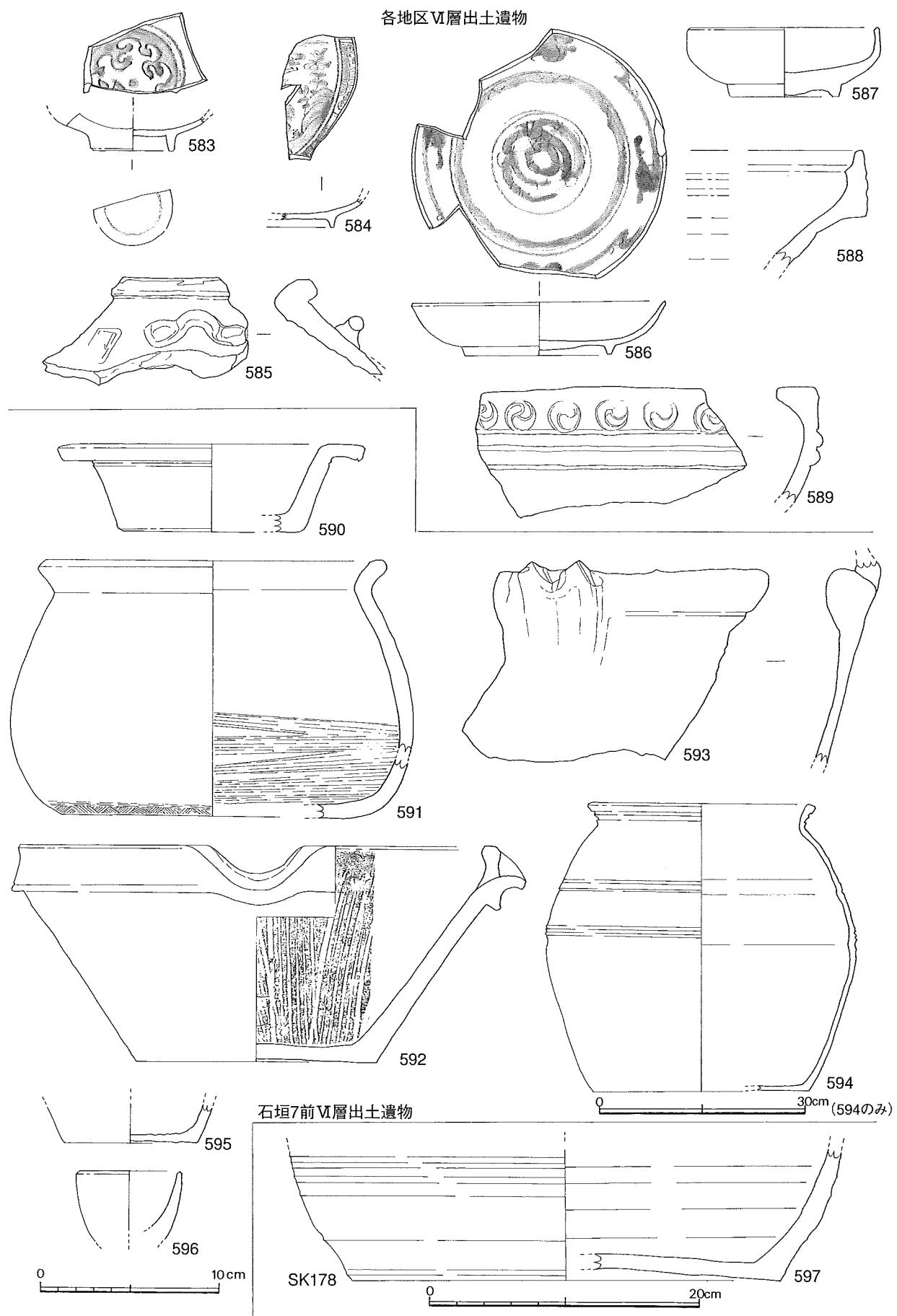


石垣9関係出土遺物

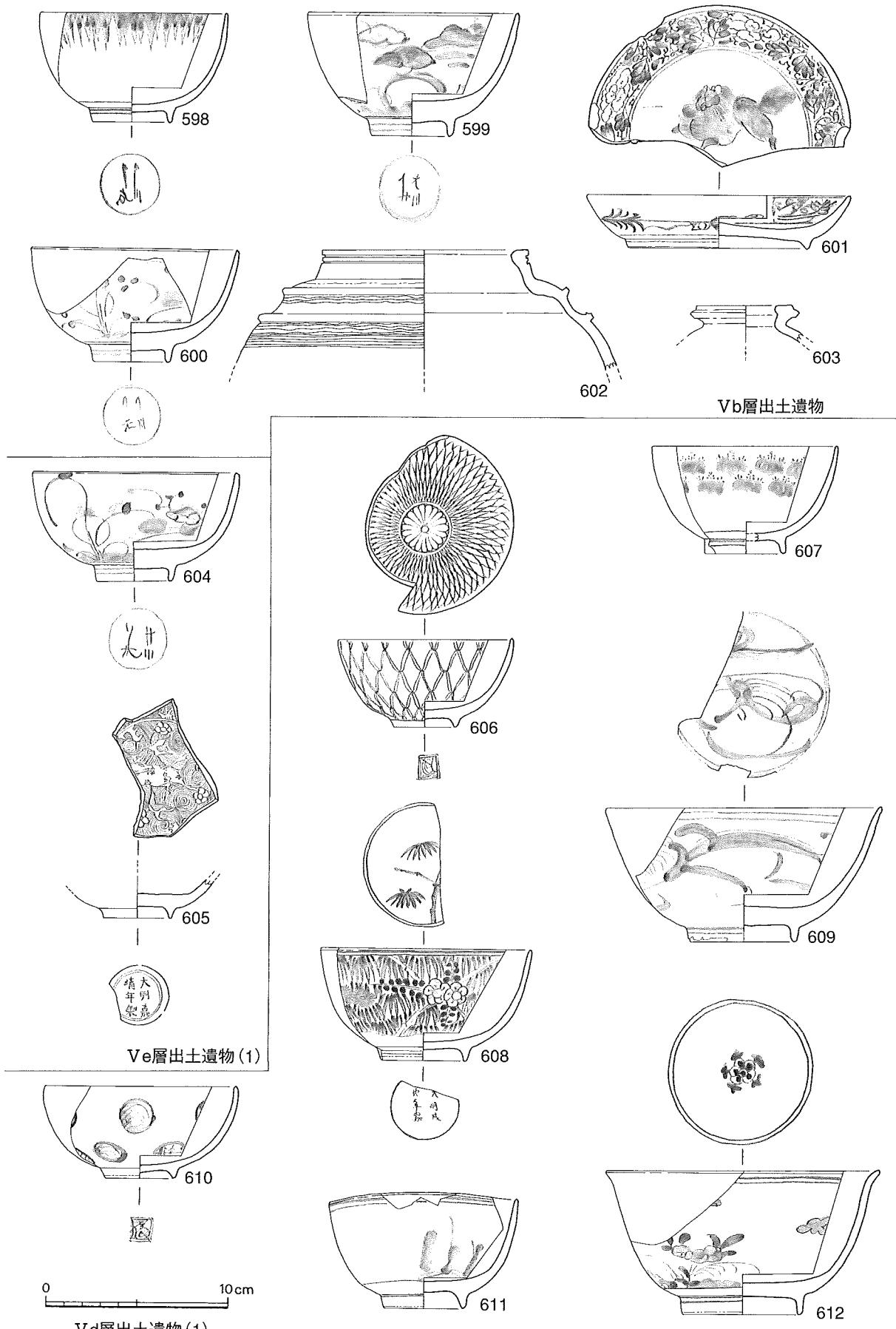
第45図 長崎奉行所跡下層面出土遺物実測図① (1 / 3)



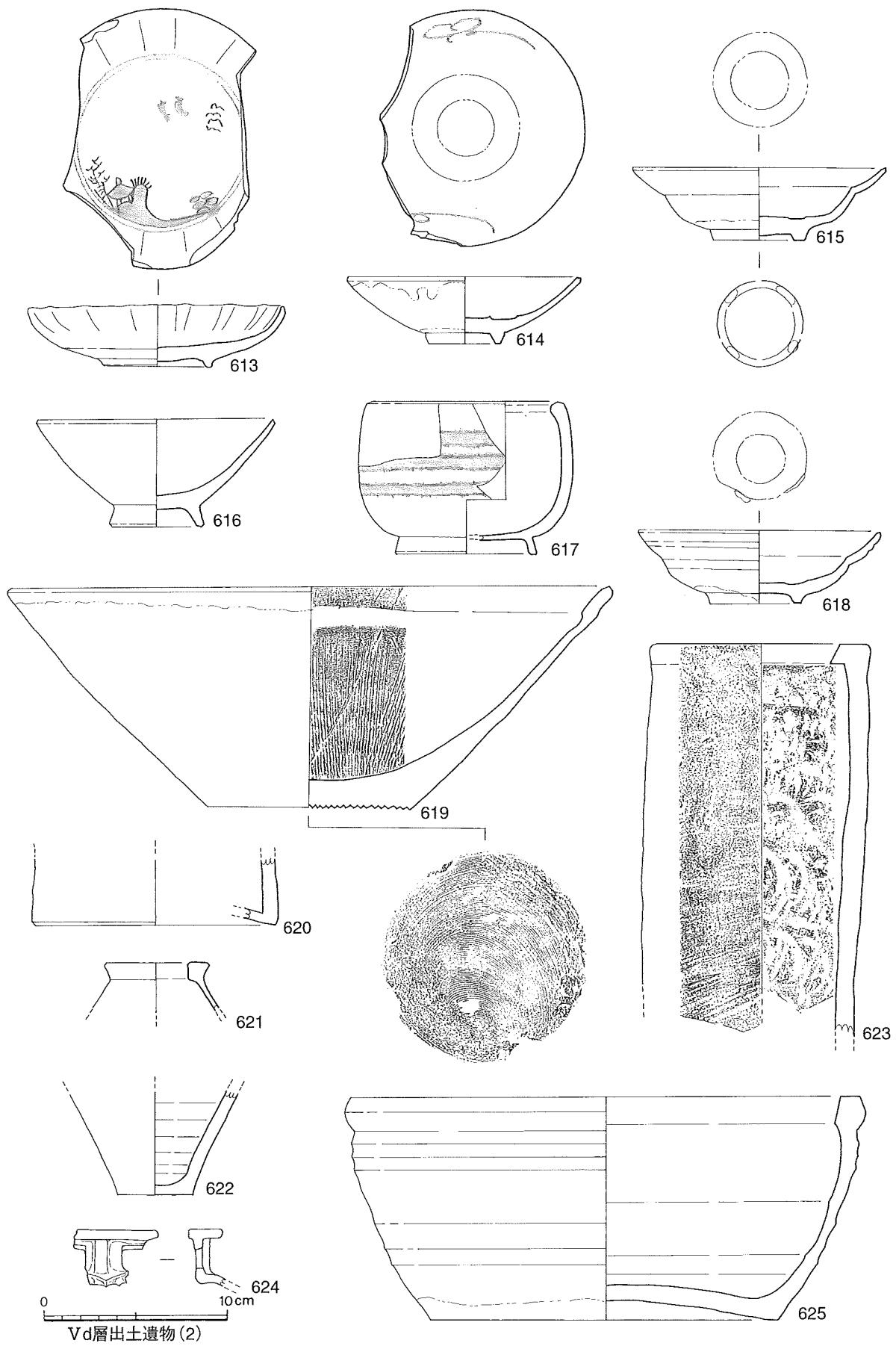
第46図 長崎奉行所跡下層面出土遺物実測図② (1 / 3)



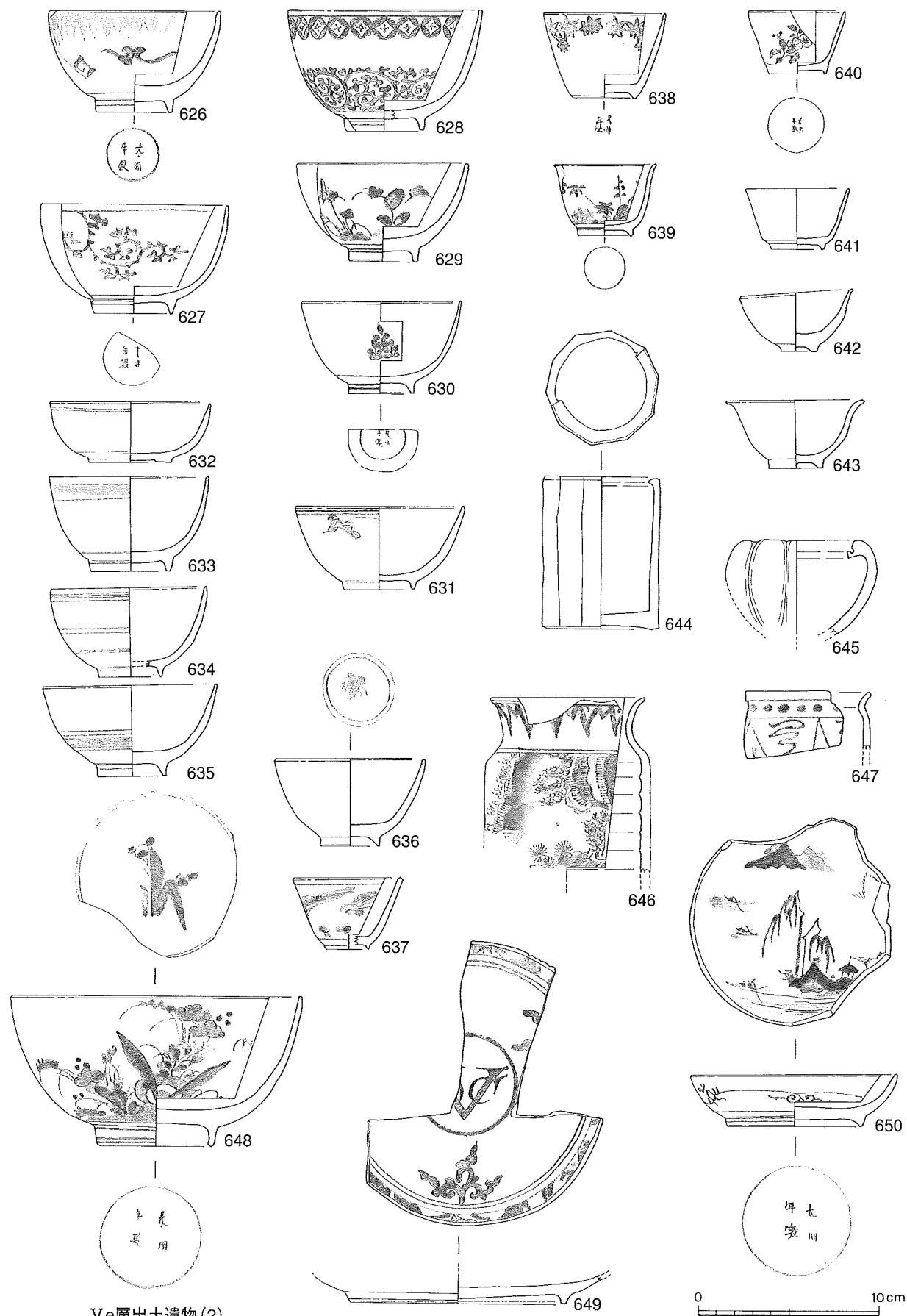
第47図 長崎奉行所跡下層面出土遺物実測図③ (1/3・1/4・1/8)



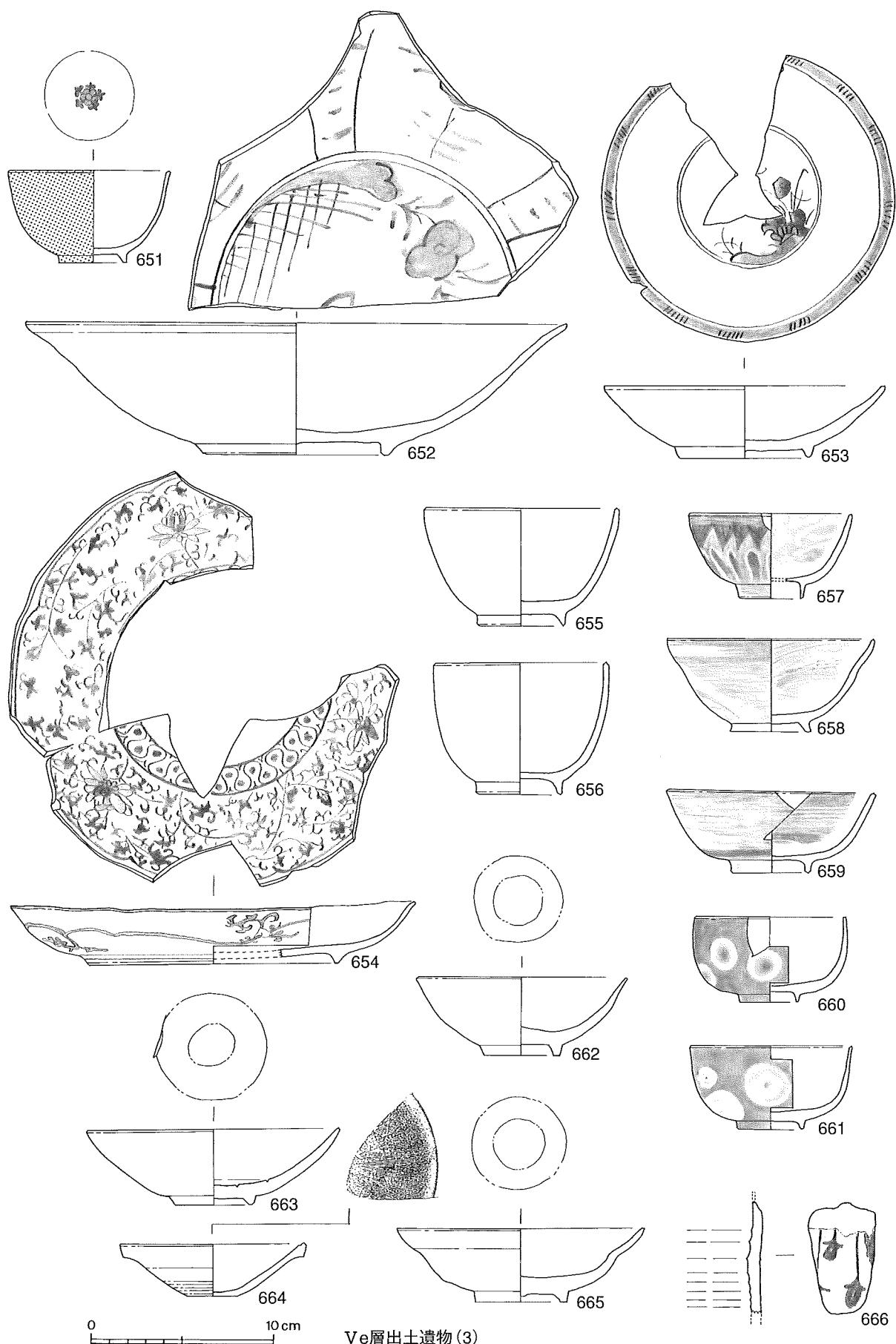
第48図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図① (1 / 3)



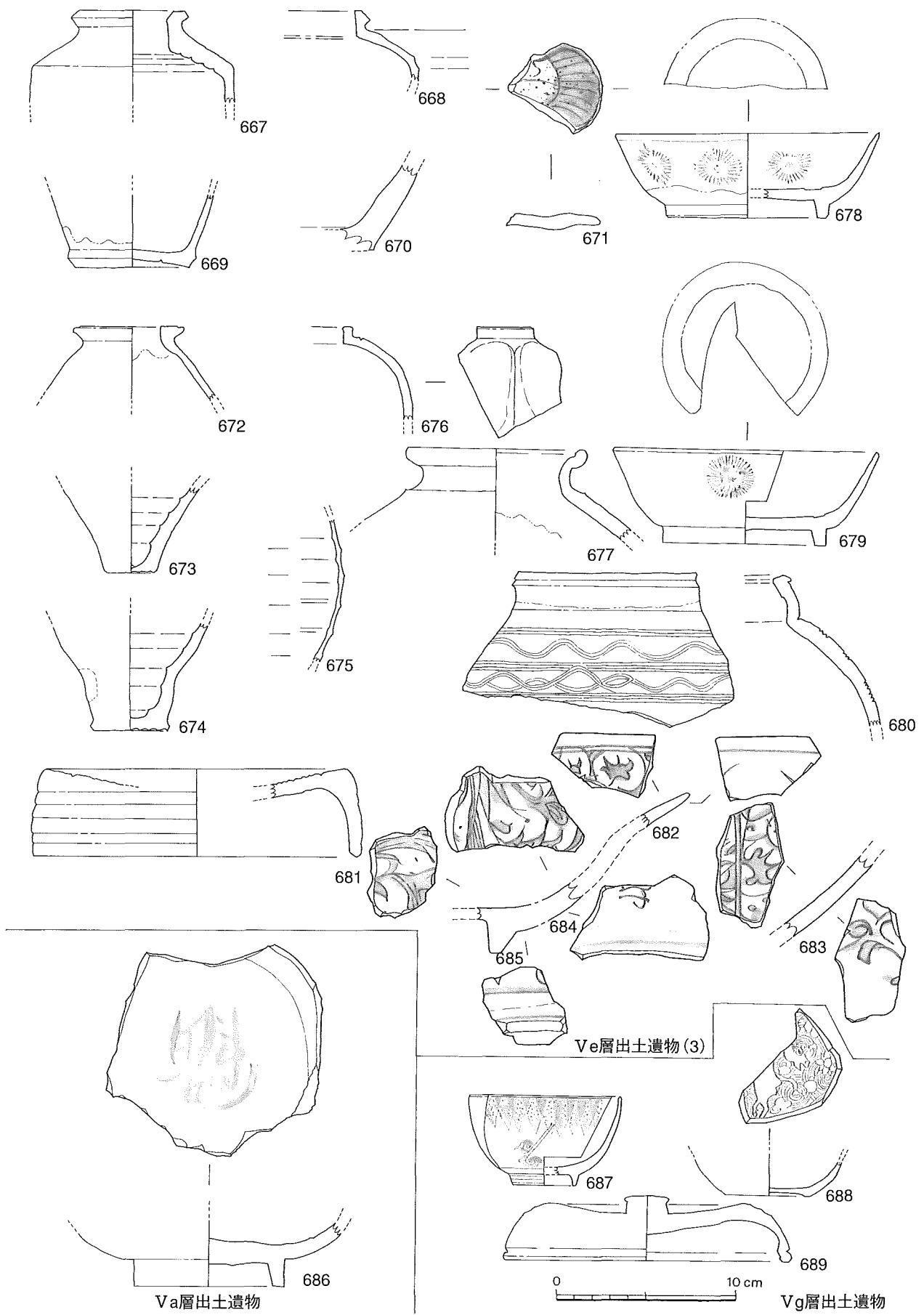
第49図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図② (1 / 3)



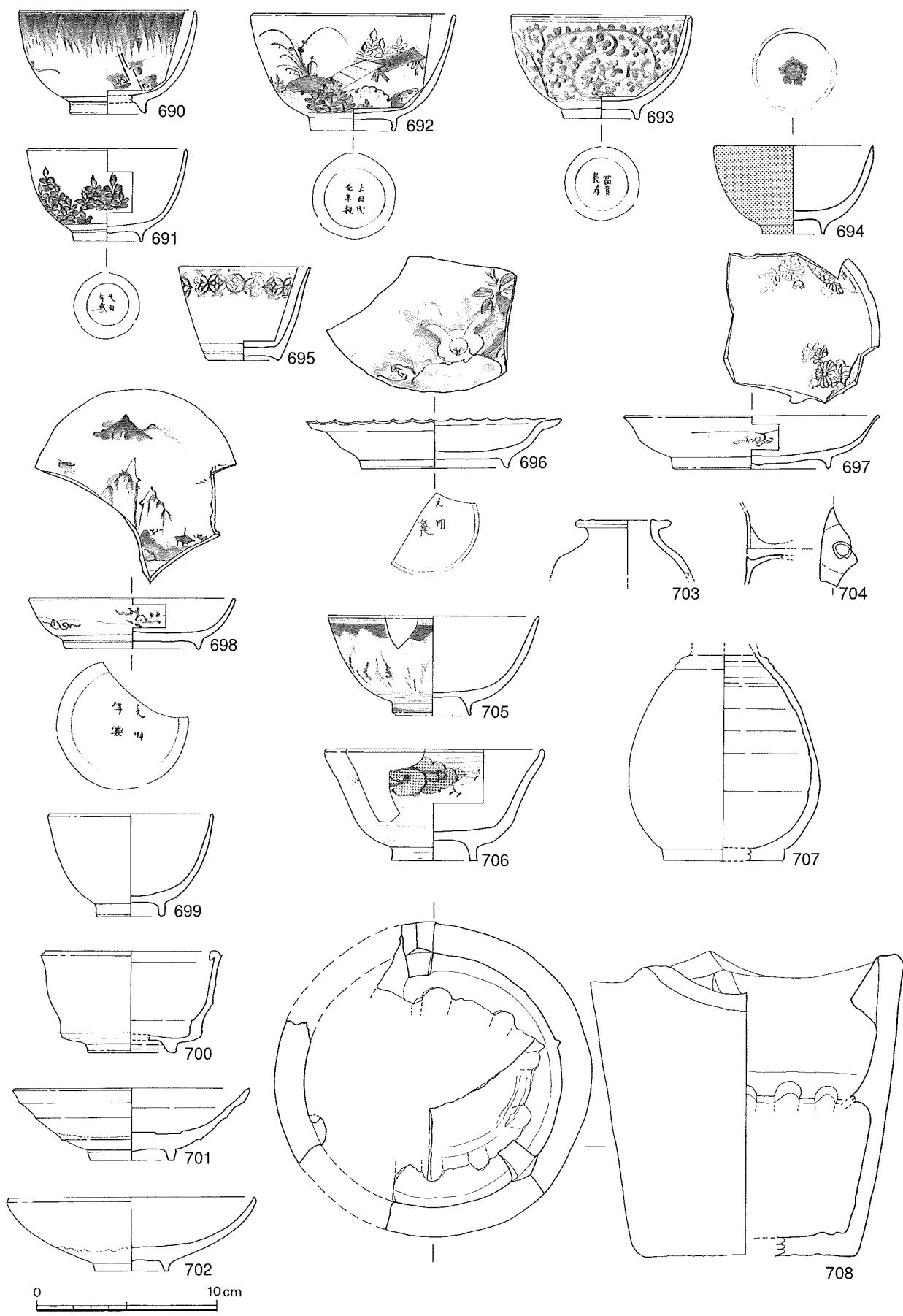
第50図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図③ (1/3)



第51図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図④ (1 / 3)

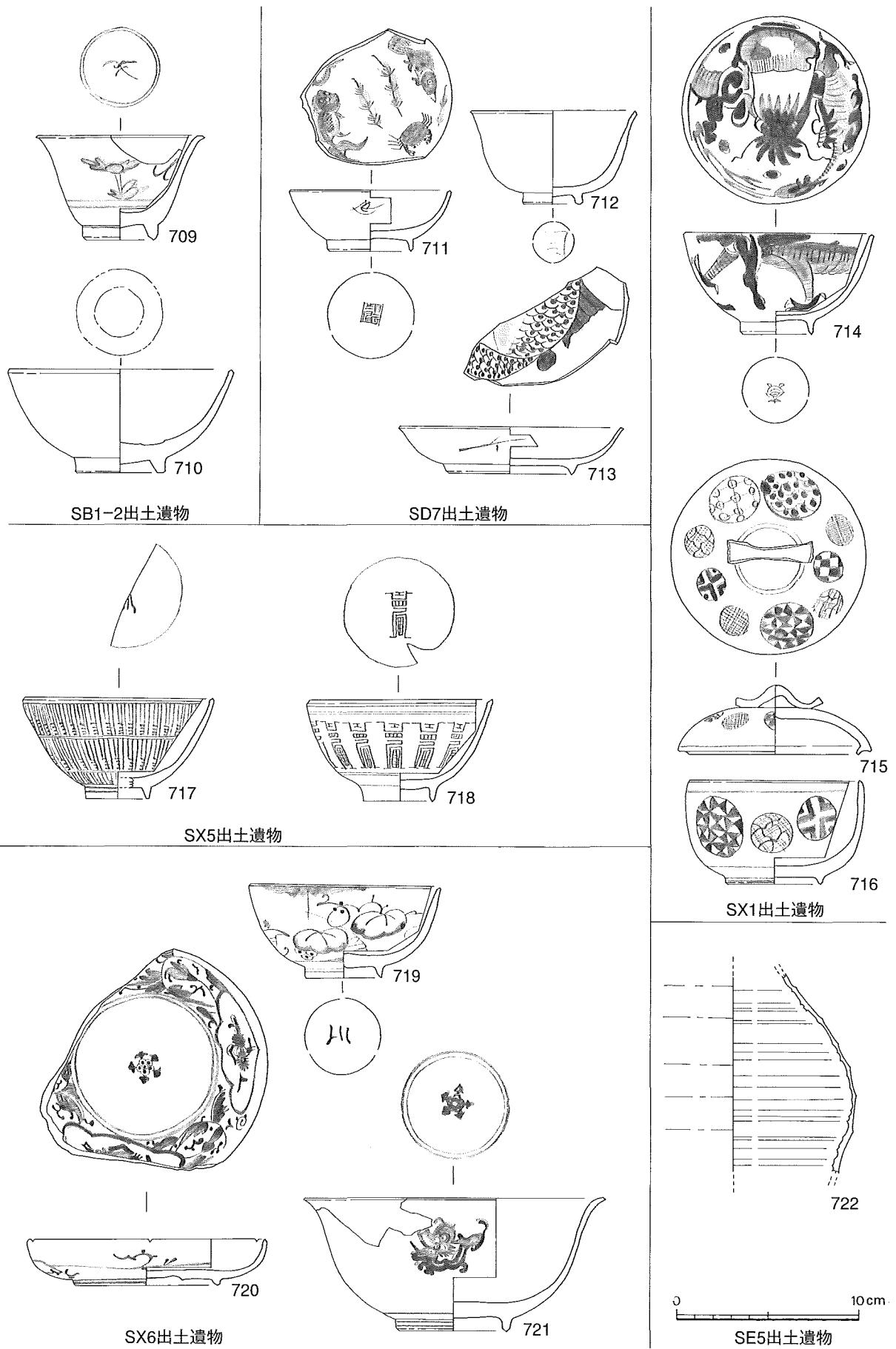


第52図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑤ (1 / 3)

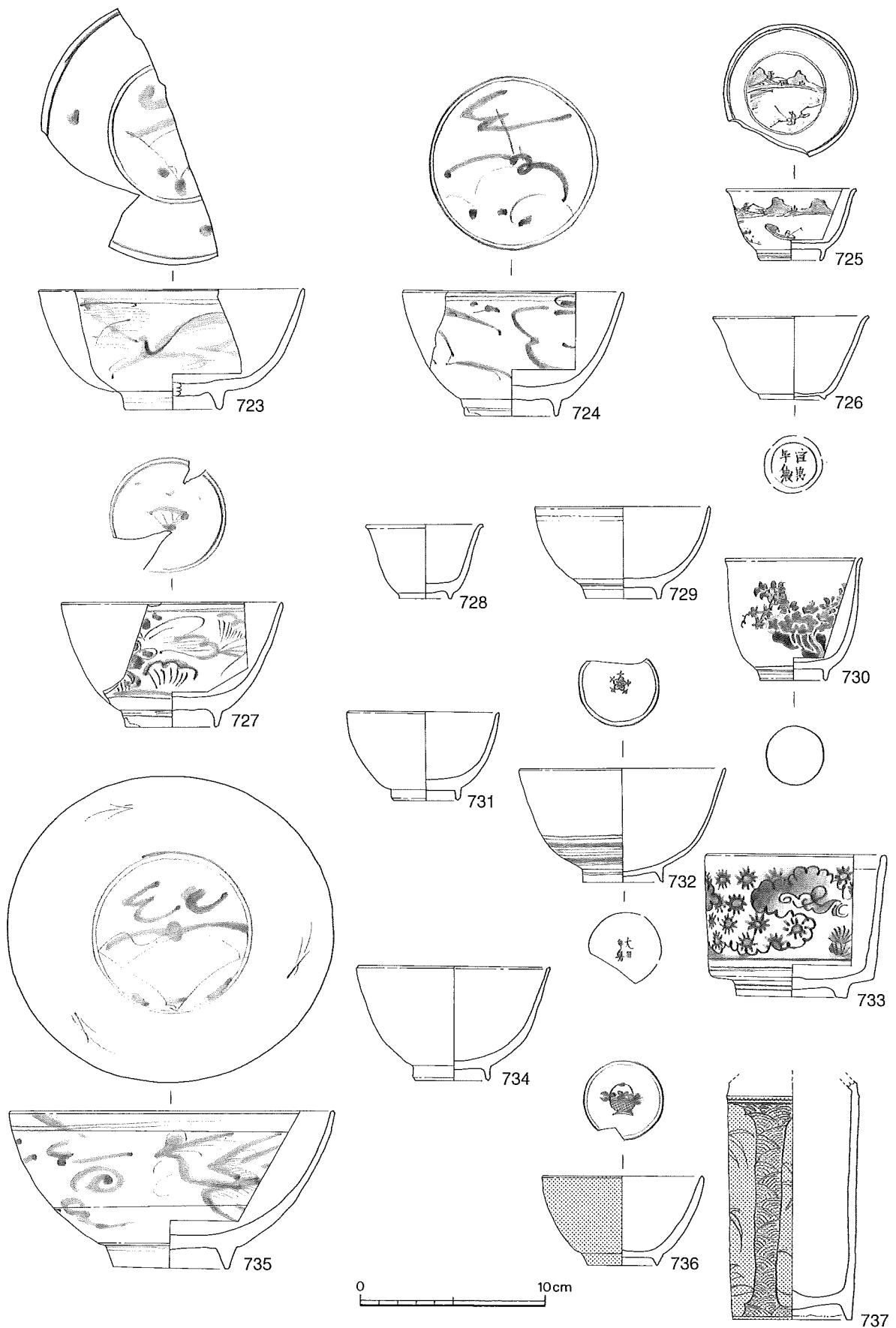


SB4基壇出土遺物

第53図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑥ (1 / 3)

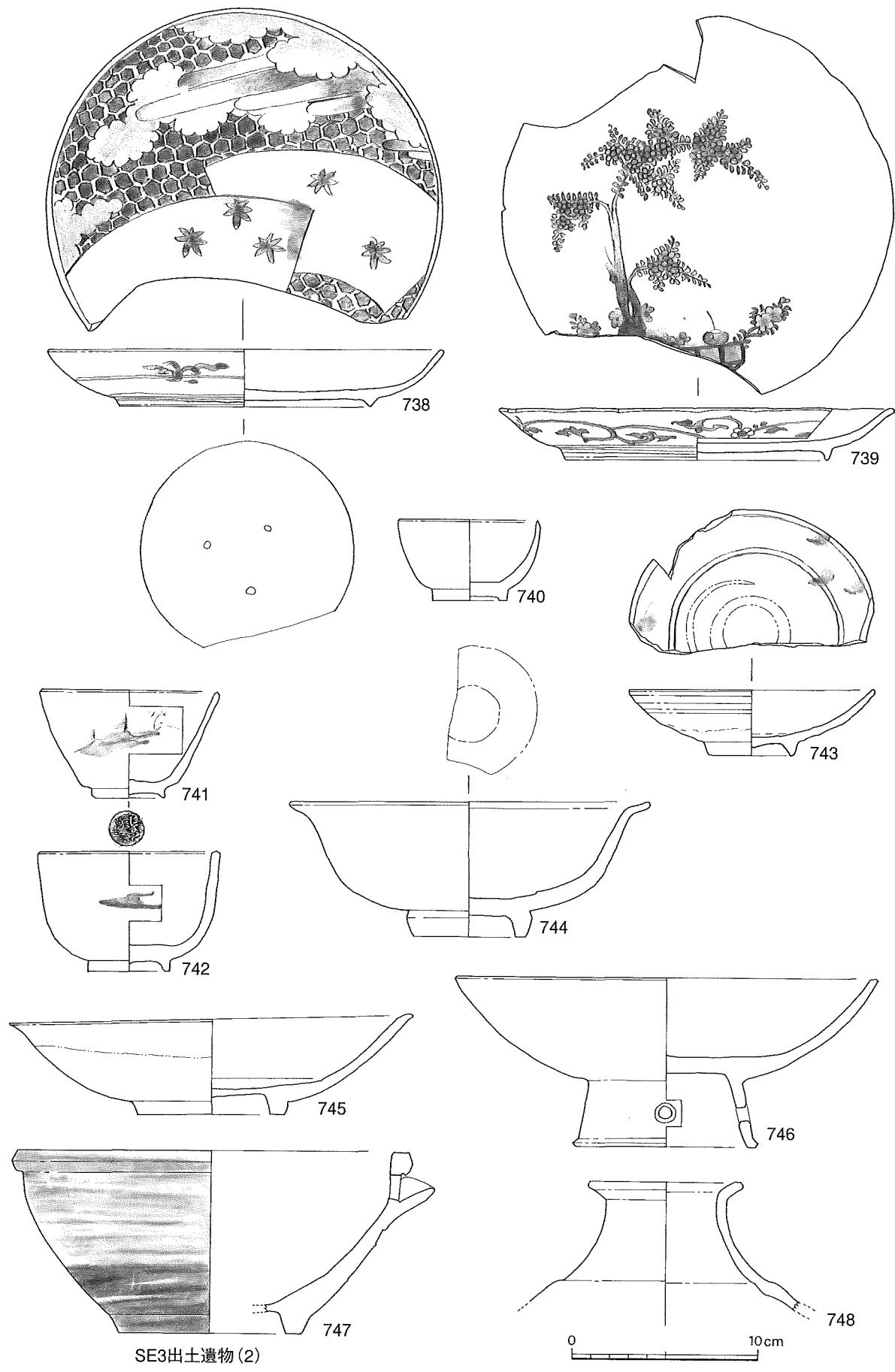


第54図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑦ (1 / 3)

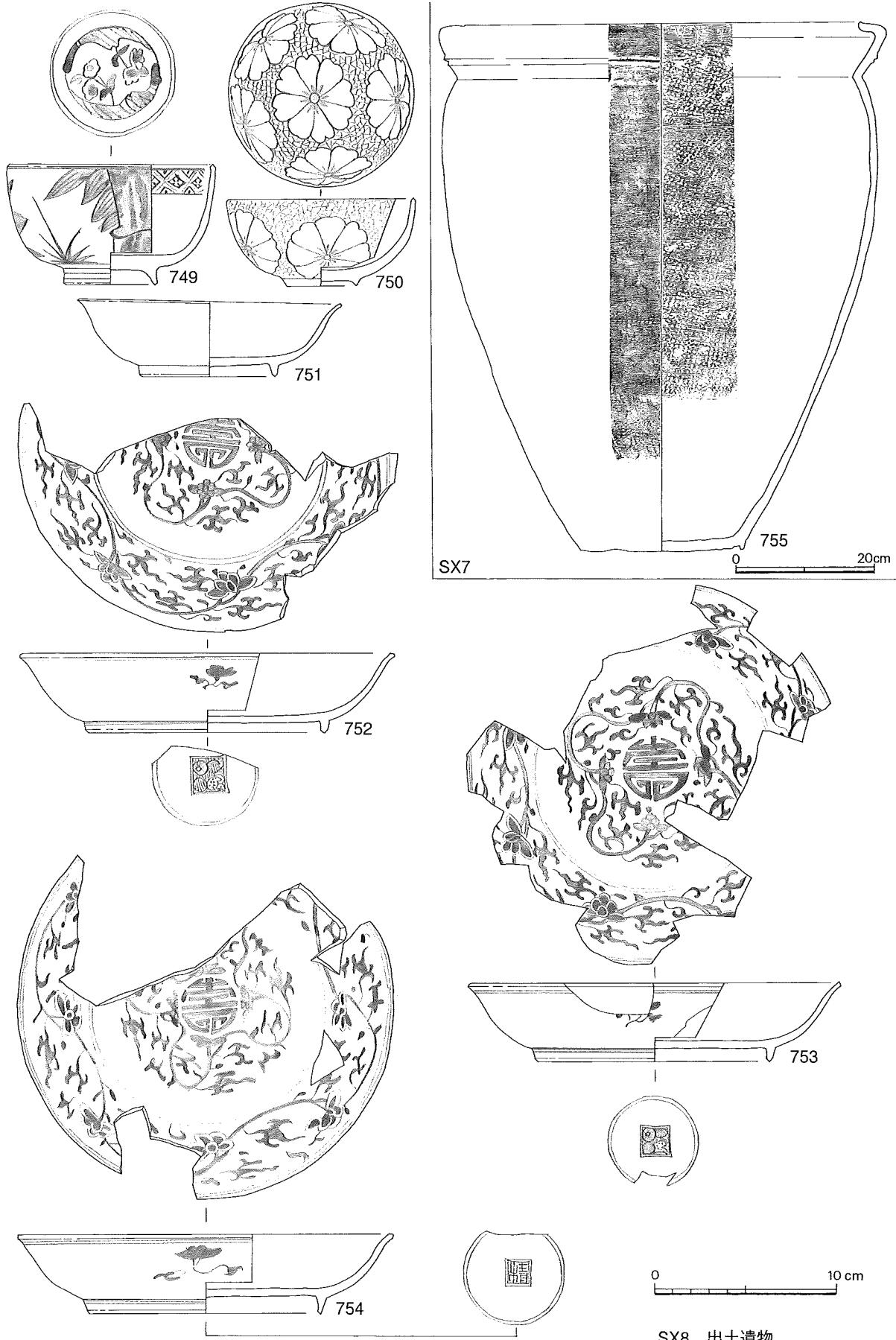


SE3出土遺物(1)

第55図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑧ (1 / 3)

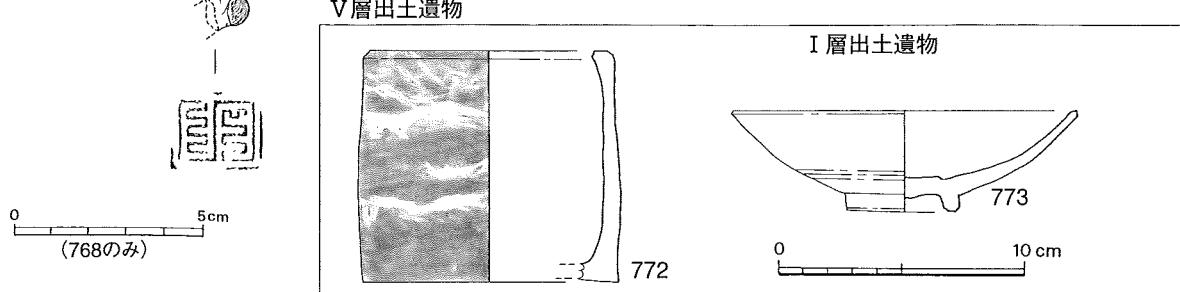
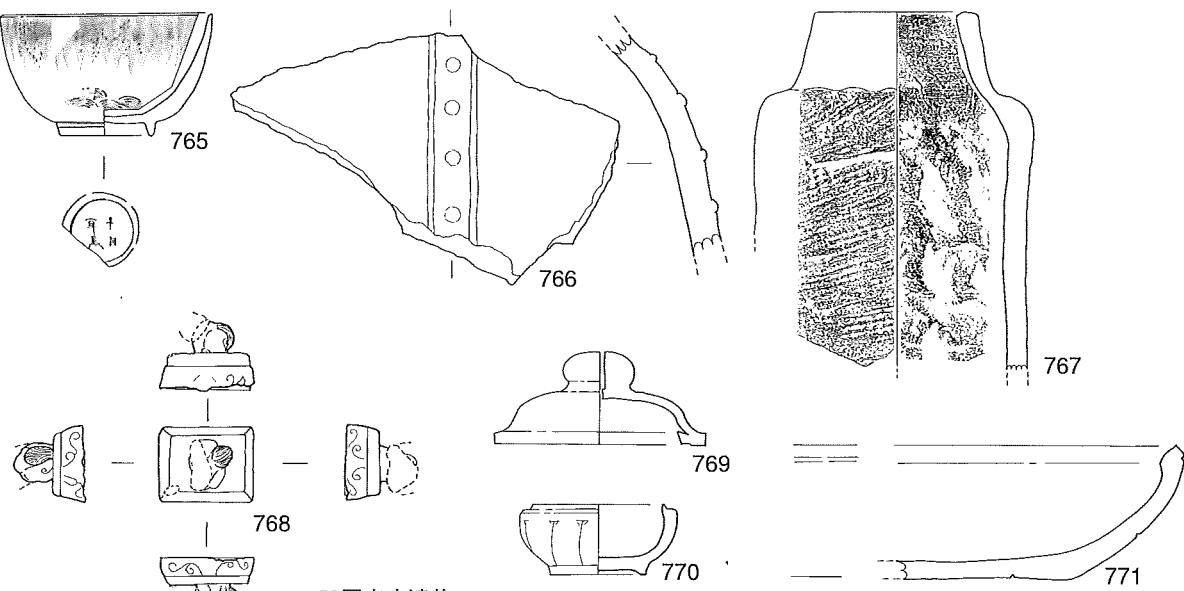
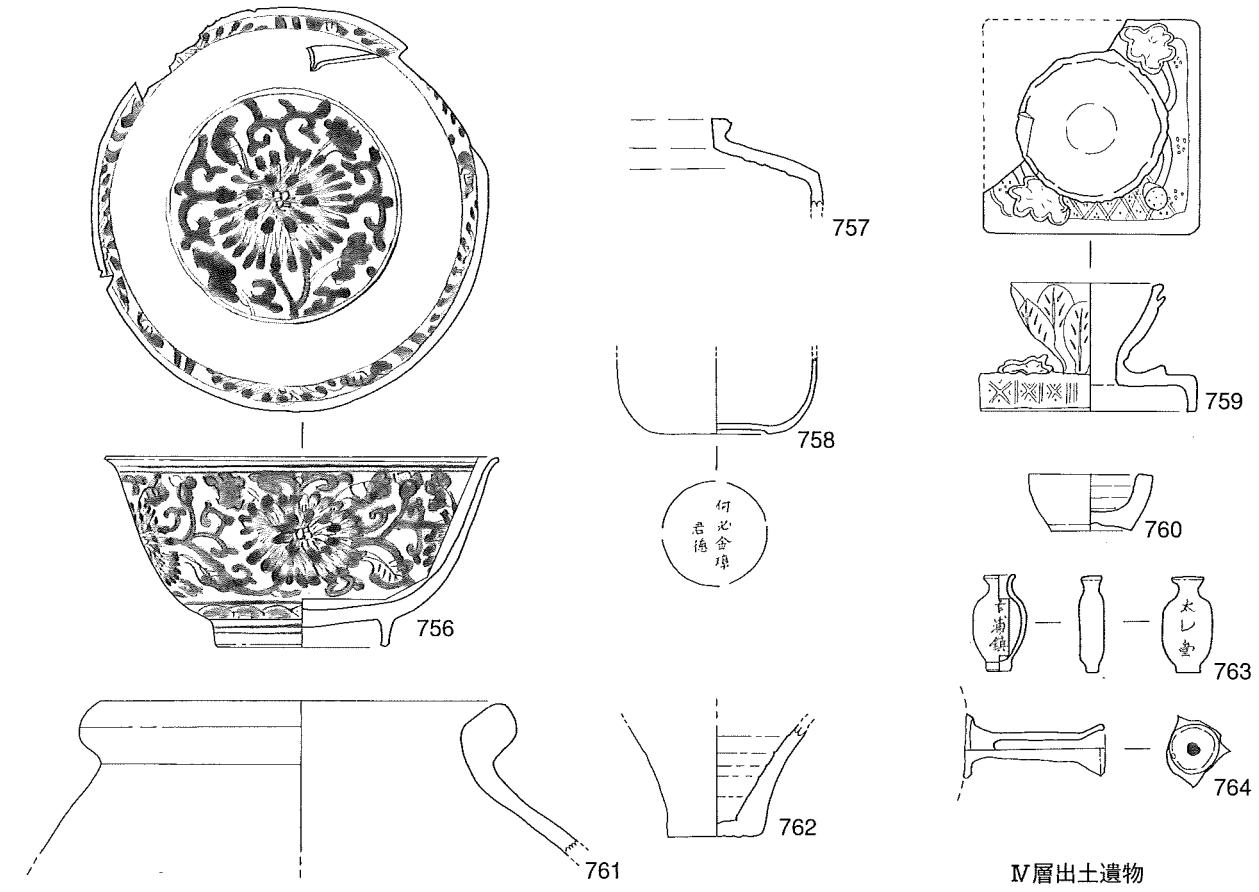


第56図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑨ (1 / 3)

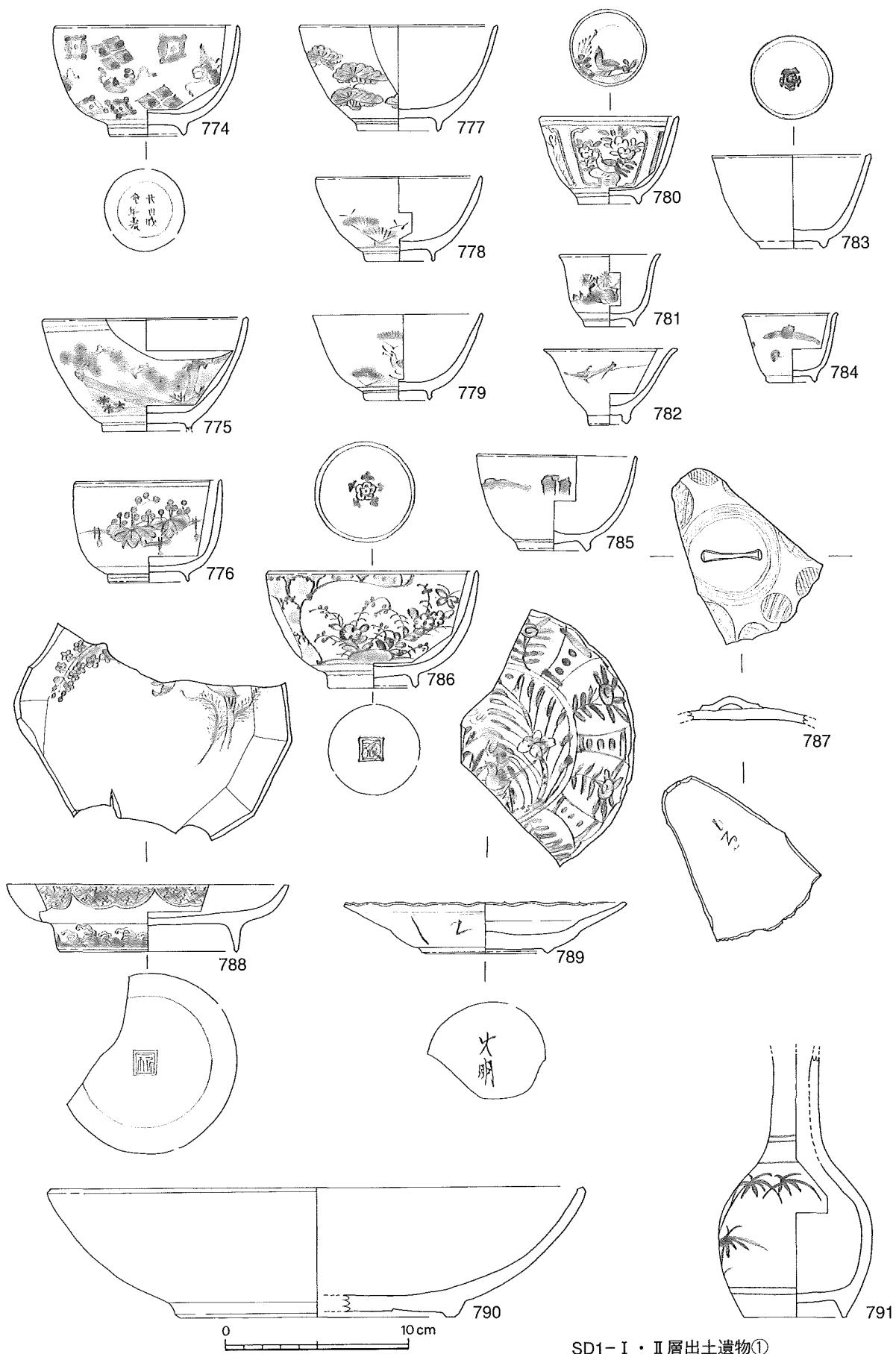


SX8 出土遺物

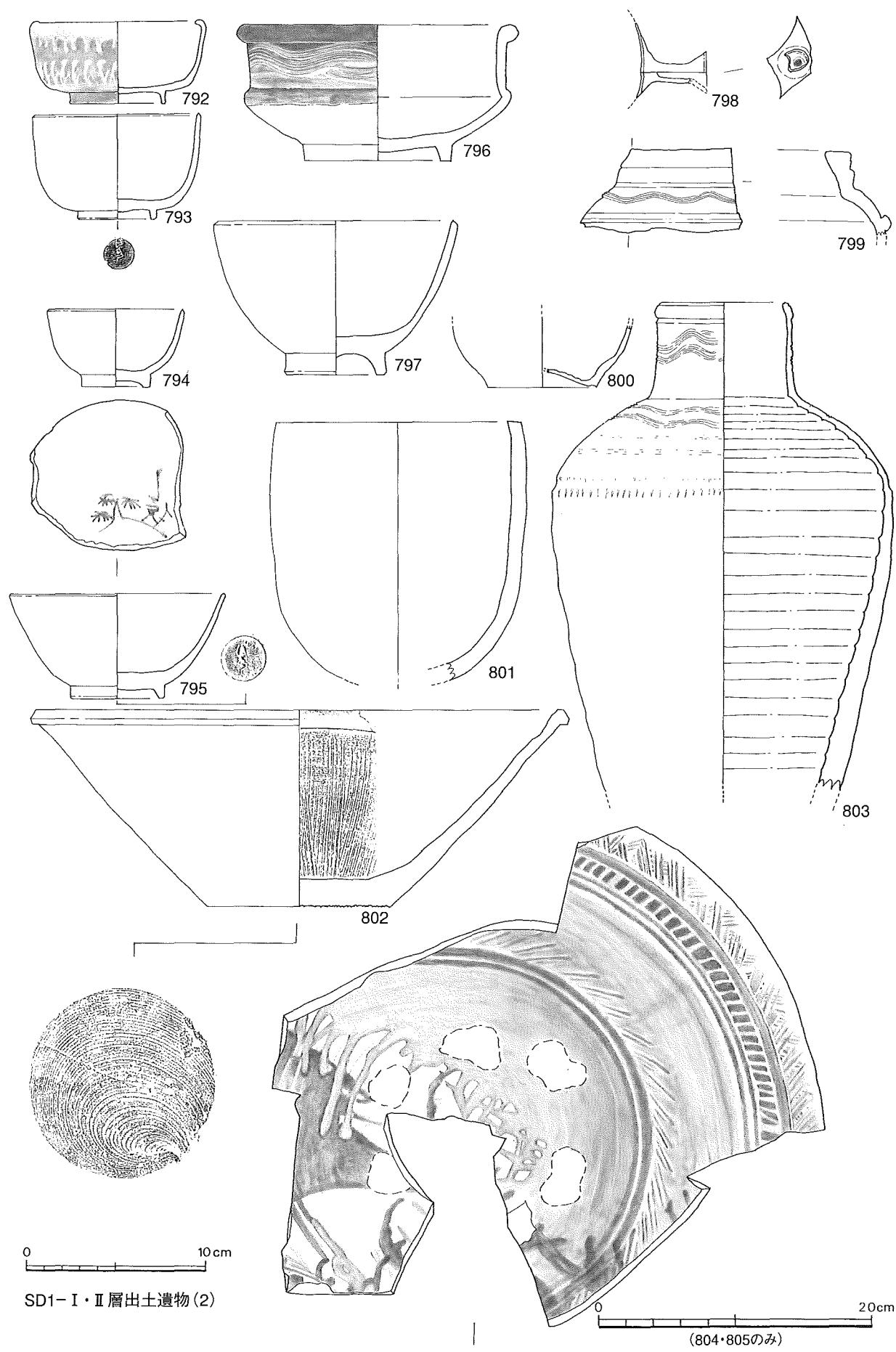
第57図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図⑩ (1/3・1/8)



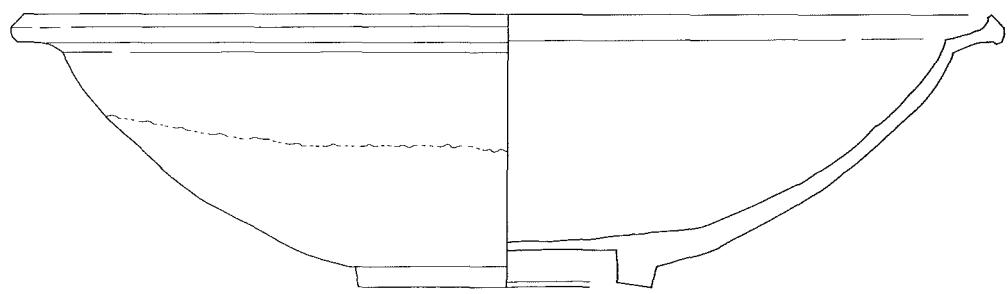
第58図 岩原目付屋敷跡出土遺物実測図① (1/2・1/3)



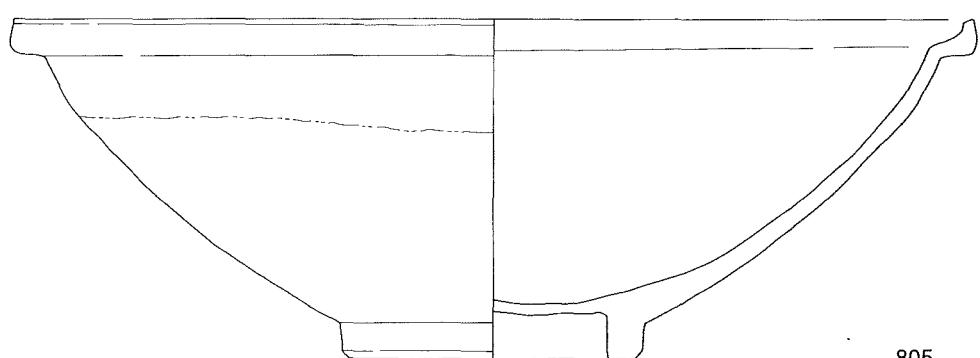
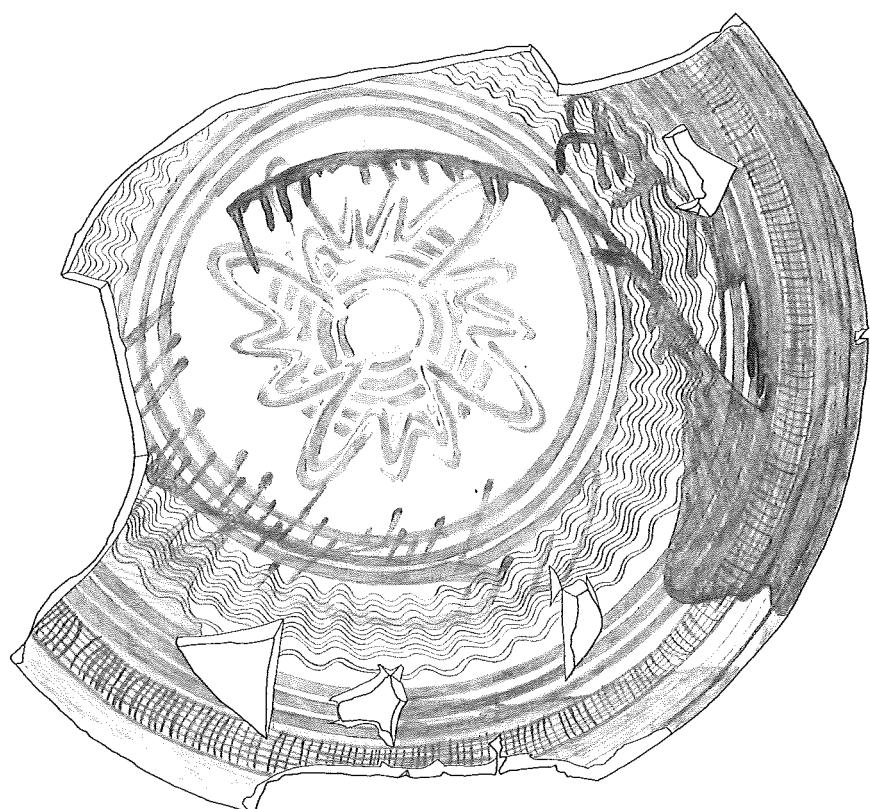
第59図 炉柏町遺跡出土遺物実測図① (1 / 3)



第60図 炉粕町遺跡出土遺物実測図② (1/3・1/4)



804

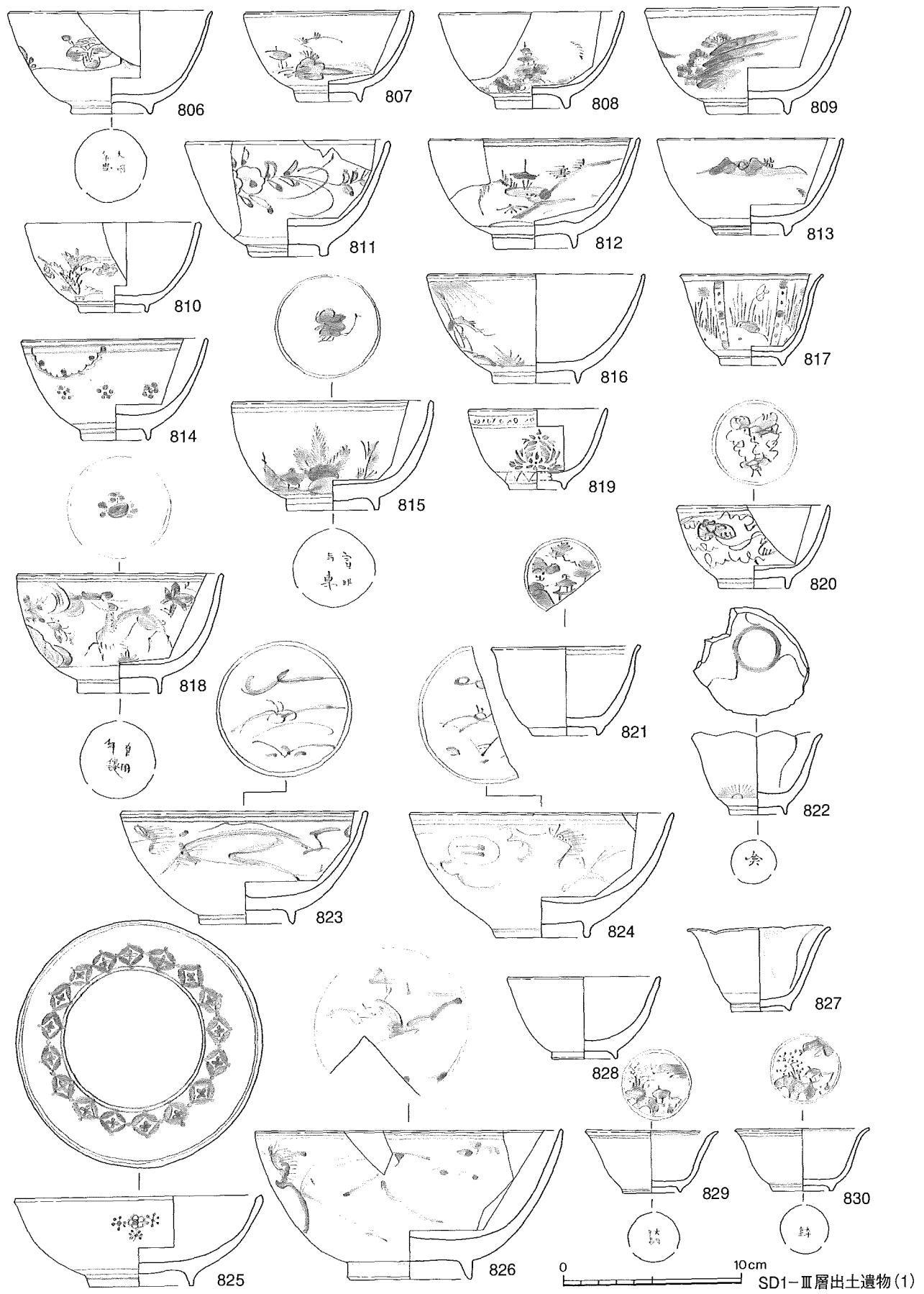


805

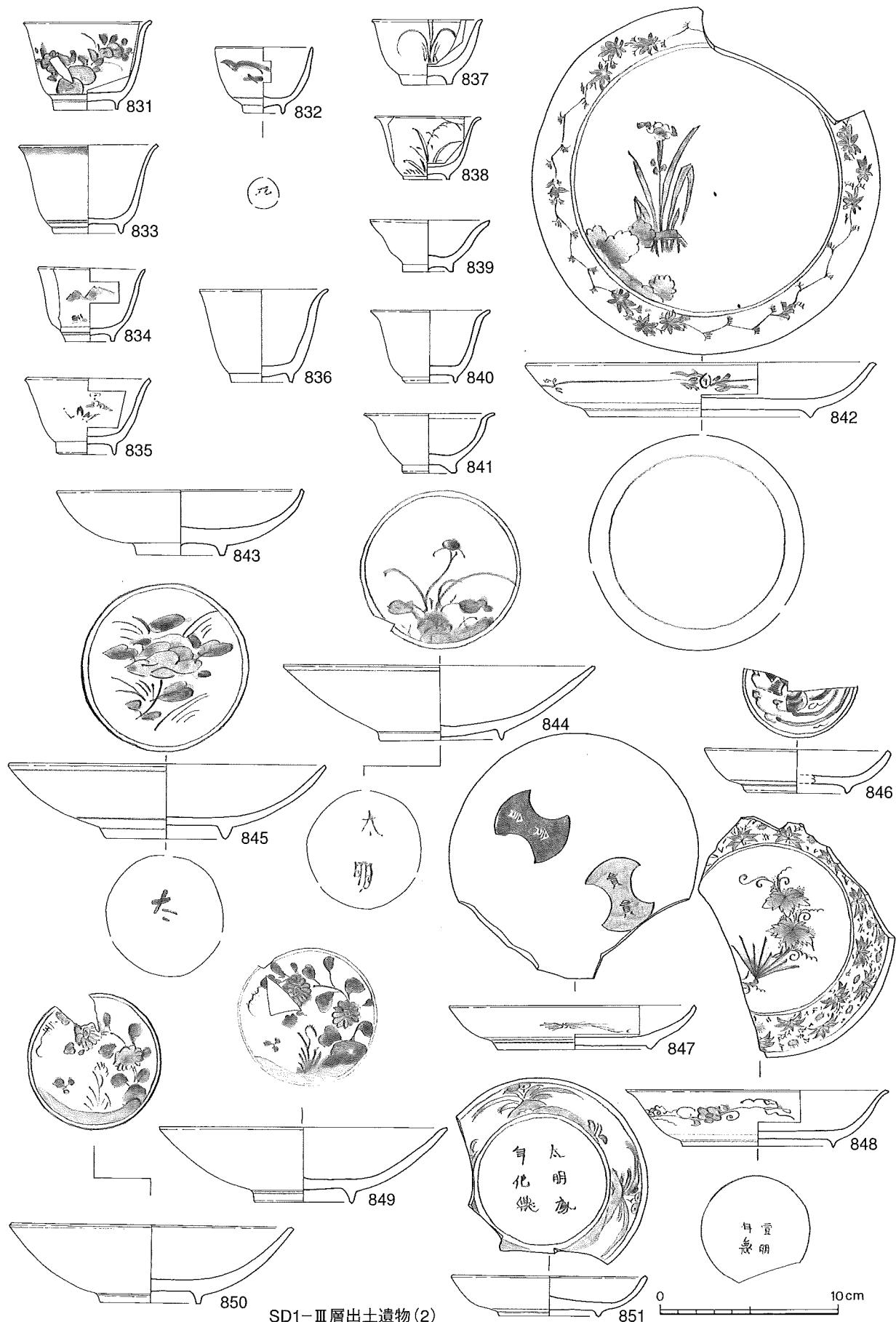
SD1-I・II層出土遺物(3)

0 20cm

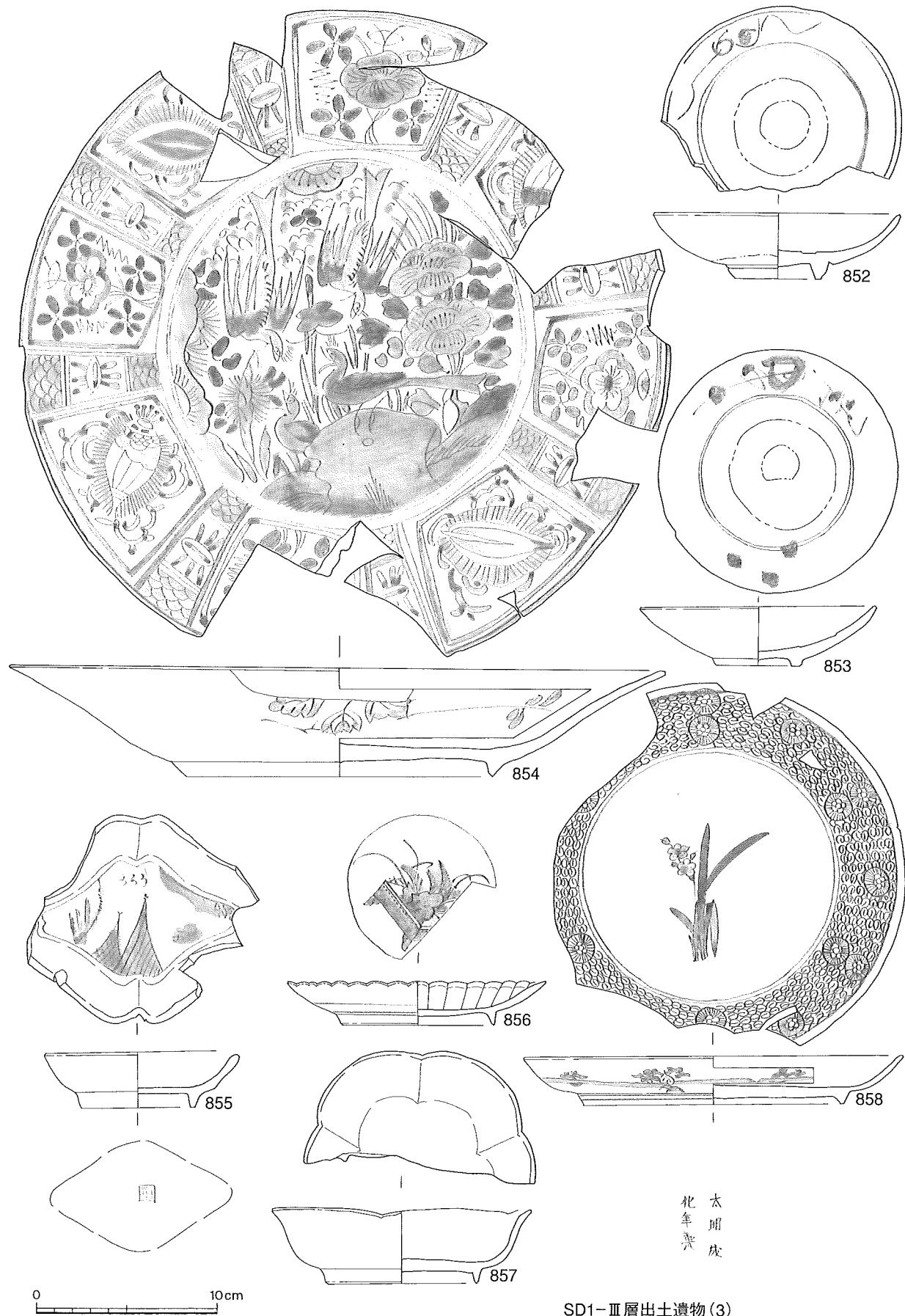
第61図 炉柏町遺跡出土遺物実測図③ (1 / 4)



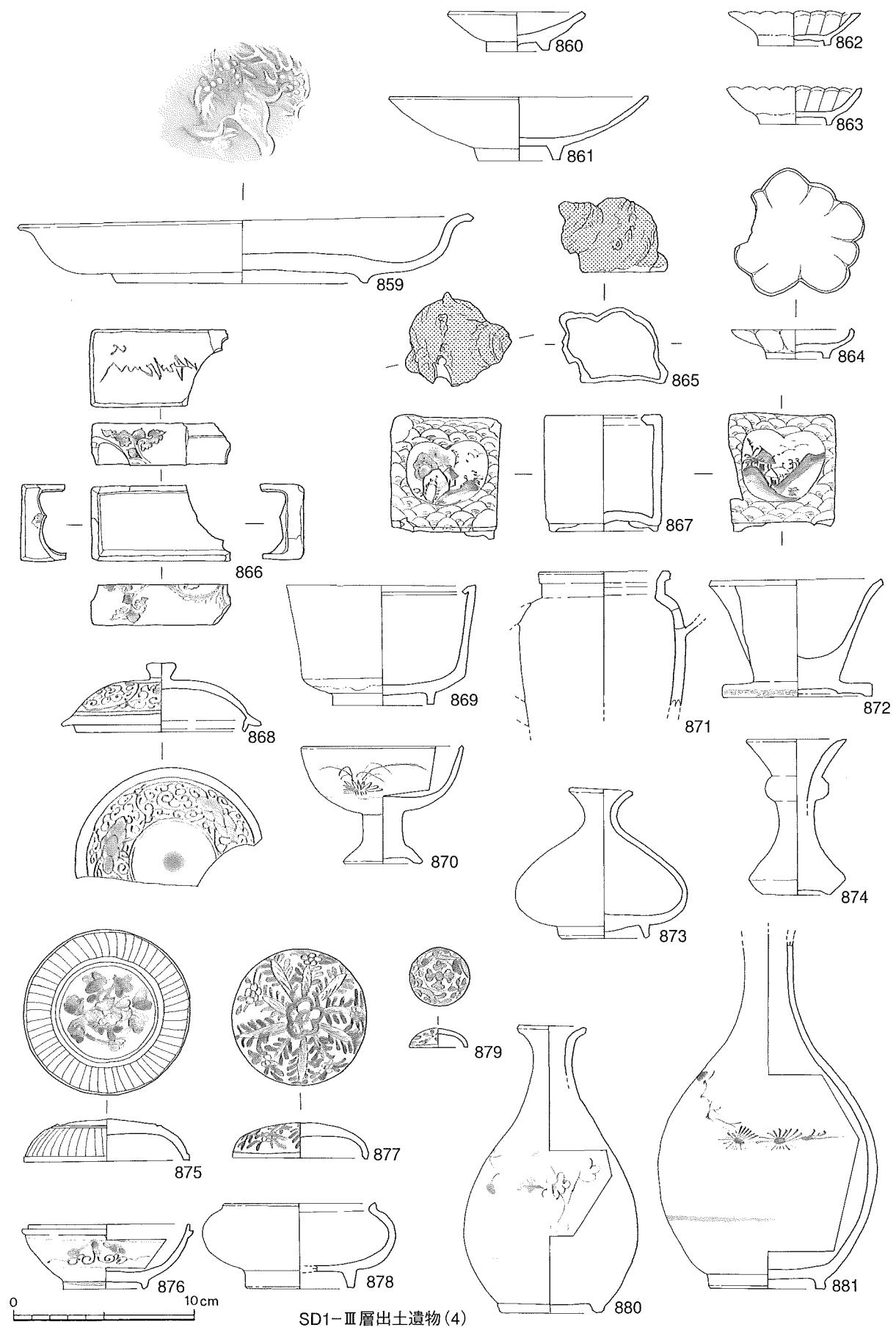
第62図 炉柏町遺跡出土遺物実測図④ (1 / 3)



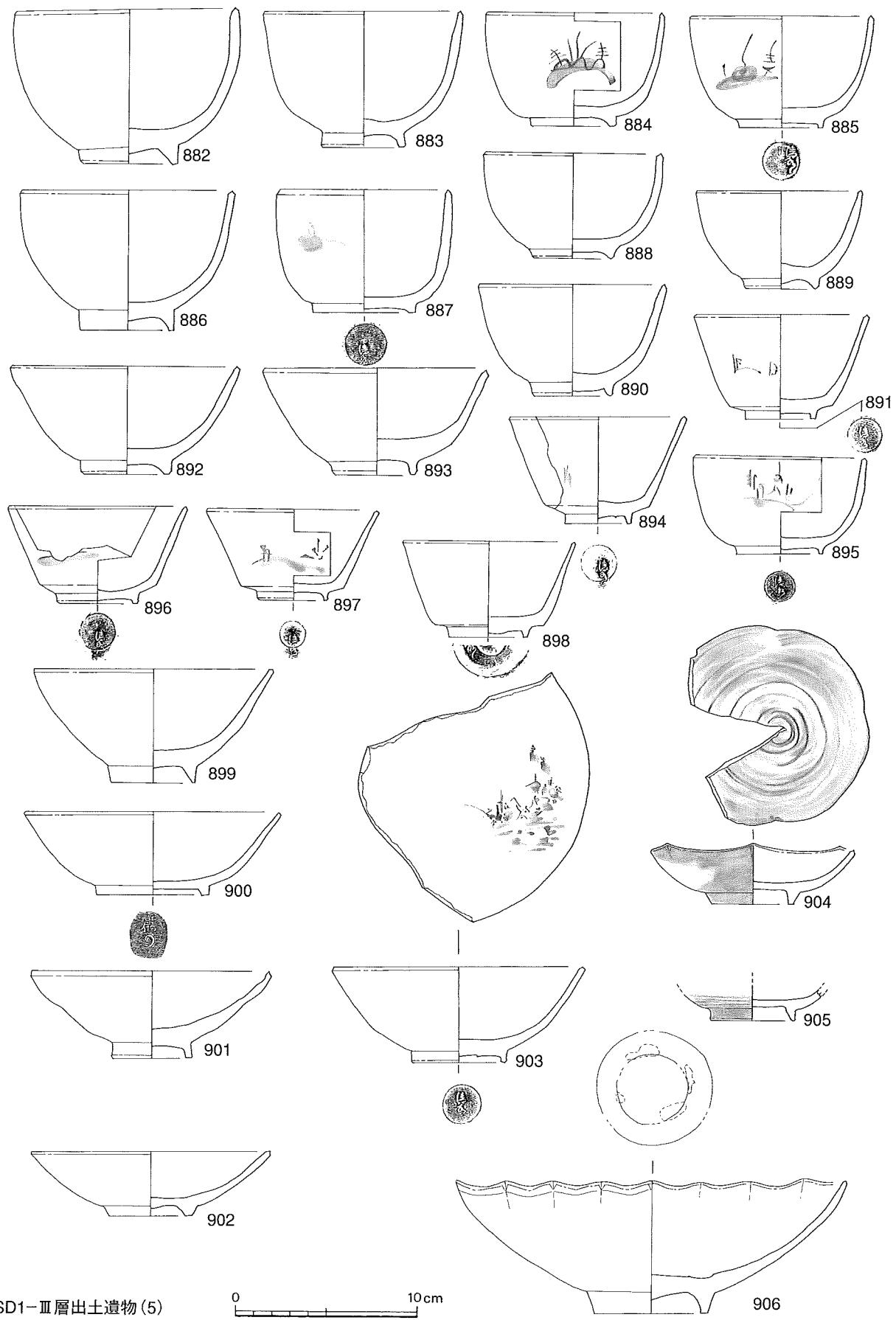
第63図 炉粕町遺跡出土遺物実測図⑤ (1 / 3)



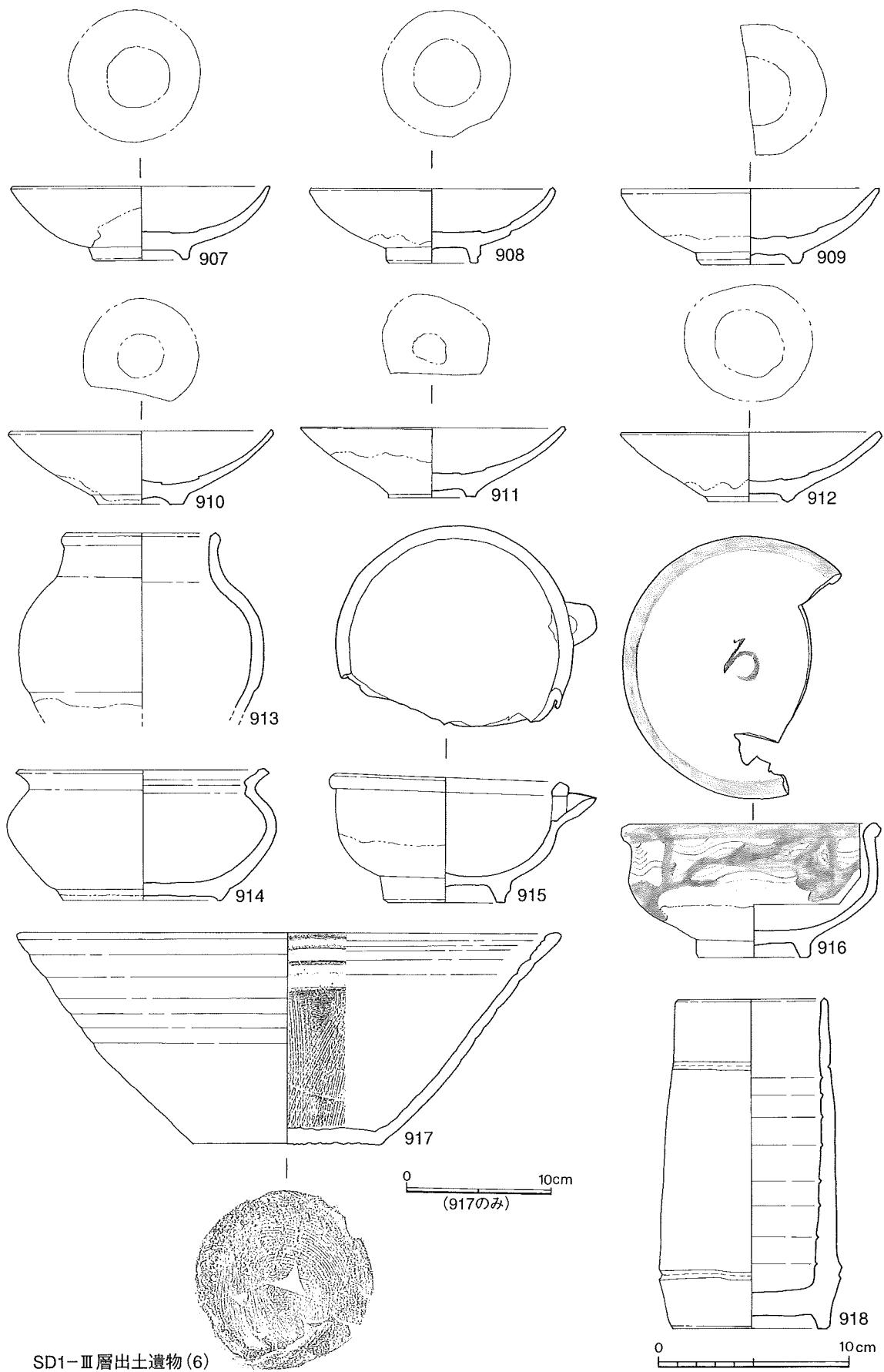
第64図 炉柏町遺跡出土遺物実測図⑥ (1 / 3)



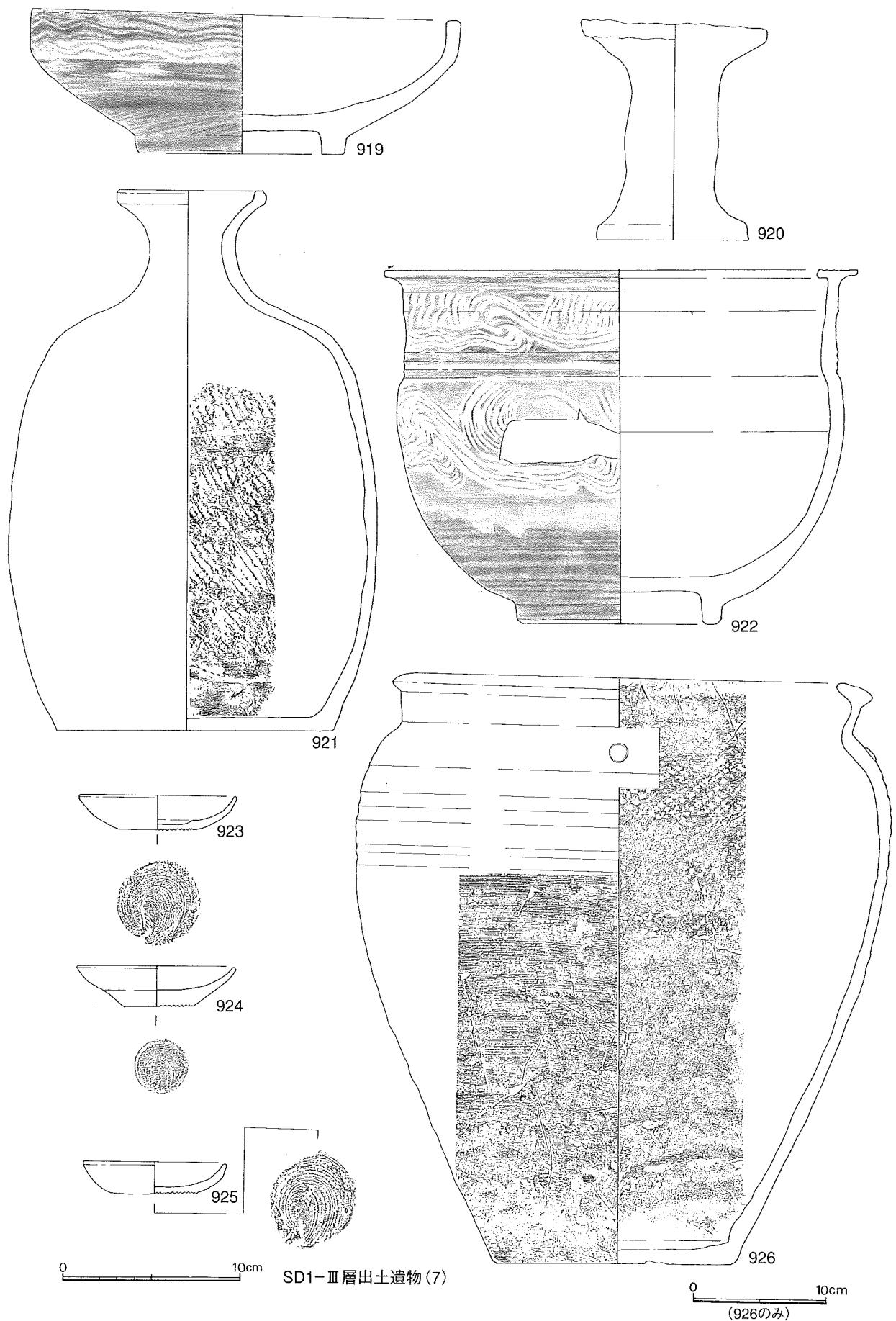
第65図 炉粕町遺跡出土遺物実測図⑦ (1 / 3)



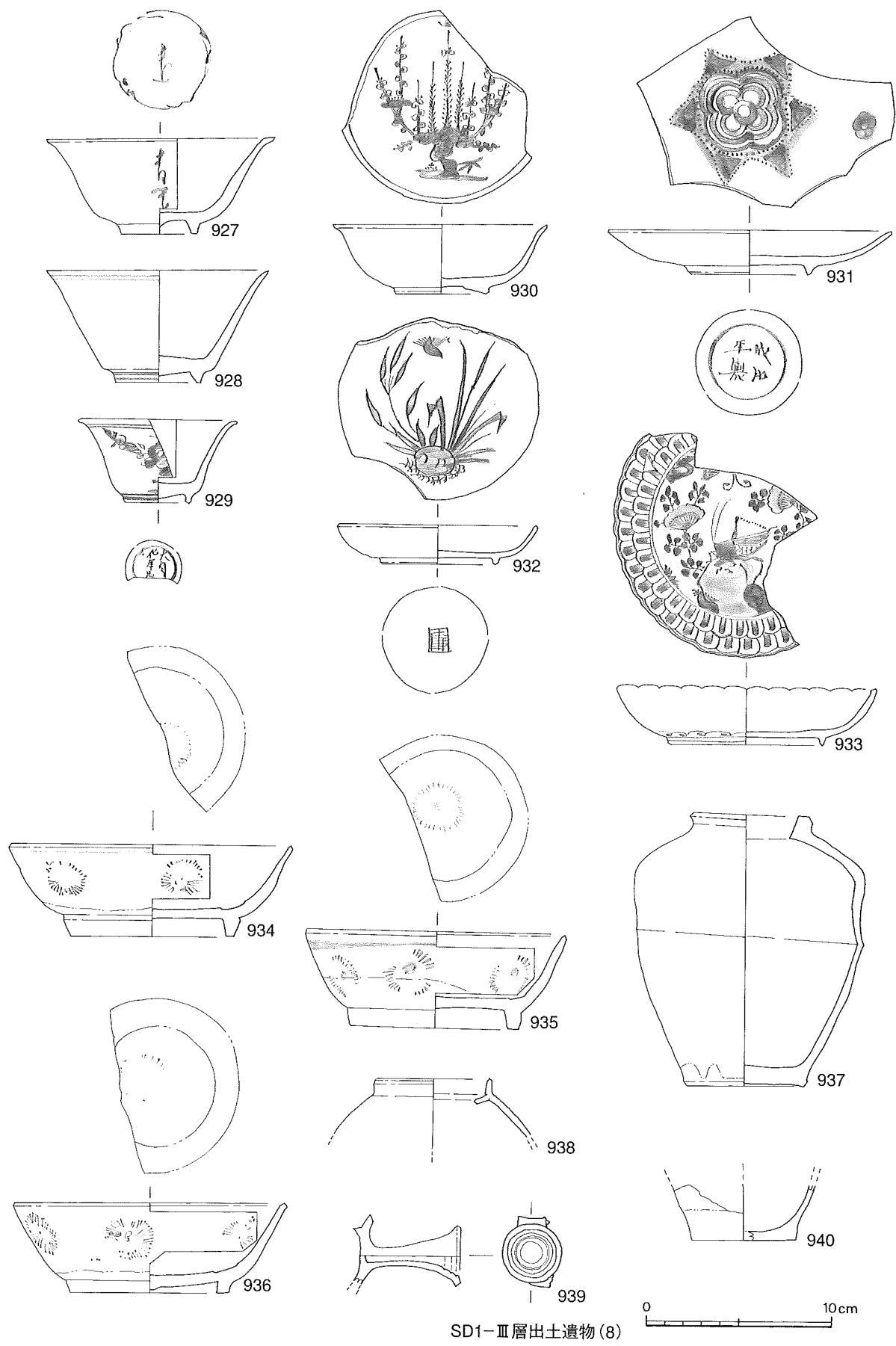
第66図 炉柏町遺跡出土遺物実測図⑧ (1/3)



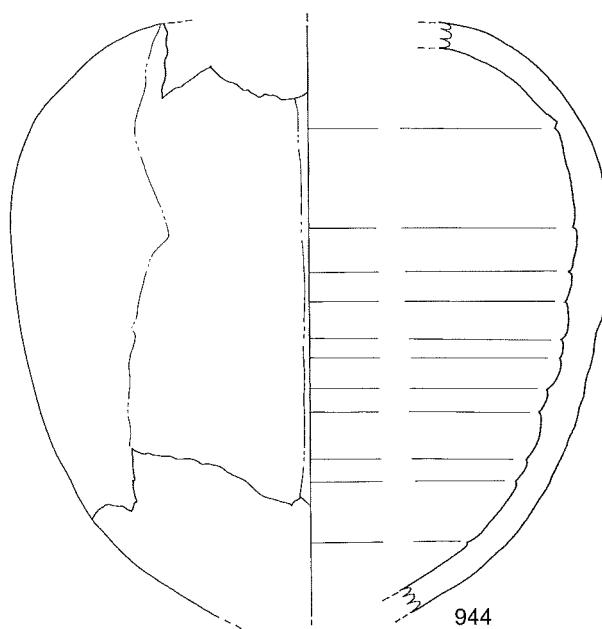
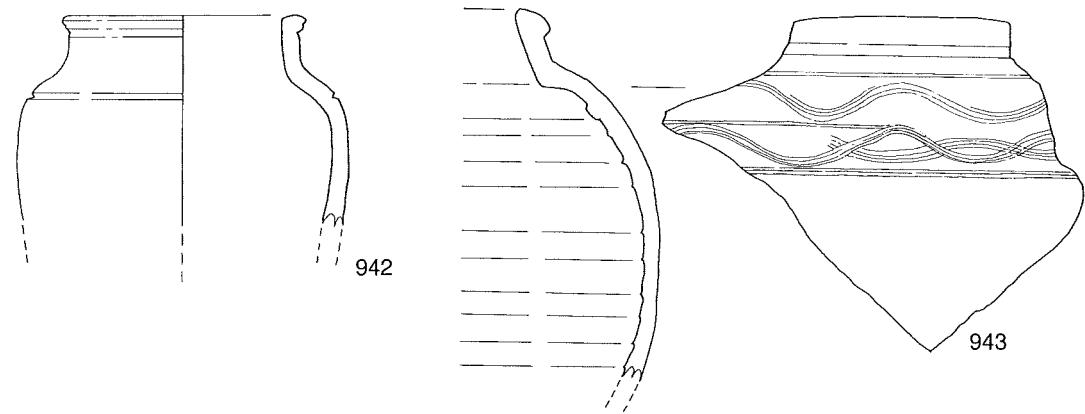
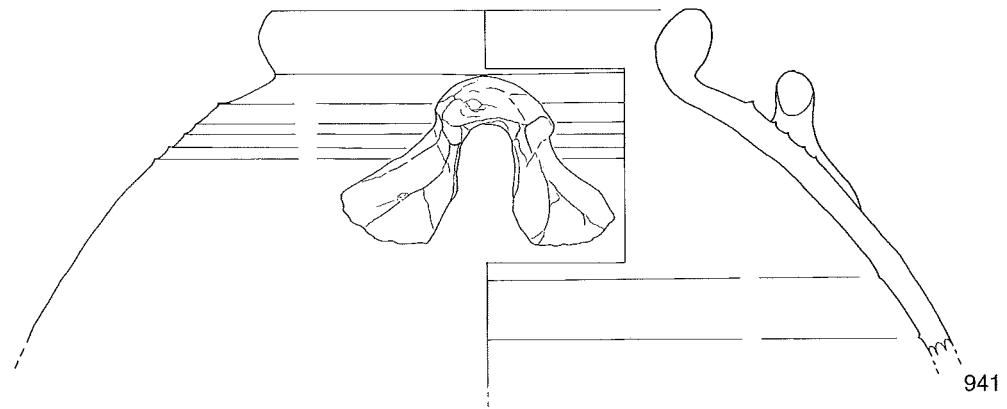
第67図 炉粕町遺跡出土遺物実測図⑨ (1/3・1/4)



第68図 炉粕町遺跡出土遺物実測図⑩ (1/3・1/4)

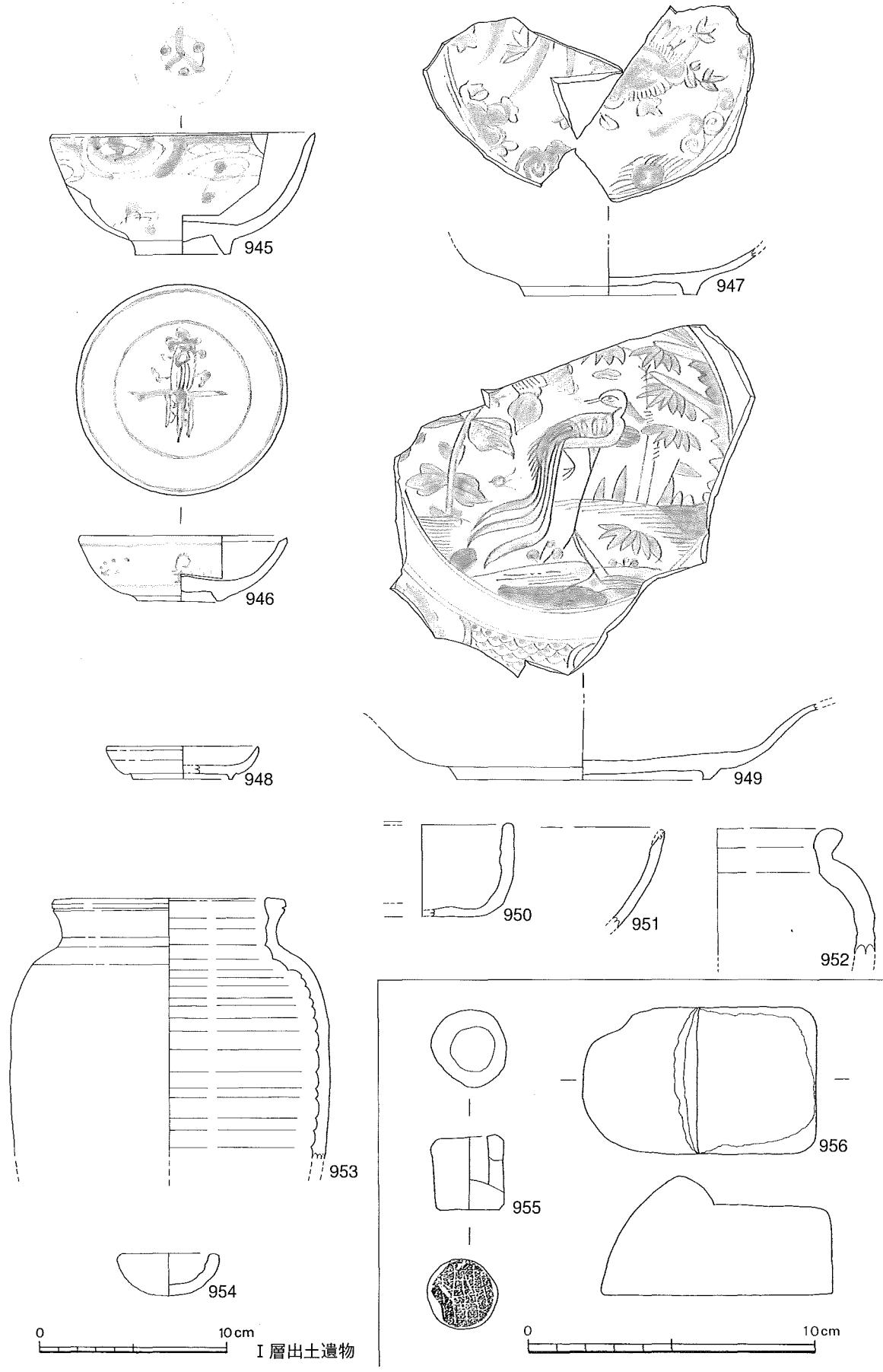


第69図 炉粕町遺跡出土遺物実測図⑪ (1 / 3)



0 10 cm
SD1-Ⅲ層出土遺物(9)

第70図 炉柏町遺跡出土遺物実測図⑫ (1 / 3)



第71図 炉粕町遺跡出土遺物実測図⑬ (1/2・1/3)

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
1	染付碗	SD 1	9.4	3.3	4.7	長与窯	
2	染付碗	SD 1	9.2	4.2	4.6	長与窯	
3	染付碗	SD 1	10	4	5.4	長与窯	
4	染付碗	SD 1	10.8	4.2	5	長与窯	
5	染付碗	SD 1	9.6	4	5.4	波佐見系	
6	染付碗	SD 1	10	4	4.4	波佐見系	
7	染付碗	SD 1	10.5	4	5	波佐見系	
8	染付碗	SD 1	12	4	5.2	肥前	清朝風
9	染付碗	SD 1	9.8	3.4	5.2	肥前	清朝風
10	染付碗	SD 1	9.8	4	6	肥前	清朝風
11	染付碗	SD 1	12	4	5.4	肥前	清朝風
12	染付碗	SD 1	12.3	7	7.2	肥前	廣東碗
13	染付碗	SD 1	10.8	6.1	5.9	肥前	廣東碗
14	染付碗	SD 1	9.8	5	4.8	肥前	清朝風
15	染付碗	SD 1	10	3.8	5.2	肥前	
16	染付碗	SD 1	12	5	7.2	肥前	
17	染付碗	SD 1	11	4.6	6	肥前	
18	染付碗	SD 1	11.3	4.4	10	肥前	
19	染付碗	SD 1	8	4	7	肥前	
20	染付碗	SD 1	8.4	3.8	6.2	肥前	
21	染付蓋	SD 1	7	—	2.4	肥前	
22	染付小碗	SD 1	7.5	4.8	5.8	肥前	
23	染付小杯	SD 1	6.4	4.9	6.2	肥前	
24	色絵小杯	SD 1	6	2.4	3.8	肥前	
25	染付小杯	SD 1	6	4	5.8	肥前	
26	染付小杯	SD 1	5.4	3.3	4.8	肥前	
27	染付皿	SD 1	12	6	3	肥前	
28	蓋	SD 1	5	—	1	京?	香合?
29	染付蓋	SD 1	5	—	1.4	肥前	
30	染付皿	SD 1	10	6	2.4	肥前	
31	染付皿	SD 1	14	9.8	4	肥前	
32	染付皿	SD 1	9.6	6	2	肥前	
33	染付皿	SD 1	12	6.2	2.8	肥前	
34	染付皿	SD 1	14	8	4	肥前	
35	染付皿	SD 1	13.4	8	4	肥前	
36	染付皿	SD 1	9.4	8.4	4	肥前	
37	染付皿	SD 1	15	9	5.4	肥前	
38	染付皿	SD 1	8.2	4.8	2	肥前	型紙摺り
39	染付皿	SD 1	13	7	3	肥前	波佐見系
40	染付皿	SD 1	12.1	4.3	4	肥前	波佐見系
41	青磁皿	SD 1	12	5	3	肥前	
42	染付鉢	SD 1	15	9	5.3	肥前	
43	染付鉢	SD 1	14.2	8.4	4.1	肥前	
44	陶器皿	SD 1	12	5	3.8	肥前	刷毛目
45	灰釉陶器	SD 1	—	5.8	—	関西?	灰落?
46	染付蓋	SD 1	17.8	—	2.8	肥前	
47	染付鉢	SD 1	23.8	13.8	8.4	肥前	
48	染付皿	SD 1	31	19.4	5.6	肥前	
49	染付皿	SD 1	23	14.6	3.8	肥前	
50	青磁染付鉢	SD 1	25	9.8	8	肥前	外青, 陽刻
51	染付蓋	SD 1	9	—	5	肥前	
52	陶器蓋	SD 1	8	—	4	肥前	
53	染付皿	SD 1	29	17	6	肥前	輪花, 形打ち
54	染付皿	SD 1	29	20	7	肥前	輪花, 陽刻
55	灯明皿	SD 1	7	3.6	7	肥前	
56	灯明皿	SD 1	5.4	4	6.4	肥前	
57	灯明皿	SD 1	6	4	7	肥前	
58	灯明皿	SD 1	5	4	5.4	肥前	
59	灯明皿	SD 1	6.2	3	2.2	肥前	
60	白磁小皿	SD 1	5	1.2	1.6	肥前	紅皿
61	白磁小皿	SD 1	5	2.2	1.4	肥前	
62	白磁皿	SD 1	10	3	3	肥前	
63	褐釉皿	SD 1	9.2	4	3	肥前	
64	粉彩皿	SD 1	11	6.2	2.6	中国	「大清乾隆年製」銘
65	染付鉢	SD 1	16.4	6	7	肥前	
66	染付鉢	SD 1	16	6	7.4	肥前	
67	染付鉢	SD 1	16	6	8.2	肥前	
68	白磁小杯	SD 1	6	4	4.6	長与窯	
69	染付蓋	SD 1	9.8	—	3	肥前	
70	染付蓋	SD 1	10.8	—	2.6	肥前	
71	染付蓋	SD 1	10	—	3.2	三川内	
72	白磁小杯	SD 1	6	2.6	4	肥前	
73	染付脚付碗	SD 1	7.4	2.6	5.6	肥前	
74	褐釉碗	SD 1	9.8	5	6.8	肥前	灰落
75	陶胎染付碗	SD 1	9.4	4.8	7	肥前	
76	青磁火入	SD 1	10.4	6.2	7.3	肥前	
77	青磁火入	SD 1	10.7	6.3	8	肥前	
78	陶器碗	SD 1	11.6	4.6	6.2	萩	
79	褐釉碗	SD 1	8	3.6	5.8	萩?	「帯山」銘
80	陶器碗	SD 1	—	5	—	萩	
81	陶器碗	SD 1	—	4	—	萩	
82	铁釉灰吹	SD 1	4.5	5.1	7.4	灰釉に笹文	
83	铁釉灰吹	SD 1	—	5	—	灰釉に笹文	
84	青磁染付鉢	SD 1	24.4	9.6	14	肥前	
85	陶器碗	SD 1	14	5	6.6	萩	
86	色絵碗	SD 1	11.6	3.2	4.4	京?	
87	練混火入	SD 1	9.6	9.4	8		
88	練混火入	SD 1	—	10.6	—	「松花山」銘	
89	染付煙管	SD 1				肥前	
90	染付煙管	SD 1				肥前	
91	染付煙管	SD 1				肥前	
92	染付煙管	SD 1				肥前	
93	染付煙管	SD 1				肥前	
94	染付煙管	SD 1				肥前	
95	染付水滴	SD 1	—	—	2	肥前	
96	染付水滴	SD 1	—	—	2.2	肥前	
97	青磁染付小杯	SD 1	7	3.4	4	中国	
98	染付小杯	SD 1	8.6	3	5.4	中国	徳化窯?
99	青磁染付小杯	SD 1	7.2	3.2	4	中国	
100	青磁染付小杯	SD 1	7	3.2	4	中国	

第4表 出土陶磁器一覧表①

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
101	青花小杯	SD 1 上層	5.8	—	—	中国	
102	粉彩小杯	SD 1 上層	—	3.6	—	中国	外面黄
103	青花小杯	SD 1 上層	—	2.4	—	中国	カップ
104	褐釉壺	SD 1 上層	16.8	(14)	—	中国	籠目タタキ
105	土製焰烙	SD 1 上層	(20)	(19)	—	日本	把手カップ
106	粉彩鉢	SD 1 上層	—	6.8	—	中国	外面ピンク
107	青花把手	SD 1 上層	—	—	—	中国	把手付瓶?
108	褐釉鉢	SD 1 上層	(18)	—	—	中国	型作り, 陽刻
109	染付碗	SD 1 中層	9.6	4.4	4.8	長与窯	一重網目文
110	染付碗	SD 1 中層	8.9	3.8	4.8	長与窯	一重網目文
111	染付碗	SD 1 中層	10	3.8	5.2	長与窯	一重網目文
112	染付碗	SD 1 中層	9.4	3.6	5	長与窯	一重網目文
113	染付碗	SD 1 中層	10	3.8	5.2	肥前	印判で菊花文
114	染付碗	SD 1 中層	9	4	4.8	長与窯	印判で菊花文
115	染付碗	SD 1 中層	10.2	4	5.4	長与窯	印判で菊花文
116	染付碗	SD 1 中層	9.6	4	5	長与窯	印判で菊花文
117	染付碗	SD 1 中層	9	4	4.8	長与窯	印判で菊花文
118	染付碗	SD 1 中層	10.4	4.4	4.8	長与窯	印判で花文
119	染付碗	SD 1 中層	9	4	5.2	長与窯	印判で花文
120	染付碗	SD 1 中層	9.4	4	5	長与窯	印判で花文
121	染付碗	SD 1 中層	9.8	4	5	長与窯	印判で龍文
122	染付碗	SD 1 中層	9.4	4	5.2	肥前	
123	染付碗	SD 1 中層	9.8	5.2	5.2	肥前	
124	染付碗	SD 1 中層	8.2	2.4	6	肥前	
125	染付碗	SD 1 中層	10	3.4	5.4	肥前	
126	染付碗	SD 1 中層	9.6	3.6	5.4	肥前	
127	染付碗	SD 1 中層	9.8	3.3	4.9	肥前	
128	染付碗	SD 1 中層	10.2	3.8	5	肥前	
129	染付碗	SD 1 中層	9	4.4	5	肥前	
130	染付碗	SD 1 中層	7	3	4	肥前	
131	染付碗	SD 1 中層	10	3.6	6	肥前	
132	染付碗	SD 1 中層	10.8	4.2	6	肥前	
133	染付碗	SD 1 中層	10.4	3.8	5	肥前	
134	色絵碗	SD 1 中層	7.2	2.8	4	肥前	
135	染付碗	SD 1 中層	10	4.2	5.8	肥前	
136	染付碗	SD 1 中層	9.8	3.4	5.4	肥前	
137	染付筒型碗	SD 1 中層	8.2	4.4	7.4	肥前	
138	色絵碗	SD 1 中層	8	3	5.5	肥前	
139	色絵小杯	SD 1 中層	4	2.8	2.8	肥前	
140	染付碗	SD 1 中層	11.4	6	6.6	肥前	広東碗
141	染付碗	SD 1 中層	11	4.8	6.4	肥前	
142	染付皿	SD 1 中層	12.8	5.6	2.6	長与窯	
143	染付皿	SD 1 中層	12.8	5	3.2	長与窯	
144	染付皿	SD 1 中層	12.6	5.2	3	長与窯	
145	染付皿	SD 1 中層	12.6	5.4	3	長与窯	
146	染付皿	SD 1 中層	13	7.4	4	肥前	
147	染付皿	SD 1 中層	12.4	7	3.6	肥前	
148	染付皿	SD 1 中層	13.4	6.6	3	肥前	
149	染付皿	SD 1 中層	13.4	8.5	3.4	肥前	
150	染付皿	SD 1 中層	14	8.5	4.2	肥前	
151	染付皿	SD 1 中層	12	5.8	2.4	肥前	
152	染付皿	SD 1 中層	9.4	6.8	1.6	肥前	
153	色絵皿	SD 1 中層	10.8	5.2	2	肥前	赤絵
154	白磁小皿	SD 1 中層	5.4	2.8	1.6	肥前	紅皿
155	染付蓋	SD 1 中層	10	—	3	肥前	
156	染付蓋	SD 1 中層	9	—	2.4	肥前	
157	染付蓋	SD 1 中層	10.6	—	2.6	肥前	
158	染付蓋	SD 1 中層	11	—	4	肥前	
159	染付蓋	SD 1 中層	10	—	3	肥前	
160	染付蓋	SD 1 中層	9.8	—	2.8	肥前	
161	染付蓋	SD 1 中層	8.2	—	3.3	肥前	
162	蓋付鉢(身)	SD 1 中層	12	6	7	肥前	
163	蓋付鉢(身)	SD 1 中層	11.6	6	6.8	肥前	
164	蓋付鉢(蓋)	SD 1 中層	11	—	3.8	長与窯	
165	蓋付鉢(身)	SD 1 中層	12	6.6	6	長与窯	
166	染付蓋	SD 1 中層	6	4	1	肥前	
167	染付鉢	SD 1 中層	16	5	7.2	肥前	
168	染付鉢	SD 1 中層	(17)	(8.5)	(11.2)	肥前	
169	染付鉢	SD 1 中層	16	7	8.2	肥前	
170	染付蓋	SD 1 中層	4	—	1	肥前	
171	染付鉢	SD 1 中層	(15)	(9)	(9.8)	肥前	
172	瑠璃袖蓋	SD 1 中層	—	—	—		
173	染付鉢	SD 1 中層	(19.4)	(10)	6.8	肥前	輪花, 型打ち
174	染付鉢	SD 1 中層	15.4	9.8	5	肥前	
175	白磁鉢	SD 1 中層	16	9.8	5.4	肥前	
176	白磁小皿	SD 1 中層	8.8	6.4	2	長与窯	
177	白磁小皿	SD 1 中層	8.2	3.6	2.4	長与窯	
178	白磁小皿	SD 1 中層	8	4	3	長与窯	
179	白磁小皿	SD 1 中層	8	3	3.4	長与窯	
180	色絵仏具	SD 1 中層	6	3.8	6	肥前	
181	褐釉花入	SD 1 中層	—	11	—	肥前	
182	色絵蓋	SD 1 中層	5.8	—	2	肥前	
183	染付皿	SD 1 中層	21.2	10.8	4.5	長与窯	
184	染付有頸壺	SD 1 中層	2	7	13	肥前	
185	染付有頸壺	SD 1 中層	1.4	—	—	肥前	
186	染付有頸壺	SD 1 中層	1.8	—	—	肥前	
187	染付火入	SD 1 中層	8	6	6		
188	鉄絵碗	SD 1 中層	9.3	3.8	6	信楽	
189	灰釉火入	SD 1 中層	10	4.8	5.5		
190	灰釉火入	SD 1 中層	7.8	4	5		
191	陶胎染付碗	SD 1 中層	11	4.6	6.8		
192	鉄絵火入	SD 1 中層	10	5.8	6.8		
193	鉄絵火入	SD 1 中層	7.2	3.8	5		
194	染付皿	SD 1 中層	(12.8)	4	3.4	長与窯	
195	鉄絵蓋	SD 1 中層	6.2	—	4		
196	鉄絵皿	SD 1 中層	—	4.2	—	肥前?	
197	白釉蓋	SD 1 中層	8.4	4.2	2.2		
198	色絵碗	SD 1 中層	11.8	3.8	4.2	京?	
199	灯火具	SD 1 中層	3.2	3.6	4.4		
200	灯明皿	SD 1 中層	7	4	7.2		

第5表 出土陶磁器一覧表②

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
201	灯明皿	SD 1 中層	5.4	3.8	7.2	肥前	
202	火入	SD 1 中層	(10)	(10.2)	(8.8)		練混手
203	青花鉢	SD 1 中層	(17.4)	(8.8)	(8.7)	中国	
204	青花色絵杯	SD 1 中層	8.2	3.8	5.2	中国	
205	青花色絵杯	SD 1 中層	8.4	3.8	5.1	中国	
206	青花色絵杯	SD 1 中層	—	4	—	中国	
207	青花色絵杯	SD 1 中層	8	3.8	5.2	中国	
208	青花色絵杯	SD 1 中層	8.8	3.2	5.2	中国	
209	染付碗	SD 1 中層	10.4	4.2	4.6	肥前	
210	染付碗	SD 1 中層	9.5	3.8	4.8	肥前	
211	染付碗	SD 1 中層	10	4.2	5	長与窯	印判
212	染付碗	SD 1 中層	9.7	4	5.2	長与窯	印判
213	染付碗	SD 1 中層	10	4	5	肥前	八羽紋
214	染付碗	SD 1 中層	10	4	4.8	肥前	牡丹唐草文
215	染付碗	SD 1 中層	9.2	3.2	5.2	肥前	八卦文
216	筒型碗	SD 1 中層	8	6.4	6.6	肥前	
217	筒型碗	SD 1 中層	7.4	4	6.6	肥前	
218	筒型碗	SD 1 中層	8.4	5	7	肥前	
219	筒型碗	SD 1 中層	8	4.2	6	肥前	
220	白磁小杯	SD 1 中層	5	3	3.6	肥前	
221	染付鉢	SD 1 中層	16	8	7.1	肥前	
222	染付皿	SD 1 中層	13.4	7.2	3.2	肥前	見込五弁花
223	染付皿	SD 1 中層	13.6	7.4	4	肥前	見込五弁花
224	染付皿	SD 1 中層	10	6.6	3	肥前	
225	白磁皿	SD 1 中層	12	4.4	4	長与窯	蛇目釉はぎ
226	染付煙管	SD 1 中層	—	—	—	肥前	
227	仏飯具	SD 1 中層	6.4	3.8	5.4	肥前	
228	染付蓋	SD 1 中層	10.8	—	—		
229	鉄絵灰落	SD 1 中層	—	5	—		笛文
230	鉄絵灰落	SD 1 中層	—	4.2	—		笛文
231	鉄絵灰落	SD 1 中層	—	4.8	—		笛文
232	鉄絵灰落	SD 1 中層	—	4	—		笛文
233	鉄絵灰落	SD 1 中層	—	5	—		笛文
234	鉄絵灰落	SD 1 中層	5	4.8	8.6		笛文
235	色絵鉢	SD 1 中層	—	(6.8)	—	中国	赤絵で銭文
236	灰釉碗	SD 1 中層	10	3.8	5.8	肥前	京焼風?
237	粉彩皿	SD 1 中層	—	9	—	中国	
238	土器皿?	SD 1 中層	—	—	—		墨書
239	土器皿?	SD 1 中層	—	—	—		墨書
240	陶器皿	SD 1 中層	(12)	(4)	4	肥前	刷毛目、蛇目釉はぎ
241	刷毛目鉢	SD 1 中層	(22.8)	(8)	9		
242	灯明皿	SD 1 中層	6.4	4	8.4	肥前	
243	片口鉢	SD 1 中層	21.8	9	11	肥前	
244	染付碗	SD 1	9	3.4	4.6	長与窯	
245	染付碗	SD 1	9	3.8	4.6	長与窯	
246	染付碗	SD 1	10.8	4.4	5.2	長与窯	
247	染付碗	SD 1	10	5	5.4	長与窯	
248	染付碗	SD 1	9	4	4.8	長与窯	
249	染付碗	SD 1	9.8	4.2	4.8	長与窯	
250	染付碗	SD 1	9.8	4.4	5	肥前	
251	染付碗	SD 1	10	4	5	肥前	
252	染付碗	SD 1	10	3.4	4.8	肥前	
253	染付碗	SD 1	10	3.8	4.6	肥前	
254	染付碗	SD 1	10	4	5	肥前	
255	染付碗	SD 1	9.2	3.4	5.1	肥前	
256	染付碗	SD 1	9.8	4	5.4	肥前	
257	染付碗	SD 1	8	3	5.2	肥前	
258	染付碗	SD 1	7.8	3	5.9	肥前	
259	染付碗	SD 1	11.2	—	—	肥前	
260	染付碗	SD 1	11.7	5	6.1	肥前	
261	染付碗	SD 1	12	5.2	7	肥前	
262	染付碗	SD 1	12	4.6	7	肥前	
263	染付碗	SD 1	9	3.5	5.2	肥前	
264	染付碗	SD 1	11.4	5	6.1	肥前	
265	染付碗	SD 1	10.4	5.8	5.3	肥前	廣東碗
266	染付碗	SD 1	10	3.8	5.2	肥前	
267	染付碗	SD 1	12	6	6.8	肥前	廣東碗
268	染付碗	SD 1	12	6.4	7	肥前	廣東碗
269	染付碗	SD 1	11.2	6.8	6.2	肥前	廣東碗
270	染付鉢	SD 1	15.2	7	8		
271	青磁鉢	SD 1	7	4	6.2		
272	青白磁碗	SD 1	11	5	5.7		
273	染付皿	SD 1	—	—	—	肥前	「VOC」銘
274	染付皿	SD 1	10	6	2.6	肥前	
275	染付皿	SD 1	10	6.6	2	肥前	
276	染付皿	SD 1	13.6	11.7	5	肥前	
277	染付皿	SD 1	15	9	5	肥前	
278	染付皿	SD 1	12.2	6.4	3	長与窯	
279	染付皿	SD 1	13	5.8	3.4	長与窯	
280	染付皿	SD 1	12	4.2	3.8	波佐見窯	
281	染付皿	SD 1	13	5	3.2	長与窯	
282	褐釉台?	SD 1	—	—	—		
283	染付蓋	SD 1	9.6	—	3		
284	染付蓋	SD 1	9.6	—	3		
285	染付蓋	SD 1	12	—	4		
286	染付蓋	SD 1	7	—	2.3		
287	白磁皿	SD 1	10.7	4	3		
288	白磁皿	SD 1	12	4	4	長与窯	蛇目釉はぎ
289	染付合子(身)	SD 1	5	2.6	2.8		
290	陶器皿	SD 1	—	3.4	—		京焼風、「表」墨書
291	陶器蓋	SD 1	3.4	—	2.7		刷毛目
292	白磁筒形碗	SD 1	7	3.3	5.2		
293	白磁小壺(身)	SD 1	6.2	4.4	5.4		
294	白磁合子(身)	SD 1	5	2.6	1.2		
295	青磁火入	SD 1	10	4	7		
296	灰釉陶器碗	SD 1	10	5	6		
297	陶器皿	SD 1	(13)	(4.6)	3.6	現川窯	刷毛目
298	灯明皿	SD 1	8	3	2		
299	染付皿	SD 1	(28.8)	(18)	(5)		
300	染付合子(蓋)	SD 1	5	—	1		

第6表 出土陶磁器一覧表③

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
301	染付皿	SD 1	16	9.4	3.4	肥前	
302	染付合子蓋	SD 1	4	—	0.8	肥前	
303	土師皿	SD 1	6	4	1		
304	緑釉壺	SD 1	16	—	—	関西?	
305	染付皿	SD 1	30	18	5.4	肥前	陽刻
306	色繪土瓶	SD 1	8	—	—	京?	
307	色繪染付小杯	SD 1	8.4	3	5	徳化窯?	赤絵で文字(ひらがな?)
308	色繪染付小杯	SD 1	8.8	3.4	5.2	徳化窯?	赤絵で文字(ひらがな?)
309	色繪染付小杯	SD 1	8.8	3.8	5.2	徳化窯?	赤絵で文字(ひらがな?)
310	色繪染付小杯	SD 1	9	3.8	5.4	徳化窯?	赤絵で文字(ひらがな?)
311	色繪染付小杯	SD 1	8.8	3	5	徳化窯?	赤絵で文字(ひらがな?)
312	色繪染付小杯	SD 1	—	3.4	—	徳化窯?	赤絵で文字(ひらがな?)
313	色絵角鉢	SD 1	13	12	2.4	京	乾山風
314	練り混み火入	SD 1	(10)	(10)	9		灰落に使用
315	色繪小杯	SD 1	7	2.8	4	中国	
316	青花小杯	SD 1	8.4	4.6	5	中国	
317	青花蓋	SD 1	6.2	—	2	中国	
318	色繪小杯	SD 1	9	3	6	中国	
319	青花小杯	SD 1	8	3.4	5	徳化窯?	
320	色繪小杯	SD 1	8.6	3.4	4.9	肥前?	
321	青花壺?	SD 1	—	(4.4)	—		
322	青花皿	SD 1	(15)	8.4	3.6		
323	青花餅入	SD 1	—	—	—		
324	白磁蓮華	SD 1	—	—	—		
325	塙釉炻器壺	SD 1	3	—	—	ドイツ	フレッヒエン系
326	染付碗	石垣 2	10	3.8	5.4	肥前	
327	染付碗	石垣 2	10	4	5.6	肥前	
328	染付碗	石垣 2	11	4.8	6.4	肥前	
329	染付碗	石垣 2	11	3.8	4.9	肥前	
330	染付碗	石垣 2	—	4	—	肥前	
331	白釉小壺	石垣 2	—	5	—	肥前	
332	染付蓋	石垣 2	(17.4)	—	(3.4)	肥前	
333	染付碗	石垣 3	8.4	3.6	5	肥前	
334	陶器碗	石垣 3	10	4.8	4.5	肥前	
335	陶器碗	石垣 3	10.8	4	6.7	肥前	
336	染付碗	石垣 3	7	—	3.6	肥前	
337	白釉陶器火入	石垣 3	12	8	(7.4)	肥前	
338	陶器碗	石垣 3	14	5	6	肥前	
339	緑釉皿	石垣 3	13	4.7	5.4	肥前	内野山系
340	鉄釉すり鉢	石垣 3	24.5	8	10	肥前	
341	鉄絵陶器皿	石垣 3	—	—	10	肥前	
342	青磁火入	石垣 3	11.6	6.8	7.8	肥前	
343	朱泥急須	石垣 3	7	—	—	宜興窯	
344	青花鉢	石垣 3	15	7	7	中国	
345	染付碗	SK 8	10	4	5	肥前	
346	染付碗	SK 8	10.2	4	5.6	肥前	
347	染付碗	SK 8	9.5	4.3	4.8	長与窯	
348	染付皿	SK 8	9.6	6	2.5	肥前	
349	染付鉢	SK 8	14	8.6	4.4	肥前	
350	色繪蓋	SK 8	7.5	—	3.8	肥前	青手
351	練り混み火入	SK 8	—	(10)	—		
352	青花碗	SK 8	9	3.6	5	中国	
353	染付碗	SK78	8.2	3.6	5.6	肥前	
354	染付小皿	SK78	7	4	2	肥前	
355	染付碗	SK 9	9	4	5	肥前	
356	染付碗	SK 9	10	3.4	5.6	肥前	
357	染付碗	SK 9	10	3.5	4.2	肥前	
358	青花皿	SK 9	11.2	6	2.6	中国	
359	青花皿	SK 9	11.2	6	3	中国	
360	白磁壺?	SK132	—	9	22	肥前	
361	色繪陶器碗	SK99	11.6	3	4.4	京?	
362	染付皿	SK139	12.8	7.4	3		
363	陶器土瓶	SK139	10	5	13.5		蓋径 8 cm
364	陶器土瓶	SK139	10	6	12		蓋径 8.2 cm
365	染付碗	SK139	9.5	4	4.6		
366	白磁壺	SE 8	7.5	—	—	中国	安平壺
367	褐釉壺	SE 8	—	(13)	—		
368	片口陶器鉢	SE 8	22.2	10	12	肥前	
369	染付碗	SE 8	10	3.8	5.4	肥前	
370	染付筒形碗	SE 8	7	3	5.6	肥前	
371	染付碗	SE 8	10	4	5	三川内?	
372	青花鉢	SE 8	18	8	8	中国	
373	青花鉢	SE 8	19.6	8.4	8.5	中国	「大清乾隆年製」銘
374	青花鉢	SE 8	17	8	8.4	中国	
375	青花鉢	SE 8	19.6	7.8	8	中国	「大清乾隆年製」銘
376	青花小杯	SE 8	6.5	2.5	4.7	中国	
377	青花小碗	SE 8	8.4	4	5	中国	
378	青花蓋	SE 8	27	—	9.6	中国	チュリーン
379	青花筒形杯	SE 8	6	3	9.8	中国	ガーニチュア
380	青花鉢	SE 8	—	—	—	中国	スープ皿
381	青花皿	SE 8	29	17	4.8	中国	
382	京焼鳳凰陶器碗	III・IV層	(10)	(3.8)	(4.4)	肥前	露胎部に鉄
383	京焼鳳凰陶器碗	III・IV層	(10)	(4.2)	(4.5)	肥前	露胎部に鉄
384	染付亀形水滴		—	—	—	肥前	
385	陶胎染付皿			11	3.4	肥前	三足
386	色繪皿		—	—	—	肥前	
387	染付煙管						
388	染付碗		10	4	5.2		
389	青花碗		10	4	6	徳化窯	
390	青花鉢		—	—	—	中国	粗製、印判手
391	陶器小皿		10	4	2.6	瀬戸?	
392	青花皿		(17)	(10)	(3)	中国	
393	染付小杯		6.2	3	4.6	瀬戸?	
394	染付小杯		9	3	4	瀬戸?	
395	染付小杯		8	3	3.8	瀬戸?	
396	染付小杯		9	3	4.4	瀬戸?	
397	染付小杯		8	3	4	瀬戸?	
398	染付小杯		8	3	4	瀬戸?	
399	染付小杯		6	2.2	3	瀬戸?	
400	小杯		6.6	3	3	五良大甫呉祥瑞	銘

第7表 出土陶磁器一覧表④

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
401	染付皿	III・IV層	19	12.2	2.6	肥前	
402	青磁筒形碗	III・IV層	6	5.8	8	肥前	
403	青磁筒形碗	III・IV層	6	6	8.6	肥前	
404	灰釉壺	III・IV層	—	4	—	小倉	
405	瓦質クンディ	III・IV層	—	—	—	東南アジア	三官貯壺
406	灰釉碗	III・IV層	10	4	7.4	肥前	
407	染付碗	SD 9	—	3.4	—	肥前	
408	染付筒形碗	SD 9	8	5	6.2	肥前	
409	青磁筒形碗	SD 9	6.2	5.4	9	肥前	
410	青磁筒形碗	SD 9	6.2	6.8	9	肥前	
411	青磁火入	SD 9	9.4	7.2	8	肥前	
412	染付皿	SD 9	9	4.6	2	肥前	
413	染付皿	SD 9	(21)	(12)	3.2	肥前	芙蓉手
414	染付皿	SD 9	12.4	6	3.2	肥前	
415	染付皿	SD 9	13	8	3.2	肥前	矢羽文
416	染付皿	SD 9	14	8	2.6	肥前	
417	染付壺	SD 9	—	5	—	肥前	
418	刷毛目陶器壺	SD 9	5.5	—	—	内野山?	
419	陶胎染付碗	SD 9	12	—	—	肥前	
420	陶胎染付碗	SD 9	10.6	5	7.2	肥前	
421	染付碗	SD 9	10.8	5	6.2	肥前	
422	陶胎染付碗	SD 9	11	4.4	7.2	肥前	
423	刷毛目陶器碗	SD 9	—	4	—	現川	
424	刷毛目陶器碗	SD 9	(10)	4.5	6	現川	
425	焼締瓶	SD 9	5	—	—	中国	
426	灰釉陶器皿	SD 9	12	4.4	4	内野山	
427	灰釉陶器皿	SD 9	13	4.4	3.2	内野山	
428	染付皿	SD 2	—	—	—	肥前	
429	褐釉小杯	SD 2	7	2.8	4.2	内野山	
430	白磁碗	SD 2	12	5	7.4		
431	青釉杯把手	SD 2	—	—	—	ヨーロッパ	
432	陶胎染付碗	SD 3	(11)	(5)	(7)	肥前	
433	褐釉小杯	SD 7	7	3.4	4	内野山	
434	染付碗	SD27	9.8	4	5.4	内野山	
435	白磁火入	SD27	8.2	—	—		
436	刷毛目陶器碗	SD27	(12)	4.4	5.4	現川	
437	染付壺	SD27	—	—	—	肥前	
438	粉彩碗	SD39	—	5	—	中国	
439	青花	SD20	(11.8)	—	—	中国	
440	白釉陶器	SD20	—	4.8	—		
441	異須赤絵皿	SD20	—	—	—	中国	
442	褐釉壺	SD20	—	(8.5)	—		
443	染付小杯	SD 8	6.4	3	4.2	肥前	
444	陶胎染付碗	SD 8	10	4	6.4	肥前	
445	青磁火入	SD 8	10.2	8.8	8.5	肥前	
446	陶胎染付碗	SD 8	11	—	—	肥前	
447	染付皿	SD 8	13	7	3.6	肥前	
448	褐釉壺	SD 8	7.4	—	4		
449	瓦質火鉢	SD 8	—	—	—		
450	刷毛目陶器壺	SD 8	—	—	—	肥前	
451	青花小壺	SD38	—	—	—	中国	
452	京焼風陶器碗	—	12	5.5	8.2	肥前	
453	灰釉陶器皿	—	13	4.5	3.5	肥前	
454	石錐	SX 4 上	—	—	—		
455	刷毛目片口鉢	SX 5	20	8.4	10		
456	褐釉蓋	SX 7	6	—	1	中国?	
457	京焼風陶器碗	SX 7	12	3.4	4.4	肥前	
458	小杯	SX 7	6	3	3		400に似る
459	染付碗	SX 7	9.4	4.4	5.8	肥前	
460	二重口縁壺	SX 7	2.5	—	—	肥前	コンプラ瓶?
461	コンプラ瓶	SX 7	—	—	—	肥前	
462	染付皿	SX18	15	5	4	肥前	
463	陶器壺	SX25	40	30	80	肥前	
464	陶胎染付碗	SB 5 上	10.5	4.8	7.4	肥前	
465	青磁碗	SB 5 上	12	4.8	7.5	肥前	
466	灰釉陶器皿	SB 5 上	12.5	4.5	3.5	内野山	
467	灰釉陶器皿	SB 5 上	13	4	3.5	内野山	
468	染付碗	Va 層	9	3.5	5	肥前	
469	染付碗	Va 層	10	5	6.5	肥前	
470	染付小杯	Va 層	5	2	4.8	肥前	
471	染付壺	Va 層	(11)	—	—	肥前	アルバレロ形
472	白磁紅皿	Va 層	7	3.8	2	肥前	
473	白磁紅皿	Va 層	6.8	3.5	2	肥前	
474	京焼風陶器碗	Va 層	9	3.8	6.2	肥前	
475	染付皿	Va 層	25.8	16	4.5	肥前	
476	染付皿	Va 層	13	8.2	3.5	肥前	
477	綠釉陶器皿	Va 層	13	5	4	内野山	
478	綠釉陶器皿	Va 層	13	4.5	5	内野山	
479	綠釉鉢	Va 層	18.5	5	7	内野山	
480	京焼風陶器碗	Va 層	11	5	6.5	肥前	
481	染付皿	Va 層	21	13.8	4.4	肥前	
482	京焼風陶器皿	Va 層	23	10.5	8	肥前	
483	焼締すり鉢	Va 層	10.8	3	3		
484	褐釉壺	Va 層	15	12.8	25	肥前	
485	染付碗	V 層	11	4.2	6	肥前	
486	染付蓋	V 层	9.5	—	3	肥前	
487	染付皿	V 层	13	3.8	3.6	肥前	
488	青磁皿	V 层	16	5.8	4.3	肥前	
489	染付皿	V 层	14	7	3	肥前	
490	染付皿	V 层	13	8.7	2.5	肥前	
491	染付皿	V 层	13	4	3.6	肥前	
492	青磁皿	V 层	14.4	9	3	肥前	
493	白磁小杯	V 层	6	3	4	肥前	
494	白磁小杯	V 层	6	3	4	肥前	
495	白磁紅皿	V 层	6.8	3.8	2.8	肥前	
496	白磁紅皿	V 层	7	3.8	2	肥前	
497	京焼風陶器碗	V 层	8.2	3.8	5.8	肥前	
498	京焼風陶器碗	V 层	9	4	5.7	肥前	
499	染付碗	V 层	9.8	3.8	5	肥前	
500	京焼風陶器碗	V 层	9	4.3	5	肥前	

第8表 出土陶磁器一覧表⑤

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
501	青磁染付小碗	V層	8.2	4	8	肥前	
502	京焼風陶器小杯	V層	8.4	2	4.8	肥前	
503	京焼風陶器碗	V層	10.6	4	4.3	肥前	
504	京焼風陶器碗	V層	10.6	4	4.6	肥前	
505	京焼風陶器碗	V層	10.4	4.6	7.5	肥前	
506	京焼風陶器碗	V層	9.6	4.2	6.8	肥前	
507	青磁染付小碗	V層	8	4	5	肥前	
508	京焼風陶器碗	V層	9.6	4	6.4	肥前	
509	京焼風陶器碗	V層	(10.6)	(5.2)	(6.3)	肥前	
510	白磁小皿	V層	7	4	1.8	肥前	
511	青磁染付小碗	V層	8	3.4	5.4	肥前	
512	白磁合子(身)	V層	(10)	(5)	(3.2)	肥前	
513	灰釉皿	V層	13	5	4	肥前	
514	刷毛目二彩鉢	V層	30	10	14	肥前	
515	染付皿	V層	14	8.2	2.8	肥前	
516	染付皿	V層	7.4	3.6	3	肥前	
517	染付碗	V層	9	4	5.4	肥前	
518	陶器壺	V層	—	6	—		火入?
519	白磁壺	V層	—	(6)	—	中国	安平壺
520	染付皿	V層	13.8	5.2	3.7	肥前	
521	染付皿	V層	13	4	3.8	肥前	
522	染付皿	V層	14	7	3	肥前	
523	染付皿	V層	14.6	9.8	2.5	肥前	
524	染付皿	V層	13	4.6	3.2	肥前	
525	刷毛目片口鉢	V層	21	10	10	肥前	
526	白磁壺	V層	5.5	—	—	中国	安平壺
527	白磁小杯	V層	6	2.4	2.4	肥前	
528	染付小杯	V層	6.4	3	5	肥前	
529	染付クンディ	V層	6.5	—	—	肥前	
530	青磁火入	V層	12	6	6.3	肥前	
531	赤絵小杯	V層	8	4	5	肥前	
532	刷毛目二彩鉢	V層	13	6.6	7	肥前	
533	白磁小杯	V層	8	3	3	肥前	
534	青花皿	V層	(30)	(16)	(7.8)	中国	吳須手
535	白磁皿	V層	(32)	(15.5)	(6.4)	肥前	
536	京焼風陶器碗	V層	7.4	4.6	7.2	肥前	
537	白磁壺	V層	—	(6.6)	—	中国	安平壺
538	褐釉碗	V層	13	4.8	7.2	肥前	
539	青花皿	V層	(15)	(8)	(2.2)	中国	
540	綠釉壺	V層	4	9	25	内野山	
541	刷毛目二彩壺	V層	3	7.5	22.5	内野山	
542	染付皿	V層	(15)	(9.2)	(2.5)	肥前	
543	白磁脚付杯	V層	7	4.4	6.7	肥前	
544	青花皿	V層	(9.8)	4.8	2.7	中国	
545	綠釉陶器皿	V層	13.2	4	3.6	内野山	
546	綠釉陶器皿	V層	13	4.4	4	内野山	
547	染付鉢	V層	15	12.4	5	肥前	
548	刷毛目壺	V層	—	8	—	内野山	
549	染付皿	V層	14	5	3.5	肥前	
550	染付皿	V層	12	8	2.6	肥前	
551	染付皿	V層	21	11.4	4	肥前	
552	天目碗	石垣9関係	(12)	(4.4)	(6)	肥前	
553	灰釉皿	石垣9関係	—	5	—	肥前	
554	灰釉碗	石垣9関係	—	7	—	肥前	
555	白釉皿	石垣9関係	15	5	4.5	肥前	
556	染付碗	石垣9関係	(9.8)	(5.4)	(6.4)	肥前	
557	染付小杯	石垣9関係	10	4.4	4.7	肥前	
558	染付碗	石垣9関係	—	(6.4)	—	肥前	
559	陶器皿	石垣9関係	—	4	—	肥前	
560	褐釉壺	石垣9関係	—	(7)	—	肥前	
561	灰釉鉢	石垣9関係	—	(8)	—	肥前	
562	鉄絵鉢	石垣9関係	11.5	4	5	肥前	絵唐津
563	灰釉皿	石垣9関係	10	4.2	3	肥前	
564	青花皿	石垣9関係	(14)	5.5	3.6	中国	
565	青花皿	石垣9関係	(12.4)	(7.4)	(3)	中国	明山手
566	褐釉壺	石垣9関係	—	10	—	肥前	
567	瓦質茶釜	石垣9関係	15	—	—		
568	青花碗	SE9	—	4.4	—	中国	
569	青花碗	SE9	—	4	—	中国	
570	灰釉碗	SE9	—	4	—	肥前	
571	透明釉皿	SE9	14	4.8	3.6	肥前	
572	灰釉皿	SE9	12	4	4.4	肥前	
573	陶器皿	SE9	30	10.2	6.8	肥前	
574	陶器皿	SE9	25	7	6	肥前	
575	燒締壺把手	SE9	—	—	—	肥前	
576	燒締すり鉢	—	(31)	(16)	(14.8)	肥前	
577	白磁壺	SK179	—	6	—	肥前	
578	青磁三足皿	SK179	17	5	4.8	肥前	
579	青花碗	SK189	10	4	5.4	中国	
580	青花皿	SK189	11	6	2.2	中国	
581	青花碗	SK9	14	5.2	6.6	中国	
582	船釉壺	SK197	6	—	—		
583	青花碗	VI層	—	(4.2)	—	中国	
584	青花皿	VI層	—	—	—	中国	
585	黑釉壺	VI層	—	—	—	中国	
586	青花皿	VI層	14	8	3	中国	
587	灰釉皿	VI層	10.2	6	3.5	肥前	
588	燒締すり鉢	VI層	—	—	—	備前	
589	瓦質火鉢	VI層	—	—	—		
590	燒締鉢	石垣7前VI層	(17)	(10)	(5)		
591	瓦質壺	石垣7前VI層	(18)	(16)	(14)		
592	燒締すり鉢	石垣7前VI層	26	13	12		
593	燒締壺把手	石垣7前VI層	—	—	—	肥前	
594	燒締壺	石垣7前VI層	32	30	42		
595	燒締壺	石垣7前VI層	—	7	—		
596	燒締杯	石垣7前VI層	5.4	—	—		
597	燒締壺	SK178	—	(31)	—		
598	染付碗	V b層	10	4	6	肥前	
599	染付碗	V b層	11	4	6.4	肥前	
600	染付碗	V b層	11	4	6.2	肥前	

第9表 出土陶磁器一覧表⑥

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
601	染付皿	V b層	14	9.5	3	肥前	
602	焼締壺	V b層	11	—	—	ベトナム	
603	焼締瓶	V b層	5	—	—	中国	
604	染付碗	V e層	11	4	6	肥前	
605	青花碗	V e層	—	3.6	—	中国	
606	染付碗	V d層	9.2	3	4.6	肥前	
607	染付碗	V d層	10	4.2	5.8	肥前	
608	染付碗	V d層	11	4.4	6	肥前	
609	染付碗	V d層	15	5.6	7.2	肥前	
610	染付碗	V d層	10	3.5	5	肥前	
611	染付碗	V d層	10	4	6.2	肥前	
612	染付碗	V d層	14.6	6.2	7.6	肥前	
613	染付皿	V d層	13.5	5.8	3.2	肥前	
614	染付皿	V d層	12	4	3.6	肥前	
615	灰釉陶器皿	V d層	12	4.8	3.8	内野山	
616	京焼風陶器碗	V d層	12.6	5	5.6	肥前	
617	綠釉陶器碗	V d層	(10)	(7)	8		
618	灰釉陶器皿	V d層	12.6	4.8	4	内野山	
619	褐釉すり鉢	V d層	32	10.4	11.8	肥前	
620	黒釉鉢	V d層	—	(12.8)	—	ベトナム	
621	焼締瓶	V d層	5.4	—	—	中国	
622	焼締瓶	V d層	—	4	—	中国	
623	焼締陶管	V d層	11	—	—	肥前	タタキ成形
624	青釉壺?	V d層	—	—	—	中国	
625	白釉鉢	V d層	27	18.2	12		
626	染付碗	V e層	9	4	5.4	肥前	
627	染付碗	V e層	10	4	6	肥前	
628	染付碗	V e層	10.2	4	6.4	肥前	
629	染付碗	V e層	9	3.8	5.2	肥前	
630	染付碗	V e層	8.5	3.4	5	肥前	
631	染付碗	V e層	9	3.8	4.6	肥前	
632	染付皿	V e層	8.8	4.2	3.3	肥前	
633	染付碗	V e層	8.4	4.2	5.3	肥前	
634	染付碗	V e層	8.2	3.2	5	肥前	
635	染付碗	V e層	9	3.5	5	肥前	
636	青磁染付小碗	V e層	8	3.2	4.6	肥前	
637	染付小杯	V e層	6	2	4	肥前	
638	染付筒形碗	V e層	6.4	3.2	4.6	肥前	
639	染付小杯	V e層	5.4	5	4	肥前	
640	染付小杯	V e層	5	3	3.2	肥前	
641	白磁小杯	V e層	5.4	2.8	3.2	肥前	
642	白磁小杯	V e層	6	1.8	3.2	肥前	
643	白磁小杯	V e層	7	2.8	3.8	肥前	
644	青磁火入	V e層	6	6	8	肥前	
645	青磁合子(身)	V e層	6	—	—	肥前	
646	染付壺	V e層	8	—	—	肥前	アルバレロ形壺
647	染付壺	V e層	—	—	—	肥前	アルバレロ形壺
648	染付鉢	V e層	15.4	6	8	肥前	
649	染付皿	V e層	—	11.4	—	肥前	「VOC」銘
650	染付皿	V e層	11	7	2.8	肥前	
651	青磁染付小碗	V e層	8.8	3.5	5	肥前	
652	染付皿	V e層	29	10	7.2	肥前	
653	染付皿	V e層	15	7	4	肥前	
654	染付皿	V e層	21.5	13	3	肥前	
655	刷毛目陶器碗	V e層	10	4.8	6.2	肥前	
656	京焼風陶器碗	V e層	9	4.5	7.2	肥前	
657	刷毛目陶器碗	V e層	8.8	3.5	4.7	現川?	
658	刷毛目陶器碗	V e層	11	4.2	5.5	現川?	
659	刷毛目陶器碗	V e層	11	4	4.5	現川?	
660	刷毛目陶器碗	V e層	8	3	4.8	現川?	
661	刷毛目陶器碗	V e層	8.5	3.5	4.6	現川?	
662	灰釉陶器碗	V e層	11.2	4	4.2	肥前	
663	綠釉陶器碗	V e層	13.2	4	4	肥前	
664	焼締すり鉢	V e層	10	2.4	3		
665	綠灰釉陶器皿	V e層	13	5	4	内野山	
666	織部茶入	V e層	—	—	—	瀬戸美濃	
667	白磁壺	V e層	6	—	—	中国	
668	白磁壺	V e層	—	—	—	中国	
669	白磁壺	V e層	—	6	—	中国	
670	青釉壺	V e層	—	—	—	中国	
671	赤絵皿	V e層	—	—	—	中国	古染付
672	焼締瓶	V e層	6	—	—	中国	
673	焼締瓶	V e層	—	2.8	—	中国	
674	焼締瓶	V e層	—	4	—	中国	
675	焼締瓶	V e層	—	—	—	中国	
676	紫泥急須	V e層	—	—	—	中国	
677	黒釉壺	V e層	9.8	—	—	中国	
678	鉄絵印花碗	V e層	14.2	8.5	4.8	ベトナム	
679	鉄絵印花碗	V e層	14.2	9	5	ベトナム	
680	焼締壺	V e層	—	—	—	ベトナム	
681	焼締蓋	V e層	17.5	—	5	ベトナム	
682	青花皿	V e層	—	—	—	中近東	
683	青花皿	V e層	—	—	—	中近東	
684	青花皿	V e層	—	—	—	中近東	
685	青花皿	V e層	—	—	—	中近東	
686	吳須赤絵鉢	V a層	—	8	—	中国	
687	染付碗	V g層	8	3.5	5	肥前	
688	青花碗	V g層	—	(4.4)	—	中国	
689	褐釉蓋	V g層	15	—	3.7		
690	染付碗	SB 4 基壇	9.4	4	5.6	肥前	
691	染付碗	SB 4 基壇	8	3.7	5	肥前	
692	染付碗	SB 4 基壇	11	4.4	6.4	肥前	
693	染付碗	SB 4 基壇	9.5	4	5.6	肥前	
694	青磁染付碗	SB 4 基壇	8.6	3.4	5	肥前	
695	染付筒形碗	SB 4 基壇	7	4	5	肥前	
696	染付皿	SB 4 基壇	13.8	8	2.6	肥前	
697	染付皿	SB 4 基壇	14	8.5	3	肥前	
698	染付皿	SB 4 基壇	11	7	2.8	肥前	
699	陶器碗	SB 4 基壇	9	3.5	5.6	肥前	
700	灰釉火入	SB 4 基壇	9	3.8	5.4	肥前	

第10表 出土陶磁器一覧表⑦

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
701	灰釉陶器皿	SB 4 基壇	13	4.4	4	肥前	
702	刷毛目陶器皿	SB 4 基壇	13.3	4	4	肥前	
703	焼締瓶	SB 4 基壇	4.5	—	—	中国	
704	焼締急須	SB 4 基壇	—	—	—	中国	
705	刷毛目陶器碗	SB 4 基壇	11	4	5.4	現川	
706	刷毛目陶器碗	SB 4 基壇	12	4.8	6	現川	
707	朱泥壺	SB 4 基壇	—	(6.5)	—	宜興窯?	
708	涼炉	SB 4 基壇	—	—	—		
709	染付小杯	SB 1 - 2	9	4	5.6	肥前	
710	灰釉陶器碗	SB 1 - 2	12	4.8	5.3	肥前	
711	染付鉢	SD 7	8	4.4	3.2	肥前	
712	京焼風陶器碗	SD 7	9	3	5	肥前	墨書き
713	染付皿	SD 7	12	6.4	2.5	肥前	
714	染付碗	SX 1	10	4	5.4	肥前	
715	染付蓋	SX 1	9	—	3.6	肥前	
716	染付蓋付碗(身)	SX 1	9	5	5.4	肥前	
717	染付碗	SX 5	10	3.2	5.4	肥前	
718	染付碗	SX 5	10	3.5	5.4	肥前	
719	染付碗	SX 6	10	4	5	肥前	
720	染付皿	SX 6	12.5	7.5	2.5	肥前	
721	染付鉢	SX 6	16	5.8	7.2	肥前	
722	焼締瓶	SE 5	—	—	—	中国	
723	染付碗	SE 3	14	5	6.4	肥前	雲龍荒磯文
724	染付碗	SE 3	11.5	5	6.6	肥前	雲龍荒磯文
725	染付小杯	SE 3	6.6	3	3.8	肥前	
726	染付小碗	SE 3	8	2	4.4	肥前	
727	染付碗	SE 3	11.8	5	6.6	肥前	
728	白磁小杯	SE 3	6	2.8	4	肥前	
729	染付碗	SE 3	9	4	5	肥前	
730	染付筒形碗	SE 3	7	3.2	6.4	肥前	
731	白磁碗	SE 3	8	3.2	4.2	肥前	
732	染付碗	SE 3	11	4	6	肥前	
733	染付筒形碗	SE 3	9.2	5.6	7.6	肥前	
734	白磁碗	SE 3	10	4	6	肥前	
735	染付鉢	SE 3	17	6	8.4	肥前	雲龍荒磯文
736	青磁染付小杯	SE 3	8.2	3.4	5	肥前	
737	瑠璃釉色絵壺	SE 3	—	6	—	肥前	
738	染付皿	SE 3	21	13	3	肥前	
739	染付皿	SE 3	21	13.6	2.8	肥前	
740	褐釉小杯	SE 3	7	4	4.2	肥前	
741	京焼風陶器碗	SE 3	9	3.8	5.4	肥前	
742	京焼風陶器碗	SE 3	9	4	6.2	肥前	
743	染付皿	SE 3	13	4.2	3.6	肥前	
744	綠灰釉鉢	SE 3	19	6	7.2	肥前	
745	刷毛目皿	SE 3	21	7.5	5	内野山	
746	京焼風陶器皿	SE 3	22	9	9	肥前	
747	刷毛目陶器片口鉢	SE 3	20.8	9.5	9.8	肥前	
748	焼締壺	SE 3	8	—	—	肥前	
749	染付碗	SE 3	11	5	6.3	肥前	
750	染付碗	SE 3	10	3.4	4.6	肥前	
751	白磁皿	SE 3	14	7	4	長与窯	
752	染付皿	SE 3	19.7	12.5	4	肥前	
753	染付皿	SE 3	19.8	12	4.2	肥前	
754	染付皿	SE 3	20	12	4.2	肥前	
755	褐釉甕	SE 3	60	22	76	肥前	
756	青花鉢	V層	15.4	6.5	7.6	中国	
757	白磁壺	V層	—	—	—	中国	
758	青花碗	V層	—	5	—	中国	
759	青磁器台	V層	6	8.4	5	肥前?	
760	チャツ?	V層	5	3	2.4		
761	焼締壺	V層	16	—	—		
762	焼締瓶	V層	—	3.6	—		
763	青花小瓶	V層	1	1	4		
764	焼締急須	V層	—	—	—	中国	
765	染付碗	V層	8	3.5	5	染付碗	
766	黒釉壺	V層	—	—	—	ミャンマー	
767	焼締陶管	V層	6	—	—	肥前	
768	青磁印	V層	—	—	2	中国	
769	朱泥蓋	V層	8	—	4	中国	
770	綠釉合子	V層	5	4	2.8	中国	
771	焼締鉢	I層	—	—	—		
772	練混火入	I層	9	10	9.4		
773	綠釉皿	I層	13.5	4	4	内野山	
774	染付碗	SD1-I・II層	10	4	6	肥前	
775	染付碗	SD1-I・II層	11	—	6	肥前	
776	染付碗	SD1-I・II層	7.8	4.2	5.2	肥前	
777	染付碗	SD1-I・II層	10.4	4.2	5.6	肥前	
778	染付碗	SD1-I・II層	8.5	3.5	4.4	肥前	
779	染付碗	SD1-I・II層	9	3	4.5	肥前	
780	染付碗	SD1-I・II層	7	3	4.6	肥前	
781	染付小杯	SD1-I・II層	5	2.5	4	肥前	
782	染付小杯	SD1-I・II層	7	2	4	肥前	
783	染付小碗	SD1-I・II層	8	3.2	5	肥前	
784	染付小杯	SD1-I・II層	5	2.4	3.8	肥前	
785	染付碗	SD1-I・II層	8.4	3.8	5	肥前	
786	染付碗	SD1-I・II層	11	4.8	6	肥前	
787	染付蓋	SD1-I・II層	—	—	—	肥前	朱書き
788	染付皿	SD1-I・II層	15	9.4	3.6	肥前	
789	染付皿	SD1-I・II層	15	6.4	2.8	肥前	
790	青磁皿	SD1-I・II層	28	14	7	肥前	
791	染付壺	SD1-I・II層	—	5	—	肥前	
792	刷毛目	SD1-I・II層	9	5	4.4	肥前	
793	京焼風陶器	SD1-I・II層	9	4	5.6	肥前	
794	褐釉陶器小杯	SD1-I・II層	7	4.8	4.2	肥前	
795	京焼風陶器	SD1-I・II層	12	5	5.4	肥前	
796	刷毛目二彩鉢	SD1-I・II層	15	7.5	7.5	肥前	
797	京焼風陶器	SD1-I・II層	13	5	8.4	肥前	
798	焼締急須	SD1-I・II層	—	—	—	中国	
799	焼締壺	SD1-I・II層	—	—	—	ベトナム	
800	焼締急須	SD1-I・II層	—	6	—	中国	

第11表 出土陶磁器一覧表(8)

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
801	埴堀	SD1-I・II層	13	—	—		
802	褐釉すり鉢	SD1-I・II層	29	10	11	肥前	
803	焼締釉頸壺	SD1-I・II層	9	—	—	ペトナム	
804	刷毛目二彩鉢	SD1-I・II層	51	15	14.5	肥前	
805	刷毛目三彩鉢	SD1-I・II層	51	15	18	肥前	
806	染付碗	SD1-III層	11	4.4	5.8	肥前	
807	染付碗	SD1-III層	9	3.4	5	肥前	
808	染付碗	SD1-III層	10	4	5.2	肥前	
809	染付碗	SD1-III層	11	4.4	6	肥前	
810	染付碗	SD1-III層	9.8	4	5	肥前	
811	染付碗	SD1-III層	11	4	6.4	肥前	
812	染付碗	SD1-III層	11	4.4	6	肥前	
813	染付碗	SD1-III層	10	4	5.4	肥前	
814	染付碗	SD1-III層	10	3.8	5.6	肥前	
815	染付碗	SD1-III層	11	5	6.2	肥前	
816	染付碗	SD1-III層	12	4.6	6	肥前	
817	染付碗	SD1-III層	8	3.2	5	肥前	
818	染付碗	SD1-III層	11	4.6	6.8	肥前	
819	染付碗	SD1-III層	8	3	4.6	肥前	
820	染付碗	SD1-III層	8.4	3.8	4.6	肥前	
821	染付碗	SD1-III層	8	3.8	5	肥前	
822	染付杯	SD1-III層	7	3	4.6	肥前	
823	染付碗	SD1-III層	13.4	5	6.2	肥前	
824	染付碗	SD1-III層	14	5	7	肥前	
825	染付碗	SD1-III層	14	5.6	5	肥前	
826	染付鉢	SD1-III層	17	6.6	8.2	肥前	
827	染付杯	SD1-III層	8	3	4.6	肥前	
828	白磁小杯	SD1-III層	8.4	3.8	4.4	肥前	
829	染付杯	SD1-III層	7	3	3.2	肥前	
830	染付杯	SD1-III層	6.2	3	3.4	肥前	
831	染付小杯	SD1-III層	7	3	4.8	肥前	
832	染付小杯	SD1-III層	5	2	3.6	肥前	
833	染付小杯	SD1-III層	7.4	3.4	4.8	肥前	
834	染付小杯	SD1-III層	6	2.4	4	肥前	
835	染付小杯	SD1-III層	7	3	4.2	肥前	
836	白磁小杯	SD1-III層	7	3	5	肥前	
837	染付小杯	SD1-III層	6	2.5	3.6	肥前	
838	染付小杯	SD1-III層	6	2.8	3.4	肥前	
839	白磁小杯	SD1-III層	6.2	2.6	2.9	肥前	
840	白磁小杯	SD1-III層	6.5	2.6	4	肥前	
841	白磁小杯	SD1-III層	7	3	3.2	肥前	
842	染付皿	SD1-III層	19	12	3	肥前	
843	白磁皿	SD1-III層	13.5	4.6	3.5	肥前	
844	染付皿	SD1-III層	17	6.5	4	肥前	
845	染付皿	SD1-III層	17	6.2	4	肥前	
846	染付皿	SD1-III層	10	5.2	2.4	肥前	
847	染付皿	SD1-III層	13.4	8.2	2.4	肥前	
848	染付皿	SD1-III層	14	8	4	肥前	
849	染付皿	SD1-III層	15.6	5.2	4	肥前	
850	染付皿	SD1-III層	15	5.2	4.4	肥前	
851	染付皿	SD1-III層	10.6	5.4	2	肥前	
852	染付皿	SD1-III層	13	4.6	3.6	肥前	
853	染付皿	SD1-III層	12.6	4.8	3.2	肥前	
854	染付皿	SD1-III層	35	16.2	6.2	肥前	
855	染付皿	SD1-III層	10	6	3	肥前	
856	染付皿	SD1-III層	13.8	8	2.4	肥前	
857	白磁鉢	SD1-III層	14	8	4	肥前	
858	染付皿	SD1-III層	20.2	14	2.6	肥前	
859	青磁盤	SD1-III層	24.8	13.4	3.4	肥前	
860	白磁小皿	SD1-III層	7	3	2.2	肥前	
861	青磁皿	SD1-III層	14	4.2	3.4	肥前	
862	白磁紅皿	SD1-III層	7	4	2	肥前	
863	白磁紅皿	SD1-III層	7	3.8	2	肥前	
864	白磁小皿	SD1-III層	6.5	3	1.6	肥前	
865	青磁置物	SD1-III層	—	—	—	肥前	サザエ形 墨書き
866	染付角形合子	SD1-III層	—	—	2.2	肥前	
867	染付火入	SD1-III層	6	5.8	6.2	肥前	
868	染付蓋	SD1-III層	9	—	3.8	肥前	
869	鉄軸火入	SD1-III層	10	5.4	6.2	肥前	
870	染付仏飯具	SD1-III層	9.8	5	6.4	肥前	
871	白磁水注	SD1-III層	7	—	—	肥前	把手付ボット
872	染付器台	SD1-III層	9	8	6.2	肥前	
873	白磁壺	SD1-III層	3	4.8	8	肥前	
874	青磁花入	SD1-III層	5	3.4	8.4	肥前	
875	染付合子(蓋)	SD1-III層	8.5	—	2.2	肥前	
876	染付合子(身)	SD1-III層	8.8	4.4	3.4	肥前	
877	染付合子(蓋)	SD1-III層	7	—	1.8	肥前	
878	青磁火入	SD1-III層	8	6.8	4.6	肥前	
879	染付合子(蓋)	SD1-III層	3	—	1	肥前	
880	染付壺	SD1-III層	3	5	15.6	肥前	
881	染付壺	SD1-III層	—	6	—	肥前	
882	京焼風陶器碗	SD1-III層	12	5	8.3	肥前	
883	京焼風陶器碗	SD1-III層	10.4	4.2	7.4	肥前	
884	京焼風陶器碗	SD1-III層	9.2	4.8	6.2	肥前	
885	京焼風陶器碗	SD1-III層	9.8	4.2	6	肥前	
886	京焼風陶器碗	SD1-III層	11	4.8	7.6	肥前	
887	京焼風陶器碗	SD1-III層	9	5.4	6.6	肥前	
888	京焼風陶器碗	SD1-III層	9.2	4.2	5.8	肥前	
889	京焼風陶器碗	SD1-III層	8.9	4	5	肥前	
890	京焼風陶器碗	SD1-III層	10	4.2	6	肥前	
891	京焼風陶器碗	SD1-III層	9	3.5	5.6	肥前	
892	京焼風陶器碗	SD1-III層	12	4.5	5.8	肥前	
893	京焼風陶器碗	SD1-III層	12	4	5.8	肥前	
894	京焼風陶器碗	SD1-III層	9	3.4	5.8	肥前	
895	京焼風陶器碗	SD1-III層	9	4.4	5.2	肥前	
896	京焼風陶器碗	SD1-III層	9.4	4	5	肥前	
897	京焼風陶器碗	SD1-III層	9.2	3.6	5	肥前	
898	京焼風陶器碗	SD1-III層	8	4	5	肥前	
899	京焼風陶器碗	SD1-III層	12.4	5.4	6.2	肥前	
900	京焼風陶器碗	SD1-III層	13.5	6	4.5	肥前	

第12表 出土陶磁器一覧表⑨

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
901	京焼風陶器碗	SD 1 - III層	12.7	4	4.8	肥前	
902	陶器皿	SD 1 - III層	12.8	4	4	肥前	
903	京焼風陶器碗	SD 1 - III層	13.4	5	5	肥前	
904	刷毛目陶器皿	SD 1 - III層	11	4.2	3.4	現川	
905	刷毛目陶器碗	SD 1 - III層	-	4.4	-	現川	
906	京焼風陶器皿	SD 1 - III層	21	6	7	肥前	
907	灰釉陶器皿	SD 1 - III層	13	5	4	肥前	
908	灰釉陶器皿	SD 1 - III層	12.2	4.5	4	肥前	
909	灰釉陶器皿	SD 1 - III層	13	5	4	肥前	
910	灰釉陶器皿	SD 1 - III層	13.2	4.4	3.8	肥前	
911	灰釉陶器皿	SD 1 - III層	13.2	4	3.8	肥前	
912	灰釉陶器皿	SD 1 - III層	13.2	3.8	3.6	肥前	
913	綠釉陶器壺	SD 1 - III層	8	-	-	肥前	
914	白釉火入	SD 1 - III層	12.4	8	6.8	肥前	
915	鉄釉火入	SD 1 - III層	12	6	6.4	肥前	
916	刷毛目二彩鉢	SD 1 - III層	13	5.4	7	肥前	
917	褐釉すり鉢	SD 1 - III層	36	13	14.5	肥前	
918	褐釉花入	SD 1 - III層	7.5	8	17	肥前	
919	刷毛目褐釉鉢	SD 1 - III層	23	11	7.8	武雄系	
920	トチン	SD 1 - III層	10	8	12	肥前	
921	褐釉壺	SD 1 - III層	8	15	30	肥前	
922	刷毛目二彩鉢	SD 1 - III層	34	14	21	武雄系	
923	土師皿	SD 1 - III層	8.5	4	2		
924	土師皿	SD 1 - III層	8.5	4	2.5		
925	土師皿	SD 1 - III層	7	4.8	1.7		
926	褐釉壺	SD 1 - III層	32	16.5	43	肥前	
927	青花碗	SD 1 - III層	12	4	5	中国	
928	青花碗	SD 1 - III層	12	4.5	6	中国	
929	青花小杯	SD 1 - III層	8.4	3.6	4.4	中国	
930	青花皿	SD 1 - III層	11.2	5	3.8	中国	
931	青花皿	SD 1 - III層	15	6.2	2.2	中国	
932	青花皿	SD 1 - III層	10.4	6	2	中国	
933	青花皿	SD 1 - III層	13.8	8	3	中国	
934	鉄絵印花文碗	SD 1 - III層	15	8.5	4.8	ベトナム	
935	鉄絵印花文碗	SD 1 - III層	13.8	9	5.2	ベトナム	
936	鉄絵印花文碗	SD 1 - III層	14.4	8.2	4.8	ベトナム	
937	白磁壺	SD 1 - III層	6	6.2	14.4	中国	
938	焼締急須	SD 1 - III層	6	-	-	中国	
939	焼締急須	SD 1 - III層	-	-	-	中国	
940	白磁壺	SD 1 - III層	-	5.4	-	中国	
941	焼締四耳壺	SD 1 - III層	17	-	-	タイ	
942	焼締瓶	SD 1 - III層	9	-	-	ベトナム	
943	焼締壺	SD 1 - III層	-	-	-	ベトナム	
944	焰釉壺	SD 1 - III層	-	-	-		
945	青花碗	SD 1 - III層	14	5	6.4	中国	
946	青花皿	SD 1 - III層	11	4	3.4	中国	
947	呉須赤絵皿	SD 1 - III層	-	9	-	中国	
948	青花小皿	SD 1 - III層	8	5	1.8	中国	
949	青花皿	SD 1 - III層	-	13	-	中国	
950	焼締鉢	SD 1 - III層	-	-	-		
951	焼締杯	SD 1 - III層	-	-	-	東南アジア	
952	焼締壺	SD 1 - III層	-	-	-	備前	
953	焼締瓶	SD 1 - III層	12	-	-	ベトナム	
954	埴輪	SD 1 - III層	5	2	2.2		
955	石製煙管	SD 1 - III層	5.8	2	2.5		
956	土製台	SD 1 - III層	-	-	-		

第13表 出土陶磁器一覧表⑩

(2) ガラス製品

簪・笄片を中心に多くのガラス製品が出土した。奉行所で百数十点、岩原では九十点ほどが出土している。全体的に長崎市内で出土する、乳青色や乳白色を呈する中国製の簪がほとんどを占めていた。しかしその形態は様々である。棒状の本体上部に装飾が付いているものが多い。扁平な部分に型押しで作り出された文様を貼付けているものも見られる(21・22)。その他、装飾はないが、頭部が星形になっているものもある(7・8)。また、同じ中国製と思われる指輪が出土している。指輪は半分欠損している。大半は破片で、形態が不明であった。また、風化(銀化)によりガラス本来の色が失われているものもあった。今回は、神戸市立博物館の岡泰正氏に一部、比重測定をお願いした。

ガラス製の簪は折れやすいため、本来の長さに近い状態で出土することが少ないが、破片としては長崎市内で数多く出土している。簪・笄は当時の女性の髪結いに用いられる代表的なものであり、ガラス製のものは当然長崎でも作られていたと推測されるが、現時点では、出島和蘭商館跡で出土している淡紫色のものが長崎製とされているのみである。長崎では中国清朝ガラス製と考えられるもののがほとんどである。簪の素材としては金属や骨製、鼈甲といった様々な材質がある。地元ガラス製品の需要は低かったとも考えられる。

その他中国製のものとして、黄褐色を呈する玉(88)と中空の壺型の製品(89)と緑色の花形の製品(90)がある。90は南有馬町原城跡において類似資料が出土しており、キリスト教遺物のコンタとして報告されている。当地は奉行所創建以前、山のサンタ・マリア教会が周辺に存在したとされており、同じくキリスト教遺物とされる花十字瓦や、メダイも出土している。このことから、今回出土した遺物はコンタである可能性がある。一方、中国元代の墳墓から類似した資料が出土しており、装身具と報告されていることから、信仰のために転用され使用されていた可能性はあるとしても、キリスト教遺物と特定することが困難な資料である。88・89もロザリオの玉や十字架の一部の可能性を残すが、今後の検討が必要であろう。89は耳管とも考えられる。

奉行所SD1から多量のヨーロッパ製のボトルが出土した。大半はワインボトルと思われるが、破片が多い。底部個体数は23点であった。口縁部は、円筒状の先端部にガラスを巻き付け形成している。13点出土している。ボトル破片は、遺跡の至る所で出土しているが、形状が推測できるものはほとんどなかった。ボトルは底部が大きく、胴部が頸部に近づくにつれ窄まる球形のものと、底部から垂直に立ち上がり、肩部が明瞭で角形のものがある。また、底部径が小さく、細長い形のものも出土した。その他破片ではあったが、ソーダボトル、ジンボトルが出土している。また、オイルやコロンを入れていたと思われる小型のボトル片(114・115)も出土している。

その他ヨーロッパ製のものは、岩原の5層から脚付ガラス杯の破片が出土している。ドイツかネーデルラント製のレーマー杯(110)やフリューゲルグラス(109)が出土している。5層は1710年代が下限と考えられる。ボトル類は長崎市内の遺跡からも一定量出土するが、レーマー杯やフリューゲルグラスなどは少ない。

和製ガラスは、型吹きガラスとポップペンなどが出土した。日本におけるガラス細工は弥生時代から存在するが、近世において海外から技術を取り入れて器などを製作したのは、長崎が始まりとされている。技術の伝播や製法などについては、不明な点が多い。

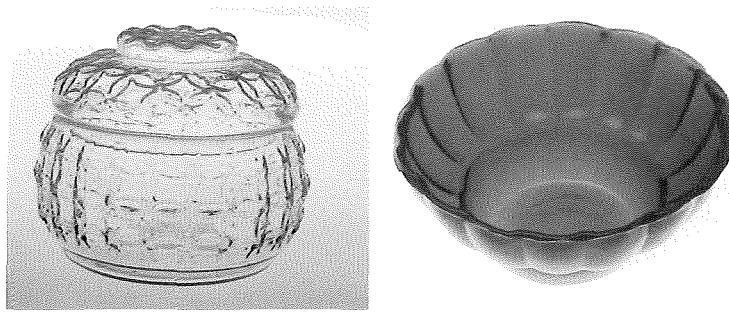
型吹き菊形ガラス盃は、一つの遺跡からの出土量はわずかながら、様々なところで出土しており、長崎で製作されたびいどろの代表的なものであろう。ポップペンについての詳しい見解は岡氏の所見を

参考にされたい。七宝つなぎ文蓋物は風化が激しく元来の生地が見えなくなっているが、断面観察から若干、薄緑色を呈していることが窺える。びいどろ史料庫に伝世品が所蔵されており、岡氏に確認したところ比重値も同じで、同じ型で吹かれた可能性があるとの指摘を受けた。その他、鉛ガラス製の脚付ガラス杯の一部と思われる製品が出土した(101・102)。ヨーロッパ製の脚付ガラス杯を日本で模倣し、製作されたと考えられる。

今のところ年代を示すことのできる、現存するびいどろは18世紀の前半とされている。しかし、17世紀中頃、すでに長崎においてびいどろが作られていたことが、文献史料から判明している。一方で、びいどろは生産地の特定が難しいため、現存する資料であっても時代と生産地がわからないものが多い。今回の調査で18世紀初頭を下限とする、長崎びいどろが出土したことは、和製のルーツに迫る大きな成果といえる。(柚木)

【引用参考文献】

- 岡 泰正著 1996『びいどろ・ぎやまん図譜』淡光社
 1996『原城跡』長崎県南有馬町教育委員会
 中山公男監修 2000『[カラー版]世界ガラス工芸史』美術出版社
 關善明 2001『中國古代玻璃』香港中文大學館
 2002『国指定史跡 出島和蘭商館跡』長崎市教育委員会



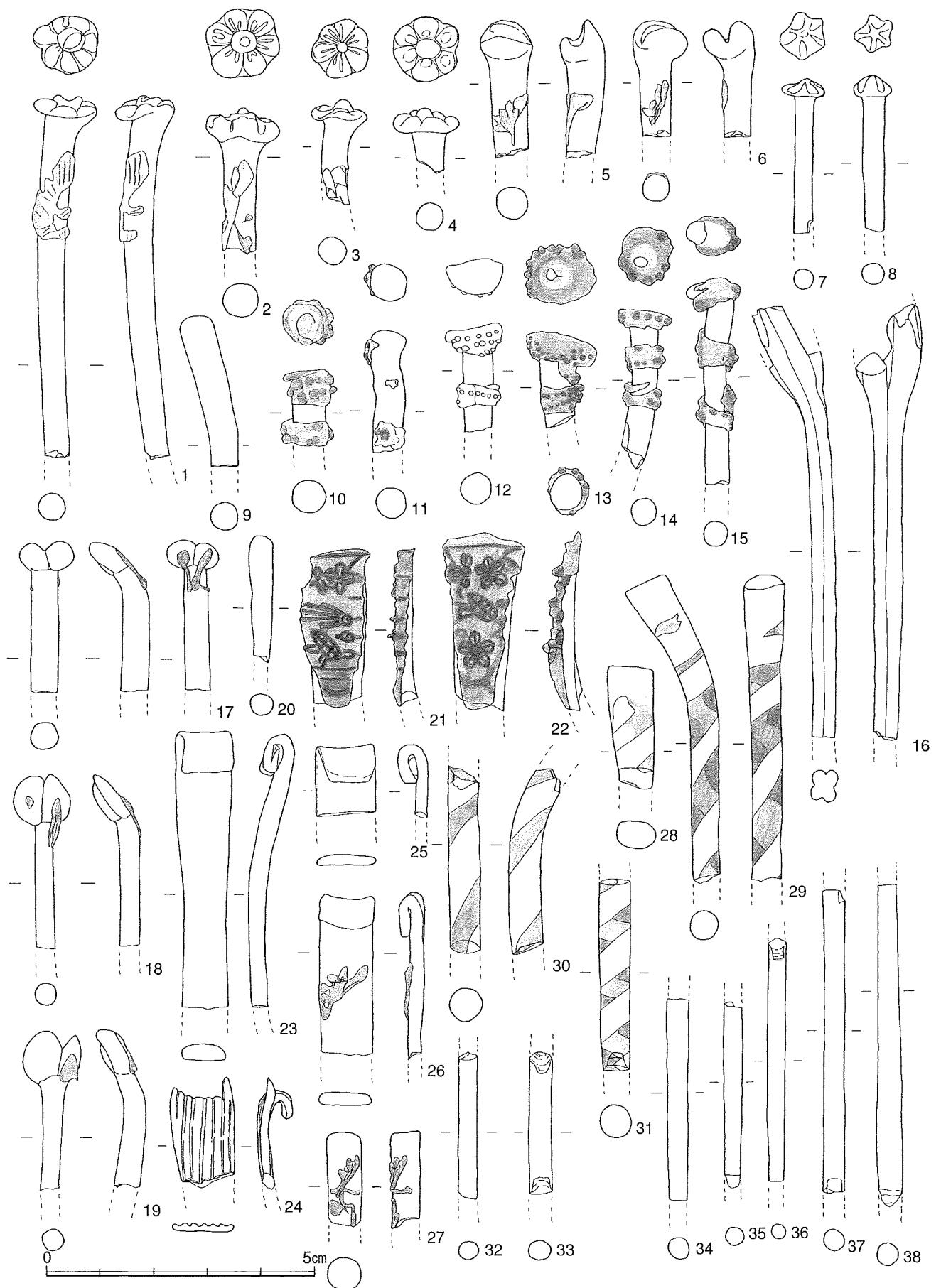
びいどろ参考資料
 (左:びいどろ史料庫蔵 右:神戸市立博物館蔵)

番号	種別	出土遺跡・遺構・層位	法量(cm)…(高さ)			比重	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
1	簪カ笄	(岩)D-9 4層	6.8		1.2		乳白色
2	簪カ笄	(岩)B-10 搾乱	2.8		1.35		乳青色
3	簪カ笄	(岩)E-7 4層	2.0		1.1		乳青色
4	簪カ笄	(岩)G-7 5c層	1.2		1.2	2.4	乳白色
5	簪カ笄	(奉)I-21 3層	2.6	1.0	0.85		乳青色
6	簪カ笄	(奉)SK75	2.2	1.0	0.95		乳青色
7	簪カ笄	(岩)5e層	2.9		0.8	3.6	黄褐色(半透明)
8	簪カ笄	(岩)5d層	2.9		0.7	3.9	黄褐色(半透明)
9	簪カ笄	(奉)SX2	2.9		0.5		乳青色
10	簪カ笄	(奉)N-18 3層	2.5		1.0		乳青色
11	簪カ笄	(奉)L-19 3層	2.3		0.85		乳青色
12	簪カ笄	(岩)4層	2.1		1.1		乳青色
13	簪カ笄	(岩)D-9 4層	1.8		1.3		乳白色
14	簪カ笄	(岩)4層	3.0		1.1		乳青色
15	簪カ笄	(岩)D-9 4層	3.9		1.0		乳白色
16	簪カ笄	(奉)SK6	8.2	1.25	1.0		乳青色
17	簪カ笄	(奉)SX7	3.8	1.0	1.1		乳青色(水色)
18	簪カ笄	(岩)D-9 4層	3.3	1.1	0.5		乳青色
19	簪カ笄	(岩)F-4 4層	3.0	1.1	0.5		乳青色
20	簪カ笄	(奉)L-19 3層	2.4		0.45		乳青色
21	簪カ笄	(奉)D-11 4b層	3.0	1.3	0.5		乳青色
22	簪カ笄	(奉)SK6	3.3	1.5	0.6		乳青色
23	簪カ笄	(岩)D-9 4層	5.2	1.1	0.65		白色、少々風化する
24	簪カ笄	(奉)I-21 4層	2.1	1.2	0.65		水色(半透明)
25	簪カ笄	(奉)P-17 4層上	1.4	1.1	0.55		乳青色
26	簪カ笄	(岩)SD7	3.1	1.0	0.5		乳青色
27	簪カ笄	(岩)G-7 4層	1.8		0.65		乳青色
28	簪カ笄	(奉)SD14	2.3		0.85		緑色(半透明)+乳白色
29	簪カ笄	(奉)K-18 3層	5.8		0.6		水色(半透明)+乳白色
30	簪カ笄	(奉)SD14	3.5		0.6		水色+乳白色
31	簪カ笄	(岩)F-6 4層	3.6		0.6		水色(半透明)+乳白色
32	簪カ笄	(岩)G-7 5c層	2.8		0.35		乳青色
33	簪カ笄	(岩)5e層	2.8		0.4	3.6	黄褐色(半透明)
34	簪カ笄	(奉)SD14	3.8		0.4		乳白色
35	簪カ笄	(奉)石垣5東側 5層	3.6		0.35		乳青色
36	簪カ笄	(奉)1層	4.55		0.35		乳青色
37	簪カ笄	(奉)SX7	5.7		0.4		乳青色
38	簪カ笄	(奉)P-17 4層上	6.0		0.4		乳青色
39	簪カ笄	(奉)正面階段直上	7.0		0.85		乳白色
40	簪カ笄	(奉)SK9	7.8		0.55		乳青色
41	簪カ笄	(岩)D-9 4層	4.7		0.5		乳青色
42	簪カ笄	(奉)D-11 4c層	3.8		0.4		水色
43	簪カ笄	(奉)表採	3.8		0.4		水色
44	簪カ笄	(岩)4層	4.2		0.45		乳青色

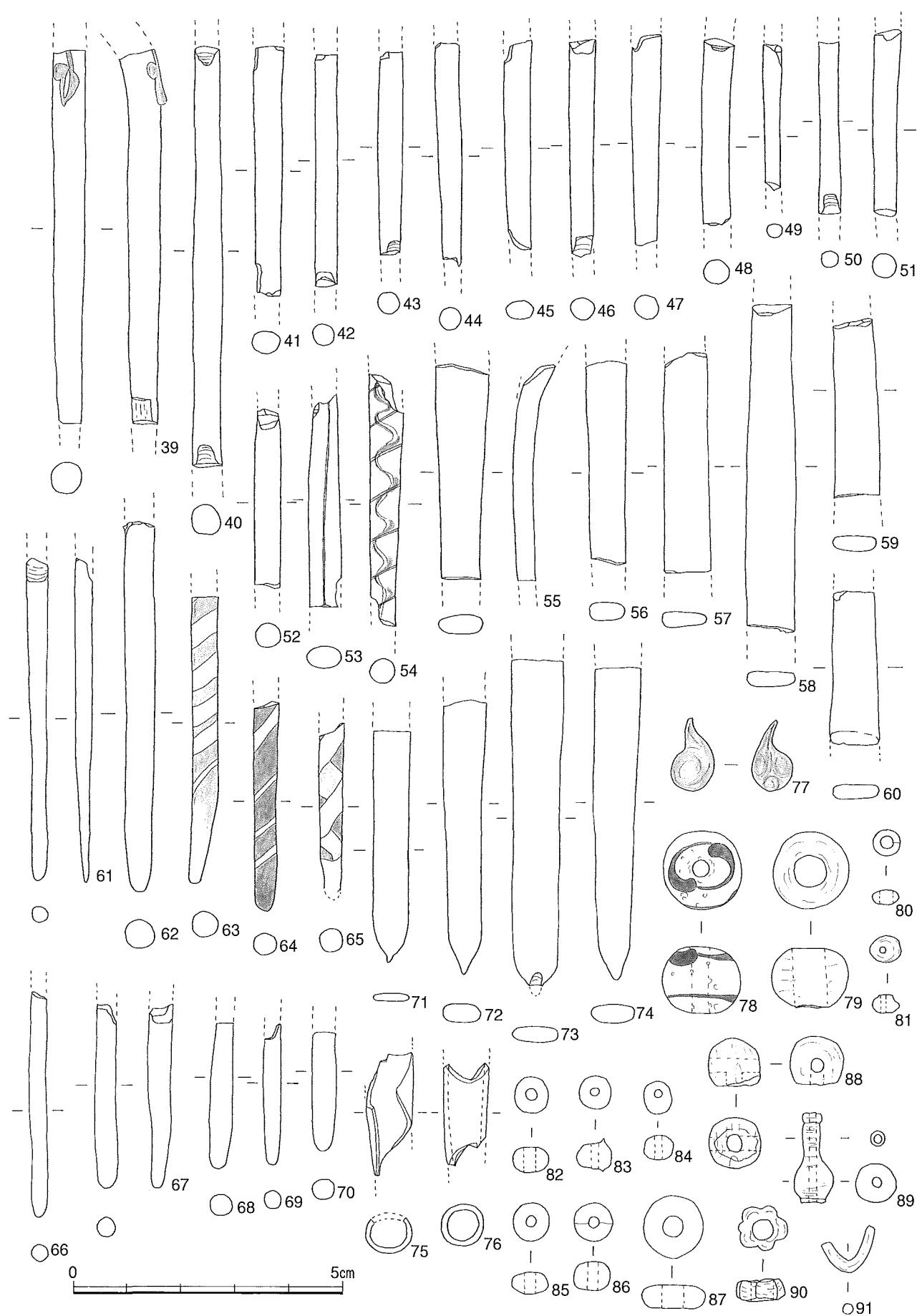
第14表 ガラス製品観察表①

番号	種別	出土遺跡・遺構・層位	法量(cm)…(高さ)			比重	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
45	簪カ笄	(岩) 4層	3.9		0.5		乳青灰色
46	簪カ笄	(岩) 4層	4.1		0.5		水色
47	簪カ笄	(岩) 4層	4.0		0.55		乳白色
48	簪カ笄	(岩) 4層	3.5		0.55		乳白色
49	簪カ笄	(奉) F-12 搾乱	2.8		0.35		乳青色
50	簪カ笄	(奉) SD14	3.2		0.35		乳青色
51	簪カ笄	(岩) B-6 4層	3.5		0.45		乳白色
52	簪カ笄	(奉) D-10 4b層	3.4		0.45		乳青色
53	簪カ笄	(奉) K-18 3層	4.0	0.6	0.4		乳青色
54	簪カ笄	(奉) E-12	4.7		0.6		透明に青色と白色の螺旋状の筋
55	簪カ笄	(奉) 表土	4.0	1.0	0.8		白色、少々風化する
56	簪カ笄	(奉) SE1	3.8	0.75	0.3		乳白色
57	簪カ笄	(岩) D-9 4層	4.1	0.9	0.3		乳青色
58	簪カ笄	(岩) 4層	6.1	0.95	0.3		乳青色
59	簪カ笄	(奉) D-11 4b層	3.3	0.9	0.3		乳青色
60	簪カ笄	(岩) D-9 5c層	2.8	0.95	0.25		白色(半透明)、少々風化する
61	簪カ笄	(岩) 4層	6.0		0.3		白色(半透明)、少々風化する
62	簪カ笄	(奉) 1層	6.85		0.55		乳白色
63	簪カ笄	(岩) SX6 石組裏込	5.3		0.45		水色+白色(半透明)
64	簪カ笄	(岩) SD7	3.9		0.5		水色+乳白色
65	簪カ笄	(岩) D-9 4層	3.1		0.45		水色(半透明)+乳白色(半透明)
66	簪カ笄	(岩) 5層	4.2		0.3		青紫色、少々風化する
67	簪カ笄	(奉) D-11 4b層	3.4		0.4		水色
68	簪カ笄	(岩) 4層	2.7		0.4		乳青色
69	簪カ笄	(岩) 4層	2.7		0.3		水色
70	簪カ笄	(岩) 4層	2.2		0.45		乳白色
71	簪カ笄	(岩) SD7	4.3	0.7	0.15		白色、少々風化する
72	簪カ笄	(奉) SX2	5.1	0.8	0.35		乳青色
73	簪カ笄	(奉) SX2	6.1	1.0	0.3	2.5	緑色(半透明)
74	簪カ笄	(奉) 表土	5.8	1.0	0.35		乳青色
75	用途不明	(岩) 5b層	2.2	0.85	0.1	2.7	緑色(半透明)、中空で風化が激しい
76	用途不明	(岩) 5e層	1.9	0.8	0.1	3.3	紺色(半透明)、中空で風化が激しい
77	用途不明	(奉) SB5 上	1.35	0.8			緑色(半透明)
78	玉	(奉) 石垣9前 5d層	1.45		1.25		晉の玉カ、風化が激しい
79	玉	(奉) E-12 3層	1.45		1.1		晉の玉カ、風化が激しい
80	玉	(奉) H-9 トレンチ6層	0.5		0.3		緑色(半透明)
81	玉	(奉) P-17 5a層	0.55		0.35		風化が激しい
82	玉	(奉) D-11 4b層	0.65		0.45		風化が激しい
83	玉	(岩) 5d層	0.6		0.6		風化が激しい
84	玉	(岩) 5e層	0.6		0.45		白色(半透明)、風化が激しい
85	玉	(岩) D-9 5d層	0.7		0.4		白色、風化が激しい
86	玉	(岩) 5d層	0.7		0.55		白色、風化が激しい
87	玉	(炉) 1層	1.15		0.4		緑色(半透明)、少々風化する
88	玉	(岩) 5e層	0.95			3.7	黄褐色(半透明)、T字型に3点穴があく
89	装身具	(岩) 5b層	1.65		0.75	3.7	黄褐色(半透明)
90	装身具	(岩) 5e層	0.95		0.4	3.3	緑色(半透明)、風化が激しい
91	用途不明	(岩) 5e層	0.85		0.2		緑色(半透明)、風化が激しい
92	型吹き菊型ガラス盃	(岩) 5e層	3.3	3.6	0.15	3.5	淡紫色
93	型吹き菊型ガラス盃	(奉) 石垣5西側 4c層	3.4	2.45	0.15		黄色を呈す
94	型吹き菊型ガラス盃	(岩) 5e層	1.2(高)	4.2	0.2	3.5	風化が激しい、消色を施す
95	型吹き菊型ガラス盃	(奉) P-17 5a層	2.35(高)		0.2	3.7	口径5.3cm(復元)風化が激しく薄緑色を呈す
96	型吹き菊型ガラス盃	(炉) SD1 3層	1.05(高)		0.25	3.7	濃紫色を呈す
97	型吹き菊型ガラス盃	(岩) 5e層	2.8	2.2	1.5		風化のためか半透明を呈す
98	型吹きガラス鉢カ	(岩) C-9 5g層	2.75(高)	3.15	0.4	3.56	風化が激しい、削れ口が薄緑色を呈す
99	ボッペン	(炉) SD1 3層	9.2	5.4		3.56	口径0.85cm
100	型吹き七宝つなぎ文蓋物	(奉) SD1 上層	(12.65)		6.15(高)	3.64	口径10.6cm(復元)、風化が激しく薄緑色を呈す
101	脚付ガラス杯カ	(奉) SK9	5.3	2.4	0.75	3.58	フット部分カ
102	脚付ガラス杯カ	(岩) 5層	5.0(高)	4.05		3.59	
103	指輪	(岩) SD7	2.35	0.75	0.25		乳青色
104	指輪	(奉) D-11 4c層	2.25	0.45	0.25		青色(半透明)
105	用途不明	(炉) SD1 3層	1.35(高)	2.5	0.25	2.6	グラスの口縁部カ
106	板ガラス	(炉) SD1 3層	4.75		0.15		
107	脚付ガラス杯	(岩) 5d層	1.65(高)	4.7			フット部分
108	脚付ガラス杯	(奉) J-10 表土	2.6(高)	5.3			フット部分
109	脚付ガラス杯	(岩) D-9 5d層	1.9		0.75		青色環付ツイストシステム片
110	レーマー杯	(岩) D-9 5d層	2.6	2.45	0.65		システム部分
111	ボトル(口縁部)	(炉) SD1 3層	2.15(高)		0.35		口径4.65cm(復元)
112	ボトル	(岩) G-7 5c層	4.7(高)	4.1			口径2.4cm
113	ボトル(口縁部)	(奉) 表土					
114	ボトル(口縁部)	(岩) 5e層	2.95(高)	2.0			口径1.7cm
115	ボトル(底部)	(岩) B-10 5f層	1.2(高)	3.3			
116	ボトル	(奉) SD1	9.95	6.45	0.5		
117	ボトル	(奉) SD1	9.85	7.2	0.8		
118	ボトル	(奉) SD1 上層	11.3	7.4	0.8		ワインボトル
119	ボトル	(奉) SD1 下層	11.0	11.0	0.75		ワインボトル
120	ボトル	(奉) SD1 下層	10.95	12.2	0.65		ワインボトル
121	ボトル	(奉) SD1 上層	5.5(高)	12.8	0.4		ワインボトル
122	ボトル	(奉) SD1 上層	6.5(高)	12.3	0.55		ワインボトル
123	ボトル	(岩) SX8 上層	9.6(高)	13.7	0.55		ワインボトル
124	ボトル	(奉) SD1 下層	8.8(高)	14.2	0.4		ワインボトル
125	ボトル	(奉) SD1 上層	4.0(高)	13.4	1.0		ワインボトル
126	ボトル	(奉) SK75	4.0(高)	14.1	0.8		ワインボトル
127	ボトル	(奉) SD1 下層	4.5(高)	14.8	1.0		ワインボトル
128	ボトル	(奉) SD1 下層	4.5(高)	14.1	0.95		ワインボトル
129	ボトル	(岩) SD1	11.0	6.8	0.8		ソーダボトル
130	ボトル	(奉) 表土	5.85	5.15	1.6		ソーダボトル
131	ボトル	(奉) J-20 表土	4.3(高)	7.0	2.3		
132	ボトル	(奉) SD1 中層	8.3(高)	12.0	0.85		
133	ボトル	(奉) SD1 上層	8.3	9.0	10.05		
134	ボトル	(奉) SE1	11.55	10.1	0.8		
135	ボトル	(奉) SD1 中層	4.85	8.85	0.85		
136	ボトル	(奉) SD1 上層	7.8(高)	11.6	0.5		
137	ボトル	(奉) SD9-L-19 4層	17.2	10.8	0.95		ジンボトル
138	ボトル	(岩) 5e層	17.2	10.65	0.65		ジンボトル

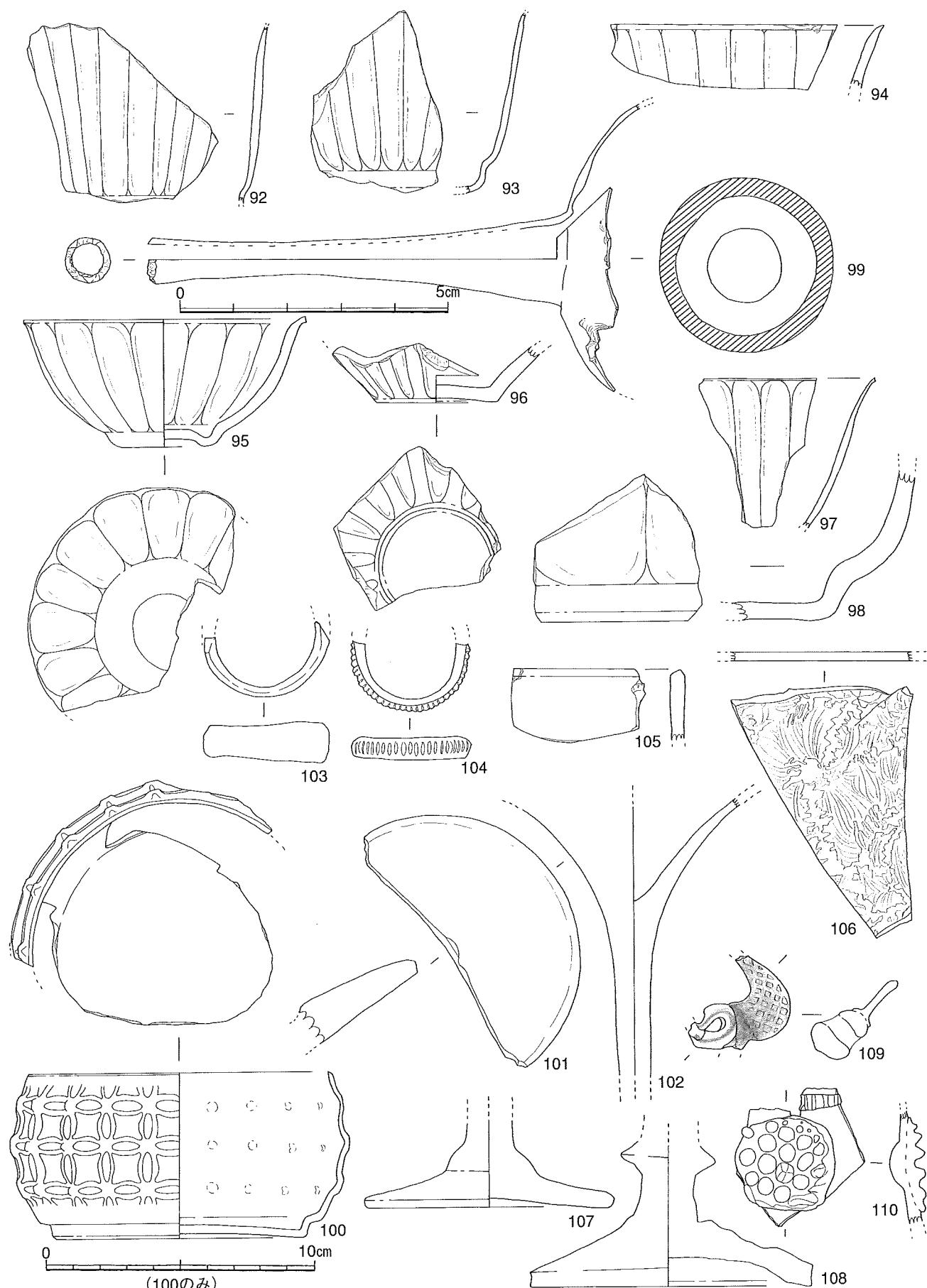
第15表 ガラス製品観察表②



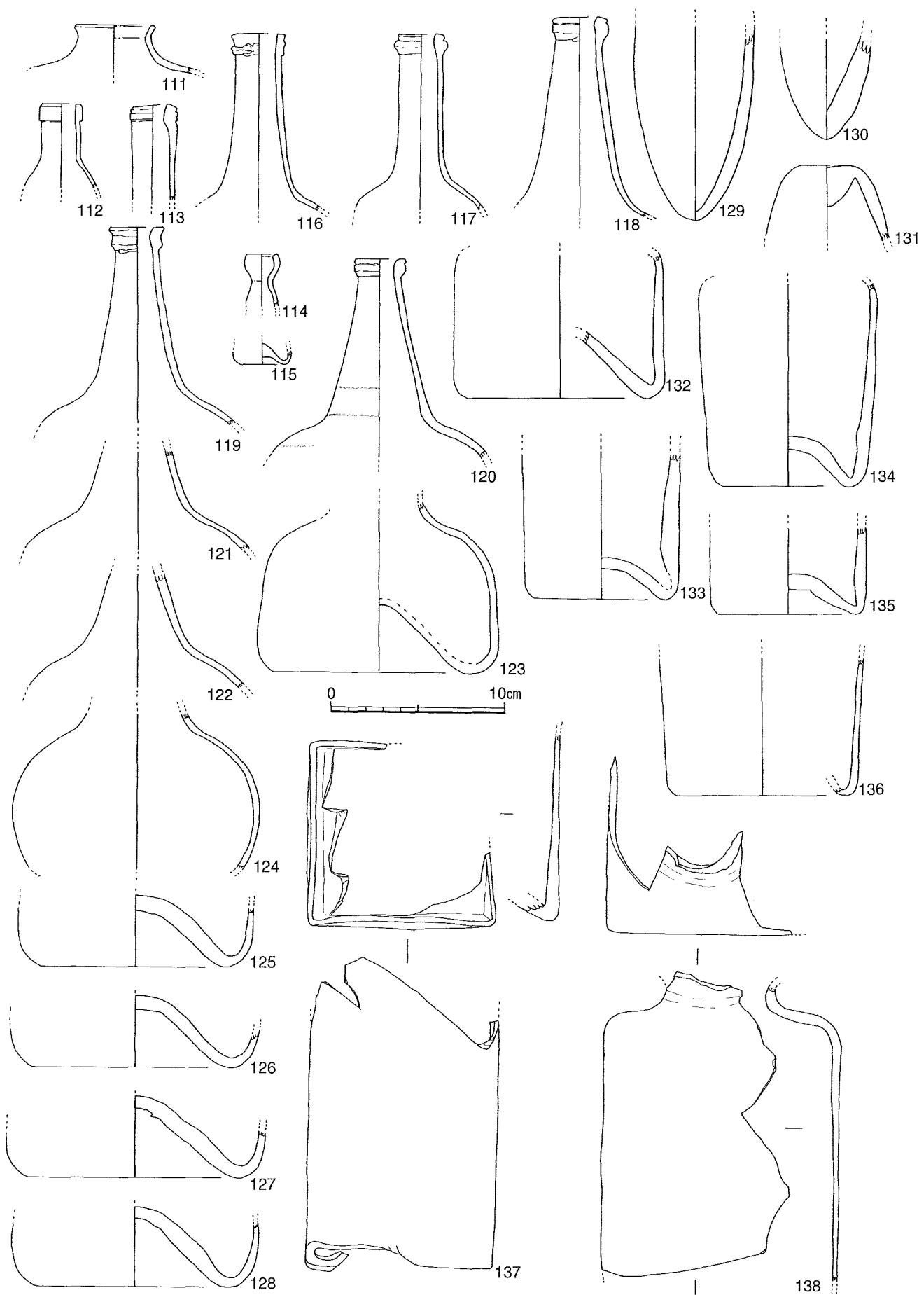
第72図 ガラス製品① (1/1)



第73図 ガラス製品② (1/1)



第74図 ガラス製品③ (1/1・1/2)



第75図 ガラス製品④ (1 / 3)

炉粕町出土のポッペンについて

岡 泰正（神戸市立博物館学芸員）

2004年12月1日に炉粕町S D 1出土、岩原目付屋敷跡5層出土のガラス資料の一部を検討した。その中の一点に胴部の大半が欠失しているが、驚くほど保存状態のよいガラス破片があった。ガラスパイプの先端にガラス素地を巻き取り、パイプにブロウ（息）を入れ、胴部を鳳船のようにふくらませて仕上げたものと推測された。いわゆる宙吹きによる成形、素地の色から見て江戸時代のびいどろであることは明らかだった。

はじめは小瓶の首部分かと疑ったが、瓶であるとすると、振り出さないと液体が出ないため、器形などを検討した結果、やはりポッペンだろうと判断した。

2004年12月4日に比重測定を行った。ガラス器の比重を測定することで、鉛ガラス、ソーダ石灰ガラス、水晶などの材質を識別できる。それだけでなく、江戸時代から明治時代前期の日本製ガラスのほとんどは、鉛ガラスであることから、素地中の鉛量を比較し、時代様式とあわせて識別することによって、製作年代もある程度特定することができる。ポッペンと思われるガラス器の比重値は、3.5₆であった。素地中の鉄分が発色して薄緑色を帯び、典型的な江戸時代のびいどろの素地。比重値の基準から検討すると、18世紀前半期の数値を示した。

長崎県教育庁学芸文化課埋蔵文化財班・川口洋平氏によると、このガラス器が出土した炉粕町S D 1の溝は、長崎奉行所の1717年の大改修の際に埋められ、1718年には完全に機能が失われていたという。このことから、ポッペンであろうと推定されるこのガラス器の下限は享保2年（1717）、上限は奉行所が創建された延宝元年（1673）と想定できる。ただしポッペンはおもに子どもが用いる玩具であり、安価であり、薄い器壁が運動してこわれやすいものでもあったから、気軽に使用されて廃棄されたと思われる。そのため使用期間も数年程度と考えるのが自然である。私は製作時期をいちおう、幅を持たせて1700～1718年と特定した。現在のところ、年代のわかる和製の吹きガラスの最も古い作例は、びいどろ史料庫所蔵の正徳4年（1714）の箱書をもつ淡青色のガラス四段重である。使用年代を想定すればポッペンの製作は段重より早い可能性がある。ということは、私の知る限り、このポッペンは年代の絞りこめる日本製ガラス資料で、吹きガラスに限って言えば、最古級の出土例となる。

また、その当時の日本で、遠方のガラス製品を、わざわざ長崎まで運んだとは思えず、様式から見て中国製の可能性は低い。私は日本の吹きガラスの起源は長崎と考えており、絞りこめる年代から考えて、このポッペンは長崎製と判断される。今のところ、長崎びいどろの最古級の作例と言ってよいとにかく、保存状態がすばらしい。このポッペンの出土は、18世紀初頭のびいどろ素地のつややかな美しさを今日に伝える貴重な発見と言えるのである。

びいどろの語源は、ポルトガル語の Vidro である。江戸時代、延宝4年（1676）には、長崎で「日本物びいどろ」という呼び方があり、中国系の技術を取り入れ、長崎でびいどろが造られていた。

ポッペンはポッピン、ポンピン、ポコンポコン、ポッピン、ポヒンポヒン、ポベン、などと様々に呼ばれ、地域、時代によって呼称が異なる。要するにその音からの呼称。『日本国語大辞典』（小学館、1975年）の「ポピン」の項に、江戸時代の用例として、ポピン、あるいはポヒンという例が挙げられている。

今では危険防止のため、吹いて音を出すものに統一されているようだが、少し前までは、吸うタイ

プも存在した。ほんの少し息を吸い、ガラスの薄い底の器壁を内側にへこませ、息を抜くと壁が元に戻る。吹くタイプはその逆になるのである。その時にチャッポンというやや金属的な響きがする。それだけの玩具だが、薄く透明なガラスが膜のように微妙に動くことの不思議さと、意外に大きく響く音の面白さから新奇に思われたらしく、安価なガラスの玩具として、遅くとも18世紀後期には上方、江戸にも普及した。

もとは中国が起源である。明代末期の崇禎8年（1635）刊『帝京景物略』卷二にその原型と思われるガラス製玩具の記述がある。かなり後代、清代の例だが、『北京民間風俗百図』（書目文献出版社、1982年）に「玻璃喇叭売り」の図が見られる。この図の説明では、ガラス屑を集めて溶かし、これで玻璃喇叭を造る、と記されている。内田道夫図説『北京風俗図譜』（平凡社、1986年）には、1920年代（中華民国14～15年・大正14～15年）の中国の子どもの遊びとして、玻璃喇叭の図が採録され、これを「吹く」ことは肺を丈夫にする、と解説されている。絵で見ると、かなり筒の長い大ぶりなもので、茶色のガラスによる瓢箪形。今日知られるポップンの形だけでなく、こうした瓢箪形が、中国に存在していたことがわかる。

明末・清朝期の中国からもたらされたポップンの形状を模倣して、遅くとも1670年代の長崎では、すでにこの玩具が造られていたかと想像される。出はじめの頃は、中国起源の玩具として、エキゾチックで珍奇な商品だったのだろう。これが、18世紀中葉以降、大坂、京都、江戸の地へとびいどろ製法の伝播とともに普及し、とりたてて長崎の特産品ではなくなっていったようである。

ことに喜多川歌麿が描いた大判錦絵「婦人相学十躰　ポッピンを吹く娘」（東京国立博物館他）は有名で、これは寛政3～4年（1791～92年）頃の版行。歌麿がえがくポッピンは、江戸の町娘のあどけなさと、あでやかさを引き立てるアイテムとなっている。この図を昔は「ビードロを吹く娘」と呼んでおり、娘が「吹いている」玩具が、ビードロと一般に認識され、ビードロすなわちポッピンと考えられるようになった。ちなみに歌麿がえがいた娘のポッピンは、江戸製だろう。ただ、錦絵を観察するとポッピンのパイプ状のところが今のものより短く、風船状にふくらむ胴部に続く部分が広がっているように見える。胴部にいたり風船状の先端が平たくなっている。これを見て、出土したガラス器を見ると、一部であるとは言え、そっくりの形状を示していることがわかる。

日本における江戸時代に製作されたポップンの出土は、京都市で報告されており、初めてではない。しかし、この京都の出土例は、18世紀後半から19世紀中頃の製作と推定されている（『平安京左京北辺四坊一第2分冊（公家町）一』235頁　京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第22冊 2004年）。18世紀初頭まで製作期がさかのぼる、加えて、長崎びいどろと特定できるポップンの出土例は初めてである。パイプと胴の接合部の保存状態もよく、残存部の曲線から、ある程度の形状も推測できる。

まず、ガラスパイプー共竿の造りかた。吹き竿に下玉ともさわを取って少し冷まし、この玉を再び坩埚しただまに入れてガラス素地を巻き取る。吹き筒に少しプロウを入れ、下向きにすると熔けた玉はイチジク形になる。もう一方で、別の工匠が吹き竿に少量のガラス素地を巻き取り、この素地を先ほどの熱いイチジク形の先に熔着し、ふたりが息を合わせて綱引きのように横に引く。まだやわらかいガラス素地が、長く延びてパイプ状になって冷え固まる。これを切ると共竿が出来る。素地が均一に伸びるので、徐冷の必要がない。

その共竿の先にガラス素地を巻き取ってプロウを入れてふくらませ、キリをもむように共竿を回転させながら底を薄くし、板などに当てて先を平たく成形したものと推測される。こうして長いパイプ

の先に底の平たい風船がくつついでいる状態のものが出来る。ここからの製法はあくまで仮説である。冷却後、風船状の素地とパイプがつながっているあたりを、窯から上がる炎であぶって熔かし、軟化させ、引っ張ったものと推定される。そのためにラッパ状の形状となったのである。ここで余分なガラスパイプを折る。出土したポッペンの先端を観察すると、折り取った先で怪我をしないように、さらに吹き口先端を鉄で細かく切って仕上げているように見える。現在の製品のように吹き口の先端をあぶってはいない。これも古様を感じさせる仕上げである。出土したポッペンに見られる胴部と頸部との継ぎ目が、太めの共竿で素地を巻き取った痕跡である。太いパイプをわざわざ細くしているのである。どうしてこんな手間のかかる製法をとっているのだろうか。それは、共竿の太い方が素地の付がよく、何より強度的にもすぐれ、耐久性に富むためと思われる。

素地は、純良で、断面は薄緑色を呈し、継ぎ目から胴にかけて厚い器胎を示している。これが先に行くにしたがって薄くなっていたのだろうが、現在、市販されているソーダ石灰ガラスのポッペン（ほとんどが外国製と推定される）に比べて、格段に器胎が厚いのである。高鉛ガラスであり、素地の質感、透明感はガラス工芸としての美しさをたたえている。大部分が欠失しているにもかかわらず品格があり、18世紀初頭の長崎びいどろの質の高さを推測させる。器面各所に経年変化による虹彩（ラスター）が認められる。

17世紀後期の長崎では、吹きガラスによるびいどろの食器、花器などのうつわ類、玉、かんざしなどが造られていたと推定される。ポッペンと同じく炉粕町から出土した型吹き紫色ガラス盃の破片、岩原目付屋敷出土の型吹きガラス鉢、および紫色菊形ガラス盃の破片などが、1673～1718年に製作年代が絞り込める最古級の和製吹きガラス、長崎びいどろの重要な遺例である。うつわ類だけでなく、こうした吹きガラスの特性を生かした、中国起源の玩具一ポッペンが造られていたことが出土作例から実証されたことは、日本のガラス工芸史上、特筆すべき事項である。上質のうつわに比べ、こわれやすく、残りにくいガラスの玩具の実像がここに明らかになったことも貴重である。

何より、長崎びいどろの創製は、不明なことが多く、このたびの発見は、17世紀後期から18世紀初頭にかけて、空白であった長崎びいどろの製造の歴史に新たな資料を呈示したと言ってよい。

現在、おみやげ品として、長崎の各所で長崎びいどろの代表としてポッペンが売られている。出土したポッペンは、その確実なルーツなのである。しかも品格があり、工芸的にもすぐれ、年代の保証された鉛ガラスの作例として、具体的な形として私たちの前にあらわれた。私の知る限り、日本最古のポッペンであり、長崎びいどろの初期の基準作例として、発見の意義は極めて大きい。

奉行所の誰が使ったものか、そのあたりの空想は各自でしていただければと思う。子どもだけでなく、歌麿の錦絵のように若い女性が口をつけたかも知れない。

大坂、江戸に普及する以前の長崎製のポッペンは、やや高級で、目新しい長崎の土産品であったかも知れないが、いずれにしても、子どもが使う玩具であったことは確実だろう。そのような日常的なものほど残りにくく、具体的な形状がわかりにくいものであることを、あらためて確認しておきたい。

こわれやすいポッペンをていねいに発掘された職員の方々の仕事に敬意を表する。くり返しになるが、発掘されたポッペンの保存状態のよさは、どうだろう。鉛を多く含む、鉄分によって薄緑色を帶びた、ねっとりとした質感の器面は、300年の眠りから醒め、再び長崎の空の光を映すことになったのである。

(3) 木製品

炉柏町遺跡 S D 1 を中心に多量の木製品が出土した。多くは建築部材で、加工されていても用途がわからないものが多い反面、様々な種類の当時の人々の生活が伺えるものが出土した。炉柏 S D 1 から出土した木製品は大変保存状態も良好であった。木製品の中で、漆製品とは別に、黒色塗料が確認されるものが出土している。漆を塗布する前の、下地（サビ止め）が露出している状態と考えられる。

下駄 総数77点出土した。下駄の差歎も16点出土した。下駄は古く古墳時代から存在が認められているが、様々な形態を持つようになったのは、江戸時代に入ってからである。

下駄は、まず足をのせる接地面（台）の形が角形と丸形（小判形）に大別される。さらに一つの木から作り出す一木下駄と、台と下駄の歎が分かれている構造下駄の2種類がある。

一木下駄には、前後2つの歎を作り出した連歎下駄（I類）と、歎が台から独立していない削り下駄（II類）の2種類がある。そして構造下駄は、差歎にホゾのあるものを露卵下駄（III類）といい、ホゾのないものを陰卵（IV類）という。当遺跡出土の露卵下駄のホゾ穴は、1つのものから3のものや、前後穴の数の違うものまで存在する。また構造下駄は、歎がとれてしまったのを補修するために、ホゾの近くに釘を打ち歎を固定しているものも見られた。

下駄には鼻緒を通す眼が穿たれており、仮に後歎の前に眼があるものをa、後ろにあるものをbとする。これらの分類をもとに今回出土した下駄の分類を試みた。

下駄は、奉行所のS E 9 から21点、炉柏町 S D 1 の3層から48点出土している。その他、炉柏 S D 1 の1・2層から2点、岩原3層から5点、岩原S E 3 から1点出土している。岩原から出土したものは角形のIII類が1点判別できるだけで、その他は残存状況が悪く分類できなかった。奉行所と炉柏町からの出土状況は以下の通りである。また、台から外れた差歎が18点（うち1点実測）出土した。

・奉行所 (S E 9)	・炉柏町 (S D 1 3層)	・炉柏町 (S D 1 1・2層)
角-I-a : 1	角-I-a : 3	角-I-b : 2
角-III-a : 5	角-I-b : 14	角-III-b : 7
角-(不明) : 5	角-II-a : 1	角-III-(不明) : 4
丸-(不明) : 2	角-II-b : 1	丸-III-a : 2
形状不明 : 2		丸-III-(不明) : 1

多種多様な下駄が出土したが、陰卵下駄本体は確認できなかった。炉柏町 S D 1 と比べると、奉行所 S E 9 から丸形下駄の出土率が高い。また奉行所 S E 9 ではa形のみが確認できた。また、黒色塗料がみられるのは丸形や、露卵下駄で幅が狭く小型のものが多く、女性や子供用の下駄のようである。

この他に、連歎下駄の形を呈し、鼻緒を通す眼が穿たれていない履き物が出土している。台の側面全体に釘穴があり、金属製の釘が一部遺存している。

生活工具 19は刷毛である。塗り物が刷毛の下部に付着しているが、毛部は残っていない。39は棒状の金属が遺存しており、錐と推測される。38・40は庖丁や小刀の柄と考えられるが、金属部分は残っていなかったため、不明である。

生活用品 樽や徳利の封に利用されたと考えられる栓が出土している。大きさも10cmを超えるものから2cmほどの小さいものまで出土している。30は吸口と考えられる。次に、箸が出土しており、完形

は2点出土している。36は断面が方形であるが、その他は円形である。いずれも両端まで同じ太さである。42・43・44は柄杓などの柄の部分と考えられる。種類が豊富なのは桶、もしくは樽の側板である。個体で出土するものはなかったが、側板内面に板を取り付けていた跡が残っている。54は上部に蓋を取り付けた跡が残っているため、樽の側板と考えた。次に曲物、樽などの蓋や底板と思われる丸板である。55・57は薄く幅の短い側板が残存しているため、蓋と思われる。56は焼印が確認できるが、内容は不明である。58は板に3.5cmほどの穴があり、樽の蓋の一部と考えられる。61・62も蓋と考えられる。その他の丸板は底板と考えられ、小型のものは柄杓の底板と考えられる。次に、曲物側板であるが、側板自体の残存状態は良好であるが、結合部は分離している。この他、味噌などをすくうときに使用したと考えられるヘラが出土した。半月状のものと、方形状のものとが出土している。

玩具 羽子板や独楽、人形などが出土した。羽子板は柄の部分が折れやすく、完全に残っていたのは2点のみであった。江戸時代から板の表面に装飾を施したもののが存在するが、出土したものは特に見あたらなかった。独楽は2点とも栗形を呈しており、86が芯の部分が金属製で、87は木製であった。82から84は動物のミニチュアの顔と足である。東京都一橋高校地点から出土している犬型の頭部と報告されているものに類似しているため、おそらく玩具であったと思われる。頭と胴部は木釘で固定されていたと思われる。人形は頭部のみで顔の部分は目鼻立ちがはっきり残っていない。

漆製品 漆の残存状況は大変よいが、製品としての原型をとどめているものはわずかであった。出土量としては漆椀が多く、その他曲物の側面や容器の一部が出土している。漆椀類は、蓋が1点確認できた。椀は、高台脇から緩やかに立ち上がるるもの(102・108)、高台脇から急激に立ち上がるもの(101・107)、高台際に稜が入り湾曲しながら立ち上がるもの(104)、高台際に稜が入り、胴部に1条の突帯がつくもの(105・106)、高台際が高台内より位置が高いもの(103・109・110)などがある。その他装身具として櫛が出土している。櫛の歯の部分はほとんど失われている。その他、製品の一部が出土し、実際の用途が不明なものが多々ある。

今回木製品を整理するに当たって、20点樹種同定を行った。同定方法は、木片の断面を顕微鏡で観察し、解剖学的形質および現生標本と比較することによって行われた。

分析の結果、下駄8点はモクレン属2点、クスノキ2点、ツガ属1点、ケヤキ1点、カツラ1点、センダン1点と、様々な種類があることが確認された。曲物2点はいずれもサワラであった。曲物蓋はスギとアスナロ、箸はスギ、栓はコナラ属アカガシ亜属、羽子板はアスナロ、杓子はヒノキ科、柄はアスナロ、丸板(小)はアスナロ、丸板(大)はスギである。いずれも温帯もしくは暖温帯に分布する樹種で、周辺地域に分布しているということであった。今回の結果は、木製品のほんの一部であって他にも様々な樹種の利用が予想される。(柚木)

※表の法量について…下駄に関しては(a. b. c. d. e)を採用。a:横幅 b:縦幅 c:前後の眼の幅 d:後方の眼の幅 e:台から歯までの厚み、漆椀に関しては(a. b. c)を採用。
a:口径 b:底径 c:高さ

【参考資料】

- 1988『三栄町遺跡』東京都新宿区教育委員会
- 古泉弘 1990『江戸を掘る—近世都市考古学への招待—』柏書房
- 2000『汐留遺跡 II』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第79集
- 江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究辞典』

番号	種類	出土地点	法量 (cm) … (復元径)・※: 残存長					塗装	備考
			最大長(a)	最大幅(b)	最大厚(c)	(d)	(e)		
100	漆椀	(炉) SD1 3層	10.95	(4.0)	2.9			外赤／内赤	漆製品、蓋。文様なし
101	漆椀	(炉) SD1 3層	12.2※	5.3※	3.4			外赤／内赤	漆製品、文様なし
102	漆椀	(炉) SD1 3層	12.0	6.0	4.25			外赤／内赤	漆製品、文様なし
103	漆椀	(炉) SD1 3層	9.95	4.9	8.0			外赤／内赤	漆製品、文様なし
104	漆椀	(炉) SD1 3層	(14.1)	(6.5)	7.0			外赤／内赤	漆製品、文様なし
105	漆椀	(炉) SD1 3層	13.0※	7.2※	4.6			外赤／内赤	漆製品、文様なし
106	漆椀	(炉) SD1 3層	11.4※	5.1	5.9			外赤／内赤	漆製品、文様なし
107	漆椀	(炉) SD1 3層	10.05※	5.45※	3.05			外黒／内赤	漆製品、草花文様の跡あり
108	漆椀	(炉) SD1 3層	(12.6)	6.0※	5.1			外赤／内赤	漆製品、文様あり
109	漆椀	(奉) SE9	13.2※	6.25	6.8			外茶／内黒	漆製品、竹文様あり
110	漆椀	(炉) SD1 3層	(10.6)	5.55	8.05			外赤／内赤	漆製品、松文様あり
111	蓋	(炉) SD1 3層	13.7	7.6	1.5			外黒／内赤	漆製品
112	容器	(炉) SD1 3層	16.4	2.1(高さ)				外黒／内赤	漆製品、八角形状
113	曲物	(岩) SX6 上層	17.7		0.6			外黒／内黒	漆製品、蓋
114	膳	(炉) SD1 3層	17.1		0.75			外黒／内赤	漆製品
115	箱	(炉) SD1 3層	18.25	4.55	0.65			外黒／内赤	漆製品、側板カ
116	容器	(炉) SD1 3層	10.6	5.9	0.35			外黒／内赤	漆製品、底部
117	容器	(炉) SD1 3層	6.9	6.85	7.95			外黒／内黒	漆製品
118	丸板	(岩) SE3	26.3		0.6			外黒／内黒	漆製品、文様なし
119	荷札	(炉) SD1 3層	22.6	6.8	0.8				墨書きあり
120	荷札	(炉) SD1 3層	9.85	2.8	0.6				墨書きあり (内容不明)
121	荷札	(炉) SD1 3層	11.0	2.5	0.4				墨書きあり (内容不明)
122	荷札	(炉) SD1 3層	12.9	1.9	0.4				墨書きあり
123	荷札	(炉) SD1 3層	17.7	3.6	0.5				墨書きあり (内容不明)
124	用途不明	(炉) SD1 3層	17.9	2.5	0.8				墨書きあり (内容不明)
125	荷札	(炉) SD1 3層	11.6	1.5	0.3				墨書きあり
126	荷札	(炉) SD1 3層	15.6	2.7	0.2				墨書きあり
127	用途不明	(炉) SD1 3層	17.1	6.4	1.4				墨書きあり (内容不明)
128	桶蓋	(炉) SD1 3層	14.8	6.2	1.25				墨書きあり (内容不明)
129	用途不明	(炉) SD1 3層	15.85	4.1	0.6				墨書きあり (内容不明)
130	用途不明	(炉) SD1 3層	7.2	4.8	0.55				墨書きあり (内容不明)
131	用途不明	(炉) SD1 3層	16.4	10.5	1.4				墨書きあり (内容不明)
132	用途不明	(炉) SD1 3層	17.9		4.8				墨書きあり (内容不明)
133	容器カ	(炉) SD1 3層	22.55	10.0	2.3				墨書きあり
134	木札	(炉) SD1 1・2層	11.6	9.0	1.1				墨書きあり
135	漆造りの杯	(炉) SD1 3層	9.0※	3.95	2.2			外赤／内赤	内側に金彩で文字が書かれている
136	ものさし	(炉) SD1 3層	25.45		1.1				墨書きあり
137	曲物	(岩) SX6 上層	15.2		1.4				墨書きあり (内容不明)
138	蓋	(炉) SD1 3層	37.0	5.1	1.3				墨書きあり (内容不明)
139	樽蓋	(炉) SD1 3層	32.5	9.85	1.3				墨書きあり (内容不明)
140	樽蓋	(炉) SD1 3層	36.4	8.1	1.7				墨書きあり (内容不明)

第17表 木製品観察表②

(4) 文字資料

荷札や木札、樽・桶の蓋に墨書きで文字の書かれた木製品が出土した。多くが破片であったり、文字が薄れているため、釈読できなかった。荷札は奉行所に納入された商品の荷札と考えられる。(柚木)

119・「長崎東中町 □□ □附札□ □

◎小柳九郎右衛門尉 □□ 」

・「□五□

しメこなへ 弐□之代
〔鬼カ〕

□□□□ 」

134 「今度為片

片桐正□□由

越□□候処一圓
〔度カ〕

同心無之剩

120・121 内容不明

□□牢人之次 」

122 「小」

135 「あまり

おぢぎ□

123・124 内容不明

くたて

125・「<昨口□□ 権太郎」

ござんす 」

・「<かし候五わ□□ 」

136 「一尺五寸五間入」

126 「四郎右衛門様参

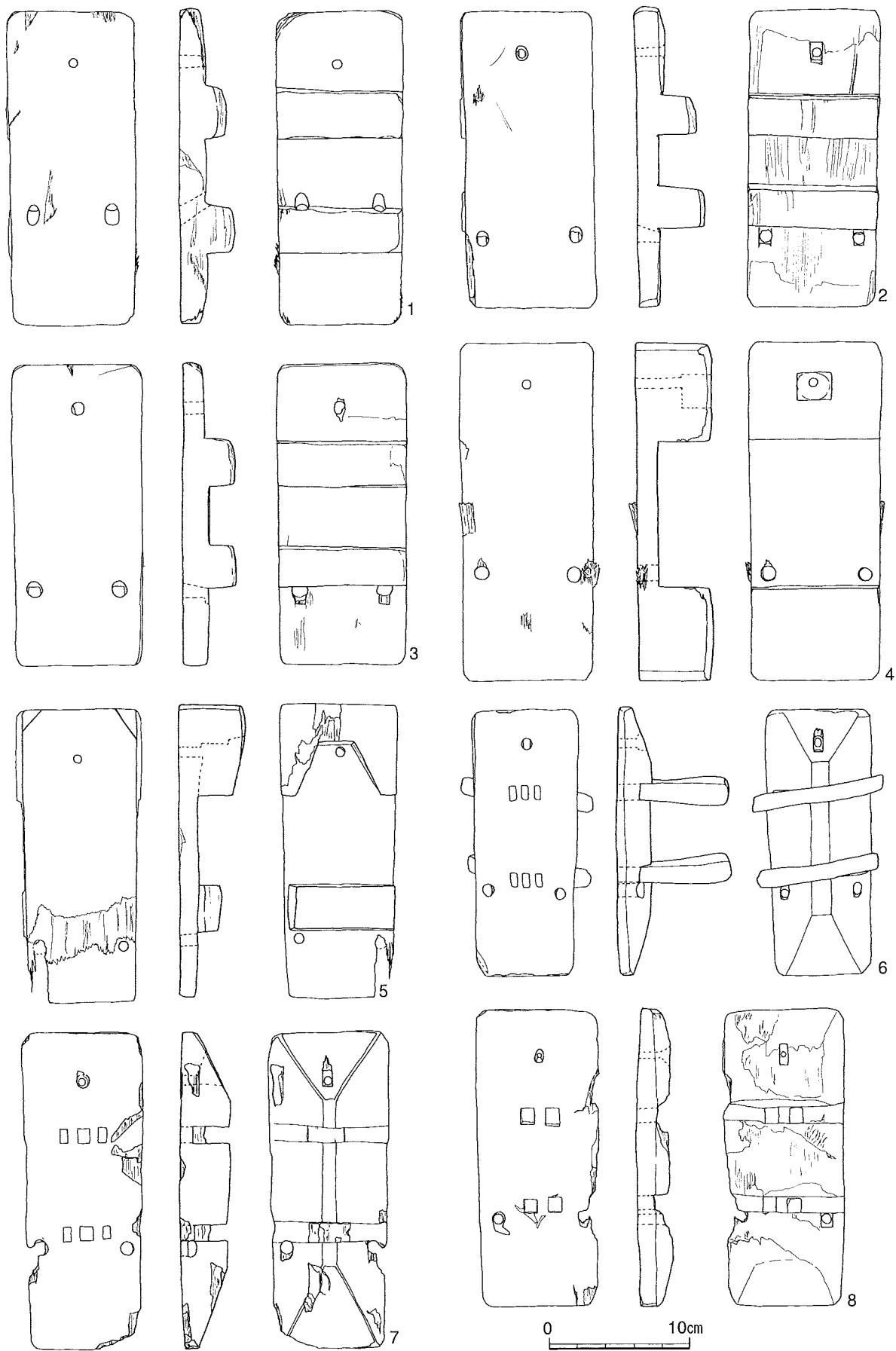
137~140 内容不明

127~132 内容不明

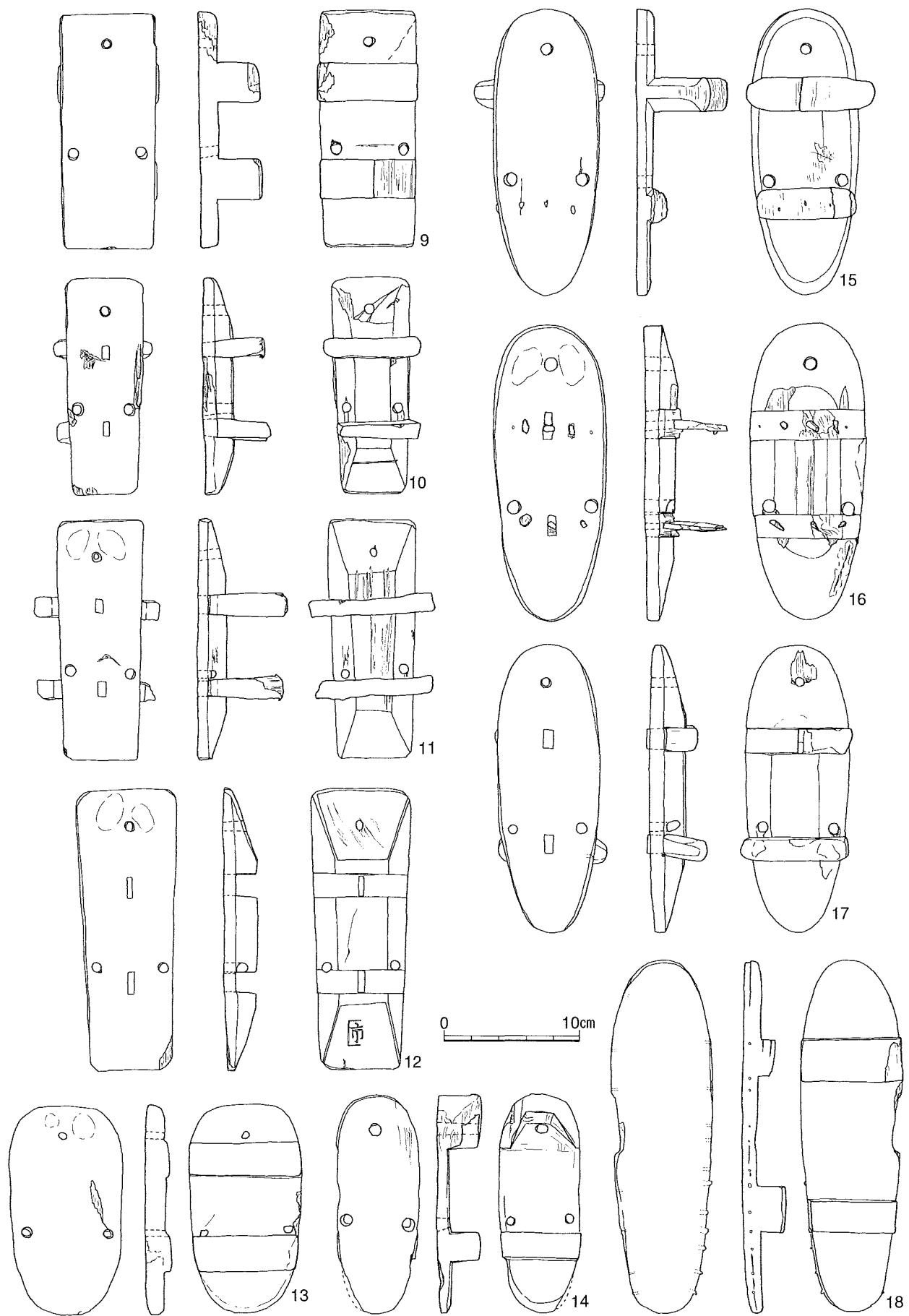
133 すみそあり

ひしおありしらゆう

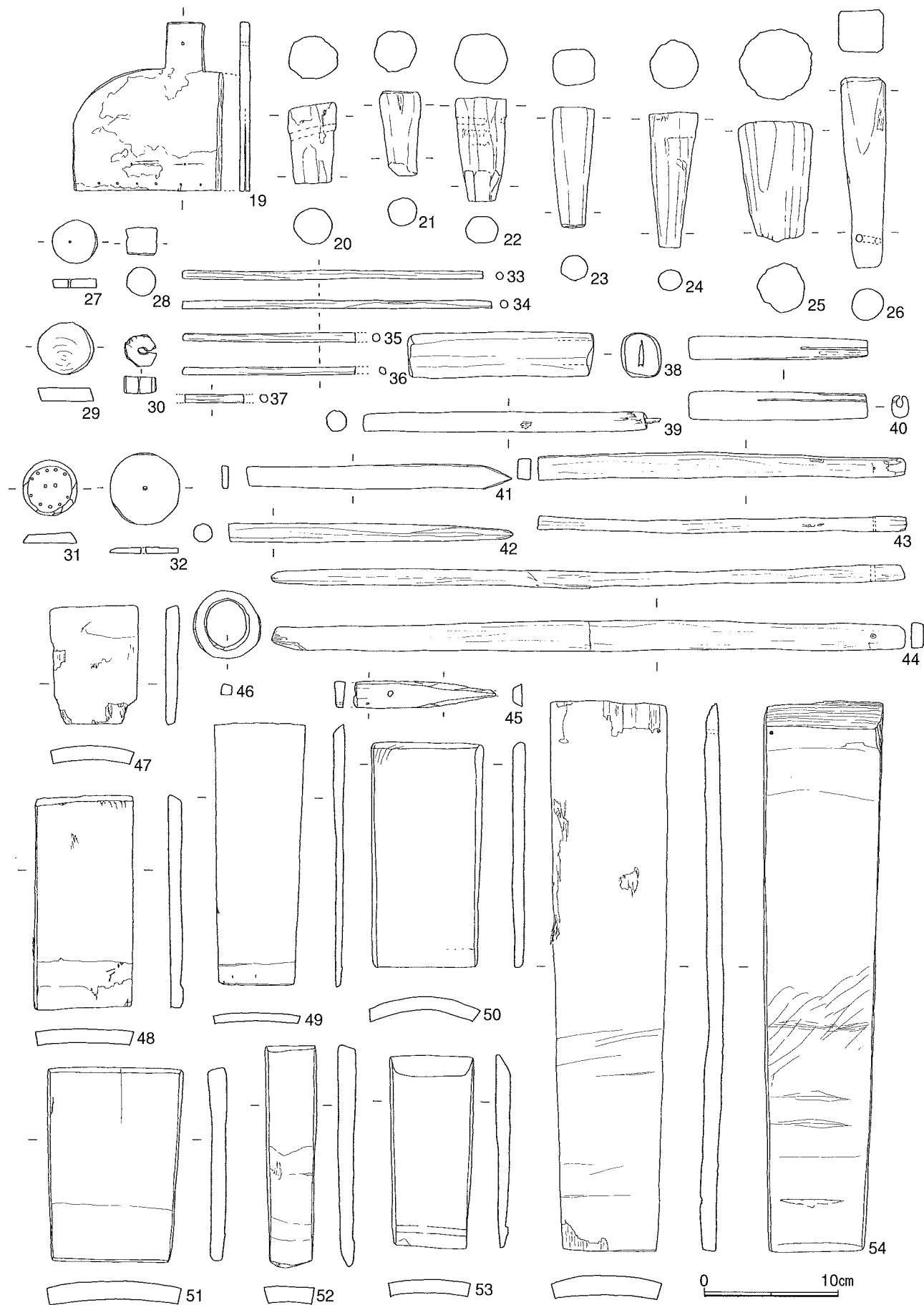
ひ□□□□」



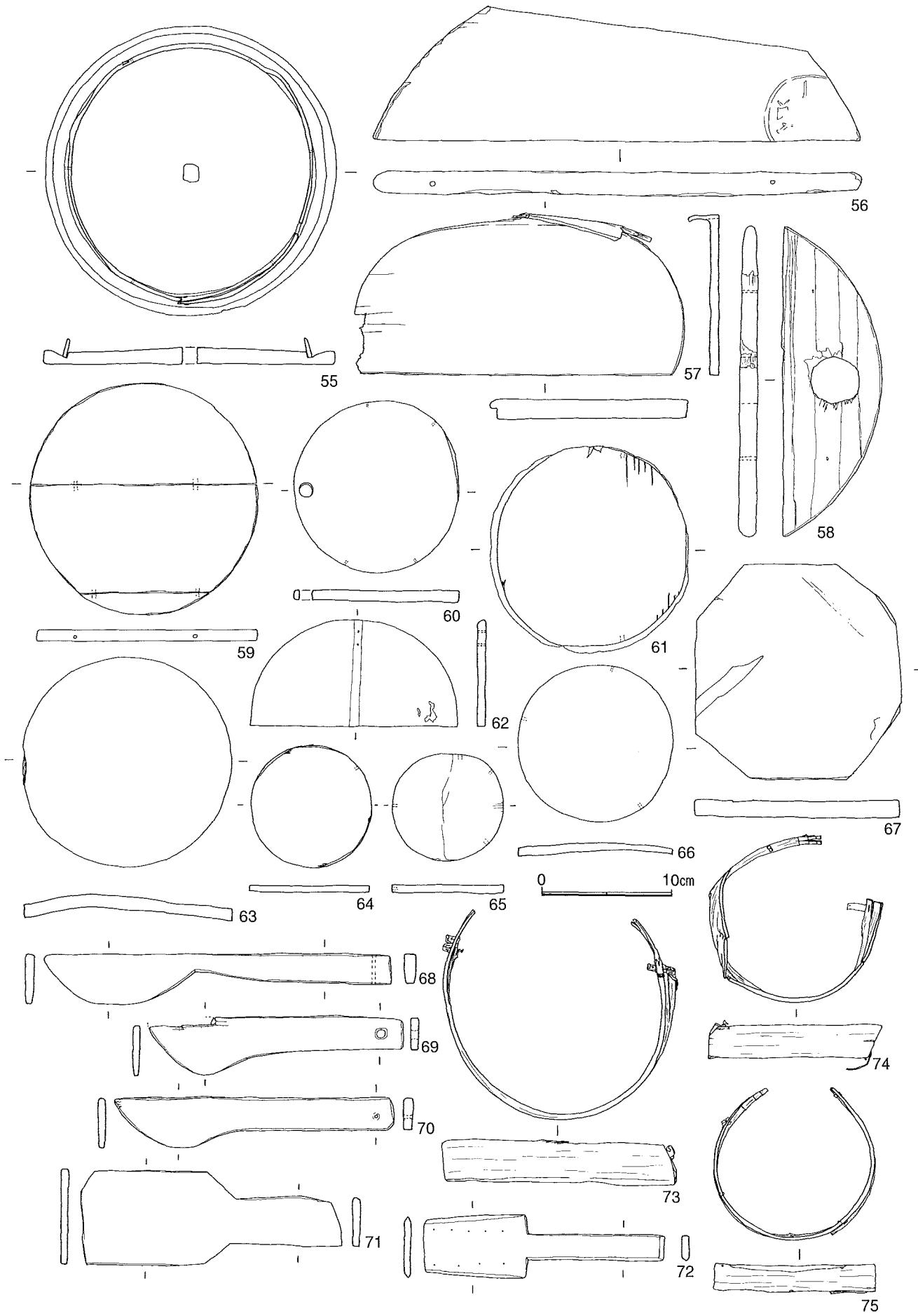
第76図 木製品① (1 / 4)



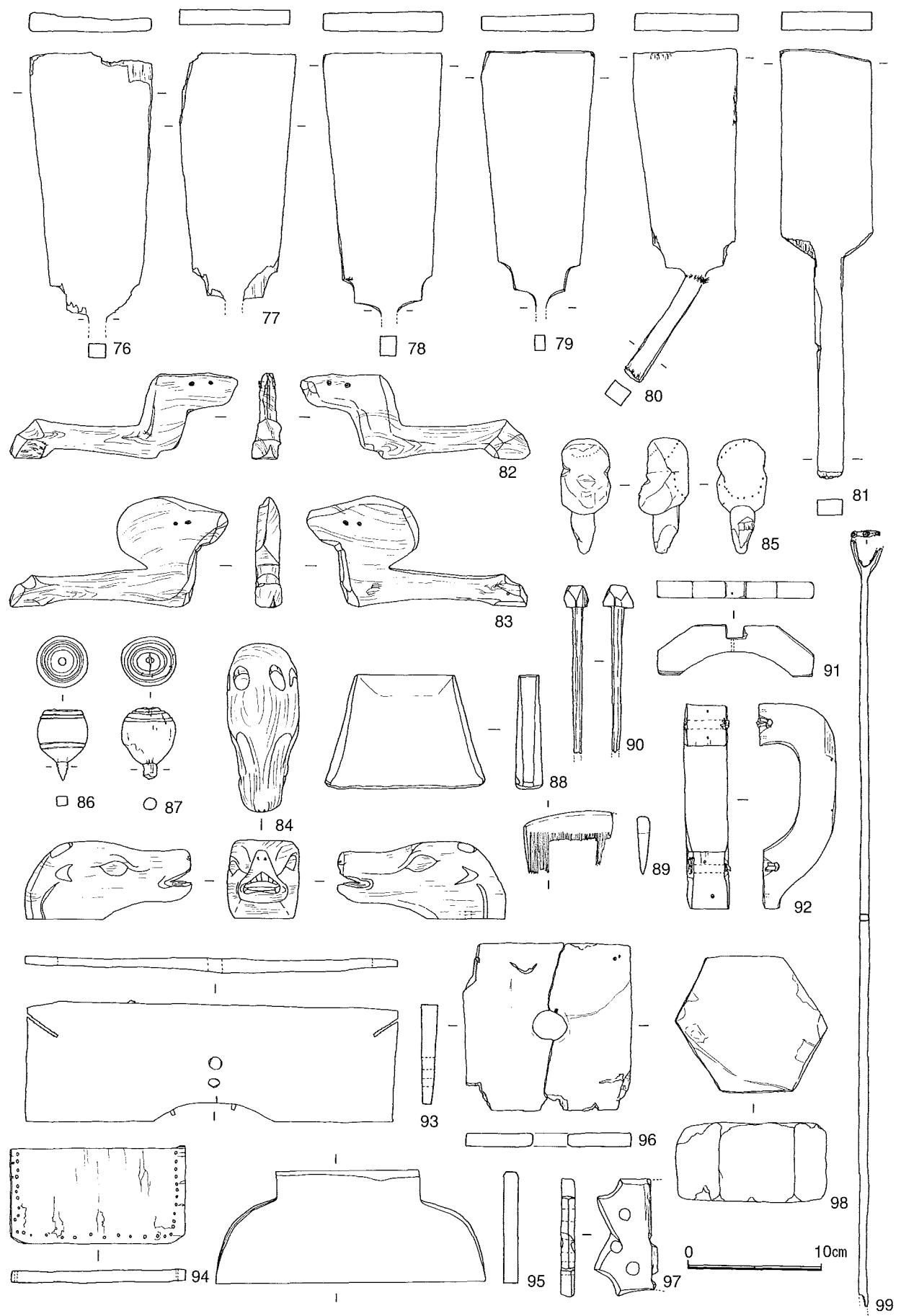
第77図 木製品② (1/4)



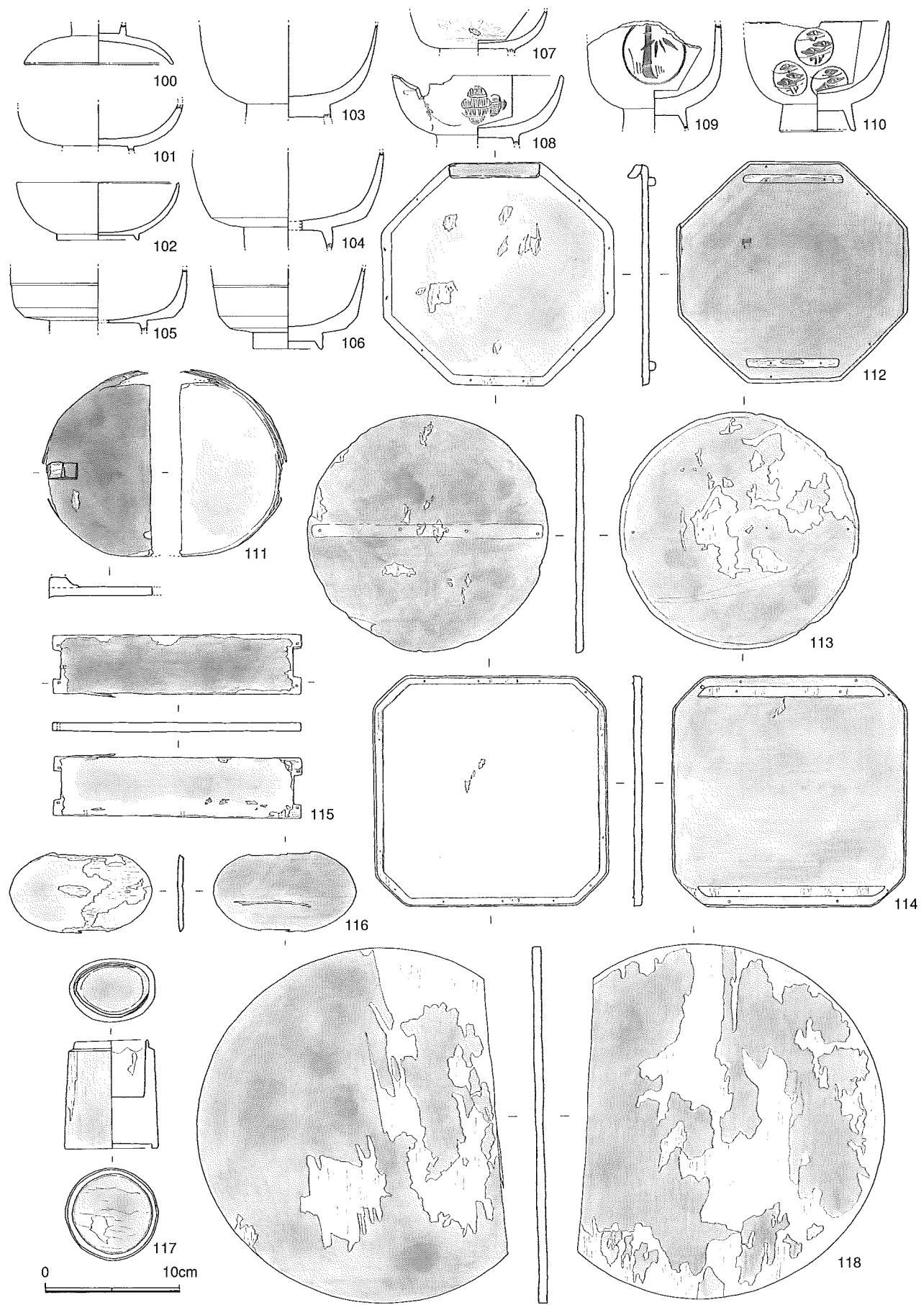
第78図 木製品③ (1/4)



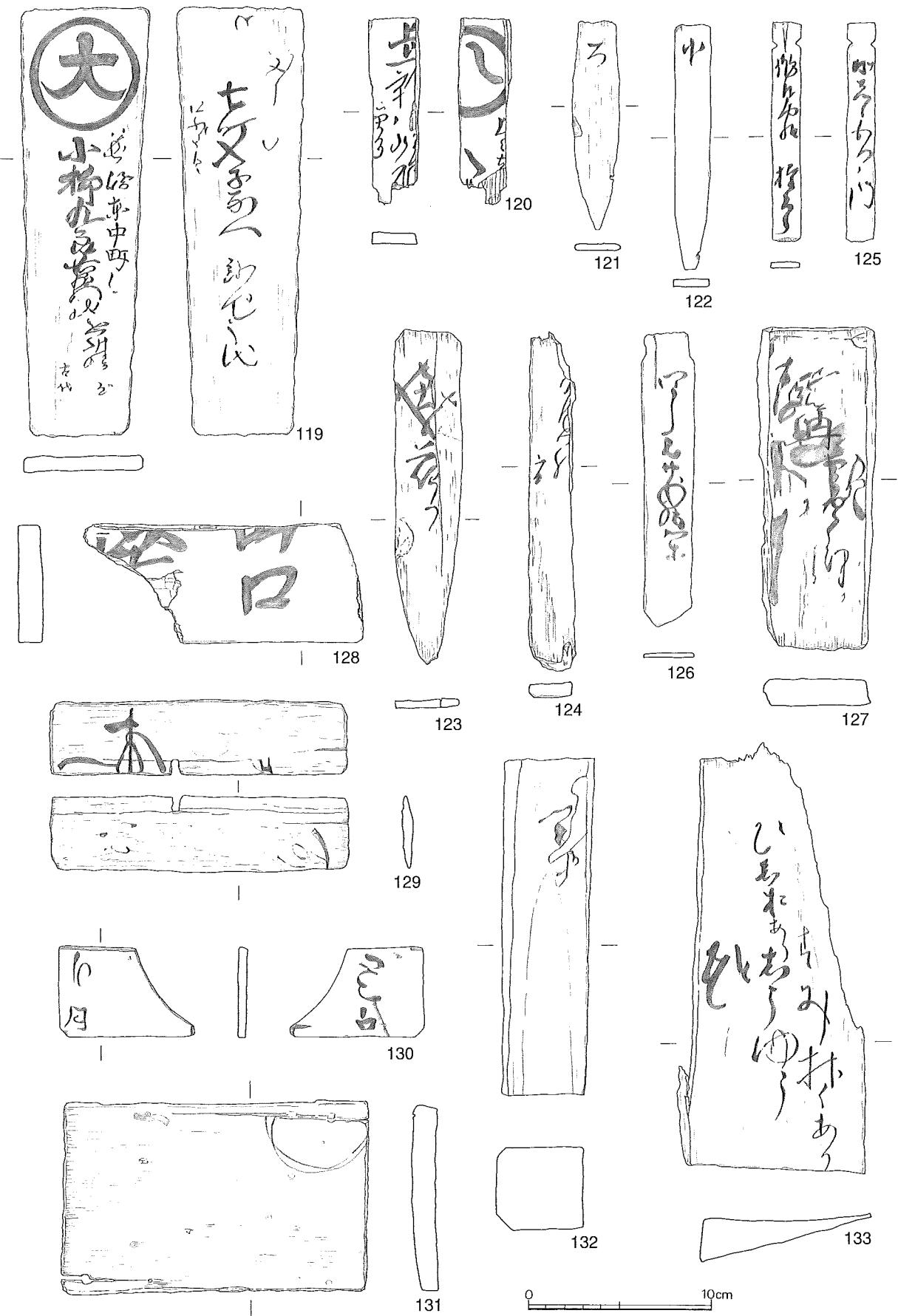
第79図 木製品④ (1/4)



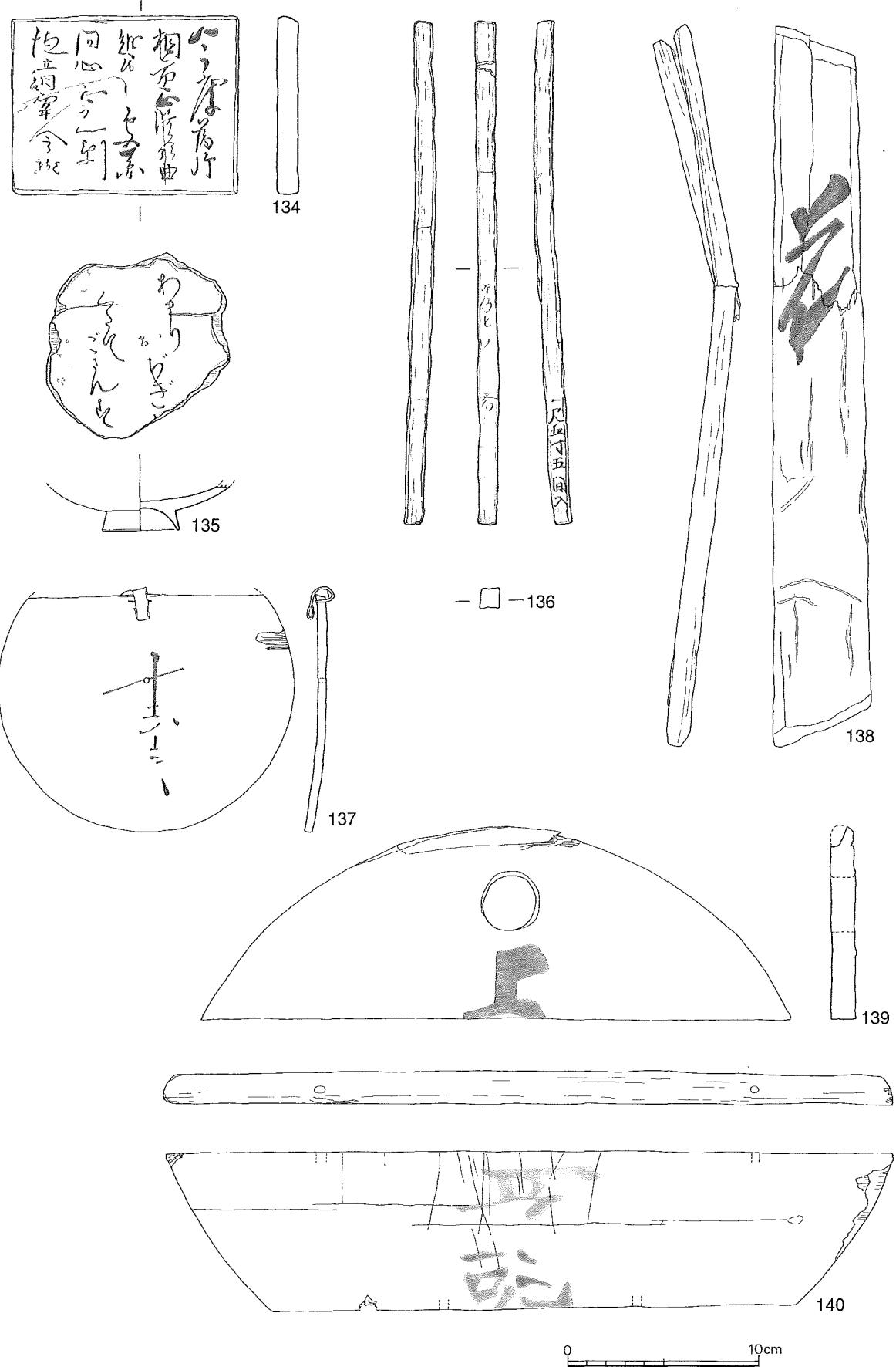
第80図 木製品⑤ (1/4)



第81図 木製品⑥ (1 / 4)



第82図 木製品一文字資料① (1/3)



第83図 木製品一文字資料② (1 / 3)

(5) 金属製品

当遺跡から多量の金属製品が出土した。しかし、多くのものが腐食し、形状がわからなくなっているものが大半であった。その中で112点図化できた。

煙管 雁首と吸口に分かれ、それを羅字でつなぐタイプものが出土した。今回は古泉氏の煙管の変遷をもとに、江藤氏に分類をお願いした。当遺跡では、古泉氏の分類でいうⅡ～Ⅲ類までが出土した。

雁首は火皿とそれにつながる部分（首部と呼ばれる）で構成されており、火皿と首部の付け根から湾曲している部分を脂返しという。この脂返しの湾曲が、新しくなるにつれ次第に小さくなる。この脂返しの曲がり具合によって分類することができる。Ⅲ類までは、火皿と首部の接合部分に細い銅板を巻き付け補強している。これを補強帶と言い、この補強帶があるものと、羅字をつなげる首部の小口側に一段肩が付いているものがⅡ類とされている。当遺跡では肩付きのものは出土しなかったが、2・3・4は途中で折れているため、肩付きの可能性がある。Ⅲ類とⅣ類は脂返しの湾曲にさほど差は見られないが、補強帶の有無によって判断される。Ⅴ類になると、火皿と脂返しの湾曲がさらに小さくなっている。そして火皿が小型からいったん大型化し、次第に小型化するという。

19には火皿の内側中程に火皿冠と呼ばれる穴があいているが、これがどのような機能を果たすもののかはまだわかっていない。またこれらの年代的なことは、各々の型式でも、同時期に並行して存在することが考えられるため、明言は避けておく。

吸口は肩が有るものと無いものに大別され、肩のあるものが古いとされている。肩の無いものでも、羅字を差し込む小口から中程までやや膨らみ、口付け部分が細くなるものと、小口から口付け部分まで直線的になっているものとがある。39は金箔が施されている。

また、何点か雁首に灰落としの際に潰れた跡が残るものがある。この他に雁首を製作する前に銅板に切り込みを入れ、接合前の段階まで加工されているものも炉粕町SD1から出土している。

小柄 いずれも柄のみの出土である。45は魚々子地に五三桐の紋様を3つ配しており、金箔が残っている。持ち主の家紋を配した可能性がある。

簪・笄 金属製のものは出土数が少ない。また装飾性の高いものは出土しておらず、主に髪搔きとして使用していたと推測される。50は用途不明の棒状製品である。途中で破損しており、円筒状の穴があいている。松の文様が彫込まれ丁寧な作りをしているため、先には金属と別のものを挿し込むような作りの簪ではないかと推測される。

釣下げ用具 釣下げる対象物は不明確であるが、55は簾を巻き上げ、それをかけておく金具で、72・73は提灯の金具ではないかと考えられる。

バック状製品 用途は不明である。袋状の本体に装飾を施した蓋がついており、裏側には何かに固定するための金具が取り付けられている。非常に作りが良い。

目貫 刀の柄の部分に取り付ける刀装具のひとつである。植物をモチーフにしていると思われる。

分銅 原型はとどめているが、腐食しており正確な重さは不明である。現在の重さは50gを測る。直方体状で角取りをし、上につまみが残っている。

矢立の蓋 矢立とは筆を収納する文房具であり、これに取り付けたと思われる蓋が出土している。

メダイ 岩原目付屋敷跡の石垣裏込から出土した。おそらく人物が彫られていると推測されるが、表

番号	種別	出土遺跡・遺構・層位	法量(cm)				備考
			最大長(a)	最大幅(b)	最大厚(c)	(d)	
102	釘	(奉)石垣3裏込A	7.1	1.2	0.45		腐食激しい
103	釘	(奉)SD1中層	6.75	0.8	0.4		腐食激しい
104	釘	(奉)SD1上層	7.9	0.55	0.45		
105	釘	(戸)SD13層	12.3	1.3	0.65		
106	釘	(奉)SK72	10.9	2.4	0.85		腐食激しい
107	釘	(奉)SK72	11	2.2	0.9		腐食激しい
108	釘	(奉)SK72	10.9	2.2	1.0		腐食激しい
109	釘	(奉)SK72	12	2.35	1.0		腐食激しい
110	釘	(奉)N-176b層	12.35	1.75	0.8		腐食激しい
111	十能	(奉)SB5下	23.55	17.25	0.3		
112	日本刀	(奉)上層面	76.2	2.52	0.6		軍刀に改造

第19表 金属製品観察表②

面が腐食しているためわからない。縦長の楕円状で、上部がやや突出し、穴があいている。

十手 奉行所のSD1から出土した。実際に使われていた十手は長さ50cmを越えるらしいが、出土したものは、24.5cmと小振りである。腐食が激しいが、表面に漆が塗布してあることがわかっている。したがって出土した十手は、身分の高い者が役職を象徴するものとして所持していたと考えられる。

把手 直接の用途は不明であるが、把手を固定する金具(58)も出土している。

飾り金具 箕笥などの角に、補強のためにあてがわれたものと思われる。腐食が激しく表面には文様を確認できなかった。

箸 長さが25cmを超える非常に長いため、火箸ではないかと思われる。断面は丸い。81も長さ・断面径が類似しており、火箸の可能性がある。

鎌 2点出土している。いずれも断面は正方形に近いが腐食が進んでいる。91は片方の先端部が欠損している。

釘 92は頭部が円形で、断面は半月状になっている。木材を接合する際に用いるような釘ではなく、飾り金具の固定に利用するようなものと考えられる。その他の釘は断面が方形であり、種類も多様である。腐食しているものが多い。104・105は先端部を叩いて薄く伸ばし、折り返しているのが明瞭な資料である。一方106以降の断面が長方形になる釘は頭部を折り曲げているものである。

杓子 いずれも柄と杓部が一体に作られている。86は上部が三分の二ほど欠損している。84・85より大きい。杓部は円形に近い形態を持つ。

輪状製品 断面が方形のものと円形のものが出土している。用途は不明である。

十能 竈や炉の灰などをすくいだす道具である。柄の部分は中空になっており、釘穴が2箇所あけられている。

日本刀 奉行所中区の上層面から地面に突き刺された状態で出土した(上巻写真参照)。軍刀に改造され、刀身の長さが短くなっている。

その他、用途不明な金属製品が出土している。54は長方形の板状金属を薄く叩き伸ばして、筒状に巻いて穴を開けている。下部は摩耗しているが欠損している跡が残っているため、金属製品の柄の部分と考えられる。76は中空菱形を呈し、断面は外側が内側よりも張り出しており、飾り金具の可能性がある。(袖木)

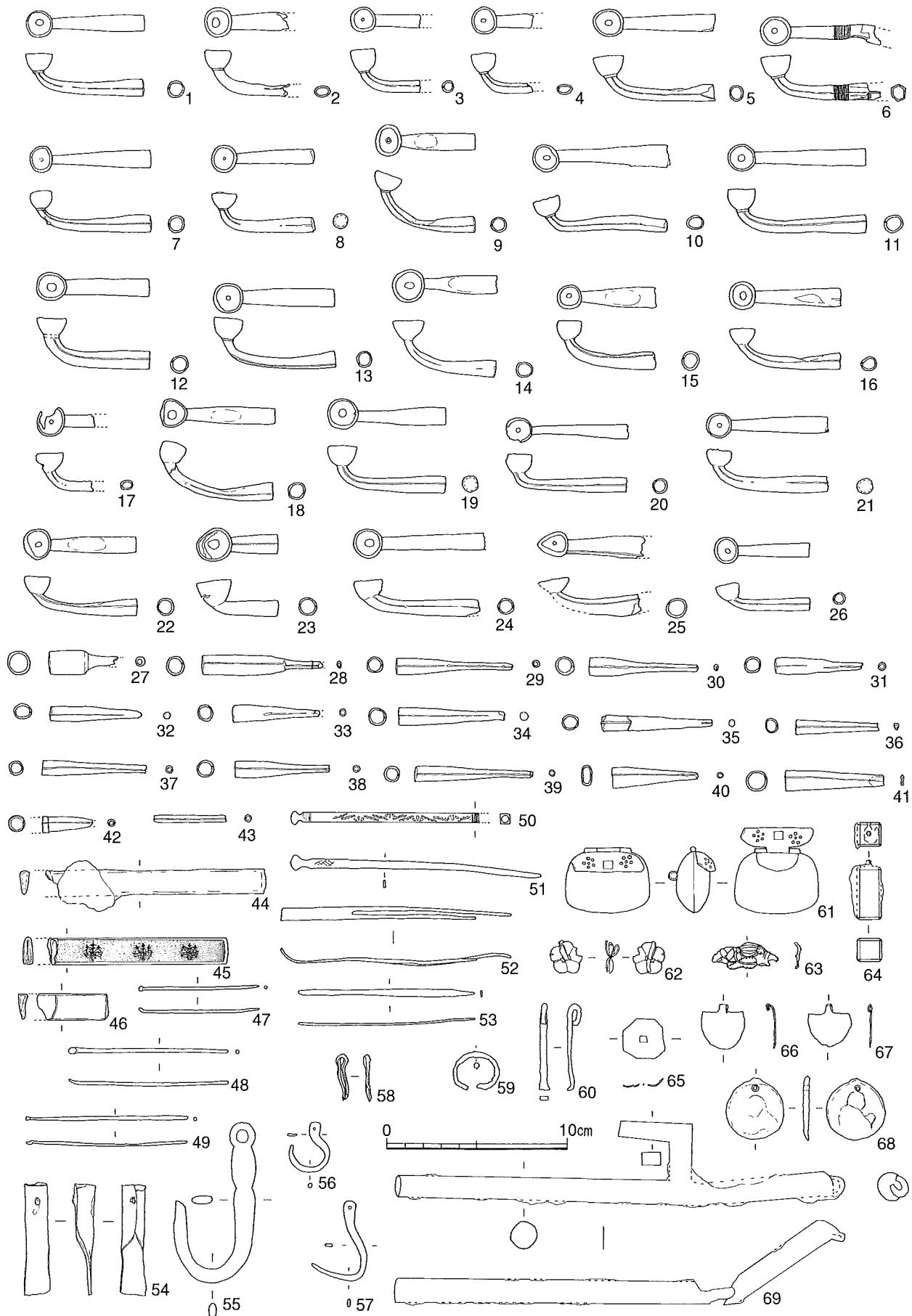
※表の法量について…煙管に関しては(a.b.c.d)を採用。a:全長 b:高さ(雁首)／小口径(吸口) c:火皿径(雁首)／口付け部分の径(吸口) d:小口径(雁首)

【参考文献】

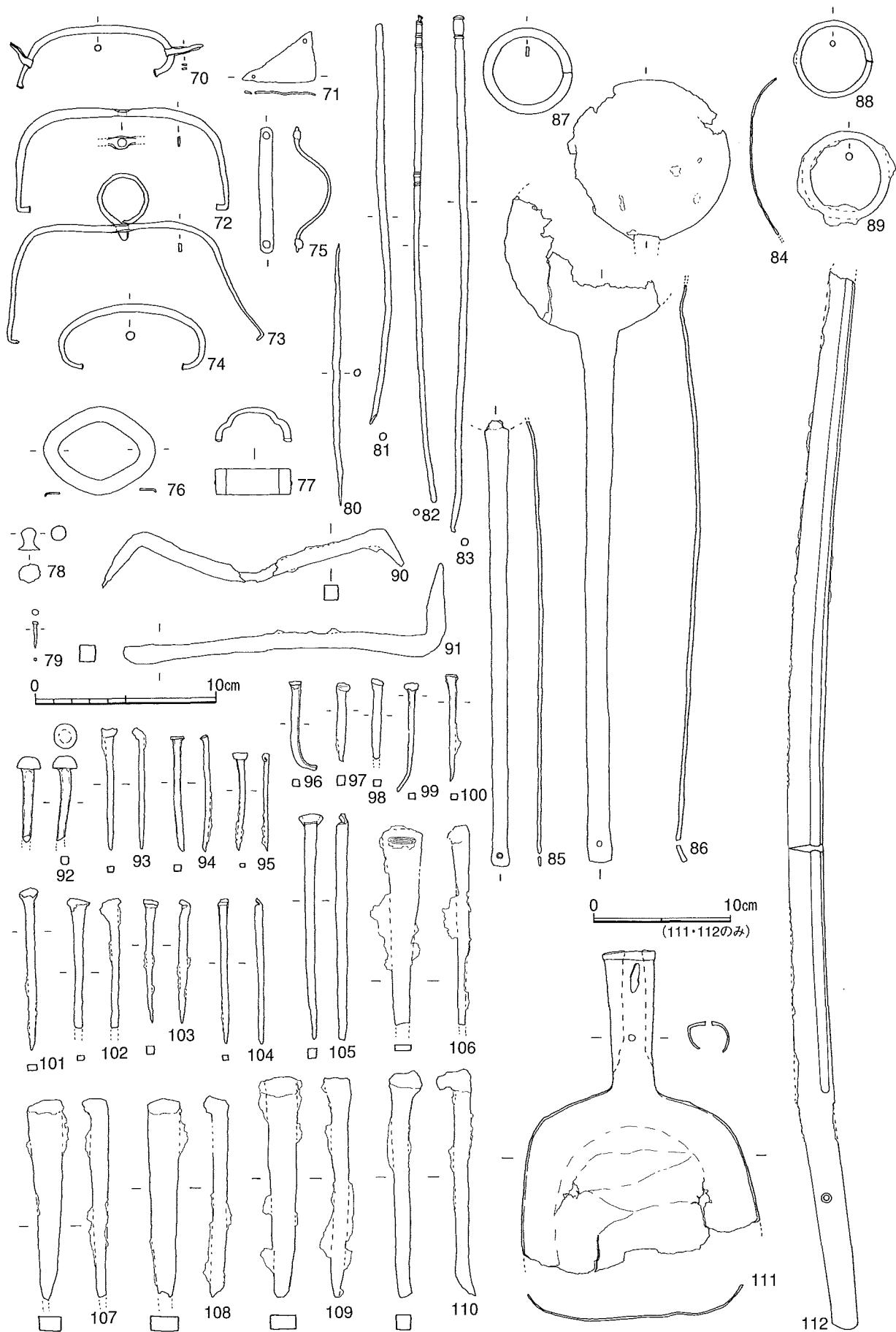
古泉 弘 1990『江戸を掘る－近世都市考古学への招待－』

江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究辞典』

文化庁編 2003『発掘された日本列島2003－新発見考古速報』 朝日新聞社



第84図 金属製品① (1 / 3)



第85図 金属製品② (1/3・1/4)

(6) クレーパイプ

長崎奉行所跡から39点、岩原目付屋敷跡から57点のクレーパイプが出土した。この中から器形の残りがよいものを中心に図化した。

1～10は、火皿部（パイプボール）である。1は、目付屋敷5e層から出土した。煙管部の直径は0.8cmで、火皿の推定口径は約2cmである。ヒールマークは、摩耗のため判別できない。2は、目付屋敷5e層から出土した。煙管部の及び火皿部の径は不明で、右向きに飛び上がった馬のヒールマークがある。3は、目付屋敷5e層から出土した。煙管部の推定直径は0.8cm、火皿部口径は不明。王冠のヒールマークがある。4は、奉行所5層から出土した。煙管部の推定直径は0.8cm、火皿部の直径は不明。王冠の下にVIのヒールマークがある。5は、奉行所SD1から出土した。煙管部の直径は0.6cm、火皿部の直径は不明。王冠付き帽子のヒールマークがある。6は、奉行所SE5（上層面）から出土した。煙管部の直径は0.8cm、火皿部の推定直径は約2cmである。ヒールマークは摩耗により不明。7は、奉行所SD1上層から出土した。煙管部の直径は0.6cm、火皿部の直径は不明。王冠付きSの字のヒールマークがある。8は、目付屋敷SB4基壇から出土した。煙管部の直径は0.8cm、火皿部の直径は不明。王冠付きVKのヒールマークがある。このパイプのみ白色ではなく、半光沢のある黒灰色となっている。9は、奉行所TP10（範囲確認調査時）4層から出土した。煙管部の直径は0.8cm、火皿部の推定直径は約2cmである。王冠付きSHのヒールマークがある。10は、奉行所SD8から出土した。煙管部の直径は0.7cm、火皿部の直径は不明。ヒールマークも摩滅のため判別が不明となっている。

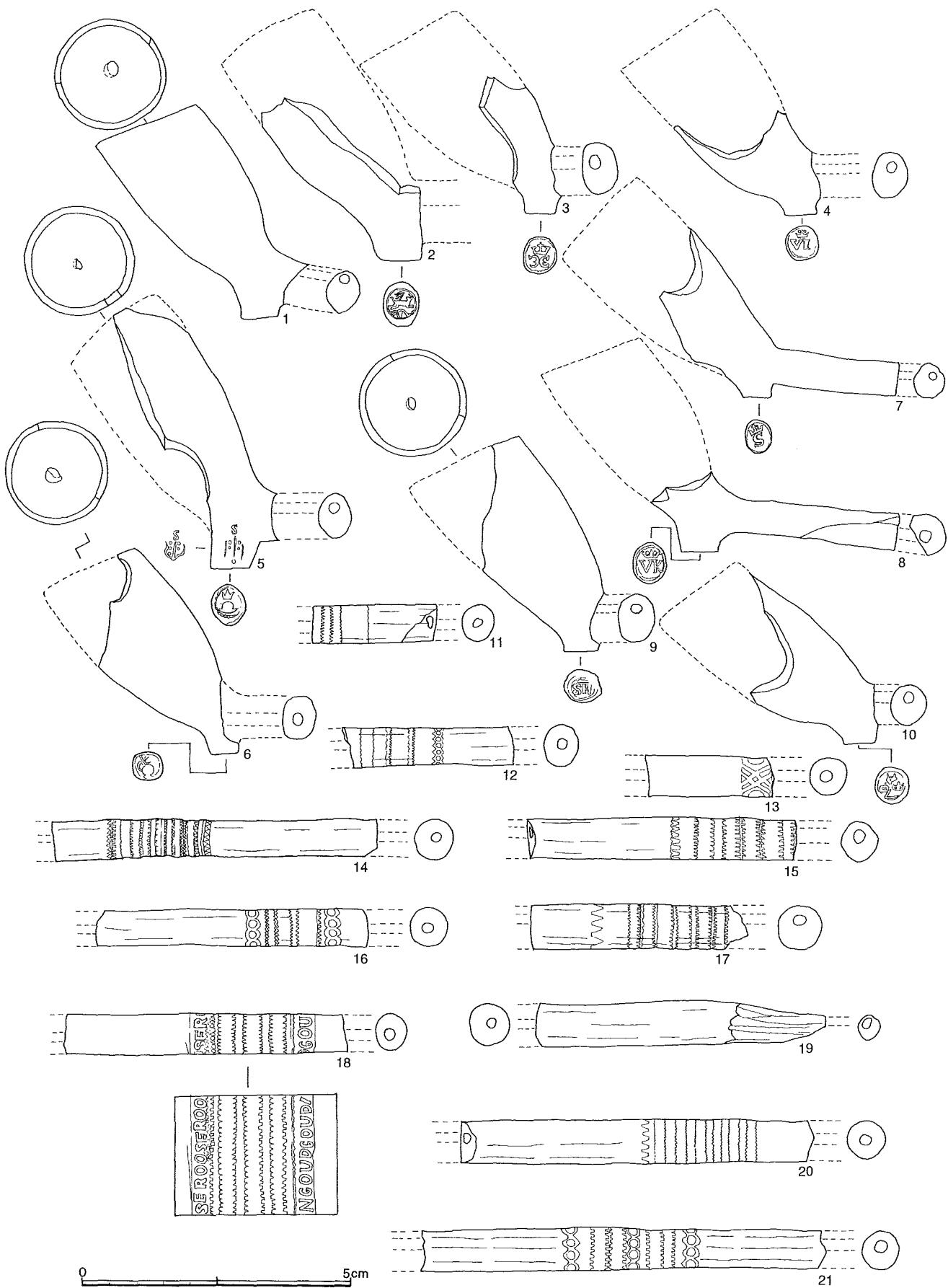
11～21は、煙管部である。11は、目付屋敷5b層から出土した。直径は0.7cmで、外周にギザギザの圏線が巡る。12は目付屋敷4層から出土した。直径は0.7cmで、外周にギザギザの圏線と丸文が巡る。13は、奉行所南区5層から出土した。直径は0.7cmで、外周にギザギザの圏線と丸文が巡る。

14は、目付屋敷4層から出土した。直径は0.8cmで、外周にギザギザの圏線が巡る。15は、目付5e層から出土した。直径は0.8cmで、外周にギザギザの圏線が巡る。16は、目付屋敷5e層から出土した。直径は0.7cmで、外周にギザギザの圏線と丸文が巡る。17は目付屋敷5e層から出土した。直径は0.9cmで、外周にギザギザの圏線が巡る。18は、奉行所SD14から出土した。直径は0.6cmで、外周にギザギザの圏線と上下に文字が巡る。上の文字は「ROOSE」、下の文字は「GOUDEN」と考えられる。19は、目付屋敷5層から出土した。直径は0.8cmで、端部を削って吹口としている。本来の吹口は端部が玉縁状になっているが、本資料は折れるなどの原因で新たに吹口を削り出したのであろう。20は、奉行所5d層から出土した。直径は0.7cmで、外周にギザギザの圏線が巡る。21は、奉行所南区4層から出土した。直径は0.7cmで、外周にギザギザの圏線と円文が巡る。

以上から傾向を整理すると次のようになる。

- ①形はほぼ共通し、煙管の直径は0.6～0.8cm、火皿の直径は約2cm。
- ②大きさと出土遺構の年代に相関性はとくにみられない。
- ③ヒールマーク、煙管部に文様のバリエーションがみられる。

搬入の背景としては、ワインボトルなどと同様に出島との関連が指摘されるであろう。クレーパイプは、長崎市街や江戸から散発的に出土するが、本遺跡の出土量からみるとより密接な結び付きが考えられる。今後、出島出土の資料との比較が必要であろう（川口）。



第86図 クレイパイプ実測図 (1/1)

(7) 焼 塩 壺 (第87・88図, 第20表)

本遺跡の様々な遺構から、多数の焼塩壺が出土した。その中でも特に廃絶・整地年代が明確な奉行所 S D 1, 炉粕町 S D 1, 岩原 V 層出土の焼塩壺をとりあげ、分類を行った。ただし生産者を特定したうえでの分類ではないため、あくまで器型のみの分類である。なお 3 遺構からの出土総数は身69点、蓋63点である。分類は身を印銘の有無及び成形技法から I ~ III 類に、蓋を内面断面の形状と布目痕の有無から A ~ C 類に設定した。詳細は以下の通りである。

身 I 類 (a) 手づくね成形及び輪積み成形のもので印銘をもたないもの。(12点)

(b) 同成形技法のもので印銘をもつものの。(5点)

II 類 (a) 板作り成形のもので印銘をもたないもの。(34点)

(b) 同成形技法のもので印銘をもつものの。(10点)

III 類 (a) 軆轤成形のもので印銘をもたないもの。(7点)

(b) 同成形技法のもので印銘をもつものの。(1点)

蓋 A 類 皿状のもので身の I 類に対応するもの。(2点)

B 類 (a) 内面断面が凹状のもので布目痕が見られないもの。(3点)

(b) 内面断面が凹状のもので布目痕が見られるもの。(57点)

C 類 内面断面が凸状のもので糸切り痕が残るもの。(1点)

炉粕町 S D 1 から身は I 類のみ、蓋は A ・ B 類が出土した。特徴として I - b 類は器高が10cmを超す大型が出土している。逆に I - a 類は小型で器高が 9 cm 未満のものである。

岩原 V 層から身は I ・ II 類、蓋は B 類のみが出土した。炉粕町 S D 1 と比較すると、I 類の特徴が類似しており、I - a 類は同一壺屋の製品の可能性がある。また II - a 類も壺塩業を創始したとされる藤左衛門系のもので、比較的古いタイプのものである。

奉行所 S D 1 は 3 遺跡内でも出土数が多く、出土した焼塩壺は本遺跡の18C末における消費実態を把握するうえで恵まれた一括資料である。出土した身は II ・ III 類で、内 8 割近くを II 類がしめている。蓋はすべて B 類である。特徴として、II ・ III 類ともに器高が 8 cm 前後の小型であること、II - a ・ b 類は内面に粘土の接合ラインが一本縦方向にみられること、布目痕が明確に残ることなどがある。また内側から底面に粘土塊を詰め、押し潰したあと指ナデを施した跡が見られる。

ここで比較 3 遺跡を一消費地域ととらえ、18C初頭～18C末までに使用された焼塩壺の器型を整理する。18C初頭では I 類から II 類への変化時期にあり、以後80年余りの間に完全に I 類は消滅してしまう。18C末には、II 類が主として使用されるが、そこに III 類が加わることがわかる。この結果は焼塩壺自体が二次利用されにくいという特色をもっており、生産から流通、消費から廃棄にいたる一連の流れが短時間のうちに行われることから得たものである。

今回は 3 遺構のみの報告となった。今後より細分類を進めること、周辺遺跡との比較・検討を行う事で本遺跡における焼塩消費の実態を明らかにできるのではないだろうか。

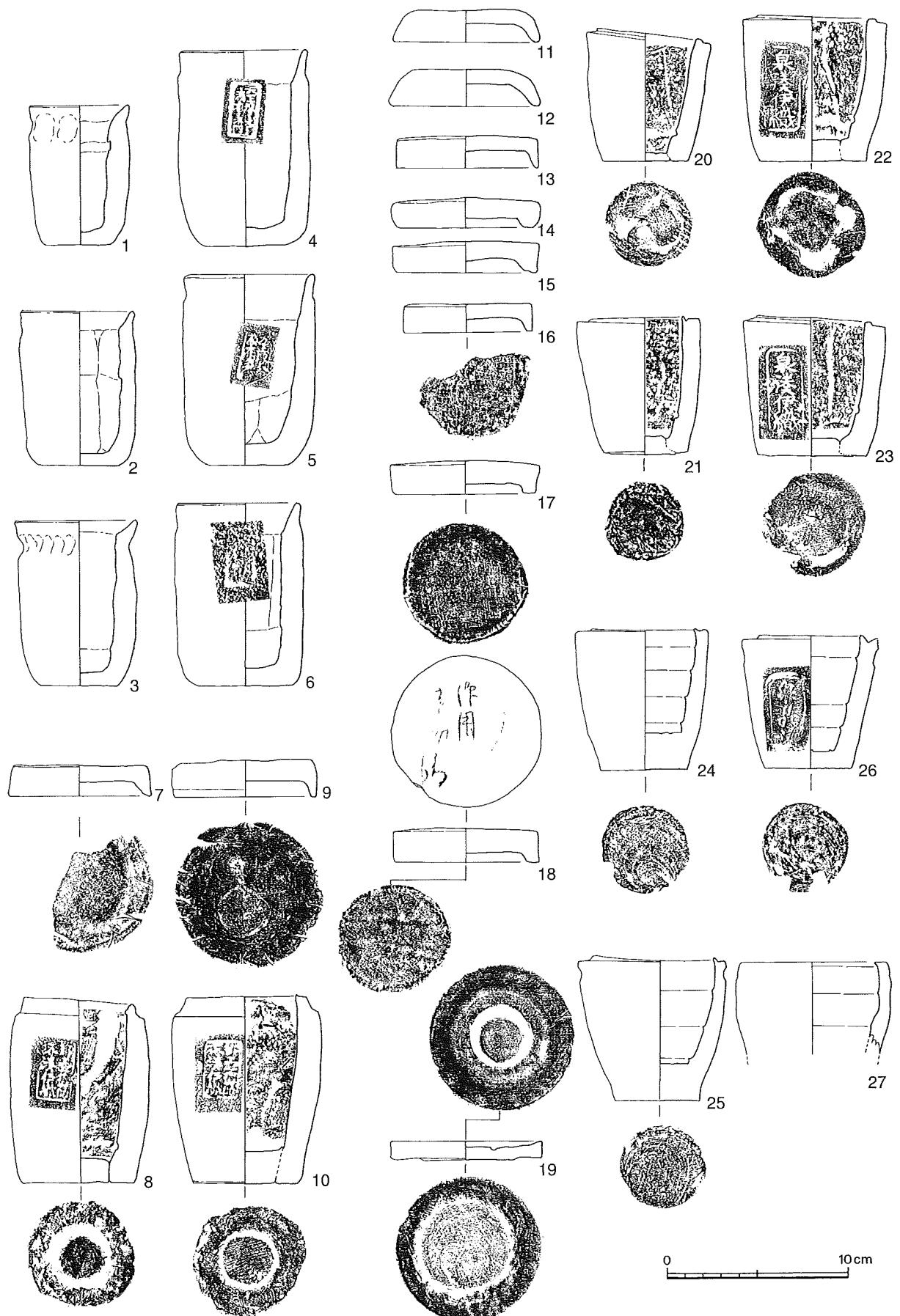
(平田)

【参考文献】

江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房株式会社

財団法人東京都教育文化財団 1994『丸の内三丁目遺跡』東京都生活文化局総務部国際フォーラム事業調整室

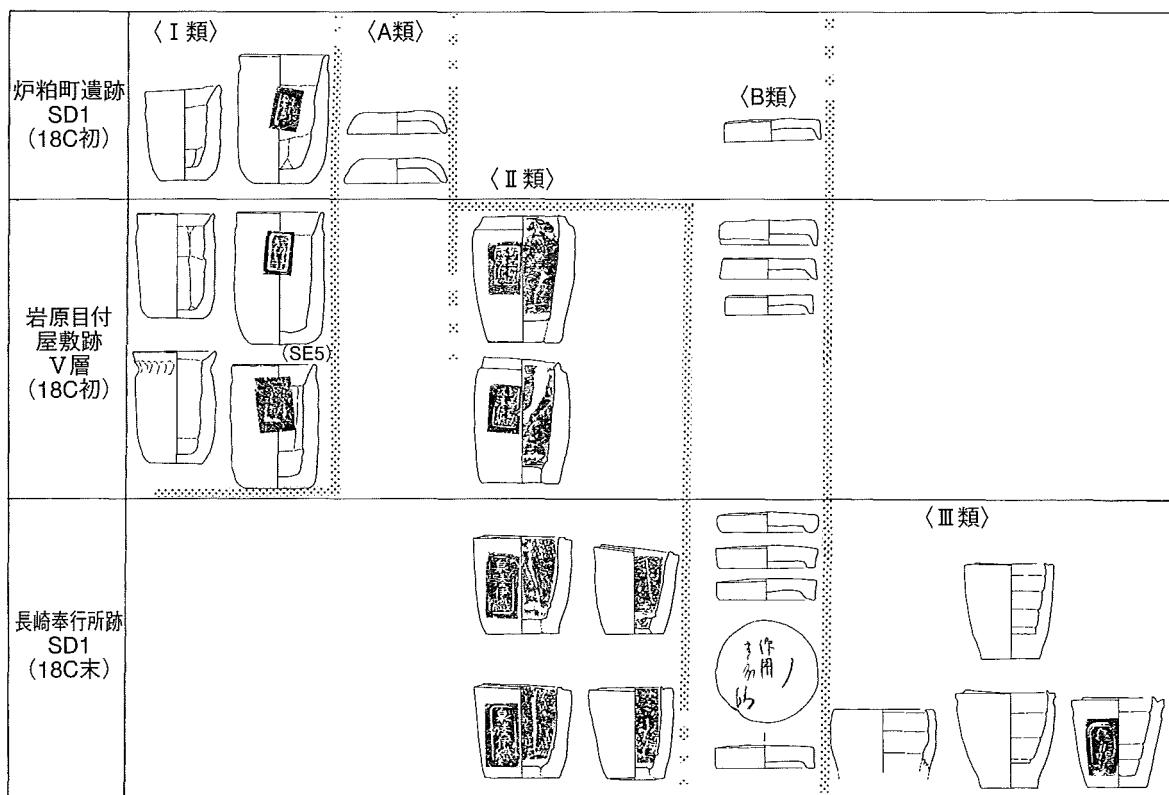
長崎市教育委員会 1998『興善町遺跡』



第87図 焼塩壺実測図 (1 / 3)

No	出土遺構	分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	印銘	備考
1	岩原V層	身 I - a	5.4	3.5	7.5	無銘	
2	岩原V層	身 I - a	6	4	8.4	無銘	
3	岩原V層	身 I - a	6.5	4.2	8.9	無銘	
4	岩原SE5	身 I - b	6.8	4.3	10.4	天下一堺ミなと藤左衛門	
5	炉柏町SD1	身 I - b	6.8	4.2	10.2	天下一堺ミなと藤左衛門	
6	炉柏町SD1	身 I - b	6.3	4.8	9.9	不明	
7	岩原V層	蓋 B - b	6.8	—	—		内面布目あり
8	岩原V層	身 II - b	5	6	1	御壺塩師堺湊伊織	内面布目あり
9	岩原V層	蓋 B - b	7.4	—	—		内面布目あり
10	岩原V層	身 II - b	5.5	5.6	10.1	御壺塩師堺湊伊織	内面布目あり
11	炉柏町SD1	蓋 A	7.6	—	—		身I類に対応
12	炉柏町SD1	蓋 A	7.7	—	—		身I類に対応
13	炉柏町SD1	蓋 B - a	7.8	—	—		
14	奉行所SD1	蓋 B - a	7.8	—	—		
15	奉行所SD1	蓋 B - a	6.4	—	—		
16	岩原V層	蓋 B - b	6.2	—	—		内面布目あり
17	奉行所SD1	蓋 B - b	6.5	—	—		内面布目あり
18	奉行所SD1	蓋 B - b	6.5	—	—		外面墨書・内面布目あり
19	岩原IV層	蓋? C	4.8	—	—		鉢形に対応する蓋か?
20	奉行所SD1	身 II - a	5	4.5	7.2	無銘	内面に布目あり
21	奉行所SD1	身 II - a	4.8	4.3	7.4	無銘	内面に布目あり
22	奉行所SD1	身 II - b	6	5.7	7.9	泉湊伊織	内面に布目あり
23	奉行所SD1	身 II - b	6.4	6.4	8.7	泉湊伊織	内面に布目あり
24	奉行所SD1	身 III - a	5.5	4.6	7.5	無銘	
25	奉行所SD1	身 III - a	6.5	4.6	7.8	無銘	
26	奉行所SD1	身 III - b	5.6	4.6	7.2	泉品○	
27	奉行所SD1	身 III - a	6.2	—	—	無銘	

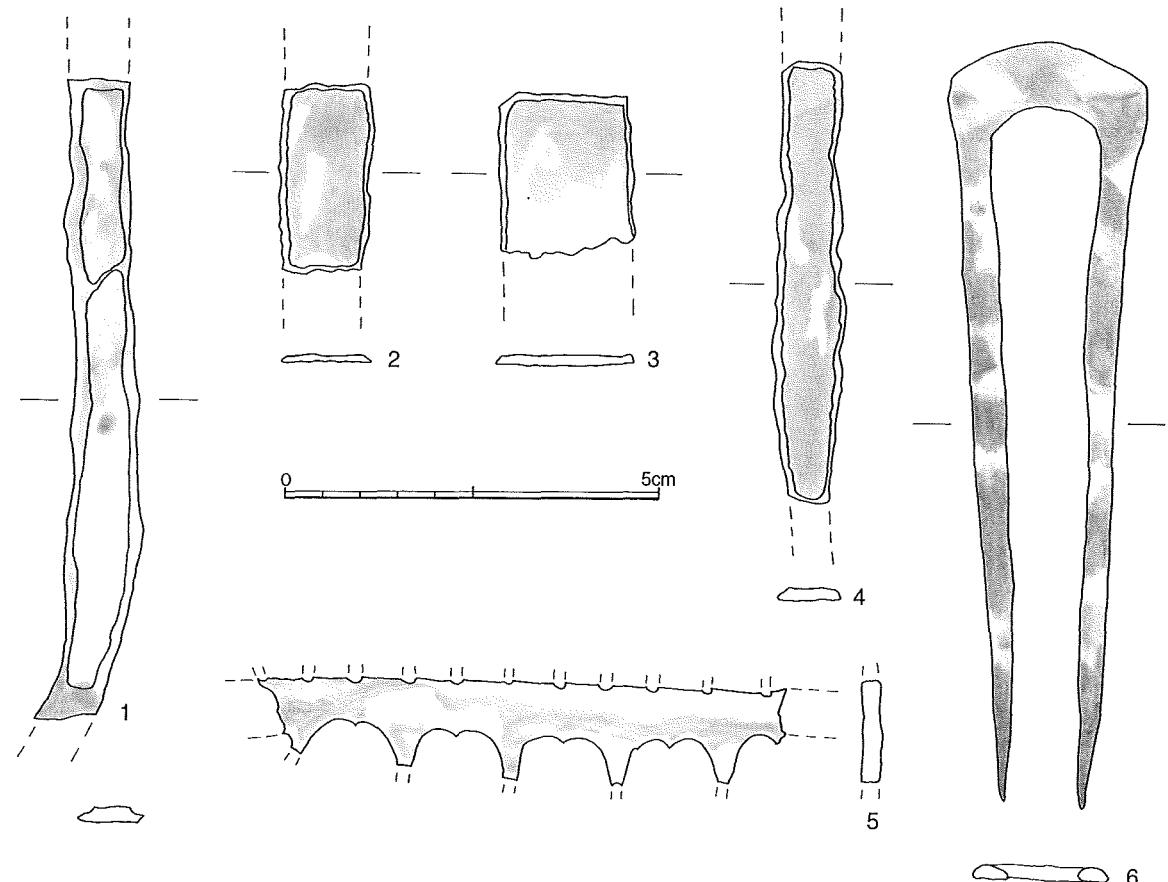
第20表 焼塙壺観察表



第88図 器型分類図 (1/4)

(8) 鰐甲製品・その他

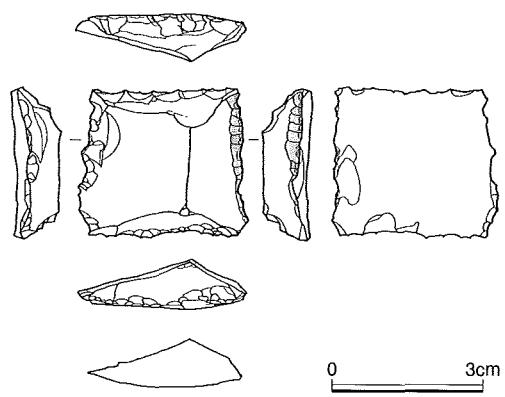
1は、奉行所西区の玉砂利下6層から出土した平たい棒状の製品である。17世紀前半が下限であると考えられる。2は、奉行所南区5e層から出土した1と同様の資料であるが、上下端部は欠損して短い。1・2共に簪の一部か。3は、目付屋敷5e層から出土した板状の製品である。笄の一部であろうか。4は、目付屋敷5層から出土した平たい棒状の製品で特徴は1・2に似る。簪か。共に18世紀初頭が下限である。1～4は、周辺部に腐食が進み、さざくれている点が共通している。5は、奉行所3層から出土した櫛と推測される資料である。一見すると鼈甲に見えるが、硬質で腐食がなく違う原材料であると推測される。6は、目付屋敷1層出土の簪であるが、セルロイド製と推測される(川口)。



第89図 鰐甲・その他実測図 (1/1)

(9) 火打石 黒曜石100点、チャート60点、石英質白色石が3点ほど出土したが、使用痕が見られるのは、黒曜石40点、赤色チャート30点、灰色チャートが6点、石英質が3点ほどであった。火打石は石の鋭利な部分を火打金などで叩いて火花を出すため、しばらく使うと石の稜部が丸くなる。そのため石を割り、新しい稜部を作り再利用するのである。今回は使用痕が明瞭な1点を実測した。奉行所S X 3上4層から出土した。褐色チャート製で、3cm四方である。黒く塗りつぶした部分を用いていたと考えられる。その他の遺物は添付の写真を確認してほしい。(柚木)

江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究辞典』

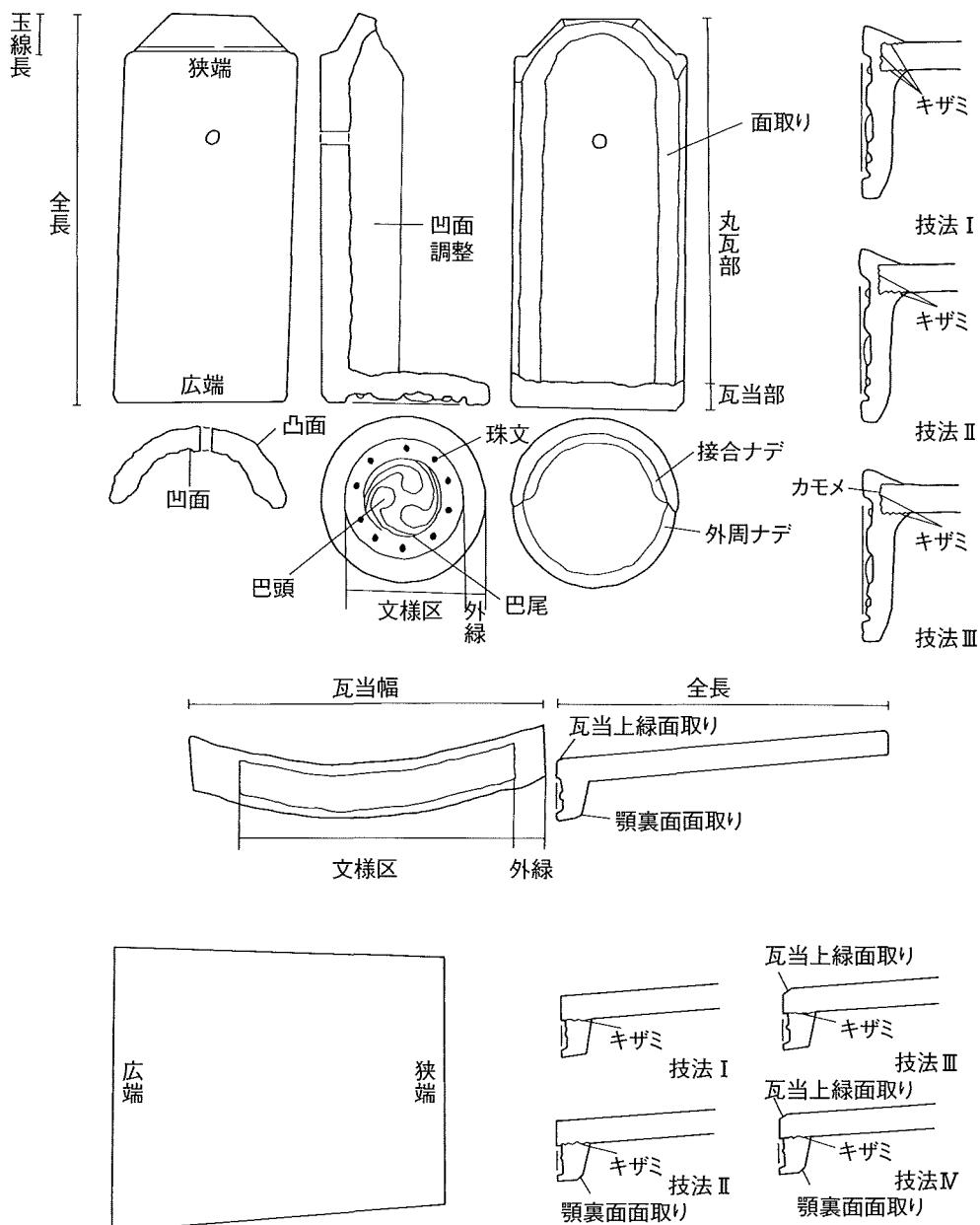


第90図 火打石実測図 (2/3)

(10) 長崎奉行所跡の瓦について

国際航業株式会社文化財事業部 安村 健

長崎奉行所跡（以下奉行所）・岩原目付屋敷跡（以下岩原）・炉粕町遺跡（以下炉粕町）から出土した瓦を報告する。今回の調査でも軒丸瓦・軒平瓦・軒棧瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦などが出土した。長崎奉行所跡（長崎県教育委員会 2004）に引き続き軒丸瓦・軒平瓦は、同範関係をもとに型式番号を設定している。新出土のものに関しては新しい形式番号を設定している。瓦の部位・名称は、第91図に従う。また観察表は、軒瓦・丸・平瓦のみを対象に作成した。



第91図 瓦部分名称

軒瓦製作技法

奉行所・岩原・炉粕町の瓦を整理するにあたり、軒丸瓦・軒平瓦の製作技法・調整の分類は長崎奉行所跡（長崎県教育委員会 2004）と同様に行った。軒丸瓦は接合部・瓦当裏面の調整、接合丸瓦の加工に着目した。接合丸瓦の加工は接合粘土と丸瓦の接着面の面積を多くし軒部分と丸瓦が剥離しないように丸瓦にキザミを入れる技法である。軒平瓦は顎裏面の調整、端部の面取り、接合平瓦の加工に着目した。接合平瓦の加工とは、平瓦と顎を接合する際に接着面を増やすために平瓦にキザミを入れる技法である。その結果、軒丸瓦の接合技法・調整を3分類、軒平瓦の接合技法・調整・外縁の面取りを4分類した。

軒 丸 瓦

接合部の調整では軒丸瓦接合部のナデ（以下接合ナデ）を、瓦当裏面の調整では外周をナデつけるナデ（以下外周ナデ）を確認した。接合ナデ・外周ナデは全ての軒丸瓦で確認できた共通技法であった。

共通技法に加えて丸瓦の先端・凹面・凸面にキザミを入れるもの技法Ⅰ、先端と凹面にキザミを入れるもの技法Ⅱ、先端と凹面にキザミがあり、さらに丸瓦が取りつく瓦当裏面にカキメを入れるもの技法Ⅲとした（図91）。（キザミは丸瓦加工部を指し、カキメは瓦当裏面の加工を指す。これらの用語は『法隆寺の至宝 第15巻』1992小学館より引用。）

軒 平 瓦

接合は顎貼り付け。調整は、顎裏面は接合ナデ。平瓦の接合・接合ナデは確認できるもの全ての軒平瓦で共通技法であった。

共通技法以外未調整のものをⅠ。共通技法に加えて顎裏面の面取りを行うものを技法Ⅱ、瓦当上縁の面取りを行うものをⅢ、顎裏面の面取り・瓦当上縁の面取りを行うものをⅣとした（図91）。

軒 丸 瓦

総点数は63点（点数はすべて破片数）。主要な文様は三巴文である。下記の方針により型式番号を設定し、頭にNM（長崎・軒丸瓦の略）を付し、三桁の数字とアルファベットを組み合わせて表示している。

1 主要な文様による大分類

百位の数字で主要な文様をもとに分類。花十字文は100番台、左巻三巴文は200番台、右巻三巴文300番台、家紋文は400番台とする。

2 文様構成による中分類

十の位の数字で珠文の数をもとに分類。珠文が8個は10番代、9個は20番代、10個は30番代、11個は40番代、12個は50番代、13個は60番代、14個は70番代、15個は80番代、20個は90番代、その他は00番台。

3 同文関係による小分類

寸法や文様構成が似ているものに一の位の数字を与える。

4 同範関係による細分類

範傷等から同じ範であることが明らかなものを、大文字のアルファベットで表記する。

花十字瓦

キリスト教の花十字文を表した瓦である。中心に花十字文があり、それを囲むように珠文が配置される。長崎県下の遺跡で出土しているが、原城跡（長崎県南有馬町）以外はすべて長崎市内からの出土である。花十字瓦については、宮下雅史「花十字紋瓦考」『西海考古』5号がくわしい。

1 150A 花十字瓦珠文12

キリスト教の花十字文を表した瓦である。珠文が花弁の間に3個ずつ、計12個と推定される。外区が長崎県内出土の花十字よりも狭く、花弁と花弁の間に珠文を有するのが特徴である。瓦当全面には、範型から瓦の取り外しを容易にするために散布した砂粒が瓦当全面に付着して残る（以下、ハナレ砂と呼ぶ）。色調は、灰白色。焼成は、良好。技法は不明。岩原V層の出土であるが、文様構成から16世紀末から17世紀初めの製作・使用が考えられる。

MN210番台 珠文8個の左巻きの3巴文

2 211A 新形式 色調は黒灰色。焼成は良好。技法は不明。巴と珠文の間に範傷が複数ある。奉行所地山上から1点出土（Ⅲ期）。

NM220番台 珠文9個の左巻きの3巴文

3 NM221A 色調は黒灰色のものと灰白色のものがある。焼成は良好。技法はⅡ。巴と珠文の間に範傷が複数ある。熊本県天草郡苓北町に所在する富岡城から搬入され再利用された瓦（富岡城Ⅲ苓北町教育委員会 1998 第46図 30他）。岩原V層や奉行所S D39・S D41などから計11点出土。（Ⅱ期）。

4 NM221B 色調は灰色。焼成は良好。技法は不明。岩原S X 8から1点出土（出土位置では年代はⅣ期に該当するが昨年の成果よりⅢ期）。

5 NM221C 色調は黒灰色。焼成は良好。技法は不明。岩原4層から1点出土（出土位置では年代はⅣ期に該当するが昨年の成果よりⅢ期）。

6 NM222A 色調は灰色。焼成は良好。技法は不明。岩原IV層や奉行所石垣13前から計2点出土（出土位置では年代はⅣ期に該当するが昨年の成果よりⅢ期）。

7 NM222C 色調は黒灰色。焼成は良好。技法はⅡ。瓦当面にキラコ付着。岩原S X 6や奉行所S D39などから計4点出土（出土位置では年代はⅣ期に該当するが昨年の成果よりⅢ期）。

NM230番台 珠文10個の左巻きの3巴文

8 NM231A 色調は黒褐色。焼成は良好。技法は不明。岩原V层から1点出土（Ⅲ期）。

9 NM234A 色調は黒褐色。焼成は良好。技法は不明。巴と珠文の間に範傷がある。奉行所S D39から1点出土（Ⅳ期）。

NM240番台 珠文11個の左巻きの3巴文

10 NM242A 色調は黒灰色。焼成は良好。岩原IV層より1点出土（出土位置の年では代はIV期に該当するが昨年の成果よりIII期）。

NM250番台 珠文12個の左巻きの3巴文

11 NM251A 色調は黒灰色。焼成は良好。技法は不明。瓦当面にハナレ砂の痕跡がある。岩原IV層や奉行所SD36裏込めなどから計6点出土（IV期）。

12 NM252A 色調は黒灰色。焼成は良好。技法は不明。岩原IV層や奉行所SD39から3点出土（IV期）。

NH310番台 珠文8個の右巻きの3巴文

13 NM311A 色調は褐灰色。焼成は良好。技法は不明。瓦当面にはハナレ砂の痕跡がある。岩原IV層から1点出土（出土位置の年代ではIV期に該当するが昨年の成果よりIII期）。

14 NM311B 色調は灰色。焼成はやや軟質。技法は不明。瓦当面にキラコ片付着。岩原IV層から1点出土（出土位置では年代はIV期に該当するが昨年の成果よりIII期）。

15 NM312A 色調は黒褐色。焼成は良好。技法は不明。岩原SD1より1点出土（出土位置では年代はIV期に該当するが昨年の成果よりIII期）。

NH320番台 珠文9個の右巻きの3巴文

16 NM321A 新形式 色調は灰色。焼成は良好。技法は不明。瓦当面にハナレ砂の痕跡がある。岩原Vd層から1点出土（III期）。

NH340番台 珠文11個の右巻きの3巴文

17 NM341A 珠文11個の右巻きの3巴文。色調は灰色。焼成は良好。技法は不明。瓦当面にハナレ砂が残る。岩原SD7・Vd層などから計3点出土（出土位置では年代はIII期に該当するが昨年の成果よりII期）。

NM350番台 珠文12個の右巻きの3巴文

18 NM351A 色調は黒灰色。焼成は良好。技法は不明。瓦当面にハナレ砂の痕跡がある。岩原SB1-7・Vd層、奉行所石垣14前V層、炉粕町SD1などから計10点出土（II期）。

19 NM353A 新形式色調は黒灰色。焼成は良好。技法は不明。岩原SD10から1点出土（IV期）。

軒平瓦

総点数は32点。主要な文様は上向き三葉文と下向き三葉文である。軒丸瓦と同じ方針により型式番号を設定し、頭にNH（長崎・軒平瓦の略）を付している。

1 主要な文様による大分類

中心飾が上向きの均整唐草文は100番台、中心飾が下向きの均整唐草文は200番台、家紋文は300番

台，その他は400番代とする。

2 文様構成による中分類

中心飾りをもとに分類。10番代～60番代は三葉文，70番代はその他の三葉文。90番代は，その他の文様とする。

3 同文関係による小分類と4同範関係による細分類の方針は軒丸瓦と同じである。なお，改範や範傷の進行がある場合は，小文字のアルファベットを使用する。a→b→cとなるほど，範への彫り加えや範傷が進行することになる。

NH111 中心飾りが上向きの3葉文で唐草が下上2回転する均正唐草文。葉には稜線が入り，各葉の下に珠文がある。同文が，小瀬戸番所遺跡（長崎市教育委員会 1995）や出島和蘭商館跡（長崎市教育委員会 2002）で出土している。同範関係は不明。

20 NH111A 色調は黒灰色。焼成は良好。技法はⅡ。岩原S E 4，奉行所S D 39などから計4点出土（Ⅲ期）。

21 NH111B 色調は黒灰色。焼成は良好。技法は破損のため不明だが顎裏面の面取りを行う。岩原IV層などから計2点出土（出土位置では年代はIV期に該当するが昨年の成果よりⅢ期）。

22 NH111C 色調は黒灰色。焼成は良好。技法はⅡ。炉粕町S K11から1点出土（Ⅲ期）。

23 NH111D 色調は黒灰色。焼成は良好。技法はⅡ。岩原IV層，炉粕町S D 1から計2点出土（Ⅲ期）。

24 NH111F 色調は黒灰色。焼成は良好。技法はⅡ。瓦当面・平瓦凹面・凸面前面にキラコ片が付着する。炉粕町S K11から3点出土（Ⅲ期）。

25 NH111G 色調は灰褐色。焼成は良好。技法はⅡ。中心葉とその下の珠文の間に範傷がある。岩原IV層，炉粕町S D 1から計2点出土（Ⅲ期）。

26 NH111H 色調は灰褐色。焼成は良好。技法は不明。炉粕町S D 1から2点出土（Ⅲ期）。

27 NH111I 新形式 色調は黒灰色。焼成は良好。技法はⅡ。唐草の下方に珠文があるのが特徴である。岩原IV層から1点出土（出土位置では年代はIV期に該当するが文様構成よりⅢ期の可能性がある）。

NH120番台 中心飾りが上向きの3葉文で唐草が下上に2回転する均正唐草文

28 NH121A 色調は黒灰色。焼成は良好。技法は不明。瓦当の文様面にハナレ砂の痕跡がある。岩原IV層から1点出土（出土位置では年代はIV期に該当するが昨年の成果よりⅡ期）。

29 NH124A 新形式 色調は黒灰色。焼成は良好。技法はⅡ。瓦当の文様面にハナレ砂の痕跡がある。炉粕町S D 1から1点出土（Ⅲ期）。

NH220番台 中心飾りが下向きの3葉文で唐草が上に2回転する均正唐草文

30 NH221A 色調は黒灰色。焼成は良好。技法はⅠ。富岡城から搬入され再利用された瓦（富岡城Ⅲ 苓北町教育委員会 1998 第49図 57～59他）。岩原V層などから4点出土（Ⅱ期）

NH130番台 中心飾りが上向きの3葉文で唐草が下上に2回転する均正唐草文

31 NH132A 色調は黒灰色。焼成は良好。技法はI。岩原V e, SX8などから計4点出土（Ⅲ期）。

32 NH194A 新形式 中心飾りしか残存しない。色調は黒灰色。焼成は良好。技法はI。瓦当の文様面にハナレ砂の痕跡がある。炉粕町SD1から1点出土（Ⅲ期）。

軒 構 瓦

良好な資料が少ないため型式番号は設定していない。軒構瓦は全てⅣ期に属する。

33 珠文12個の右巻きの小丸瓦当と平部瓦當に唐草が残る軒構瓦。色調は黒灰色。焼成は良好。目付IV層から出土。

34 珠文12個の左巻きの小丸瓦当と平部瓦當に唐草が残る軒構瓦。小丸瓦當には外区と珠文・巴尾間に範傷がある。色調は黒灰色。焼成は良好。目付IV層から出土。

35 珠文8個の右巻きの小丸瓦当と中心飾りの外に唐草が2回転する左軒構瓦。この瓦以外左構瓦は見られないで、屋根の蟻羽に葺かれていたものであろう。色調は黒灰色。焼成は良好。目付IV層から出土。

36 中心飾りが三葉でその外に2葉その外に唐草を有する軒構瓦。右外縁の上部は隅きり。色調は黒灰色。焼成は良好。目付SD1から出土。

37 珠文12個の左巻きの小丸瓦当と中心飾りが三葉でその外に2葉その外に唐草を有する軒構瓦。色調は黒灰色。焼成は良好。目付IV層から出土。

鬼 瓦

2点ある。すべて色調は黒灰色。焼成は良好。38は、表面の周縁に無文の突帶がめぐる。文様の詳細は不明。裏面は周縁に突帶を貼付。岩原V d層から出土（Ⅲ期）。39は表面の中心が凸型円形で外側には突帶がある。その突帶にキザミが施されている。文様の詳細は不明。裏面は周縁に突帶を貼付。炉粕町SD1から出土（Ⅲ期）。

鰐 瓦

鰐は2点ある。40・41共に胴部。鱗はU字形の沈線。40は尾鰐が取り付く部分。尾鰐は破損している。目付けV dとSE2-4出土のものが接合した。41には釘穴が残る。SE2-4から出土。これらはどちらもSE2-4から出土しているため同一固体の可能性が高い。

棟 込 瓦

42 屋根の装飾に使用される瓦。小片のため詳細は不明。目付V dから出土。

鳥 食 瓦

43 屋根の棟の端、鬼瓦の上部で使用される。311Bの瓦範を使用した右巻の三巴文。瓦当面は橙色に変色しており2次焼成の可能性がある。瓦当裏面には接合のためのカキメが残る。瓦当面は橙色、裏面は黒灰色で焼成は良好。炉粕町SD1から出土。

平 瓦

大量の平瓦片が出土したが全てが破片のため詳細は不明。

玉縁丸瓦

全長のわかるものはわずかに3点。すべてコビキBである。

44は、全長29.1cm、玉縁長2.9cm。凸面は玉縁から筒部狭端までが横なで、他は縦なで。凹面は、布袋痕が残り、側縁と広端には面取がある。色調は黒灰色で焼成は良好である。目付け東西トレンチ2出土。

45は、全長29.6cm、玉縁長3.5cm。凸面は玉縁から筒部狭端までが横なで。凹面は、布袋痕が残り、玉縁端と側縁、広端には面取がある。色調は灰色で焼成は良好である。目付IV層出土。

46は、全長26.8cm、玉縁長2.3cm。凸面は玉縁から筒部狭端までが横なで、他は縦なで。凹面は、布袋痕と竹棒圧痕がある。玉縁端と側縁、広端には面取がある。色調は黒灰色で焼成は良好である。目付IV層出土。

刻 印

47「小左衛門」の刻印が押印されている丸瓦。富岡城から搬入され再利用された瓦（富岡城Ⅲ 苓北町教育委員会 1998 第51図 71~73他）。奉行所 S D41から出土。

編 年

長崎市内の遺跡では瓦が多く出土する。奉行所、岩原、炉粕町の調査でも大量の瓦が出土した。屋根に葺かれる瓦の大半は平瓦・丸瓦である。これらの瓦は近世になると形式化され、現在まであまり変わらない。そこで昨年の調査で出土したものも含め軒瓦に視点をあて瓦の編年を組む。（図97）

I-1期 NH142Aが玉砂利遺構Ⅶc層から出土。出土点数が少數のため詳細は不明。

I-2期 軒丸瓦は花十字（NM190A・180A・150A）がこの時期に該当する。軒平瓦はS D20出土のNH142Bと、桐文のNH371Aがある。

II期 この時期の瓦は大きく2種類に分けることができる。石垣1前のVf層から出土のNM351A・NH121Aと奉行所設立時の整地層などに多く含まれるNM221A・NM471A、NH221A・141A・161A・191Aである。

III期 奉行所SB5・石垣5の周辺と、炉粕町SD1から出土したものが中心になる。SB5周辺からはNH221A・NM221が多く出土した。石垣5周辺からは、NM222A・241A、NH111A~C・NH221A・222A・151A・152Aが出土した。この中では、NM241A、NH222Aが比較的まとまって出土している。

炉粕町遺跡SD1からはNM252A、NH111D・111G・111Hが少數ではあるが出土している。

IV期 IV期以降の瓦は棟瓦が中心になる。棟瓦はIII期には出土しておらずIV期に出現する。ただしIV期のなかでの上限は不明である。棟瓦は奉行所SD1以外の遺構に伴って出土したものが少ない。SD1は18世紀末に廃棄されており棟瓦の制作年代は分からない。

考 察

I – 2期 遺構に伴って出土した花十字瓦は無いが、キリスト教との関係が指摘されていて（宮下雅史「花十字紋瓦考」『西海考古』5号），16c末～17初頭のものと考えられる。NH142Aの系譜を引くNH141Bと、桐文のNH371Aがある。桐文は長崎市内での出土は見られず、持ち込まれた可能性が高い。花十字とどの軒平瓦がセットになるかは不明。

II期 奉行所より下層である石垣1の前のVf層からの一括資料の瓦がある。その瓦はNM351A・NH121Aである。Vf層からは他の瓦の出土は無く、その瓦と共に範する陶磁器の年代は17c中葉であった。この時期に立山に建っていた建物は井上筑後守屋敷である。このことから慶安元年（1648）に建てられた井上筑後守屋敷の瓦ということが判明した。これらの瓦はこの位置以外からの出土はほとんど見られず、石垣1上の井上屋敷の瓦を投棄したものであろう。

奉行所建設時の整地層や奉行所以前の整地層から出土瓦として、NM221A・NM471A、NH221A・141A・161A・191Aがある。これらの瓦は、すべて富岡城と同じ文様である。富岡城の発掘調査では瓦の出土がほとんどなく、他所へ運ばれた可能性が指摘されている（熊本県天草郡苓北町教育委員会1998）。軒丸瓦の中ではNM221が、軒平瓦の中ではNH221Aの出土数が圧倒的に多く、NM221とのセット関係にあると考えられる。文献資料でも『長崎志正編』（丹羽漢吉・森永種夫校訂1973）によれば寛文11年（1671）に「是迄ノ東屋敷ヲ此地ニ移シ、天草コボチ屋敷ヲ取寄セ長屋等ニ用之」とあり『崎陽群談』（中村易直・中村質校訂1974）では延宝元年（1673）に「西屋舗の内東屋舗引取家作出来、門長屋ハ天草の城はかれ之古道具有之候を申上当地へ受取候」とある。このことからも延宝元年（1673）の奉行所建設時に富岡城（熊本県天草郡苓北町）から持ち込まれた瓦ということが分かる。

III期 SB5周辺からも富岡城からの搬入瓦が多く出土している。SB5周辺から出土した瓦の多くは富岡城から搬入されたものであることは『長崎志正編』や『崎陽群談』の記述と一致する。しかし石垣5の瓦は、多くの種類の瓦で建てられていた。石垣5に葺かれていた瓦には富岡城の瓦は軒平瓦が1点含まれているだけであとは、NH222A・111系統・151A・152Aなどである。その中で、比較的まとまって出土しているのがNM241A・NH222Aである。NH222Aは14点と比較的まとまっているが、他の遺跡では見ることができない。少数派では、111系統・151A・152Aがある。NH111は他遺跡でも出土するため長崎で当時多く使用されていた文様である。奉行所・岩原・炉粕町のNH111系統の出土は9種類ある。この種の瓦はI期・II期では見られず、延宝元年（1673）の奉行所設立時に使用されたものである。長崎市内の他遺跡では小瀬戸番所遺跡、出島和蘭商館跡、崇福寺などにみられる。元禄元年（1688）に設立された小瀬戸番所に使用されたことが（扇浦正義編1995）、出島和蘭商館跡では寛政の大火（1798）より数十年前であることが指摘されている（高田美由紀編2002）。崇福寺の護法堂では享保16年（1731）の創建時に使用されている（文化財建造物保存技術協会 1995）。このことから少なくともNH111系統の瓦の製作年代は延宝元年（1673）の奉行所設立時から享保16年（1731）の崇福寺の護法堂の創建時までの約60年間である。151Aは同文様が桜町遺跡で出土し（扇浦正義2000）、152Aは少しかたちの崩れた同文様が万才町遺跡で出土している（宮崎貴夫・寺田正則編1995）。このことから石垣5に葺かれていた瓦は、奉行所でのみ出土する瓦と、長崎市内の他遺跡でも出土する瓦に分けられる。NH222Aは富岡城から持ち込まれた瓦に似ていてその瓦をモチーフ

に製作された可能性がある。そして、奉行所だけでしか出土しないため、奉行所専用に製作されたものである。その他の瓦は、他遺跡でも出土するため奉行所に限ったものでなく他にも供給していたものである。さらに、葺き替えの可能性も考えられる。

技法的なものでは、I－2期・井上筑後守屋敷の瓦には離れ砂がある。III期の瓦にはNM222A・312、NH111・222Aなどには見られないが、NM241A・151A・152Aなどには離れ砂が見られる。万才町遺跡で出土している瓦はIV－1期（1690年代～1740年代）に位置づけられ、離れ砂があることが指摘されている。17c後半から18c初めの瓦には、離れ砂を使用するものとしないものがあり、瓦製作技法の中でちょうど過渡期にあったと考えられる。

IV期 『長崎志正編』によると享保2年（1717）に「屋敷内悉ク平地ニ均シテ本屋長屋全ク造リ替ラル」とある。棟瓦の出現は少なくともこの時期以降であるが、出現時期は不明。棟瓦は良好な資料が少なく、遺構に伴って出土しているものが少ない。その中で奉行所SD1から出土し、なおかつ他遺跡出土が見られるものを選出した。棟瓦1の同紋は小瀬戸番所跡や興善町（宮下雅史編1999）、出島で出土している。棟瓦2の同文は小瀬戸番所跡から出土している。棟瓦3の同紋は万才町跡（扇浦正義1996）や出島（高田美由紀編2002）から出土している。棟瓦の多くは特定の遺跡だけではなく、複数の遺跡から出土する場合が多い。花十字や井上筑後守屋敷、奉行所石垣5のNH222Aが特定の建物に使用されたのに対し、そういう意識は無く製作された瓦である。

ま　と　め

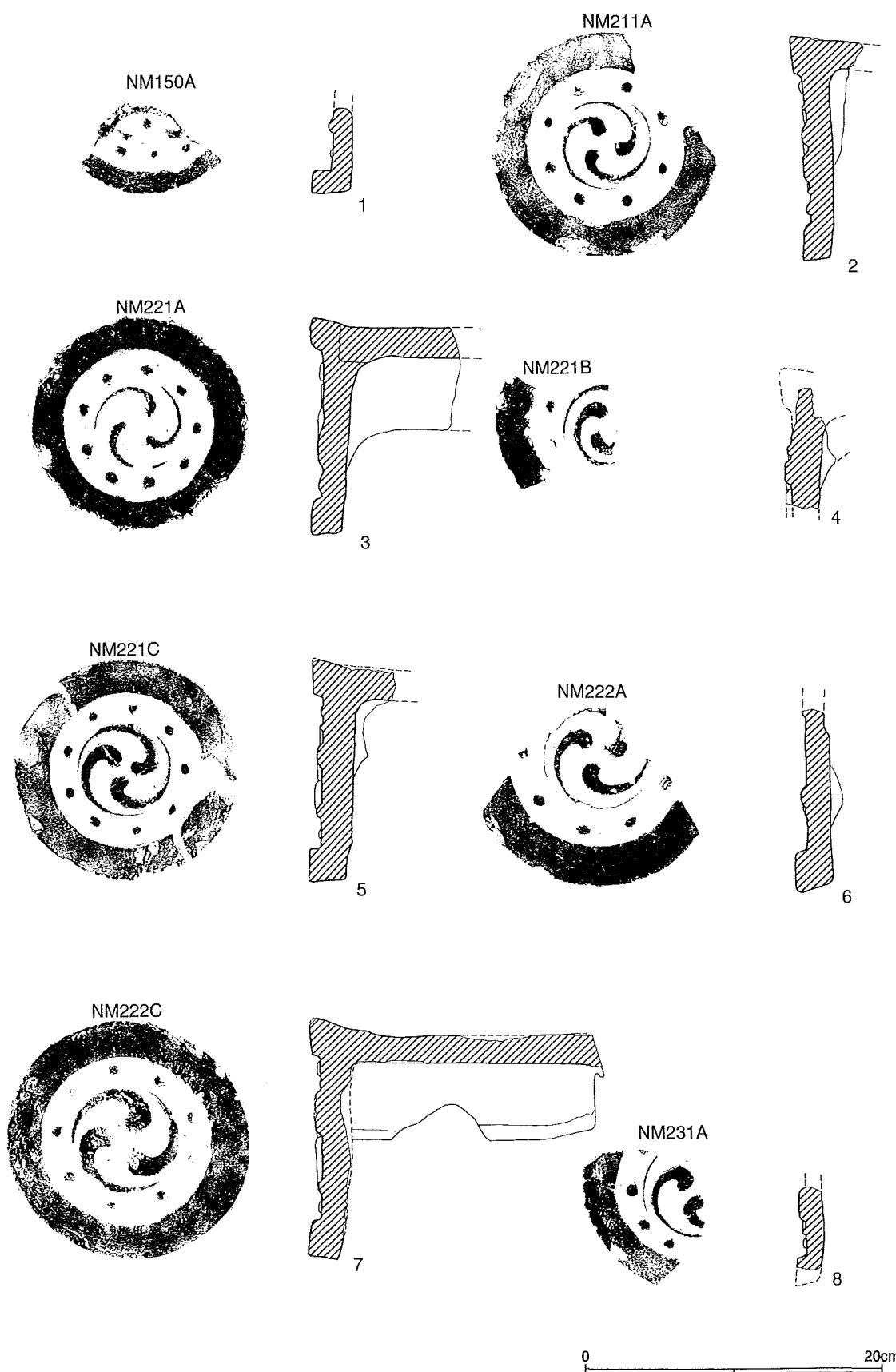
長崎奉行所跡、岩原目付屋敷跡、炉粕町遺跡の瓦を見てきた。これらの遺跡は17c初頭から幕末にかけて文献資料を絡めて年代を抑えることのできる数少ない遺跡のひとつである。奉行所の瓦の出土量に対し、岩原目付屋敷設立以降の瓦の出土が極めて少なく編年の中にはほとんど組み込まれていない。岩原設立後立て替えの際に持ち出され廃棄された可能性を考えなければならない。

立山は、山のサンタ＝マリア教会→井上筑後守屋敷→長崎奉行所・岩原目付屋敷という土地利用の変遷になっている。山のサンタ＝マリア教会の時期の相当する建物跡は検出されていないが、花十字瓦は出土している。しかし、これらの瓦が立山で使用されていたかは不明である。井上筑後守屋敷建物の遺構は検出されていないが、一括資料であること、共範遺物が16c中葉であることなどからこの建物の瓦であると判断した。奉行所でも設立時に使用された瓦と享保2年（1717）以降に使用されたものがわかった。このように、17c初頭から立山の建物に対する瓦ということで編年をおこなった。

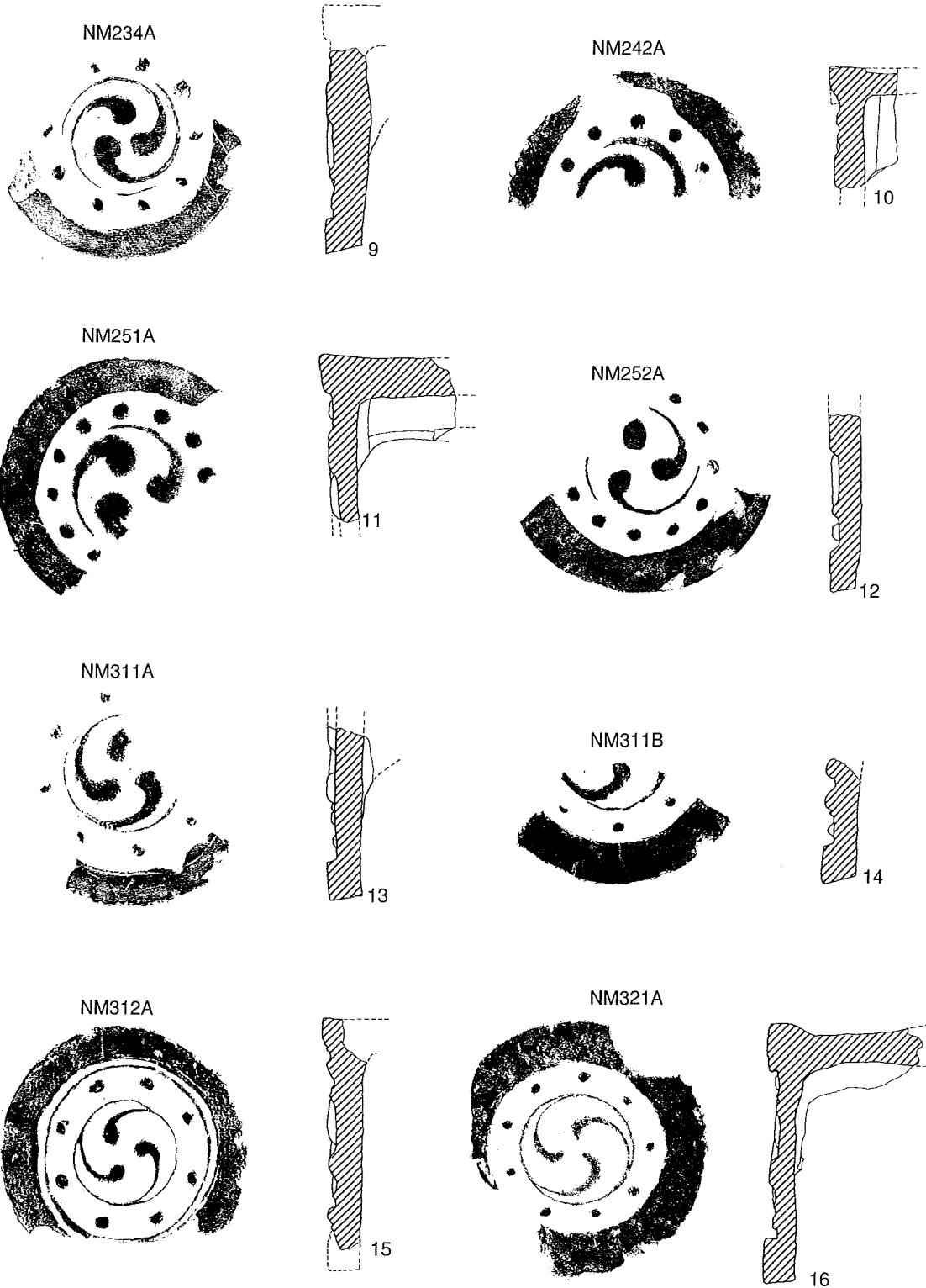
問題点としては、NH111系統の出現時期・製作技法の変遷・棟瓦の出現時期などがあり、今後の資料の増加により、いっそうの検討が必要となる。

【引用・参考文献】

- 丹羽漢吉・森永種夫校訂 1973『長崎実録大成』正編 長崎文献社
中村易直・中村質校訂 1974『崎陽群談』近藤出版社
毛利光俊彦編 1992『法隆寺の至宝 瓦』15巻 小学館
永松実編 1992『朝日新聞社長崎支局敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市埋蔵文化財調査協議会
永松実編 1993『栄町遺跡』長崎市埋蔵文化財調査協議会
宮崎貴夫・寺田正則編 1995『万才町遺跡 長崎県庁新別館建替えに伴う発掘調査報告書』長崎県教育委員会
扇浦正義編 1995『小瀬戸番所跡—宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市埋蔵文化財調査協議会
文化財建造物保存技術協会 1995『国宝 崇福寺大雄宝殿・第一峰門保存修理工事報告書』
後藤宏爾 1996「名護屋城跡出土の軒平瓦」『研究紀要』第2集 佐賀県立名護屋城博物館
扇浦正義編 1996『朝日生命ビル建設に伴う万才町遺跡発掘調査概要報告書』長崎市埋蔵文化財調査協議会
熊本県天草郡苓北町教育委員会 1996~2002『苓北町文化財調査報告 富岡城跡 I ~ V』第4~8集
宮下雅史編 1999『興善町遺跡—東邦生命保険第2ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』長崎市教育委員会
杉本宏 2000「棧瓦考」『考古学研究』46巻4号 考古学研究会
扇浦正義編 2000『桜町遺跡—サンガーデン桜町マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』長崎市埋蔵文化財調査協議会組織
高田美由紀・古賀朋緒編 2001『国指定史跡 出島和蘭商館跡 護岸石垣復元事業に伴う発掘調査及び事業報告書』長崎市教育委員会
高田美由紀編 2002『国指定史跡 出島和蘭商館跡 道路及びカピタン別荘跡発掘調査報告書』長崎市教育委員会
宮下雅史 2003「花十字紋瓦考」『西海考古』5号 西海考古同人会
扇浦正義 2003『勝山町遺跡—長崎市桜町小学校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』長崎市教育委員会
川口洋平編 2004『長崎奉行所（立山役所）跡 炉粕町遺跡』長崎県教育委員会 2004

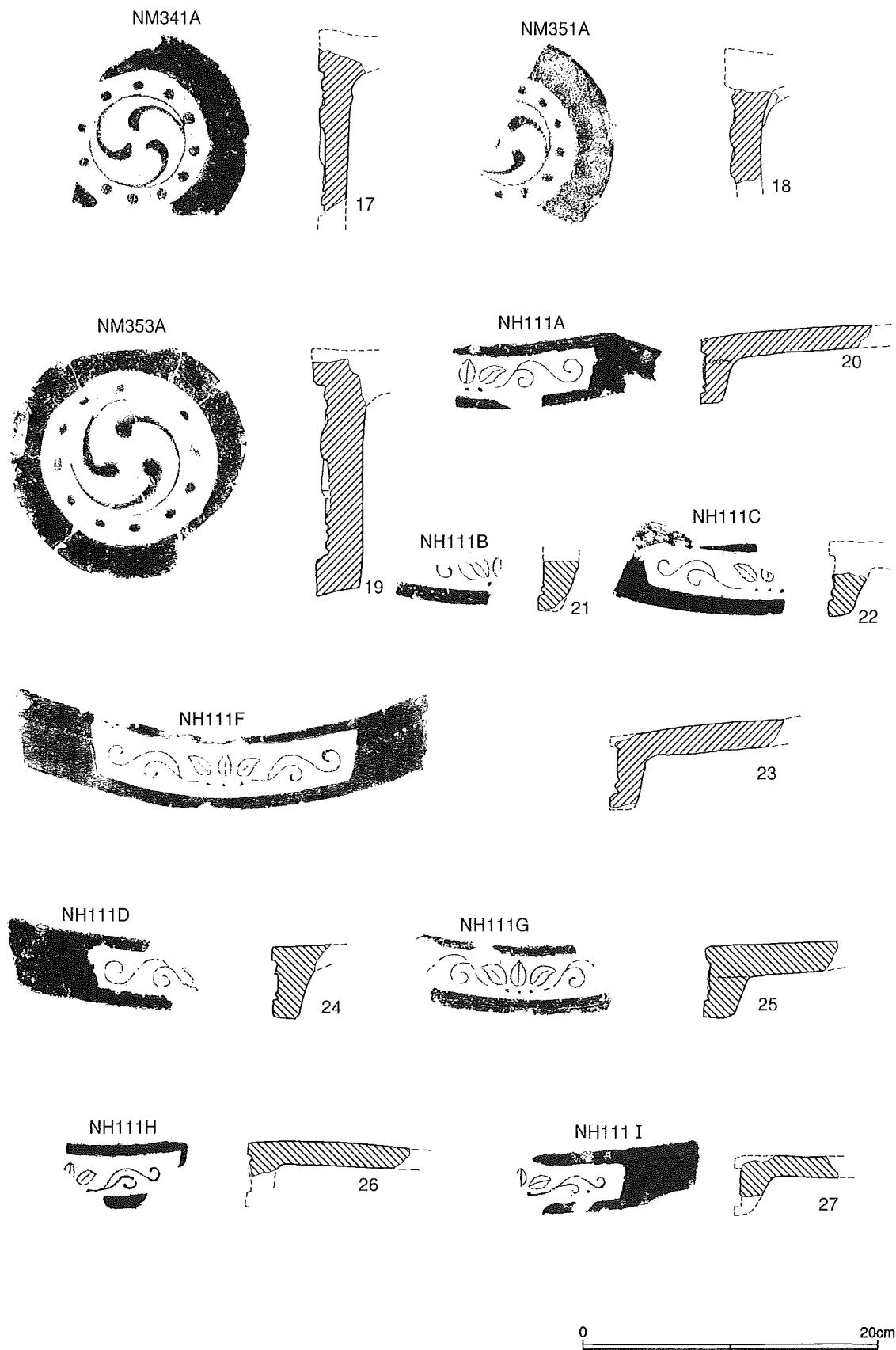


第92図 軒丸瓦① (1 / 4)

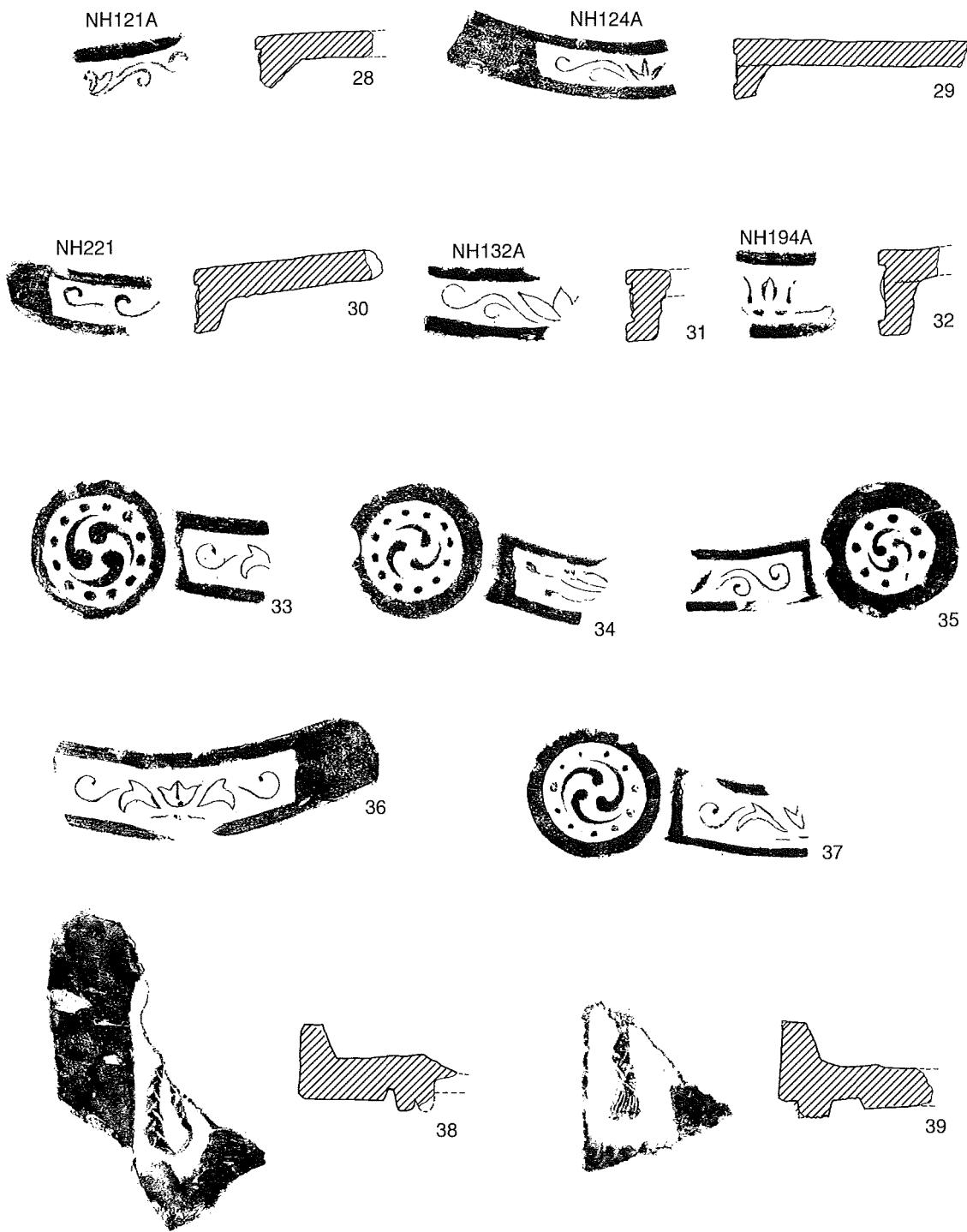


0 20cm

第93図 軒丸瓦② (1 / 4)

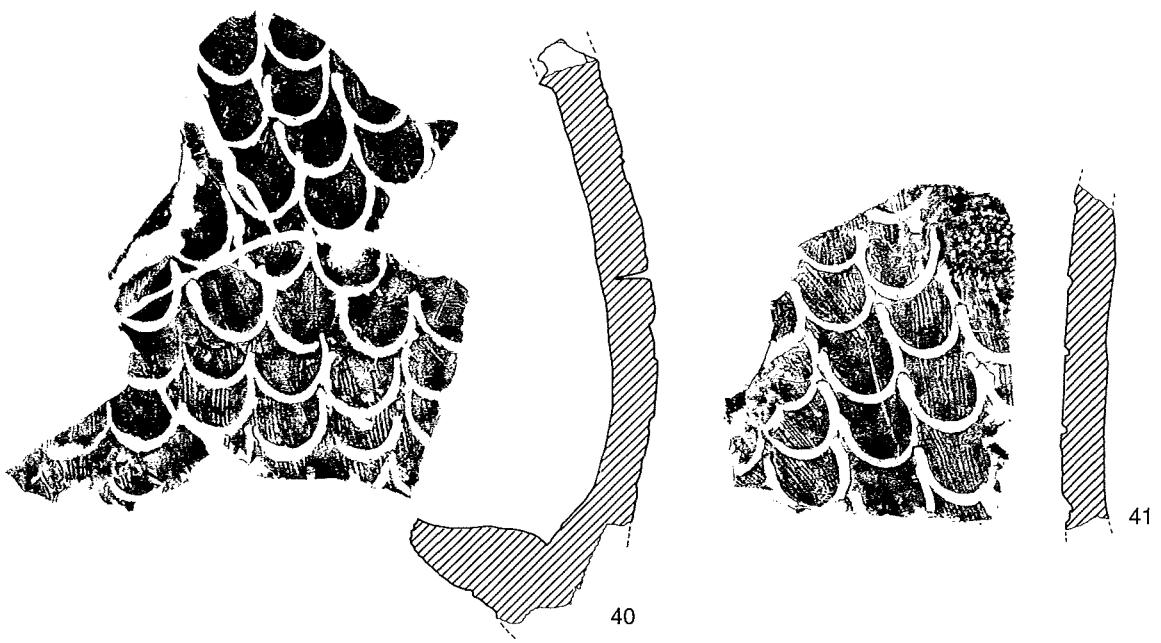


第94図 軒丸瓦③・軒平瓦① (1/4)



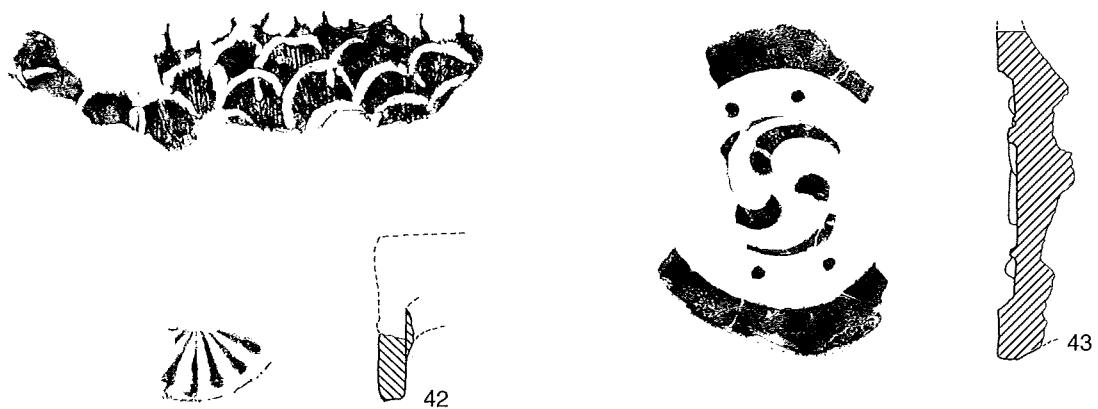
0 20cm

第95図 軒平瓦②・棟瓦・鬼瓦 (1/4)



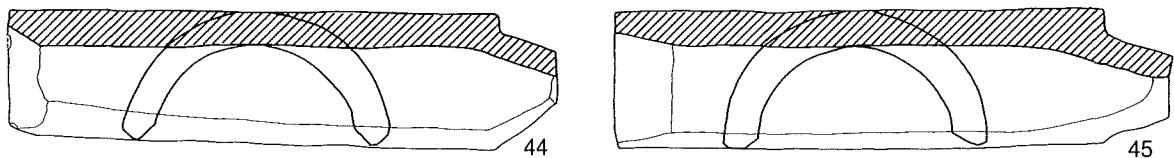
40

41



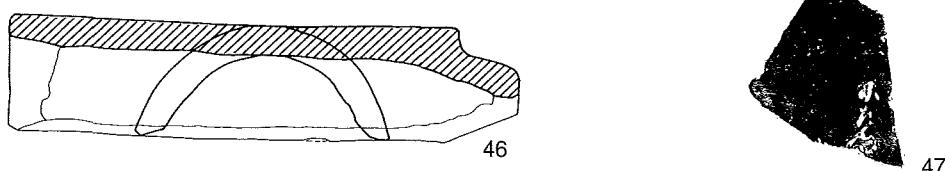
42

43



44

45



46

47

0 20cm

第96図 道具瓦・丸瓦・刻印瓦 (1/4)

I 1期	井上筑後守屋敷 富岡城	NH142A	NM471A
		NM221A	NH161A
II 期	NM221A	NH221A	NH141A
	NM351A	NH191A	
III 期	NH121A	NH190A	NH111H
	NH371A	NM180A	NM252A
IV 期 以 降	NH142B	NM222A	NH111D
	NH150A	NH222A	NH211A
石垣5	NH142A	NH111A	NH311A
	NH151A	NH111B	NH111F
その他	NH152A	NH111C	
	NH151A		
奉行所 SD1	NH111D	NH111E	NH111F
	NH111H	NH111G	
様1	NH111I	NH111J	
	NH111K	NH111L	
様2	NH111M	NH111N	
	NH111O	NH111P	
様3	NH111Q	NH111R	
	NH111S	NH111T	

第97図 編年図 (1 / 6)

軒丸瓦

型式番号	図版番号	時期	点数	接合	珠文	直径	外区幅	瓦当厚	備考
150A	1	I - 2	1	-	12	-	1.6	1.2	
211A	2	III	1	-	8	14.9	2.5	1.7	
221A	3	II	11	II	9	14.3	2.3	1.6	
221B	4	III	1	-	9	-	2.5	1.8	
221C	5	III	1	-	9	15.0	2.4	1.9	
222A	6	III	2	-	9	-	2.8	1.3	
222C	7	III	4	-	9	16.5	2.6	1.7	キラコ
231A	8	III	1	-	10	-	2.3	1.1	
234A	9	IV	1	-	10	-	2.1	2.5	
242A	10	III	1	-	11	-	2.3	1.6	
251A	11	IV	6	-	12	-	2.4	1.3	ハナレ砂
252A	12	IV	1	II	12	-	2.8	1.5	
311A	13	III	1	-	8	-	2.2	1.5	ハナレ砂
311B	14	III	1	-	8	-	2.6	1.5	キラコ
312A	15	III	1	-	8	14.6	2.0	1.6	
321A	16	III	1	-	9	16.2	2.8	1.1	ハナレ砂
341A	17	II	3	-	11	-	2.7	1.6	ハナレ砂
351A	18	II	10	-	12	-	2.5	1.8	ハナレ砂
353A	19	IV	1	-	12	14.3	2.5	2.1	

軒平瓦

型式	図版番号	時期	点数	接合	瓦当幅	瓦当高	脇区右	脇区左	弧深	備考
111A	20	III	4	II	-	4.3	4.8	-	-	
111B	21	III	2	-	-	-	-	-	-	
111C	22	III	1	II	-	4.9	-	-	-	
111D	23	III	2	II	-	4.9	-	5.8	-	
111F	24	III	3	II	28.4	4.9	5.5	5.3	3.4	キラコ
111G	25	III	2	II	-	4.7	-	-	-	
111H	26	III	1	-	-	4.3	-	-	-	
111I	27	IV	1	II	-	3.8	5.1	-	-	
121A	28	II	1	-	-	-	-	-	-	ハナレ砂
124A	29	III	1	II	-	3.5	-	6.1	-	ハナレ砂
221A	30	II	5	I	-	3.8	-	2.7	-	
132A	31	III	4	I	-	4.6	-	-	-	
194A	32	III	1	I	-	5.1	-	-	-	

軒棧瓦

図版番号	時期	小丸瓦当			平部瓦当			備考
		珠文	直径	外区幅	瓦当厚	瓦当高	脇区右	
33	IV	12	8.6	1.1	2.3	5.1	-	
34	IV	12	8.7	1.4	1.8	4.5	-	
35	IV	8	8.7	1.9	2.4	3.9	-	左棧瓦
36	IV	-	-	-	2.4	5.3	5.7	角きり
37	IV	11	8.3	1.1	2.1	4.6	-	

丸瓦

図版番号	出土地	全長	玉縁長	厚さ	広端	狭端	備考
44	東西トレンチ	29.1	2.9	1.8	14.2	13.8	目付
45	IV層	29.6	3.5	1.9	14.6	14.6	目付
46	IV層	26.8	2.3	1.5	13.7	13.8	目付

第21表 瓦一覧表

(11) 長崎奉行所跡の出土銭貨

櫻木 晋一

本遺跡から、第22表のように合計205枚の銭貨と小判の形態をした銅製品が1枚出土している。銭貨は大別すると、北宋や清など中国からの渡来銭が13枚、中世末から近世初期に中国銭を模してわが国で作られた銭貨が5枚、徳川幕府の公鑄貨である寛永通寶が186枚と天保通寶が1枚となっている。

近世の遺跡から銭貨が出土するのは一般的なことであり、これらの銭貨を観察・検討することによって、当地で流通していた銭貨の特色や遺構の時期などを明らかにすることも可能となる。従って、以下で銭貨を概観し、気づいた特徴的な点について述べる。出土銭貨の大半を占めている寛永通寶については、いわゆる古銭学的分類も可能な限り示した。¹⁾

まず、出土渡来銭から述べる。唐の開元通寶（621年初鑄）や北宋銭の天聖元寶（1023年初鑄）・皇宋通寶（1038年初鑄）・政和通寶（1111年初鑄）は、中世において大量に流通していた銭種であり、本遺跡の性格から判断すると、近世に至っても流通市場に一部残存していたものが出土したと考えられる。明銭の洪武通寶（1368年初鑄）と萬曆通寶（1576年初鑄）は、貨幣流通の実態把握を試みる経済史研究にとっては注目すべき銭貨である。洪武通寶は明初期に発行された貨幣であり、銭径や文字の変化が大きな銭種である。本資料は降共と分類されているタイプである。このタイプの洪武通寶は、通常の一文銭より1mmほど銭径が小さい。九州各地で出土する銭貨中に占める洪武通寶の割合が高く²⁾、銭貨の流通圏を把握するためには格好の資料である。明末に発行された萬曆通寶は、近年徐々に出土例が増えてきているが、まだ国内での出土例は少ない。長崎市家庭裁判所遺跡³⁾、栄町遺跡⁴⁾、博多遺跡群第102次調査⁵⁾などわずかな出土遺跡が知られているのみで、それも長崎や博多などに偏って見られる。この銭種は16世紀第4四半世紀に、福建省からジャワに流入していたことが知られており⁶⁾、東南アジアで広範に流通していたと考えられている銭貨であるが、わが国での出土例は少ない。当該期のシナ海交易と長崎・博多など北部九州の都市との関係を解明するカギを握っている貨幣なので、今後も注目する必要がある。4枚出土している清銭も、乾隆通寶（1736年初鑄）以外の3枚はいわゆる豆銭⁷⁾と呼ばれている小型の銭貨である。康熙通寶（1662年初鑄）は清初期の発行なので銭径は26mm程度のやや大型の銭貨が多いのだが、本資料は17mmと2枚とも小型である。道光通寶（1821年初鑄）も小型である。清銭には背面にも満州文字などが刻まれたものが多く、この道光通寶は左が「寶」字、右が铸造地を示している。右の満州文字は、湖南寶南局のものに見える。寛文10年（1670）以降、わが国では法令によって渡来銭の流通が禁じられていた。小畠弘己氏の研究⁸⁾によると、清銭は幕末から明治にかけて流入したものが多く、本資料は流入時期も含め、実際にわが国で流通していたのかどうかについても慎重に考察していく必要がある。

次に、わが国で模鑄された銭貨について述べる。行書の元豊通寶は北宋銭の元豊通寶ではなく、新規母銭を製作し、わが国で鑄造されたものである。管見の限り、これと似たタイプの元豊通寶が、築町遺跡⁹⁾から1点出土しているだけである。改造ビタあるいは加治木系ビタとも呼ばれているこのタイプの元豊通寶は、铸造地が長崎と関連する可能性も考えねばならない。筑前洪武と呼ばれている模鑄銭¹⁰⁾の洪武通寶は、長嘴と呼ばれているタイプを写しており、制錢の洪武通寶と比較すると銭径が若干小さい。このタイプの洪武通寶は、北部九州地域で多くの出土例を確認できる。従って、この地

域一帯で広範に流通していた可能性をもつ錢貨である。真書の元豊通寶は長崎貿易錢と呼ばれているもので、万治2年（1659）から貞享2年（1685）にかけて輸出用として長崎で鋳造されていたといわれているものである。近年出土事例が増加してきていることから、かなりの数量国内流通をしていた可能性が高まってきた。

徳川幕府の公鋳貨である寛永通寶は、寛永13年（1636）から鋳造された古寛永、寛文8年（1668）から江戸亀戸で鋳造されたいわゆる文錢、元禄10年（1697）以降に全国各地で鋳造された新寛永に大別できる。この大別によると古寛永99枚、文錢14枚、新寛永73枚となり、古寛永の割合が高い。このことは、総じて江戸時代でも前半までの遺構からの出土錢貨が多い結果ではないかと推測される。古寛永の鋳造地については確定的ではないものが多く、古錢学的分類に付された地名が必ずしも鋳造場所を示しているのではないことは銘記しておかねばならない。

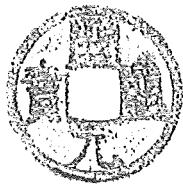
古錢学的分類に注目すると、古寛永は称岡山（9枚）・称水戸（11枚）・称坂本（6枚）・称建仁寺（5枚）・称芝（18枚）・称鳥越（12枚）・称沓谷（12枚）などが多く、推岡山・称仙台・称吉田・称高田・長門・不知錢などは少ないが、ほとんどすべての種類が出土しているといってよい。さまざまなものタイプの寛永通寶が交じり合って流通していた当時の状況をうかがい知ることができる。出土数の多寡は、鋳造量そのものの反映であると考えられる。新寛永については、四ツ宝錢（14枚）旧猿江錢（5枚）・仙台石巻錢（6枚）・不旧手旧十万坪錢（8枚）・不旧手七条錢（6枚）などが多い。背面に文字を有するものでは、佐渡で鋳造された背「佐」（1714年初鋳）、摂津高津の背「元」（1741年初鋳）、当地長崎稻佐で鋳造された背「長」錢（1767年初鋳）が3枚出土している。背「長」錢の複数出土は鋳造量の多さではなく、調査地点と鋳造場所の地理的関係を如実に示していると考えられる。長崎で鋳造された錢貨は、主に在地で流通させていたということであろう。

天保6年（1835）に百文錢として登場した天保通寶の出土例は、長崎市の築町遺跡や他の遺跡でも見られるが、築町遺跡では便壺の廃棄儀礼とのかかわりも指摘されている。小判型銅製品は玩具である可能性が高いと思われるが、表面上に浅い放射状の菊花のような線刻が認められる。

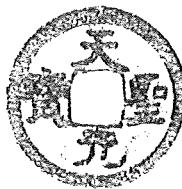
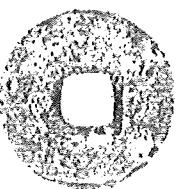
貨幣の鋳造地でもあり、近世の貿易都市でもある「長崎」で出土する錢貨は、貨幣生産や各地との交易関係を探るために格好な土地柄であり、今後も注意を払っていかねばならない。

〔註〕

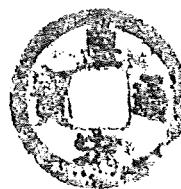
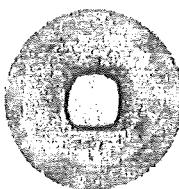
- 1) 元東洋鋳造貨幣研究所研究員の古田修久氏に拓本による鑑定を依頼した。
- 2) 櫻木晋一「洪武通寶の出土と成分分析」『季刊考古学』第62号、雄山閣出版、1998年
- 3) 長崎市教育委員会『家庭裁判所敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』、1992年
- 4) 長崎県教育委員会『栄町遺跡』長崎県教育委員会文化財調査報告書第162集、2001年
- 5) 福岡市教育委員会『博多80』福岡市教育委員会文化財調査報告書第706集、2002年
- 6) 黒田明伸「16・17世紀環シナ海経済と錢貨流通」『越境する貨幣』青木書店、1999年
- 7) 満州地方の私鋳錢と考えられている。(『改訂増補古錢語事典』国書刊行会、1997年)
- 8) 小畠弘己「清錢の流入と流通—鎖国～開国期の錢貨事情—」『博多研究会誌』第5号、1997年
- 9) 長崎市教育委員会『築町遺跡』、1997年
- 10) 中国政府が発行した制錢を、わが国で模して鋳造した錢貨を模鋳錢と呼んでいる。



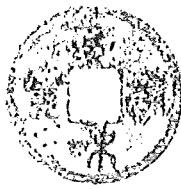
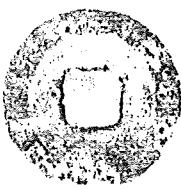
87. 開元通寶



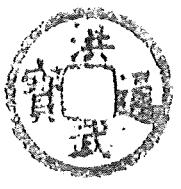
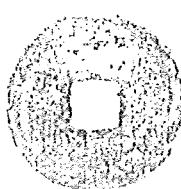
18. 天聖元寶（真書）



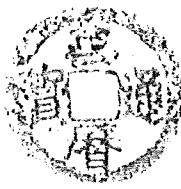
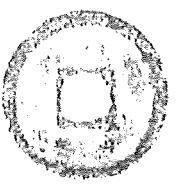
147. 皇宋通寶（真書）



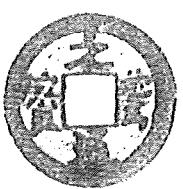
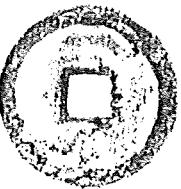
206. 政和通寶（篆書）



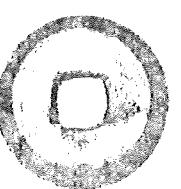
82. 洪武通寶（降共）



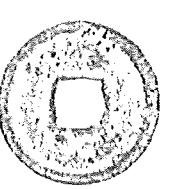
205. 萬曆通寶



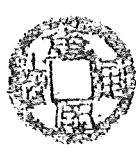
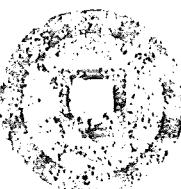
5. 元豐通寶（模鑄）



79. 洪武通寶（模鑄）



183. 元豐通寶（長崎貿易錢）



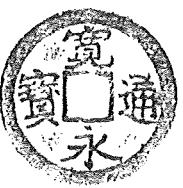
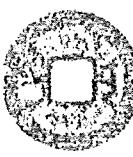
159. 康熙通寶



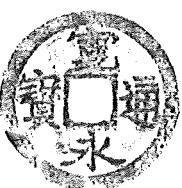
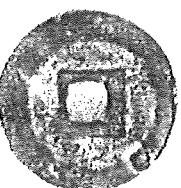
131. 乾隆通寶



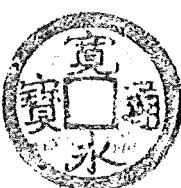
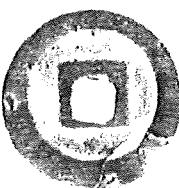
182. 道光通寶



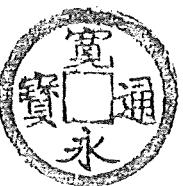
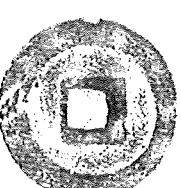
58. 称芝錢 不草点



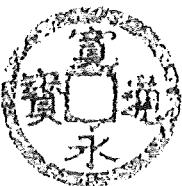
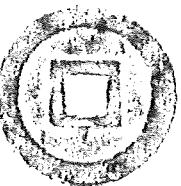
146. 称芝錢 二草点



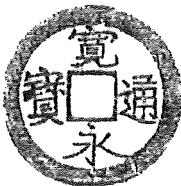
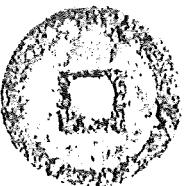
63. 称坂本錢 跳永



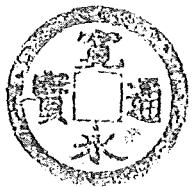
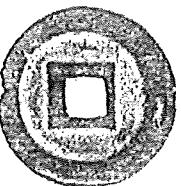
47. 称水戸錢 力永



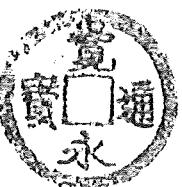
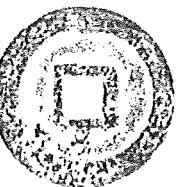
198. 称水戸錢 湾柱永



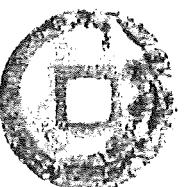
81. 推岡山錢 縮寬



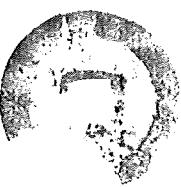
91. 称岡山錢 小字



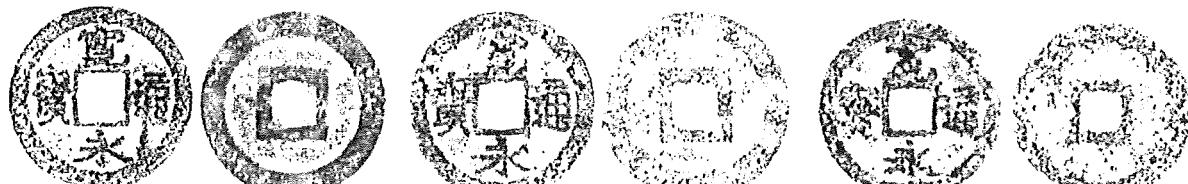
157. 称岡山錢 俯永



56. 長門錢 奇永



第98図 錢貨① (1/1)



20. 称建仁寺銭 小字広寛

169. 称建仁寺銭 大字狭寛

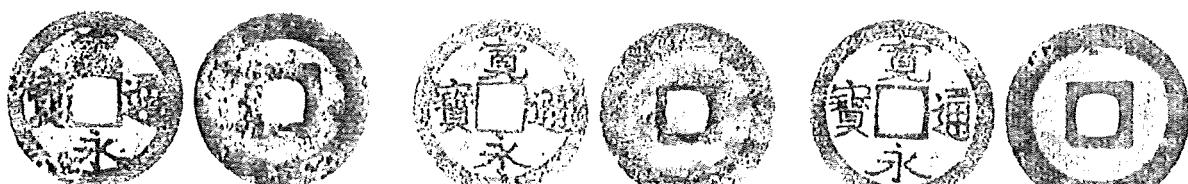
149. 称仙台銭 跛宝



150. 称仙台銭 潤字

114. 称高田銭 笹手永

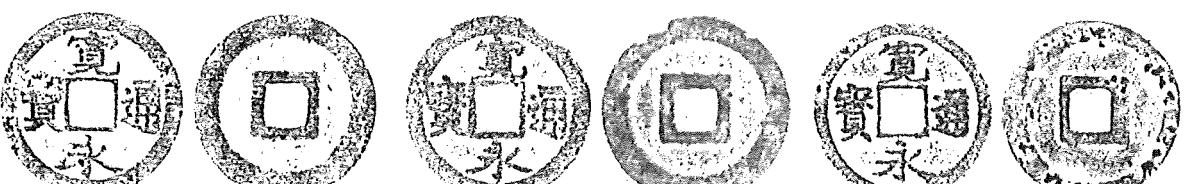
166. 称高田銭 縮通



109. 称吉田銭 広永

196. 称吉田銭 狹永小字

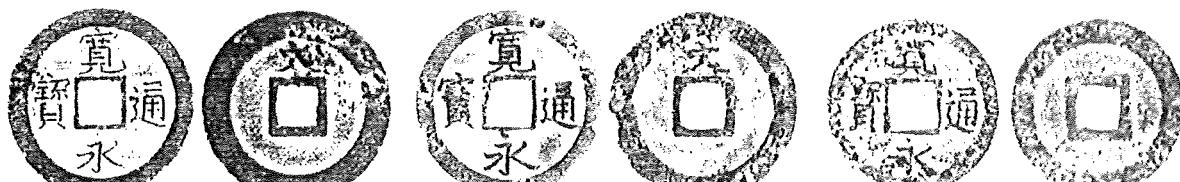
17. 称沓谷銭 正足宝



163. 称沓谷銭 大字

70. 称鳥越銭 高寛

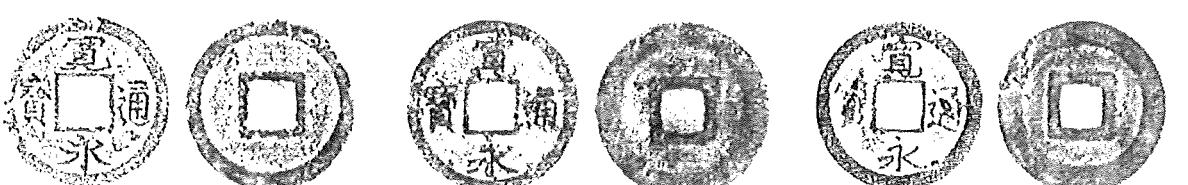
64. 不知銭 太細



94. 文銭 織字狭文

145. 文銭 正字背文

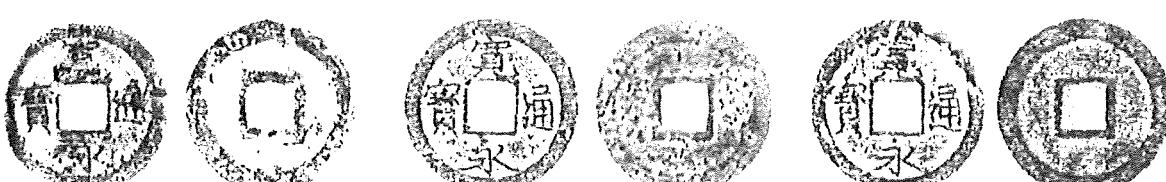
110. 四ツ宝銭 広永



23. 四ツ宝銭 勁永広寛

7. 旧猿江銭 正字

6. 旧猿江銭 小字

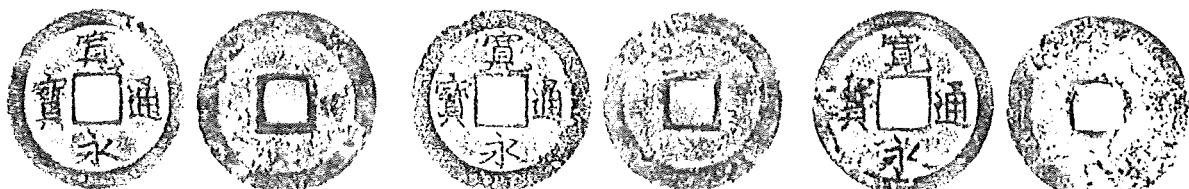


77. 江戸荻原銭 厚肉高寛

99. 京都荻原銭 草点永治水

54. 京都荻原銭 正永

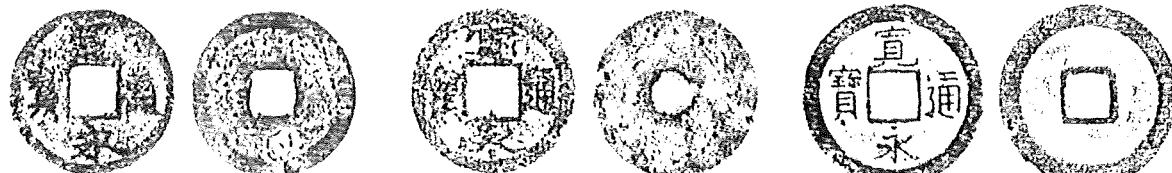
第99図 錢貨② (1/1)



22. 不旧手旧十万坪銭 広目寛

21. 不旧手旧十万坪銭 小目宝

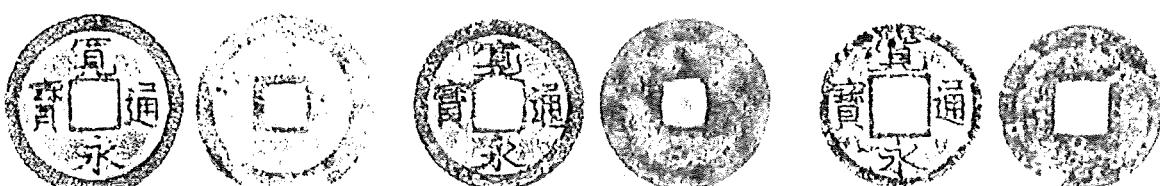
9. 不旧手七条銭 退永小通



113. 不旧手横大路銭 退永

180. 佐渡銭 明和背「佐」

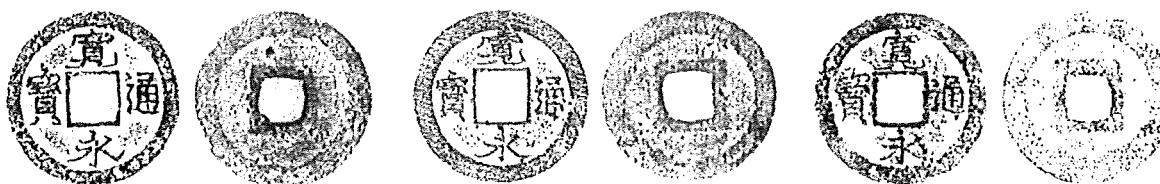
25. 仙台石巻銭 異書低寛



19. 仙台石巻銭 異書進冠

37. 元文十万坪銭 虎の尾寛

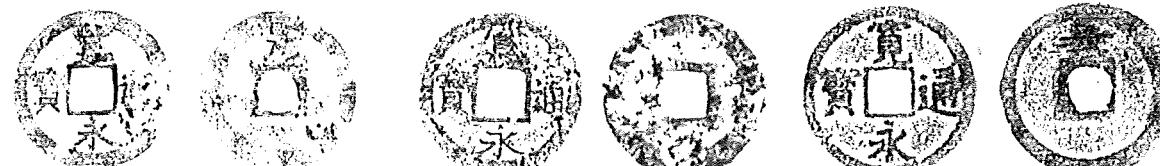
102. 小梅銭 小梅手広穿



11. 秋田銭 大字

28. 平野新田銭 十万坪手

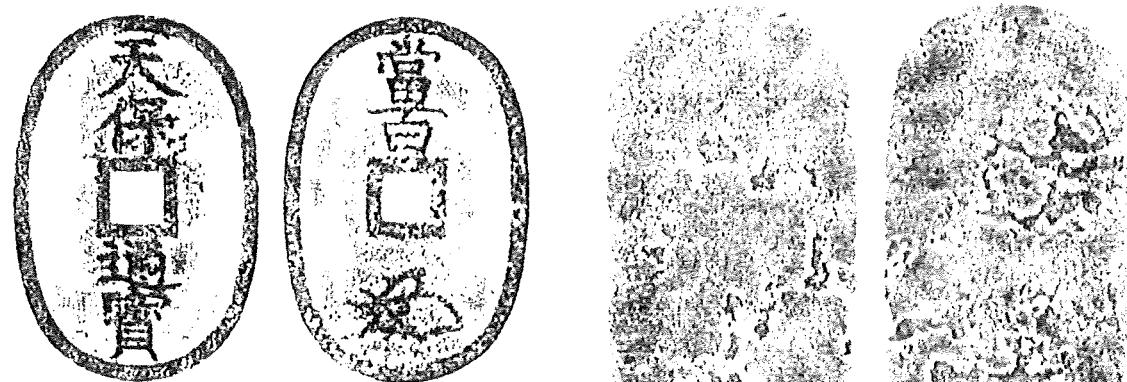
204. 元文期推定銭 清水短通



195. 高津背元銭 接郭宝背「元」

24. 亀戸四年銭 小様降通

128. 長崎背長銭 背「長」



100. 天保通寶 本座広郭

16. 小判型銅製品

第100図 銭貨③ (1/1)

(12) 長崎奉行所遺跡群出土の動物遺存体

1. 貝類

長崎奉行所遺跡群奉行所地点から出土した貝類遺存体は、合計4分類群（2種・1種不明・1目以下不明）である（第23表）。資料は、現場で目視によって検出されたものである。今回報告する資料の内訳は、総最小個体数4である。検出された貝類遺存体は、ハマグリ・サザエ等、長崎市内の江戸時代の遺跡に一般的に出土するものが主体である。

長崎奉行所遺跡群岩原地点から出土した貝類遺存体は、合計9分類群（5種・2種不明・1属種不明・1目以下不明）である（第23表）。資料は、現場で目視によって検出されたものである。今回報告する資料の内訳は、総最小個体数20である。検出された貝類遺存体は、サザエ・ハマグリ等、長崎市内の江戸時代の遺跡に一般的に出土するものが主体である。

ここで注目されるのは、ハイガイの最小個体数が3と相対的に多く出土したことである。菅野（1981）によると、大ナチュラリスト向井元升（1609～1677）の遺著『庖厨備用倭名本草』という、今日でいえば食品百科事典ともいえるもののなかで、元升は「唐人は、シシガイ（ハイガイやサルボウを指す）をよく洗い、軽く湯煮をして、殻の開かないうちに、殻のまま食卓に出し、主客手づから殻を開いて食べる。血液を棄てないで食べる所以、薬になるとの話だ」と述べているとある。また、「今日の上海流ハイガイ調理法となんとよく似ていることであろう。元升は、肥前国神崎郡酒村（現在の佐賀県神崎郡。いま酒村がどこか私にはわからないが、おそらく神崎町であろう）に生れ、幼時長崎に移り、五十歳で京都に移るまでその地に留ったから、おそらく直接の見聞を書いたものであろう、長崎と中国、ことに上海との交流は、昔から今にいたるまで、きわめて密接である。元升に、ハイガイの食べ方を教えたのは、上海の人だったかも知れぬ。」とある（菅野 1981）。

現在では、当該種は国内では有明海においてのみ生息する。その沿岸では冬期の食卓にしばしば供されている（加藤 2005）。当該遺跡と同じ長崎市内にある唐人屋敷跡（天后堂前）から出土した貝類遺存体の総数318点のうち、当該種が25.5%を占め、主体を占める貝種であるという結果を得た（加藤・阿部・江田2003）。また、当該遺跡と同様に長崎市内のいくつかの近世遺跡から、少量のハイガイが出土している（金子1998など）。これらの事実から、向井元升のいう唐人のたしなむハイガイの料理とは、本人が長崎に住んだことがあるので、長崎の日本人から聞いたのかもしれない。そして当時、長崎では普通に日本人が食べていたものかもしれないことを著者は指摘したことがある（加藤 2005）。

当該種の捕獲地や移入経路、さらには消費地での調理や消費量など、まだまだわかっていないことが多い。それらの課題解明のためにも、当該遺跡のような基礎資料の調査の蓄積が望まれている。

（加藤 久雄）

【引用文献】

- 加藤久雄 2005 「ハイガイを食す」『史紋』第3号 (p.85-89) 『史紋』刊行会
加藤久雄・阿部常樹・江田真毅 2003 「唐人屋敷跡出土の動物遺存体」『唐人屋敷跡－天后堂前広場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(p.22-32) 長崎市教育委員会
金子浩昌 1998 「動物遺体」『興善町遺跡－日本団体生命保険株式会社長崎ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(p.87-89) 長崎市教育委員会
菅野 徹 1981 「『有明海－自然・生物・観察ガイド』(194pp.) 東海大学出版会

第23表 出土貝類種名表と最小個体数

綱	綱(ラテン語)	目	目(ラテン語)	科	科(ラテン語)	種名	種名(ラテン語)	最小個体数(奉行)	最小個体数(岩原)
腹足綱	Gastropoda	原始腹足目	Archaeogastropoda	ミミガイ	Haliotidae	種不明(アワビ類)	<i>Hariotis sp.</i>		1
				リュテンサザエ	Turbinidae	サザエ	<i>Batillus cornutus</i>	1	7
二枚貝綱	Pelecypoda	不明		不明		目以下不明	ord. et fam. et. gen. et. sp. indet.	1	1
				翼形目	Pteriomorphia	フネガイ	Arcidae	サルボウガイ	1
						ハイガイ	<i>Scapharca subcrenata</i>		3
				イタヤガイ	Pectinidae	種不明(イタヤガイ類)	<i>Tegillarca granosa</i>		1
				イタボガキ	Ostreidae	属・種不明(カキ類)	<i>Pecten sp.</i>	1	1
						マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>		2
		異歯目	Heterodontia	マルスグレガイ	Veneridae	ハマグリ	<i>Meretrix losuria</i>	1	3
合 計								4	20

2. 魚類

長崎奉行所遺跡群から出土した魚類遺存体は、合計8分類群（1種・2種不明・4属種不明・1目以下不明）である（第24表）。資料は、現場で目視によって検出されたものである。出土資料の内訳は、総破片数137（奉行所：34；岩原103）である。検出された魚類遺存体は、サメ類・タイ類・フグ類・ベラ類等、長崎市内遺跡に一般的に出土するものが主体である。
（加藤 久雄）

第24表 出土魚類種名表

綱	綱(ラテン語)	目	目(ラテン語)	科	科(ラテン語)	属	属(ラテン語)	種名	種名(ラテン語)
軟骨魚綱	Chondrichthyes	ネズミザメ目	Lamniformes	ネズミザメ科	Lamnidae	アオザメ属?	Isurus?		
条鰓魚綱	Actinopterygii	スズキ目	Perciformes	ハタ科	Serranidae	属・種不明	gen. et sp. indet.		
				タイ科	Sparidae	マダイ属	<i>Pagrus</i>	マダイ	<i>P. major</i>
						(マダイ亜科)	(<i>Pagrinacae</i>)	属・種不明	gen. et sp. indet.
				ベラ科	Labridae	コブダイ属	<i>Semicossyphus</i>	コブダイ?	<i>S. reticulatus?</i>
		フグ目	Tetraodontiformes	フグ科	Tetraodontidae	属・種不明	gen. et sp. indet.		

*同定・記載に関して、土岐耕司氏（国際航業株式会社）および若山真由美氏に多大なるご協力を得た。厚く御礼申し上げたい。

3. 鳥類

長崎奉行所遺跡群からは20点の鳥類遺存体が出土した。このうち14点で目以下を単位とした同定が可能で、キジ類（Phasianidae spp.；5点）、カモ類（Anatinae spp.；4点）、タカ類（Accipitridae sp.；2点）、ツル類（Gruidae sp.；1点）、チドリ類（Charadriiformes sp.；1点）、カラス類（Corvidae sp.；1点）が確認された。キジ類と同定した資料（右烏口骨肩端、左上腕骨遠位端、左尺骨遠位端、右手根中手骨完存、左足根中足骨近位端）のうち、手根中手骨を除く4点はすべて筆者所有のキジ♂の標本（EP-143）よりかなり大きく、さらに足根中足骨では下足根内側稜が第一中足窩まで隆起するキジやヤマドリの特徴（西田・林 1984）は認められなかった。以上のことから、手根中手骨を除く4点はニワトリのものである可能性が高い。カモ類と同定した資料（右上腕骨遠位端2点、中間部1点、左尺骨近位端1点）のうち、尺骨と上腕骨遠位端の1点はカルガモの標本（EP-84）と、他はオナガガモの標本（EP-4）とほぼ同じ大きさであった。タカ類の資料2点は左尺骨の遠位端と中間部破片で、同一個体のものである可能性が高い。大きさはトビの標本（EP-3）よりかなり大きいものであった。また、ツル類の資料（左脛足根骨近位端）はナベヅルの標本（EP-137）と、カラス類の資料（右大腿骨完存）はハシブトガラスの標本（EP-13）とほぼ同じ大きさであった。チドリ類とした資料は右上腕骨の近位端～中間部で、形態はシギ科のタシギにもっとも類似し、チドリ科、ウミスズメ科、カモメ科とは大きく異なる。なお、骨の部位の名称は、Baumel et al.(1993) および

その和訳である日本獣医解剖学会（1998）に、分類群名は日本鳥類目録編集委員会（2000）に従った。また、資料の同定にあたって川上和人氏（森林総合研究所）の標本を拝見させていただいた。末筆ながらこの場を借りて謝意を示す次第である。

（江田 真毅）

【引用文献】

- Julian J. Baumel, Anthony S. King, James E. Breazile, Howard E. Evans & James C. VandenBerge (eds.) "Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium 2nd Edition" Publication of the Nuttal Ornithological Club, No.23 1993
日本鳥類目録編集委員会編「日本産鳥類目録 改訂第6版」日本鳥学会 2000
日本獣医解剖学会編「家禽解剖学用語」日本中央競馬会 1998
西田隆雄・林良博 1984「遺跡に見られるキジ科鳥類骨格標本の形態学的分析」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学－総括報告書－』(pp501-507)

4. 哺乳類

長崎奉行所遺跡群奉行所地点から出土した哺乳類遺存体は、合計6分類群（6種）である（第25表）。資料は、現場で目視によって検出されたものである。資料の内訳は、総破片数55（接合可能なものは破片数を1とカウントした。以下同様）である。検出された哺乳類遺存体は、ヒト・イヌ・イエネコ・イノシシ／ブタ・ウシ・ウマと江戸時代の遺跡に一般的に出土するもので構成される。

長崎奉行所遺跡群岩原地点から出土した哺乳類遺存体は、合計8分類群（6種・1種不明・1科以下不明）である（第25表）。資料は、現場で目視によって検出されたものである。資料の内訳は、総破片数112である。検出された哺乳類遺存体は、ヒト・イヌ・イエネコ・イノシシ／ブタ・ニホンジカ・ウシ等と、江戸時代の遺跡に一般的に出土するもので構成される。

出島和蘭商館跡（金子1986）および唐人屋敷跡（加藤・阿部・江田2003）など長崎市内の遺跡から多くの量が出土するが、江戸府内遺跡ではあまり多く出土しないヤギ／ヒツジ類が岩原地点から1点出土しているところは興味深い。このような輸入動物の広がりを考えることも今後の課題である。

両地点とも、出土したネコの破片数が最も多い。ある程度の部位が揃った形で出土するものもあり、解体痕等の人为的な傷などがないことから、おそらくヒトが食したものではないだろう。また、両地点（奉行所：P17の4層・SD20の2／3層・SK182；岩原：表土）からヒトも4点出土している。当該遺跡は、江戸期以前においてキリスト教寺院の墓域にあたる可能性があり、これら人骨と奉行所を建設した時期に破壊された江戸期以前の時期の遺構との関連性が興味深い。

（加藤 久雄）

【引用文献】

- 加藤久雄・阿部常樹・江田真毅 2003「唐人屋敷跡出土の動物遺存体」『唐人屋敷跡一天后堂前広場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(p.22-32) 長崎市教育委員会
金子浩昌 1986「出島遺跡出土の動物遺存体について」『国指定史跡 出島和蘭商館跡範囲確認調査報告書』(p35-37) 長崎市教育委員会

第25表 出土哺乳類種名表

綱(ラテン語)	目(亜目)	目(ラテン語)	科	科(ラテン語)	種名	種名(ラテン語)	奉行所	岩原
Mammalia	霊長目	Primates	ヒト科	Hominidae	ヒト	<i>Homo sapiens</i>	○	○
	クジラ目	Cetacea	クジラ類(種以下不明)	Fam. et gen. indet.				○
	食肉目	Carnivora	イヌ科	Canidae	イヌ	<i>Canis familiaris</i>	○	○
			ネコ科	Felidae	イエネコ	<i>Felis catus</i>	○	○
	偶蹄目	Artiodactyla	イノシシ科	Suidae	イノシシ／ブタ	<i>Sus scrofa/Sus scrofa domesticus</i>	○	○
			シカ科	Cervidae	ニホンシカ	<i>Cervus nippon</i>		○
			ウシ科	Bovidae	ウシ	<i>Bos taurus</i>	○	○
	奇蹄目	Perissodactyla	ウマ科	Equidae	ヤギ／ヒツジ	<i>Capra hircus/Ovis aries</i>		○
					ウマ	<i>Equus caballus</i>	○	

*○は出土した分類群を示す。

5. その他の動物

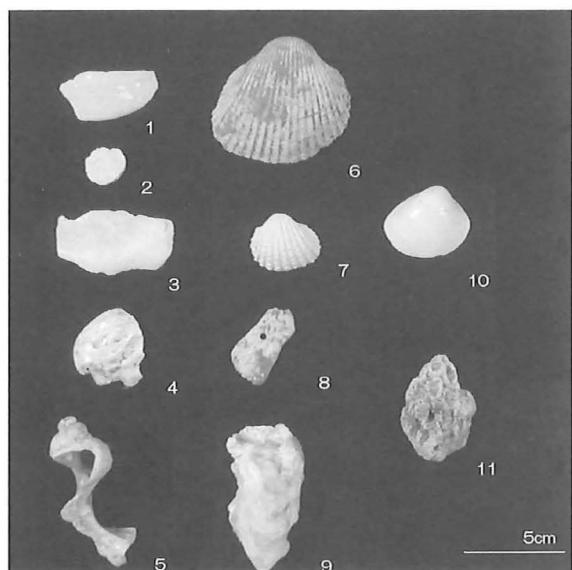
長崎奉行所遺跡群（岩原地点）より出土し、同定されたその他の遺存体は、1分類群（第26表）、1点である。サンゴ類：長さ数センチの破片である。何らかの用途で意図的にもちこまれたもののか、地形時に混入したものだろうか、現在のところ、当該地点で当該動物が出土した要因がわからぬ。

（加藤 久雄）

第26表 出土したその他の動物遺存体種名表

門	門(ラテン語)	綱	綱(ラテン語)	目	目(ラテン語)	科	科(ラテン語)
刺胞動物門	Cnidaria	花虫綱	Anthozoa	目以下不明(サンゴ類)	ord. et fam. et gen. et sp. indet.		

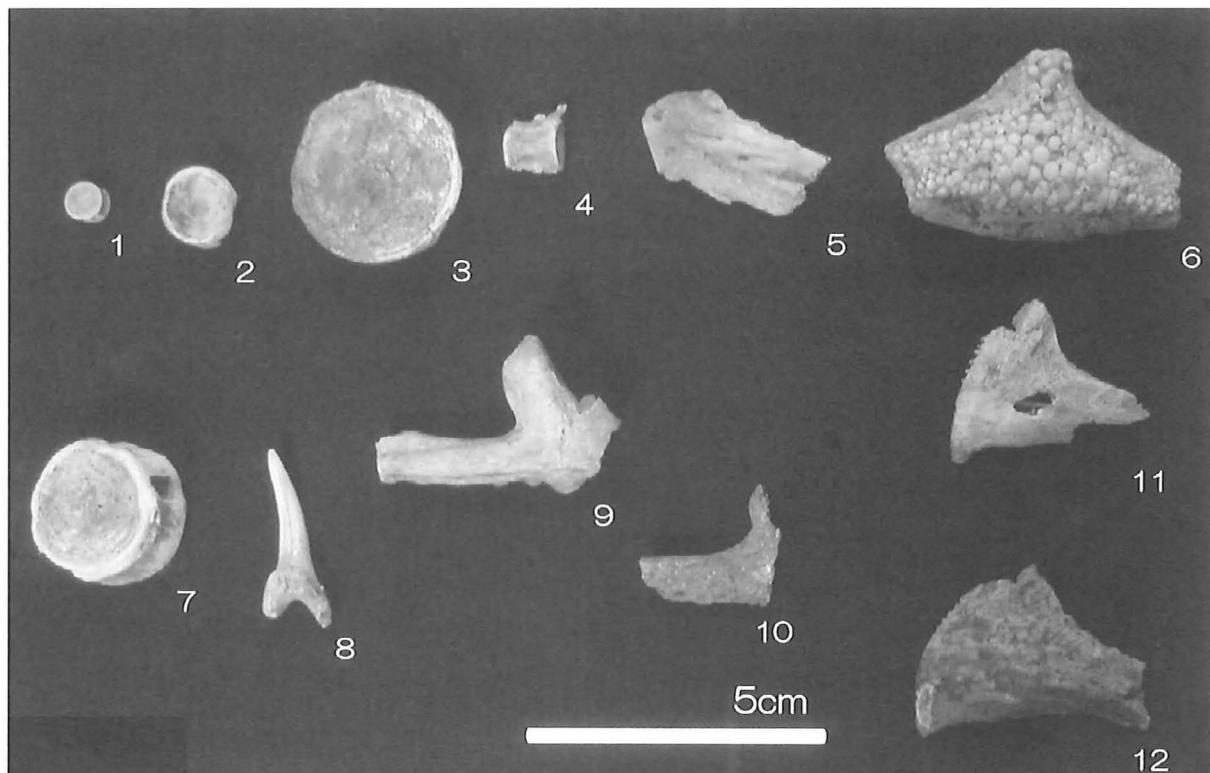
加藤久雄（愛知学泉大学）・江田真毅（日本学術振興会特別研究員）



貝類・その他

貝類・その他 1～3：奉行所 4～11：岩原
1 ハマグリ 2 サザエ（蓋） 3 カキ類 4 アワビ類
5 サザエ 6 サルボウガイ 7 ハイガイ 8 イタヤガ
イ科（穿孔あり）。貝杓子などの道具の可能性が
ある。 9 マガキ 10 ハマグリ 11 サンゴ類

魚類 1～6：奉行所 7～11：岩原 1 サメ・
エイ類椎骨 2 サメ類椎骨 3 サメ類椎骨
4 不明椎骨 5 マダイ亜科歯骨
6 ベラ科コブダイ？下咽頭骨
7 サメ類椎骨 8 アオザメ属？歯
9 ハタ科前上顎骨 10 マダイ亜科前上顎骨
11 フグ科前上顎骨 12 フグ科前上顎骨



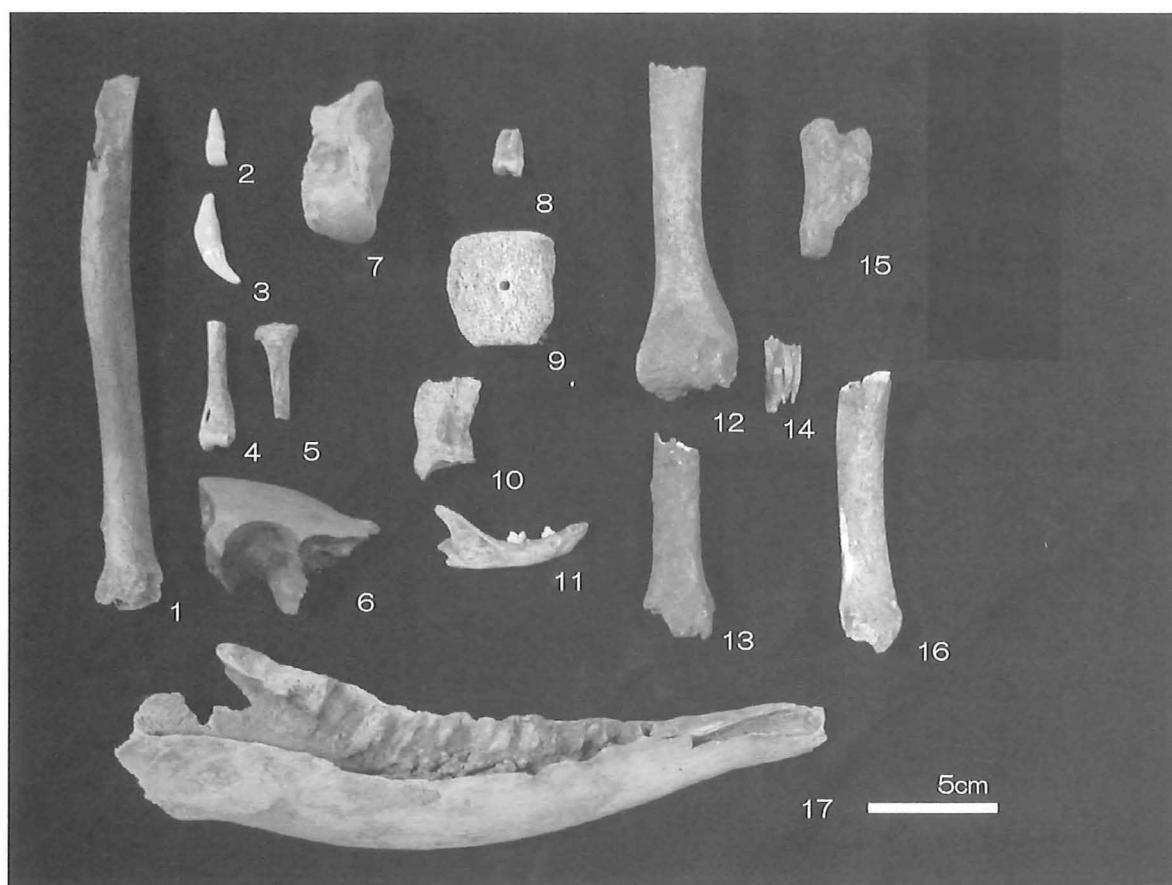
魚類



鳥類

鳥類（約50%） 1 - 4 右上腕骨
 5 - 6 右手根中手骨 7 - 9 左足根中足骨
 10 - 11 右大腿骨 12 - 13 左尺骨
 14 - 15 左脛足根骨 1 オナガガモ
 2 カモ類 3 チドリ類 4 タシギ
 5 キジ類 6 キジ（♀） 7, 8 ニワトリ
 9 キジ（♂） 10 ハシブトガラス
 11 カラス類 12 タカ類 13 トビ
 14 ツル類 15 ナベヅル
 2, 3, 5, 7, 11, 12, 14は出土資料
 他 現生標本

哺乳類 1 ~ 7 : 奉行所 8 ~ 17 : 岩原
 1 ヒト上腕骨（華奢で女性的） 2 ヒト上顎第
 1 切歯 3 イヌ上顎犬歯 4 ネコ上腕骨 5 ネコ
 脛骨 6 イノシシ／ブタ前頭骨 7 ウシ距骨
 8 ヒト上顎第（2／3？）大臼歯 9 クジラ類？
 部位不明（穿孔あり。何らかの道具の可能性
 がある。） 10 イヌ肩甲骨 11 ネコ下顎骨 12 ニホンジカ
 上腕骨 13 ニホンジカ脛骨 14 ヤギ／ヒツジ
 下顎第（1？／2）後臼歯 15 ウシ基節骨
 16 イノシシ／ブタ脛骨 17 ウマ下顎骨



哺乳類

長崎奉行所立山役所の変遷についての一考察

～絵図面を中心として～

小松 旭

現在、長崎奉行所立山役所全体を描いたものとして確認されている絵図面は10数枚を数える。本稿ではこれらの分類を行い、特色を比較し年代等を考察したい。まず、絵図面を主な特色から4パターン（A～D）に分類し、それぞれの特色を比較したい。

1. 分類

Aパターンの図面としては、『長崎鳥瞰図屏風（箔屋屏風）』（神戸市立博物館蔵）（図版A）がある。この立山役所の特色は次の3点があげられる。

- ①他のグループの奉行所と比べて、規模が小さい。②現在の奉行所前通り側に表門があり、しかも2箇所である。③屋根は瓦葺ではない。

Bパターンの図面としては、『長崎実録大成』の「立山御役所図」（図版B-1）、『長崎諸役所建物絵図』（東大史料編纂所蔵）（図版B-2）等がある。この立山役所の特色は次の3点があげられる。

- ①鎮守稻荷の鳥居から社までが、二段になっている。②厩長屋と奉行所本屋の間に、別の長屋がある。③奉行所の北に蔵がおかれている。

但し、『長崎実録大成』の方は、「池」がなく、東側に「ホリ」があり、厩長屋側からの山之内（馬場）への入口の方向が異なることから、この2枚にも作成された年代に若干のずれが想定される。

なお、Bのものとして他に『立山御屋敷の図』（長崎大学経済学部蔵）など数点がある。

Cパターンの図面としては、『長崎諸役場絵図』（県立長崎図書館蔵）（図版C-1）、『長崎諸官公衙図』（県立長崎図書館蔵）（図版C-2）等がある。この立山役所の特色は次の3点があげられる。

- ①厩長屋と奉行所本屋の間の長屋がなくなり、塀で仕切られている。②鎮守稻荷の鳥居から社までが、四段になっている。③奉行所の北の蔵がなくなっている。④布石（鋪石）が小山稻荷及び南長屋・西長屋まで伸びている。

なお、Cのものとして他に『長崎諸役所絵図』・『崎陽諸図』（国立公文書館蔵）、『長崎諸役所古図』（福岡市立博物館蔵）など数点がある。現在確認されている立山役所の絵図面のパターンとしては最も多い。

Dパターンの図面としては、『立山御役所絵図面』（川村家文書・新潟市蔵）（図版D）がある。川村家文書とは、110代長崎奉行・川村対馬守修就（ながたか）の御子孫の家に所蔵されていた三千点余の資料で、修就が初代新潟奉行をつとめたという縁で新潟市郷土資料館に寄贈されたものである。この立山役所の特色は次の4点があげられる。

- ①御白洲が東南方向に移動し、向きも変更されて、目安方詰所・仮牢などが増設されている。②御白洲の移動にともない、土蔵も東南方向に移っている。③證文場の東南側の部屋が、詰所から番所に変更されている。④小山稻荷の東側に、別棟が増設されている。

なお、現在確認の絵図面のなかで最も新しい時期の立山役所を描いたものが、このDパターンであり、幕末から明治期に想定されている長崎奉行所遠景写真（東京国立博物館蔵）にある立山役所に時代的に最も近いと考えられる。

2. 考 察

長崎奉行所立山役所の建物の変遷に関する事項については、以前『長崎実録大成』『長崎集』などによりまとめており（註10）、今回は特に関係あるものを第27表、立山役所関係事項①に抜き出した。また、本考察について関係ある事項を第27表、立山役所関係事項②に列挙した。ここではいくつかの資料と記録を比較し、絵図面に描かれた奉行所の時期を考察したい。

図版Aは長崎の貿易商人箔屋三田村家が大坂の本家に送ったもので、寛文の大火（寛文3年・1663年）前後の町名があり、延宝4（1676）年に破却された長崎代官末次平蔵の屋敷も描かれていることから、延宝年間末頃（1680年代）の作成と考えられている。また、立山役所は享保年間の大改修前は移設された東屋敷時代の規模が基本で後のものと比して小規模と考えられ、瓦葺の建物ではないことから、図版Aは延宝元（1673）年に完成した直後の立山役所を描いたものと考えられる。

図版BとCの大きな違いの一つは鎮守稻荷の形状であるが、これは寛政12（1800）年の記録と符合すると思われる。また、東長屋側の「ホリ」及びその周辺の変化は寛政5（1793）年の改築と関係があると考えられる。このことは「ホリ」から出土した遺物の年代が19世紀段階まで入らないことからも明らかと思われる（註11）。これらのことから図版Bは享保2（1717）年の全面改築から18世紀段階の情報を反映した図面であろう。なお、これらの比較から19世紀中頃作成とされる『立山御屋敷の図』（第28表の4）は、18世紀段階のものであることが推定される。

図版CとDの違いについてはマクドナルドの記述が興味深い。幕末に漂流し来日したアメリカ人ラナルド

第27表 長崎奉行所立山役所関係事項一覧表

西暦	和暦	立山役所関連事項①	備考	立山役所関連事項②	備考
1671	寛文11	長崎奉行所東屋敷を立山に移し造営	註1		
1673	延宝元	長崎奉行所立山役所が完成する	註2		
1717	享保2	立山役所、全面改築。地均し、本屋長屋など全て造り替える	註3		
1744	延享元	立山役所、瓦葺になる	註4		
1789	寛政元	南長屋を立て替える	註5		
1793	寛政5	東長屋・長屋向住居を立て替える	註6		
1796	寛政8	立山役所専用水槽がつくられる			
1800	寛政12	鎮守稻荷社拝殿が建て替えられる	註7		
1804	文化元	奥書院・土蔵・本屋・長屋が建て替えられる	註8		
1842	天保13			与力10騎・同心15人を再置	
1844	弘化元			与力・同心を廃止する	
1845	弘化2			朝倉彦太夫、立山役所普請掛を命じられる	註9
1848	嘉永元			米人マクドナルド、立山役所において井戸対馬守より取り調べ	
1855	安政2			川村対馬守、長崎奉行に就任	

第28表 長崎奉行所立山役所関係絵図面一覧表

資料名	所蔵先等	本稿分類	本稿No.	備考
1 『長崎鳥瞰図屏風（箔屋屏風）』	神戸市立博物館	A	A	
2 『立山御役所図』	『長崎実録大成』より	B	B-1	
3 『長崎諸役所建物絵図』	東大史料編纂所	B	B-2	
4 『立山御屋敷の図』	長崎大学経済学部・武藤文庫	B	-	※1
5 『立山新図』	(株)思文閣出版社	B		※2
6 『長崎旧圖』	諏訪神社	B		
7 『長崎諸役場絵図』	県立長崎図書館	C	C-1	
8 『長崎諸官公衙図』	県立長崎図書館	C	C-2	※3
9 『長崎諸役所絵図』	国立公文書館・内閣文庫	C	-	
10 『崎陽諸図』	国立公文書館・内閣文庫	C	-	
11 『長崎諸役所古図』	福岡市立博物館	C	-	
12 『長崎諸御役場絵図』	県立長崎図書館	C	-	
13 『長崎諸役場絵図』	長崎市立博物館	C	-	
14 『立山御役所絵図面』	新潟市・川村家文書	D	D-1	
15 『立山屋舗絵図』	神戸市立博物館・郷土コレクション	不明		※4

※1 絵図の記録によると、作成は天保年間（19世紀中頃）

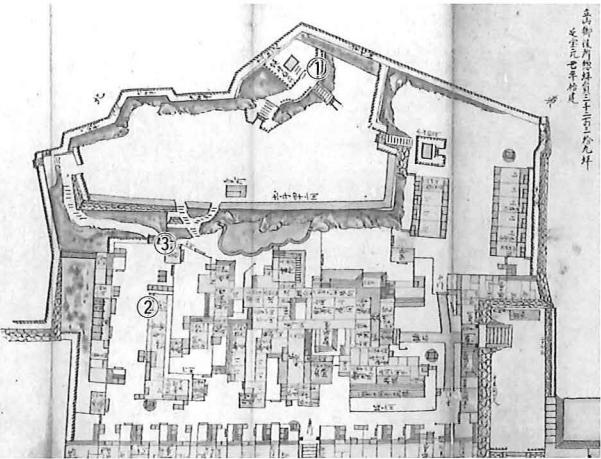
※2 絵図の記録によると、作成は宝曆3～4年（1753～1754年）の修復後

※3 絵図の記録によると、作成は文化5（1808）年

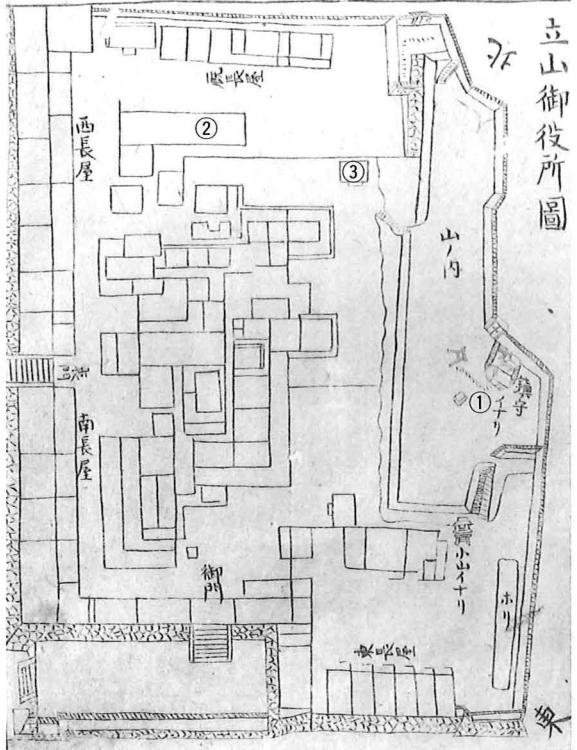
※4 考察記述後の調査で、初期の立山役所（図版A期）を描いたものであることが判明した。



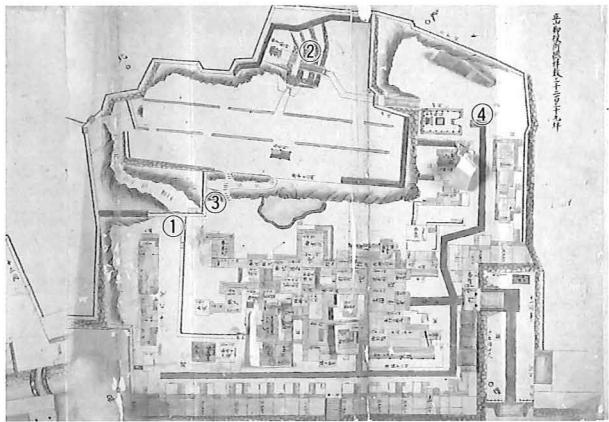
図版A 「長崎鳥瞰図屏風」(一部)(神戸市立博物館蔵)



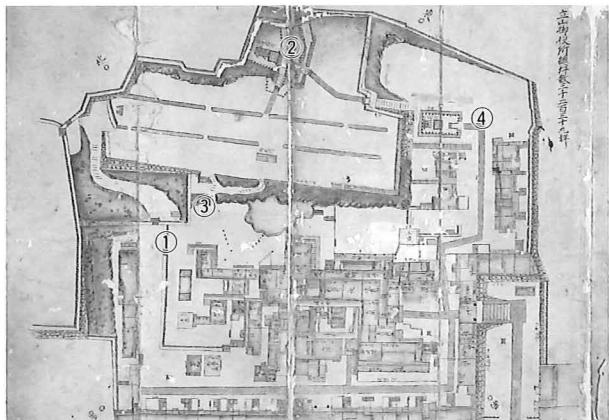
図版B－2 「長崎諸役所建物絵図」(東大史料編集所蔵)



図版B－1 「立山御役所図」(『長崎実録大成』)



図版C－1 「長崎諸役場絵図」(県立長崎図書館蔵)

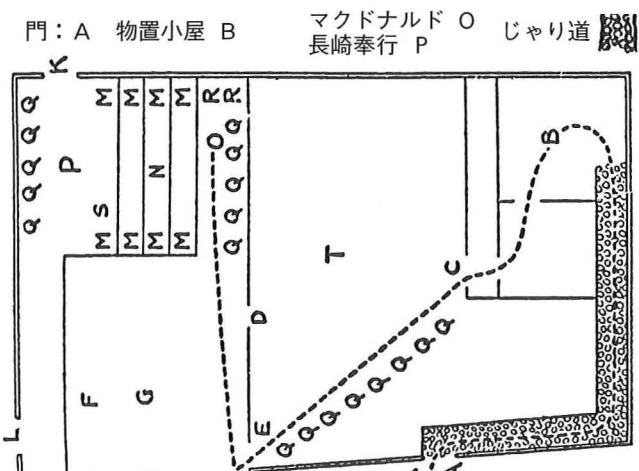


図版C－2 「長崎諸官公衙図」(県立長崎図書館蔵)

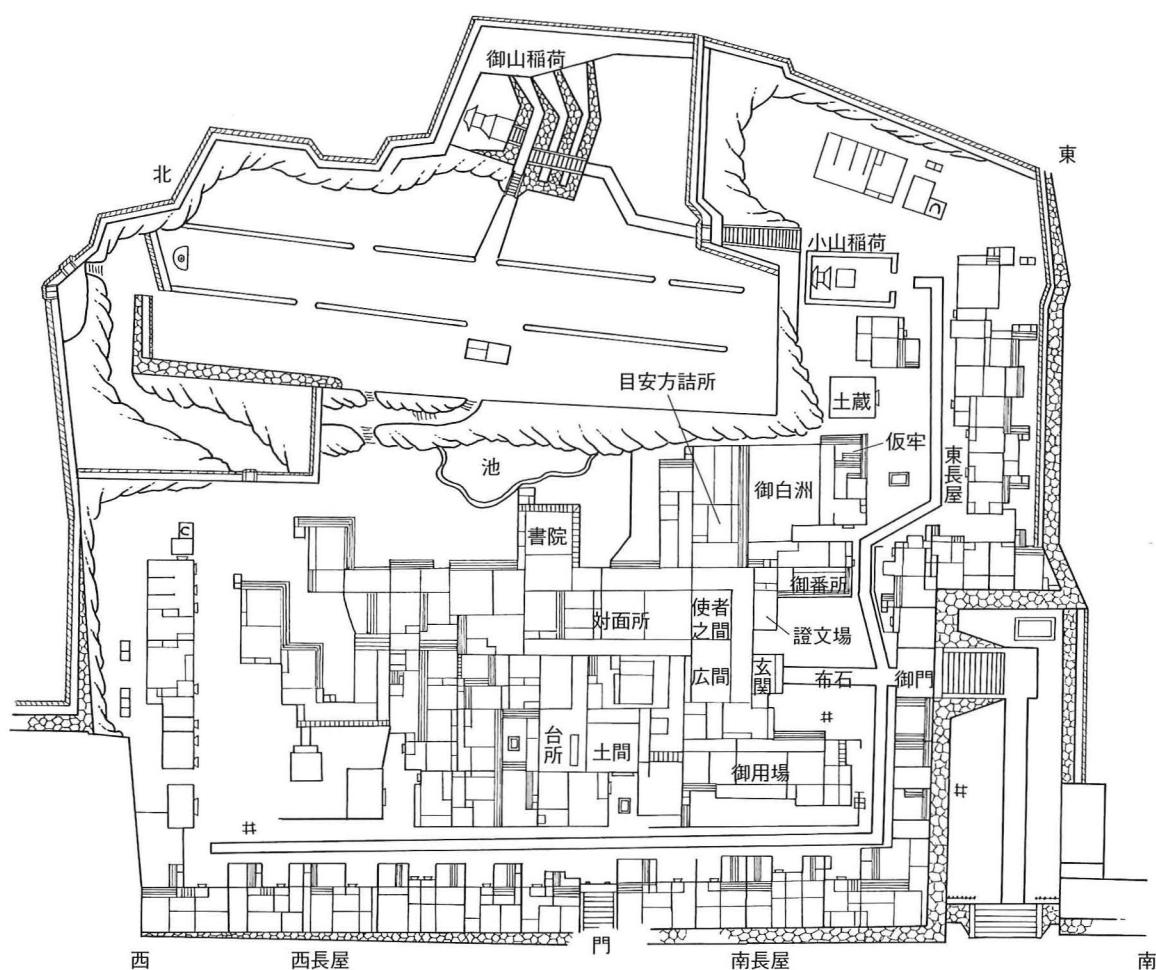
=マクドナルドは嘉永元（1848）年に立山役所で長崎奉行・井戸対馬守に取り調べを受け、その時に建物の記録を残している。それは次の通りである（註12）。「奉行所の門を入り、じゃり道を右に曲がり、つきあたりを左に折れ、引戸の低い門を入ると横木で囲まれた場所に連れて行かれた。小さなくぐり門を入り、物置小屋のような建物に入った。その床は2 フィート（60センチ）ばかり高くなっていて、汚らしい蘆（マット）が敷きつめられていた（途中省略）」。また、見取図（図版E）によると、マクドナルドが入った門は奉行所の裏門で、裏門（図版E－A）と、奉行が座り（E－P）、座らされた場所（E－O）の関係・方向がよくわかる。上記の記述と絵図面を比較すると、図版Cは、裏門と御白洲は同じ北東方向を向いているので、記述と合わない。一方、図版Dすなわち川村家文書の絵

図面は、裏門は北東方向を向き、御白洲は南東方向を向いているので、マクドナルドの記録と符合する。すわなち1848年段階では少なくとも御白洲付近に関しては図版Dの状態になっていたと推定される。このことは弘化2（1845）年に立山役所普請掛が命じられた記録と関係があると推定され、また、図版Cの中の『長崎諸官公衙図』に、同心詰所という記述があり、同心が再置されたのは天保13（1842）年であるから図版CからDへの変化は1840年代中頃と考えられる。

- 註1 『長崎志正編』1928 長崎文庫刊行会 P 37
- 註2 『長崎志正編』1928 長崎文庫刊行会 P 38
- 註3 『長崎志正編』1928 長崎文庫刊行会 P 37
- 註4 『新長崎年表』（上）1974長崎文献社 P 303
- 註5 『続長崎実録大成』1974長崎文献社 P 41
- 註6 『続長崎実録大成』1974長崎文献社 P 41
- 註7 『続長崎実録大成』1974長崎文献社 P 41
- 註8 『続長崎実録大成』1974長崎文献社 P 41
- 註9 『長崎幕末史料大成3 開国対策編 I』
1970長崎文献社 P 1
- 註10 『長崎奉行所立山役所』1998長崎県文化財
調査報告書第146集 P 13～P 19
- 註11 『長崎奉行所（立山役所）跡・炉粕町遺跡』
2004長崎県文化財調査報告書第177集 P 76
- 註12 『マクドナルド「日本回想記」』1979刀水
書房 P 133～P 141



図版E マクドナルドが書いた立山役所見取図



図版D 「立山御役所絵図面」（新潟市・川村家文書）

第5章 総括

前章まで遺構と遺物について個別に報告を行ってきたが、三年間に及ぶ調査の総括として全体的な遺跡の変遷について整理を行ってみたい。調査によって遺跡の遺構面は概ね上・中・下の三面であることが判明したが、それぞれの面に関係する層位・遺構・出土遺物からより詳細な整理が可能である。以下では時期別にそれぞれの主な内容を提示したい。

下層面	I - 1期（中世？）・土坑墓SK181（地山上） I - 2期（6層・17世紀初頭か）※初期伊万里を含む時期に廃絶したものが多いため。 (奉) 捜立柱建物、玉砂利敷遺構、溝SD20・34、井戸SE9、土坑SK76ほか (岩) 石組遺構SX2 (口) 焼跡 ※ (奉) 磁石建物SB1（中・下層は不明）
中層面	II期（5層・17世紀前葉～中葉） (奉) 石垣1下部、石垣7下部、 (岩) SB5、SE3（廃絶はSB4以前か） III期（5層・17世紀後葉～18世紀初頭） (奉) 長屋建物跡SB5・10、石垣4・5、石組溝 (岩) 基壇建物SB4、溝SD5、玉砂利、柵列SA1、井戸SE4・5 (口) 溝SD1
上層面	IV期（4層上・18世紀初頭～18世紀末） (奉) 石垣1上、石垣7上、正門階段、石畳、溝SD1（開削は18世紀中葉） (岩) 建物SB1～3、石垣1・2、 V期（4層上・18世紀末～19世紀後葉） (奉) — (岩) 溝SD1、井戸SE2

各面と時期区分は以上になる。では、これらは文献史料の記録とどのように対応するのであるか。まず、下層面の遺構が文献にみえる「山のサンタマリア」と呼ばれた聖堂や墓地に対応するかどうかが問題となってくる。出土遺物からみると下層面の堆積層である6層は、肥前陶器（唐津）と明青花を主体とし、わずかに肥前磁器（初期伊万里）を含んでいる。肥前磁器の生産は、現在のところ1610年代と考えられていること、および6層には1620年代以降とされる格子タタキを用いた肥前陶器を含まないことなどから6層の下限は1610年代と推測される。とすれば、前年のキリスト禁教令に続いて行われた、慶長十九年（1614）の長崎の教会の一斉破却と時期的には重なってくる。石組みの側溝をもつ玉砂利敷遺構は下層面の代表的な遺構であるが、分厚い間層によって文字通り「埋め殺された」感のある廃絶遺構であるが、上巻で指摘したようにポルトガル人によって舗装された「山の

サンタマリアへ続く道」とすれば、教会破却を示すものとして重要である。この遺構の北側には時期の特定できない礎石建物 S B 1 があり、今後多角的な検討からこの時期の様相を明らかにする必要がある。

Ⅱ期については、上巻で小松旭が明らかにしたように、幕府大目付井上筑後守政重が長崎下向の際に屋敷として利用した可能性が指摘されている。発掘成果からみると、敷地を東西に走る石垣 1 が、Ⅱ-1 期直後に成立したと考えられ、石垣で区画された場所として何らかの利用が行われたことが推測される。いわゆる『寛永長崎図』でも、付近には石垣が描かれており状況は一致している。井上家の文書である『井系譜』は、慶安元年（1648）に立山に屋敷を拝領し、「玄関・書院・長屋・台所・馬屋・風呂屋等」を普請したと記している。発掘成果で時期的に対応する遺構は明確ではないが、17世紀中葉に堆積・廃棄されたと考えられる土層や遺物が散発的にみられる。後述のⅢ期としている遺構の多くは、建て替え・造り替えが行われているものが多く、Ⅱ期に成立がさかのぼるものも多いと推測される。より深い検討が必要であるが、そのように仮定した場合、Ⅲ期とした初期奉行所の建物配置と井上屋敷時代の建物配置は、多くが重複している可能性を指摘することができる。初期奉行所の普請に際しては、富岡城などから資材が運ばれたことが文献・考古的に実証されているが（上巻参照）、礎石や溝などの利用できる下部構造が再利用された可能性もある。

Ⅲ期は多くの遺構が確認されている。遺構内出土の遺物および堆積層である 5 層出土の遺物は、内野山系の緑釉陶器、現川系の刷毛目陶器を含むことなどから、18世紀初頭頃を下限と判断される。Ⅲ期の遺構の多くが確認された石垣 1 の南側は一段低くなっているが、Ⅲ期の遺構や堆積層を覆って地山風化礫層である 4 層が厚く堆積し、層位的に大きな断絶がある。加えて 5 層からは富岡城出土瓦と同窓の瓦が確認されていることから、文献にみえる立山役所設置の記録および「土地を平たく均し、全く造り替えた」たという正徳五年（1715）から享保二年（1717）にかけての造成・建て替えの記録とも一致する。初期奉行所を描いた詳細な絵図面は現時点では確認されておらず、発掘成果との比較ができない状況であるが、実年代のわかる貴重な遺構として注目される。また、岩原目付屋敷側の中層の堆積にも富岡城の瓦が含まれており、奉行所の建て替えに伴って出た廃材などが造成土として使われた可能性がある。さらに炉粕町遺跡の S D 1 も、陶磁組成が奉行所・目付屋敷と共に通することから、一連の造成の際に埋められたと考えられる。

Ⅳ期は、奉行所の造成・建て替えと目付屋敷が成立する時代である。奉行所では正門階段、石垣 1・7、目付屋敷では建物 S B 1～3、石垣 1 などが確認され、いずれも絵図面と位置関係が一致する。遺構面は明治期まで継続していたようであり、文献では小規模な建て替えが何度もみえる。発掘調査で確認した変遷としては奉行所東側の S D 1 があり、『長崎実録大成』宝暦五年（1755）に「立山御役所東堀内二用水ノ堀出來ス」とあり、開削の年代がわかる。さらに出土遺物が18世紀終わり頃を主体とすることから、『続長崎実録大成』に寛政五年（1793）「東長屋建替、並長屋向住居替有之」とあるように、長屋の建て替えに際して埋められたと推測される。絵図面においても、『長崎実録大成』所収の「立山御役所図」には堀が描かれているが、文化年間の諸図には描かれていない。S D 1 からは豊富な遺物が出土しており、年代が特定できることからⅣ期とし、以後をⅤ期として分けるとした。Ⅴ期については、明治以降の増築のせいか良好な遺構は確認できなかった。

各時期の出土遺物はバラエティに富んでいる。瓦・文字資料など奉行所や目付屋敷の直接的な手が

かりになるような資料もあり、とくに瓦は富岡城からの搬入が確認されるなど大きな成果があった。また、陶磁器やガラス製品では廃棄の年代が特定できることから、それぞれの研究における成果の活用が期待される。全般的に注意すべきは、今回の調査範囲が奉行所の本体部分から外れていることであろう。出土遺物の多くは、奉行や目付の周辺で使用されたものは少なく、おそらく与力・同心など家臣や役人が使用したものが多いと推測される。したがって、出土遺物から場の機能を評価するにあたっては慎重な検討が必要であり、今回の出土遺物をもって奉行や目付のステータスを云々することは早計であろう。

各期の遺構・遺物を通して言えることは、三遺跡が内容的に密接なつながりを持っており、遺跡名は異なるものの、本来的にはひとつの遺跡として捉える必要があるということである。筆者は長崎の主要な施設と旧町の総称として「長崎遺跡群」という概念を提示しているが、その意味では付近は長崎遺跡群・立山地区と位置づけることができよう。

最後に、博物館建設側と調整によって幸いにも保存あるいは活用することができた範囲について言及しておきたい。該当する遺構や場所は以下のとおりである（位置・範囲は掲載各図を参照）。

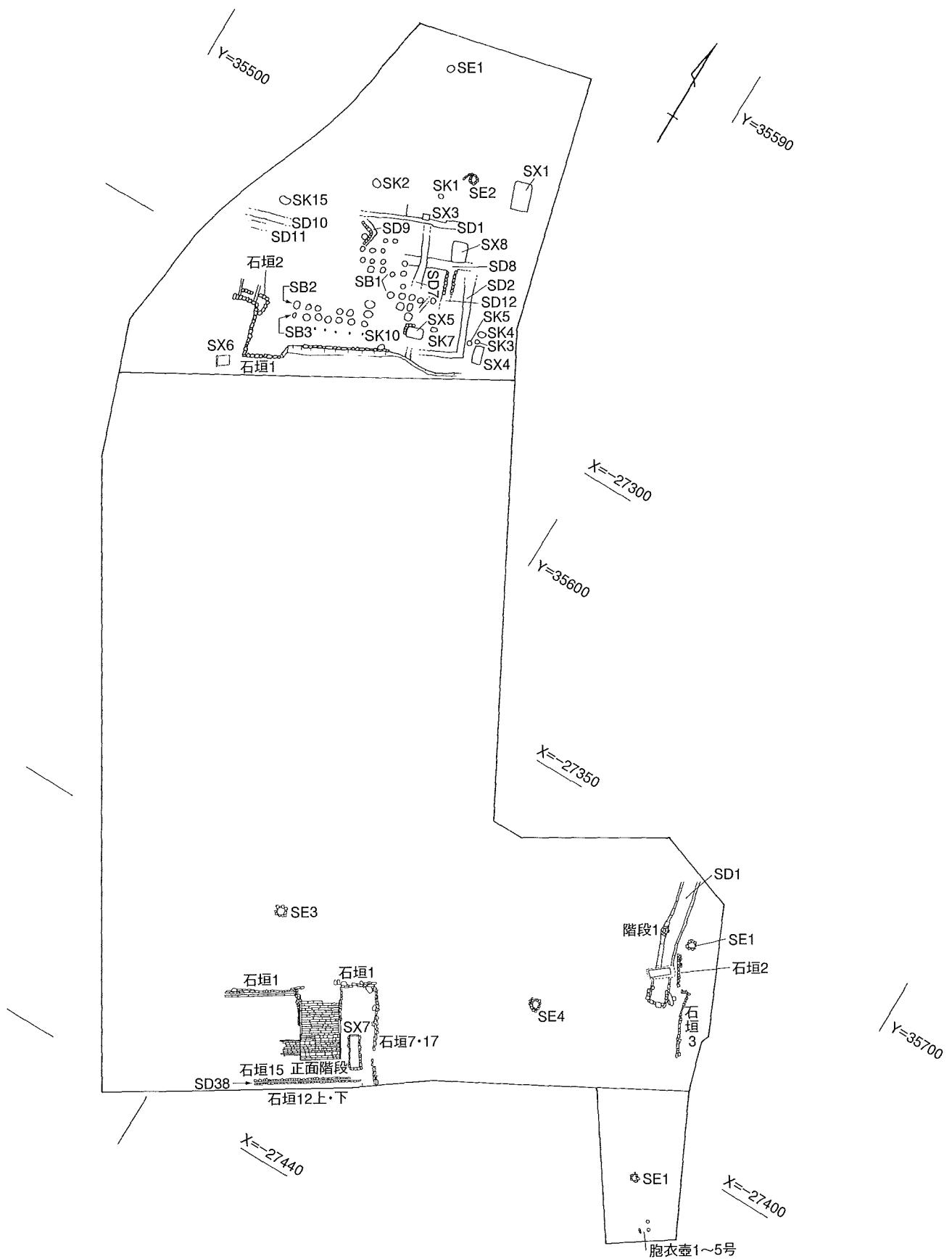
- (奉) 正門階段・石畳・石垣 7 南隅
- (岩) S X 2 (記録後埋め戻し)
- (口) 調査区東西側 (S D 1 は東西に長くのびると判断される)

これらは近世長崎の輝かしい歴史を包蔵する極めて貴重な場・遺構であり、後世に伝えるべき価値を有するものである。奉行所復元という博物館建設の妙によって活用が決まったが、やむなく破壊された遺跡を代弁するものとしてご覧頂けたら幸いである。

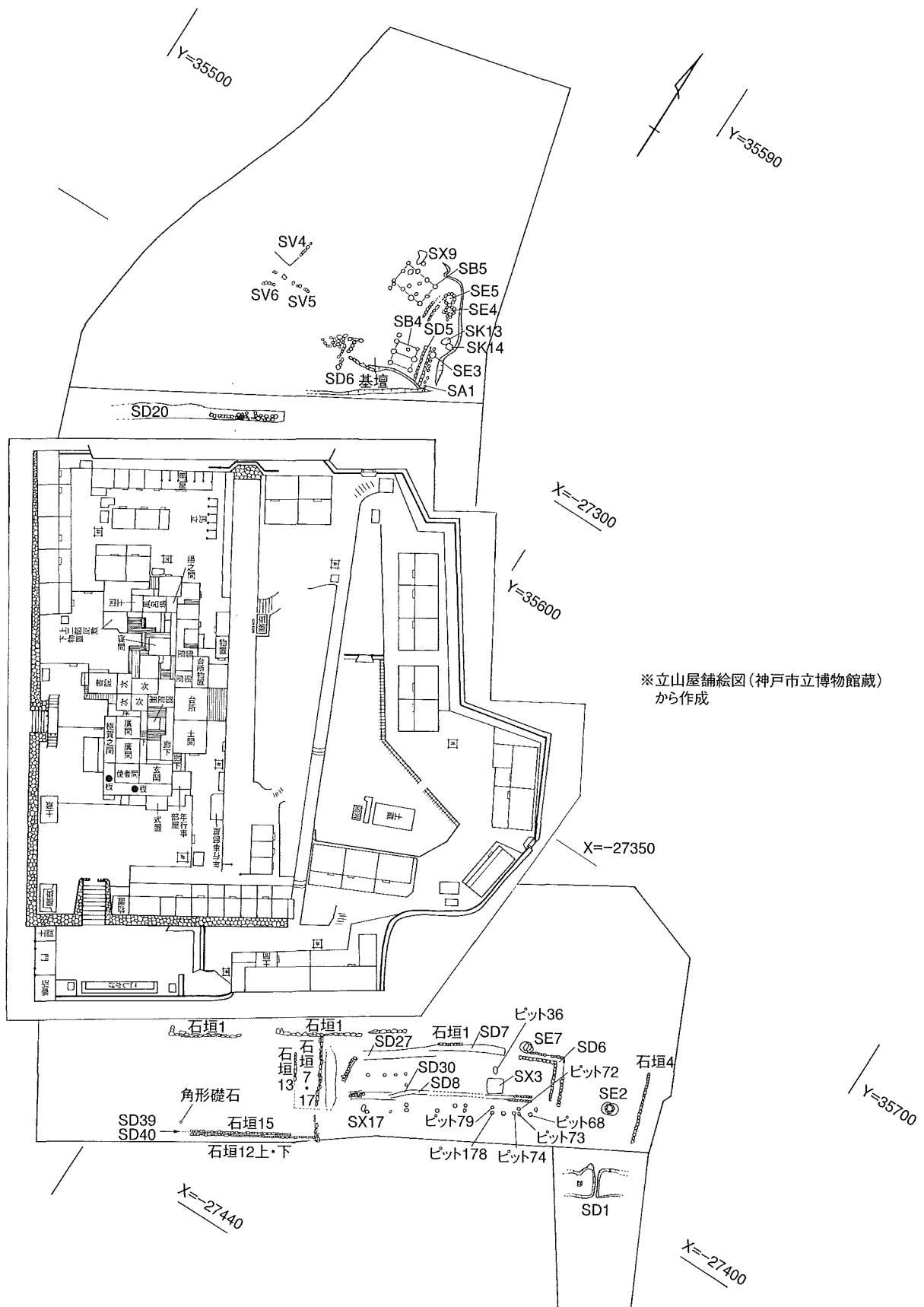
本報告では様々な制約から十分な考察ができなかった。ただしデータ提示には全力で努めたので、使える情報は多いのではないかと思う。これをもとに今後も積極的な論考の機会を持ちたいと考えている。また、本書の執筆・編集に関しては現場段階からは多くの方々の協力を得た。以下に記して感謝申し上げたい。ボランティアによる協力も多かったが、それは遺跡の魅力によるものだと思っている。とりわけ調査員の柚木・平田の両氏の活躍は、順風耳・千里眼の如しであった。深く感謝申し上げたい（川口）。

一瀬裕子・小川博美・末吉由里子・寺井浩美・富永諭美・永尾ひとみ・中島美恵子・中村ヒロ子・成田万里・野島愛子・浜崎美加・林田志保美・溝上布美子・山口幸恵・山下容代・横田愛子・吉野はるか・和田美加・渡辺洋子・土田ひさ子・樋口眞子・竹田ゆかり・山田英明

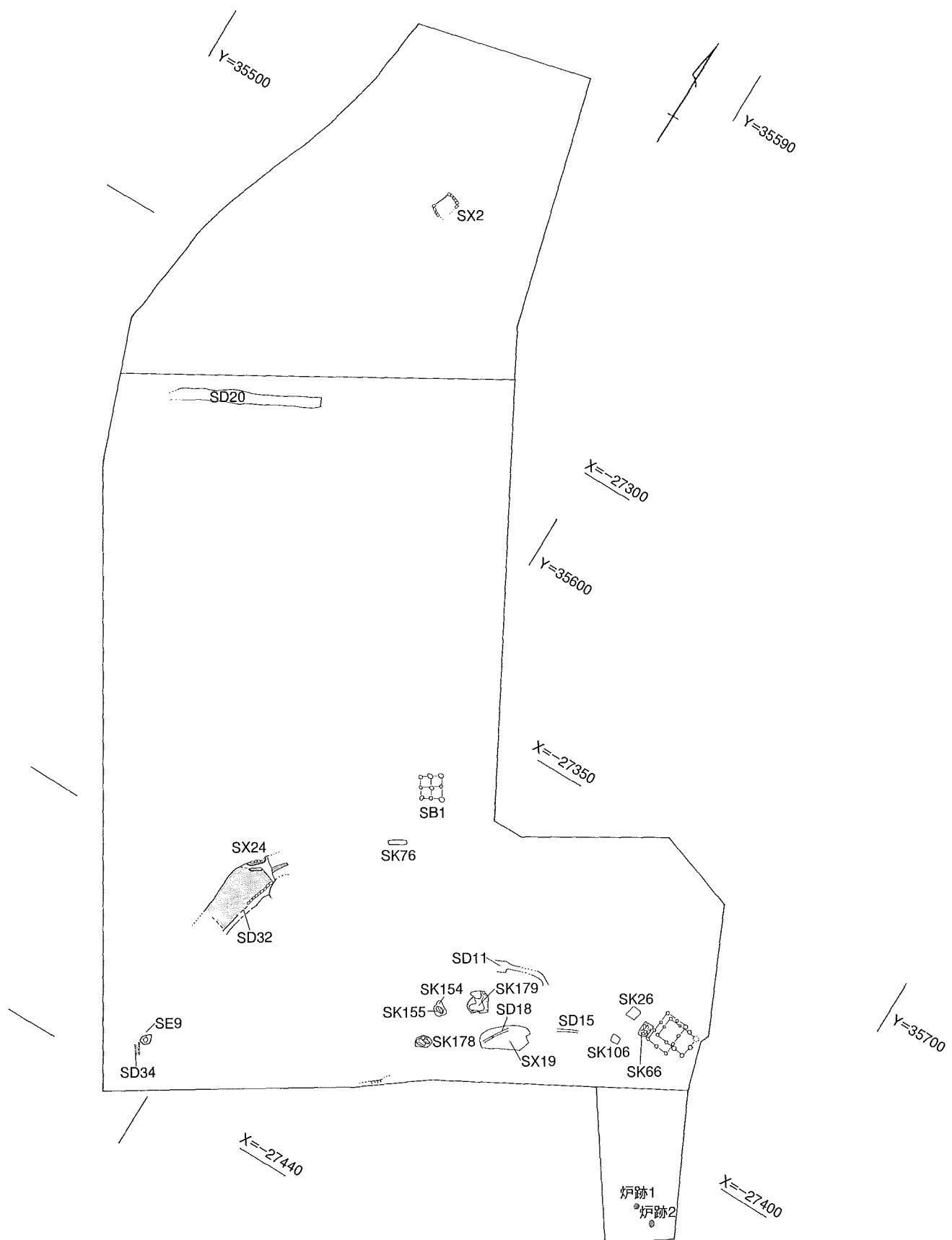
（追）脱稿後、神戸市立博物館所蔵の『立山御舎屋図』を参考することができ、調査成果との比較から本図が正徳・享保の奉行所の大規模改修以前のものであることが判明した。絵図面の豊富な後期の建物配置とは大きく異なっている点が驚かされる。とくに石垣1の南側の一段低くなる場所については、正門階段の位置を含め、中層面の調査成果と一致している。調査前に本図を参考にすることができなかった点が悔やまれるが、手探りで成果に驚きつつ調査ができた時間は楽しいものであった。最後に答案をみせられ、ともかくも合格点をとったという気持である。本図は急遽トレースし、校正中に掲載することとした（第102図中段参照）。読者の採点を請うところである。



第101図 遺跡変遷図・上層面遺構 (1/1000)



第102図 遺跡変遷図・中層面遺構 (1/1000)



第103図 遺跡変遷図・下層面遺構 (1 /1000)

図 版



① 石垣12・15, SD38・39・40, 玉石 東から



② 石垣12・玉石 北から

図版2



③ SD38・39・40 東から



④ SX7・石垣14 東から



⑤ 石垣12（上・中層面） 北から



⑥ SD38・39・40（上・中層面） 東から



⑦ 石垣12・15（上・中層面） 西から



⑧ トレンチ②溝内断面 東から



⑨ 石垣12・15（上・中層面） 西から



⑩ トレンチ③溝内断面 東から



⑪ 石垣12（上・中層面） 北から



⑫ 玉石面（上層面） 西から

図版 4



⑬ 調査区遠景 東から



⑭ SX 7・SD36断面 北から



⑮ SD36(近代) 西から



⑯ SD38・39・40(上・中層面) 西から



⑰ 調査区東側断面



⑱ 石垣7・17(上・中層面) 西から



⑲ SX 7・石垣13(上・中層面) 東から



㉚ 石垣13（中層面） 西から



㉛ SK193・194 西から



㉜ 石垣13（中層面） 南から



㉝ 調査区遠景 東から



㉞ 石垣13断面 南から



㉟ 調査風景



㉞ 石垣16（中層面） 西から



㉟ 調査員・作業員

図版 6



㉙ B・C区調査区全景（上層面） 東から



㉚ B区調査区全景（上層面） 東から



(30) SB 4 基壇周辺遺構全景 東から

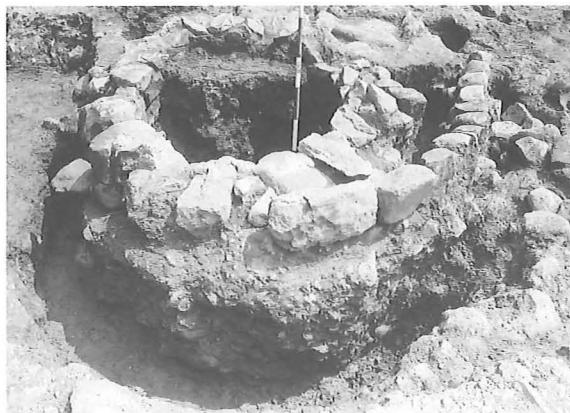


(31) SX 2 東から

図版8



③② SD 2 北から



③③ SE 2 北から



③④ SX 3・SD 1 断面 西から



③⑤ SB 1 南から



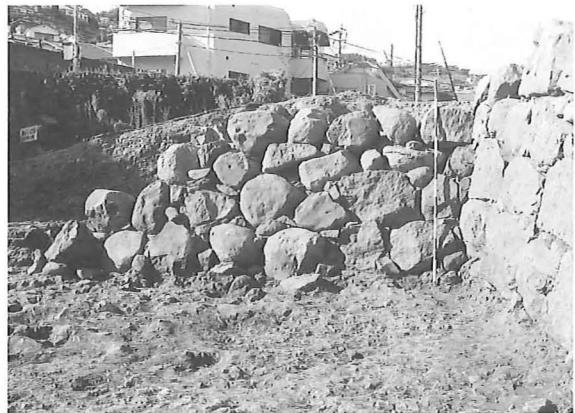
③⑥ SX 4 西から



③⑦ B区V層上面 東から



③⑧ SB 2・3 東から



③⁹ 石垣 1 南から



④⁰ 石垣 1 西から



④¹ 石垣 1 南側部分 南から



④² 石垣 1 断面 南から(1)



④³ 石垣 1・2 断面 西から(1)



④⁴ 石垣 1・2 断面 西から(2)

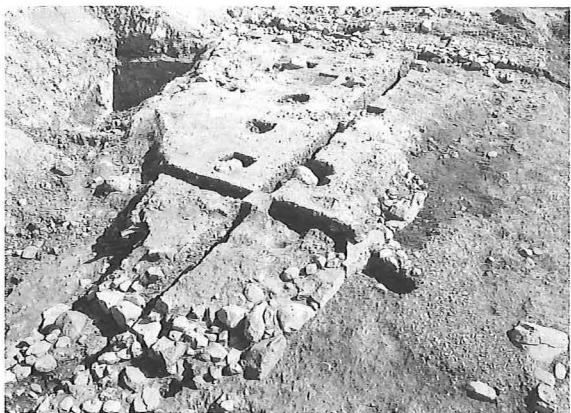


④⁵ 石垣 1 断面 南から(2)



④⁶ 石垣 1 断面, C 区土層断面 南から

図版10



④7 SB 4 基壇遺構 西から



④8 SB 1 北から



④9 SD 5 南から



④0 SE 3 北から



⑤1 SX 7 北から



⑤2 Ve 層遺物出土状況 東から



⑤3 SB 5 西から



⑤4 SX 2 南から

報告書抄録

ふりがな	ながさきぶぎょうしょあと・いわはらめつけやしきあと・ろかすまちいせき						
書名	長崎奉行所（立山役所）跡・岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡						
副書名	歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	下						
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第183集						
編著者名	川口洋平・柚木亜貴子・平田賢明・櫻木晋一・加藤久雄・岡 泰正						
編集機関	長崎県教育委員会						
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市江戸町2番13号 TEL095-824-1111						
発行年月日	西暦2005年3月31日						

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °、'	東経 °、'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながさきぶぎょうしょあと 長崎奉行所跡	ながさきしたてやま 長崎市立山 1丁目ほか	42201	28	32° 45' 04"	129° 52' 46"	20020708	1,800	博物館建設
						20041203		
						20000717		
いわはらめつけやしきあと 岩原目付屋敷跡	ながさきしろかす 長崎市炉粕 町30ほか		40	32° 45' 04"	129° 52' 46"	20010309	2,500	
						20030401		
ろかすまちいせき 炉粕町遺跡	ながさきしろかす 長崎市炉粕 町30ほか			32° 45' 04"	129° 52' 46"	20030630		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長崎奉行所跡	奉行所跡		建物跡	近世陶磁器・瓦類	
岩原目付屋敷跡	目付屋敷跡	近世	石垣	輸入陶磁器ほか	
炉粕町遺跡	町屋か		溝		

長崎県文化財調査報告書 第183集
長崎奉行所(立山役所)跡
岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡

平成17年3月31日

編集 長崎県教育委員会
長崎県長崎市江戸町2-13

印刷 株式会社 昭和堂
長崎県諫早市長野町1007-2

正誤表(下巻)

P8 本文17行目 (約188cm) → (195cm)

P18 SE3 南側立面図 → SE3 南側断面図

図版1～5 — 奉行所

図版6～10 — 岩原目付屋敷

